

天瀬遺跡・岡山城外堀跡

一般国道2号京橋共同溝他建設に伴う発掘調査

2001

国土交通省岡山国道工事事務所
岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 154

天瀬遺跡・岡山城外堀跡

一般国道2号京橋共同溝他建設に伴う発掘調査

2001

国土交通省岡山国道工事事務所
岡山県教育委員会



1. 岡山城外堀跡新段階西側石垣と埋積状況

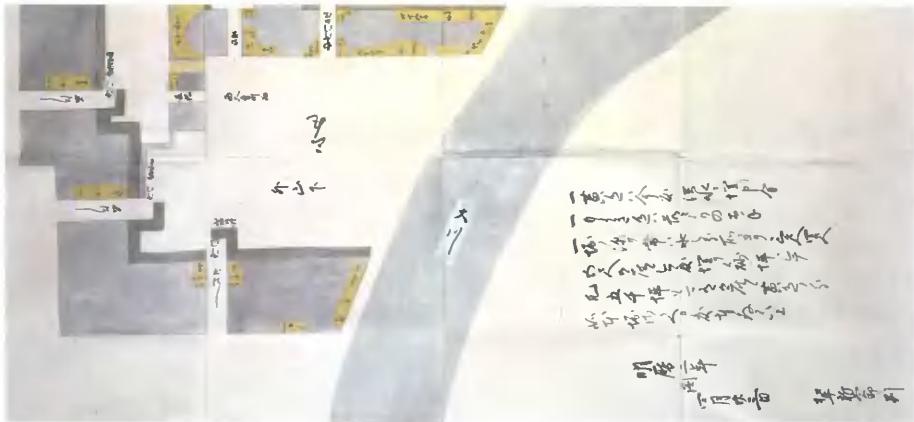


2. 土壌27埋土完掘状況



3. 土壌27底部炭層堆積状況

巻頭図版 2



1. 明暦 2 (1656)年 岡山城郭之図堀浚二付御届之控(岡山大学附属図書館所蔵)



2. 延宝 8 (1680)年 【御城堀浚石垣修復御願之絵図并御奉書】(岡山大学附属図書館所蔵)



3. 文政13(1830)年 御堀浚土居繕御普請出来絵図并品々御入用寄帳(岡山大学附属図書館所蔵)

序

一般国道2号京橋共同溝ならびに岡南共同溝は、道路下に複雑に張り巡らせている電気、電話、ガス、上下水道などの既設ライフルайнを地下空間内に計画的に整理・集約する施設です。

国土交通省岡山国道工事事務所ではこれらの共同溝を整備することにより、占用工事に伴う道路の掘り返し工事を無くし、交通の円滑化と都市景観の向上、災害に強い街づくりをめざしています。

当共同溝の整備区間である岡山市東中央町周辺は天瀬遺跡・岡山城外堀跡があることから、共同溝整備に先立ち岡山県教育委員会と協議を重ね、工事によって影響を受ける遺跡について記録保存を委託してまいりました。

発掘調査の結果、近世の外堀跡と大雲寺町口の土橋跡等が発見されるに至りました。この発見により、江戸時代における岡山城下の町並みや暮らし等を窺い知ることができる貴重な資料が得られたと思います。

本書は、これらの遺跡の発掘調査の記録であり、これが埋蔵文化財に対する認識と理解を深めるとともに、学術・文化等のために広く活用されることを心から期待いたします。

末筆ながら、この発掘調査並びに本書の編集にあたられた岡山県教育委員会をはじめとする関係各位のご尽力に対して、深甚なる謝意を表します。

平成13年2月

国土交通省中国地方整備局

岡山国道工事事務所長 岩崎泰彦

序

この報告書は、平成4年度から平成10年度に一般国道2号京橋共同溝及び岡南共同溝建設に伴って発掘調査を行った、天瀬遺跡・岡山城外堀跡の発掘調査報告書です。

岡山県の中央を南流する旭川は、中国山地から多量の土砂を運びその下流に肥沃な穀倉地帯である岡山平野を形成しました。この平野には、津島遺跡、南方遺跡、鹿田遺跡、百間川遺跡群など弥生時代を中心とした著名な集落遺跡があり、古代吉備の中心的な地域の一つであったことを物語っています。さらに、天正18(1590)年からは宇喜多秀家によって岡山城を中心とした城下町の整備が始まり、江戸時代以後も小早川氏、池田氏が引き続き整備を行い、現在の岡山市街地の基礎が築かれました。

このたび、市街地南部の一般国道2号下を利用して、建設省(現 国土交通省)岡山国道工事事務所によって共同溝建設が計画されました。そのため、岡山県教育委員会と建設省(現 国土交通省)岡山国道工事事務所との間で事前に協議が重ねられましたが、工事の性格上遺跡の現状保存は困難であるとの結論に達し、やむを得ず調査を実施することとなり、平成4年度は岡山県教育庁文化課で、平成8・10年度は本文化財センターにおいて、記録保存を目的とした発掘調査を行いました。

工事対象地は、弥生時代後期を中心とした遺跡で、龍の線刻文のある器台が出土したことでも有名な天瀬遺跡が所在しています。また、岡山城下町の南端に位置することから、近世の城下町に関する遺構・遺物の検出も想定されました。

調査の結果、弥生時代では微高地端部に残されていた粘土採掘壙群が検出され、そこに遺棄された多量の土器が出土しました。また、近世の城下町関連の遺構では、外堀跡と大雲寺町口の土橋跡が確認できたことは、江戸時代に描かれた城下町絵図と現在の市街地とを比較する上で大きな成果でした。そのほかに、慶長6(1601)年に小早川秀秋によって築かれた外堀が、17世紀後半に造り替えられたことが判明しました。この際、その埋土に大量の精鍊滓や鍛錬鍛冶滓、羽口といった鍛冶関連遺物が含まれており、この地点が旧大雲寺境内の脇にあたることから、寺普請の際に、精鍊から鉄器生産までの一貫した鍛冶が行われていたことが想像でき、今まで不明であった近世前期の鉄素材の生産・流通を考える上で貴重な資料を得ることができました。

これらの調査成果を収載した本報告書が、学術研究に寄与するだけでなく、地域の歴史の解明や文化財の保護・活用の一助となれば幸いに存じます。

末筆ながら、発掘調査ならびに報告書の作成にあたっては、国土交通省岡山国道工事事務所をはじめ、地元の関係各位からも多大な御支援・御協力をいただきました。記して厚くお礼申し上げます。

平成13年2月

岡山県古代吉備文化財センター

所長 正岡 瞳夫

例　言

- 1 本書は、岡山県岡山市東中央町外において一般国道2号京橋共同溝及び岡南共同溝建設工事に伴い発掘調査を実施した、天瀬遺跡・岡山城外堀跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、建設省(現 国土交通省)岡山国道工事事務所の依頼を受け、平成4年度は岡山県教育庁文化課が行い、平成8・10年度は岡山県古代吉備文化財センターが実施した。
- 3 調査は、平成4年度の発掘調査を岡山県教育庁文化課職員柳瀬昭彦・亀山行雄、平成8年度の発掘調査を岡山県古代吉備文化財センター職員内藤善史、平成10年度の発掘調査を同センター職員柳瀬昭彦・速水章人・杉山一雄が担当した。
- 4 調査期間は、平成4年度が平成4年11月11日～同年11月17日、平成8年度が平成8年10月1日～同年12月31日、平成10年度が平成10年10月1日～平成11年3月31日である。
- 5 本書の作成は、平成11年10月1日～平成12年3月31日の期間に文化財センターで杉山が行った。
- 6 本書の執筆は調査担当者で分担し、第2章第1節と第3章第1節を柳瀬、第5章第1節を内藤、その他を杉山が執筆し、編集は杉山が担当した。
- 7 遺物の復元・実測・淨書については文化財センター職員の協力を得た。また、遺物写真の撮影については江尻泰幸氏の協力と援助を仰いだ。
- 8 出土遺物のうち必要に応じて鑑定・分析を次の諸氏および機関に依頼し、有益な御教示を賜った。また、そのうちのいくつかについては玉稿をいただいた。衷心よりお礼申し上げる。

陶磁器の鑑定	家田淳一（佐賀県立九州陶磁文化館） 大橋康二（佐賀県教育委員会） 乗岡 実（岡山市教育委員会） 石神由貴（三田市教育委員会）
石材鑑定	妹尾 譲（倉敷芸術科学大学）
動物遺存体の同定	富岡直人（岡山理科大学）
土器の胎土分析	白石 純（岡山理科大学自然科学研究所）
文字の解読	加原耕作（岡山県立博物館） 横山 定（現 岡山県立勝山高等学校）
鉄滓の肉眼鑑定	大澤正己（たたら研究会九州委員） 鈴木瑞穂（株式会社九州テクノリサーチ）
木器・木材の樹種同定	パリノ・サーヴェイ株式会社
植物珪酸体・花粉分析	パリノ・サーヴェイ株式会社

- 9 発掘調査ならびに報告書作成にあたっては、下記の諸氏・諸機関から有益な御助言と御配慮をいただいた。記して厚くお礼申し上げる次第である。
安間拓巳、臼井洋輔、川越哲志、河瀬正利、岡山大学中央図書館参考資料室、三田市教育委員会、(財)元興寺文化財研究所
- 10 本報告書に關係する出土遺物ならびに図面・写真等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325—3）において保管している。

凡 例

1 本書に用いた高度は海拔高であり、北方位は磁北で示している。ただし、調査区の位置と方位は工事計画図面（1/1000）に調査中作成した図面を組み込んで割り出しているため、精度にやや難がある。

2 本報告書に掲載した遺構・遺物図面の縮尺は、基本的に次のように統一している。

遺構 井戸・土壙：1/40 柱穴列：1/80

遺物 土器：1/4・1/8 軒瓦：1/4 道具瓦：1/4・1/5 平・丸瓦：1/5 土製品：1/3・1/4

石製品：1/2・1/3 金属製品：1/2・1/3 木製品：1/2・1/4・1/6・1/12

骨製品：1/3

3 本報告書で用いた土層名称は、各調査担当者によって表記方法が異なっており、必ずしも統一できていない。

4 遺構名は、本文の図中では必要に応じて次の通り省略して表記している。

井戸：井 土壙：土 柱穴列：列

5 本報告書に掲載した石器実測図においては、敲打部分を▲、研磨部分を●、磨滅（手擦れなど）部分を○の記号を付してその範囲を示している。

6 本報告書に掲載した遺物番号については、土器・陶磁器、瓦、土製品、石製品、金属製品、木製品、骨製品ごとに連番とし、土器・陶磁器以外の遺物は番号の前にそれぞれ次の記号を付している。

瓦：R (Roof tile) 土製品：C (Clay) 石製品：S (Stone) 金属製品：M (Metal)

木製品：W (Wood) 骨製品：B (Bone)

7 本報告書に掲載した土器・陶磁器および木製品の実測図のうち、中軸線の左右に白抜きのある図は口径の不正確なものである。

8 本報告書の第2図に使用した地図は、国土地理院発行の1/25,000地形図「岡山北」・「岡山南」を複製・加筆したものである。

9 本報告書に用いた時期は、主に次の文献を参考にして時期決定した。表記方法については必要に応じて政治史区分と西暦を併用した。

正岡睦夫「備前地域」「弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編」木耳社 1992

吉留秀敏ほか「鹿田遺跡I」「岡山大学構内遺跡発掘調査報告第3冊」岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1988

間壁忠彦「備前焼」ニュー・サイエンス社 1991

大橋康二ほか「有田町史 陶磁編」有田町 1988

藤澤良祐「瀬戸市史 陶磁史編六」愛知県瀬戸市 1998

本文目次

卷頭図版

序

例言

凡例

目次

第1章 遺跡の位置と環境	1
第2章 調査および報告書作成の経緯と体制	3
第1節 調査に至る経緯と調査経過	3
第2節 報告書作成の経過	4
第3節 調査および報告書作成の体制	4
第3章 平成4(1992)年度の調査概要	6
第1節 遺構	6
第2節 遺物	7
第4章 平成10(1998)年度の調査概要	15
第1節 1~4区の遺構	15
第2節 5~8区の遺構	24
第3節 9~10区の遺構	30
第4節 遺物	40
第5章 平成8(1996)年度の調査概要	69
第1節 遺構	69
第2節 遺物	73
第6章 まとめ	82
遺構一覧表	86
附編	87
附編1 天瀬遺跡出土粘土採掘場粘土の分析……白石 純	87
附編2 天瀬遺跡出土の動物遺存体の分析……富岡直人	89

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第1図 遺跡位置(1/300,000)	1
第2図 調査地周辺の地形と主要遺跡分布 (1/25,000)	2
第3図 調査区位置(1/3,000)	3
第4図 検出遺構配置と土層断面位置(1/300)	6
第5図 土層断面柱状模式図相関(1/60)	6
第6図 土壙1~2、溝1平・断面(1/40)	7
第7図 土壙1~2、土器溜まり出土土器(1/4)	9
第8図 15~16区包含層出土土器(1/4)	9
第9図 4~11区包含層出土土器①(1/4)	10
第10図 4~11区包含層出土土器②(1/4)	11
第11図 4~11区包含層出土土器③(1/4)	12
第12図 4~11区包含層出土土器④(1/4)	13
第13図 4~11区包含層出土土器⑤(1/4)	14
第14図 石器(1/3)	14
第15図 1~4区検出遺構と土層断面位置(1/300) 及び土層断面柱状模式図相関(1/60)	15
第16図 1~4区弥生・古墳時代遺構配置(1/300)	16
第17図 土壙3~5、溝2~5、高まり1 平・断面(1/40)	17
第18図 粘土採掘場群平・断面(1/120・1/40)	18
第19図 1~4区中・近世遺構配置(1/300)	19
第20図 井戸1平・断面(1/40)	20
第21図 井戸2~3平・断面(1/40)	21
第22図 井戸4、土壙6~8、柱穴列1~2、 溝6平・断面(1/40・1/80)	22

第23図 5~8区検出遺構と土層断面位置(1/300)	24
第24図 5~8区土層断面柱状模式図相関(1/60)	25
第25図 5区弥生時代遺構配置(1/300)	25
第26図 高まり2断面(1/40)	25
第27図 5~8区近世遺構配置(1/300)	26
第28図 井戸5、土壙9~12平・断面(1/40)	27
第29図 柱穴列3~6平・断面(1/80)	28
第30図 溝8~14断面(1/40)	29
第31図 溝12~13合流部平・立面(1/60)	29
第32図 9~10区検出遺構と土層断面位置(1/300) 及び土層断面柱状模式図相関(1/60)	30
第33図 土壙13~23平・断面(1/40)	34
第34図 土壙24~31平・断・立面(1/40)	35
第35図 土壙32~43平・断・立面(1/40)	36
第36図 土壙44~51平・断面(1/40)	37
第37図 外堀平・断面(1/150・1/100)	38
第38図 外堀断面(1/50)	39
第39図 外堀石垣平・立面(1/60)	39
第40図 土壙5出土土器(1/4)	41
第41図 弥生時代の土製品・石器(1/3)	42
第42図 土壙7~16~19~23~24~43~51、溝8出土 の土器・陶磁器(1/4・1/8)	44
第43図 溝12~14出土の土器・陶磁器(1/4)	45
第44図 溝12~13出土の陶磁器(1/4)	46
第45図 溝12~13出土の磁器(1/4)	47

第46図	溝12・13、外堀古段階出土の 土器・陶磁器(1/4).....	48
第47図	外堀古・新段階出土の土器・陶磁器(1/4)	49
第48図	外堀新段階出土の陶器(1/4).....	50
第49図	外堀新段階出土の陶磁器(1/4).....	51
第50図	外堀新段階、包含層出土の陶磁器(1/4).....	52
第51図	軒丸瓦(1/4).....	55
第52図	軒丸瓦・軒平瓦(1/4).....	56
第53図	道具瓦・丸瓦・平瓦(1/5).....	57
第54図	土製品①(1/3).....	59
第55図	土製品②(1/4).....	60
第56図	石製品(1/2・1/3).....	61
第57図	骨製品(1/3).....	62
第58図	金属製品①(1/2).....	63
第59図	金属製品②(1/3).....	64
第60図	金属製品③(1/3).....	65
第61図	木製品①(1/4).....	66
第62図	木製品②(1/6).....	67
第63図	木製品③(1/6).....	68

第64図	検出遺構と土層断面位置(1/200) 及び調査区土層断面(1/60).....	69
第65図	弥生時代遺構配置(1/200).....	70
第66図	近世遺構配置(1/200).....	70
第67図	井戸6、土壤52~56平・断面(1/40).....	72
第68図	溝16平面(1/40).....	73
第69図	溝15・16断面(1/60).....	73
第70図	井戸6、土壤52・53・55、溝15出土の 土器・陶磁器(1/4).....	75
第71図	溝15・16出土の土器・陶磁器(1/4).....	76
第72図	溝16、包含層出土の陶磁器(1/4).....	77
第73図	瓦(1/4・1/5).....	78
第74図	土製品(1/3).....	79
第75図	石製品(1/2・1/3)、骨製品(1/3).....	79
第76図	金属製品(1/2・1/3).....	80
第77図	木製品(1/2・1/4・1/6・1/12).....	81
第78図	遺構変遷①(1/1,500).....	83
第79図	遺構変遷②(1/1,500).....	84
第80図	土器・陶磁器組成.....	85

卷頭図版目次

卷頭図版 1

1. 岡山城外堀跡新段階西側石垣と埋積状況
2. 土壌27埋土完掘状況
3. 土壌27底部炭層堆積状況

卷頭図版 2

1. 明暦2(1656)年 岡山城郭之図堀浚ニ付御届之控
2. 延宝8(1680)年 【御城堀浚石垣修復御願之絵図并御奉書】
3. 文政13(1830)年 御堀浚土貯膳御普請出来絵図并品々御入用寄帳

写真図版目次

- 図版1—1. 調査区中景
2. 土壌1土器出土状況
3. 土壌5土器出土状況

- 図版2—1. 粘土採掘痕群
2. 高まり1
3. 井戸1
4. 井戸2
5. 溝12・13合流部
6. 溝12・13合流部
7. 溝12と柱穴列5・6
8. 外堀古段階の西肩部柱列

- 図版3—1. 外堀東側石垣
2. 外堀西側石垣と土層堆積
3. 土壌19備前焼大甕内堆積物
4. 土壌20埋土断面
5. 土壌24
6. 土壌30土層断面
7. 土壌32北側土層断面
8. 土壌48土層断面

- 図版4—1. 弥生時代の水田畦畔
2. 井戸6
3. 土壌52土層断面
4. 土壌56

5. 溝15土層断面
6. 石敷き検出状況
7. 溝16検出状況
8. 溝16南側護岸状況

- 図版5 土壌1~3・土器溜まり
・包含層出土土器①

- 図版6 包含層出土土器②
図版7 包含層出土土器③

- 図版8—1. 土壌5出土土器

2. 土器・備前焼
3. 昭和20年の空襲により歪んだ瓦
軒丸瓦

- 図版10 軒丸瓦・軒平瓦・道具瓦

- 図版11—1. 平瓦・丸瓦
2. 土製品①

- 図版12 土製品②

- 図版13—1. 石製品
2. 骨製品

- 図版14—1. 銅鏡
2. 煙管雁首

- 図版15—1. 金属製品
2. 鏡片

- 図版16—1. 土壌17・27・30・31・36・45出土鉄塊・鉄片
2. 墨書き木製品

- 図版17 木製品

- 図版18 下駄

- 図版19—1. 外堀古段階出土土器・陶磁器
2. 輸入磁器

3. 関西系陶器

- 図版20—1. 肥前系白磁・染付磁器
2. 肥前系青磁
3. 三田青磁

- 図版21 濑戸・美濃系陶磁器

- 図版22 国産陶磁器

- 図版23—1. 焼き締め陶器

2. ガラス焼き継ぎの銘

- 図版24—1. 外堀出土鍛冶関連遺物

2. 羽口

3. 蒔絵

第1章 遺跡の位置と環境

天瀬遺跡ほかは、岡山県岡山市東中央町外に所在する。岡山市は岡山県の南部中央、県下三大河川の一つである旭川の下流に位置する。中国山地を源流とする旭川が吉備高原を通って南流する際に運んだ多量の土砂は、その他の多くの小河川の土砂とともに「吉備の穴海」と呼ばれた浅海を徐々に埋めていき、肥沃な岡山平野を築いていった。遺跡の所在する東中央町付近は、この岡山平野の南部で、現在の岡山市街地中央に位置し、中世頃の海岸線に近接していた。

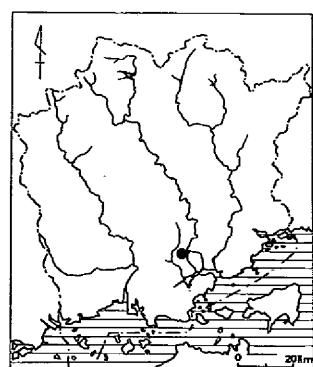
天瀬遺跡は、沖積世以降の土砂の堆積作用によって作られた微高地上に営まれた弥生時代を中心とした集落・生産遺跡です。近隣では丘陵上で後期旧石器時代になってから人類の営みがみられる。その後は旭川東岸の沖積地にある百間川遺跡群で縄紋時代中期の土器が散見されるが、平地への本格的な進出は、縄紋時代後期後半まで待たなければならない。縄紋時代晚期から弥生時代前期には、津島遺跡や百間川遺跡群で集落址とともに水田跡が広範囲に確認されるようになり、生産基盤が安定していたことを物語っている。弥生時代中期以降は旭川の複雑な流路の間にみられる細い島状の微高地単位に集落が営まれるようになる。前期後半から南方遺跡、中期からは絵図遺跡・鹿田遺跡・上伊福遺跡といった集落がみられ、天瀬遺跡も後期中頃には集落が営まれている。これらの遺跡はそれぞれ長短はあるがおおよそ古墳時代前期まで継続する。

古墳時代に入ると、平野部を南に望む半田山丘陵上に弥生時代後期末から引き続いて、旭川西岸域に展開した集落の首長系譜と考えられる墳墓が築かれる。しかしながら、後期になると平地部に津島遺跡、北方下沼遺跡など大規模な集落が営まれているにもかかわらず、西岸域ではほとんど古墳がみられなくなり、東岸域の操山古墳群に代表される造墓活動の状況と対照的な様相を示す。

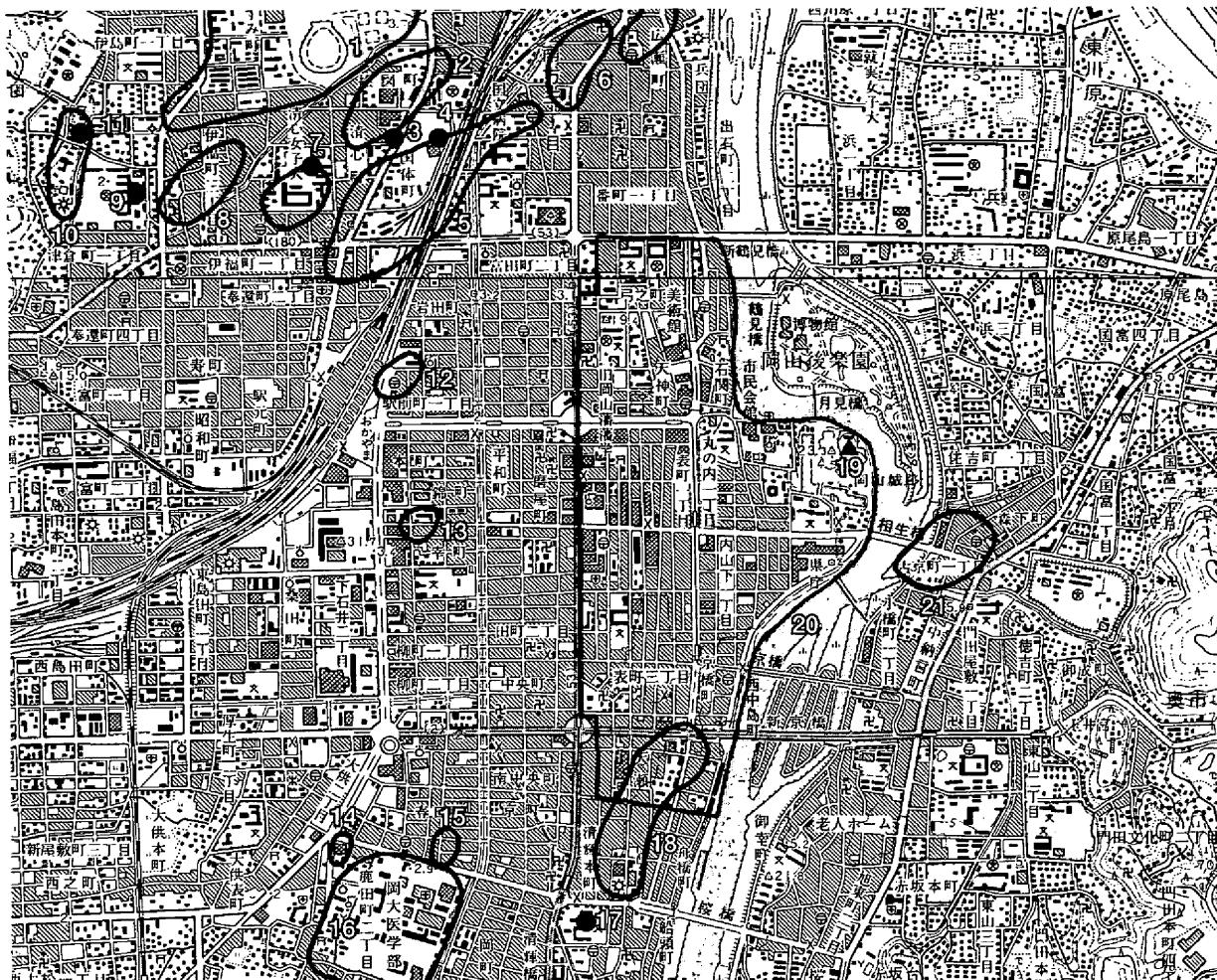
古代になると平野部には条里制が施行され、津島遺跡や津島岡大遺跡などで条里に関係すると考えられる溝を検出している。また、津島江道遺跡では掘立柱建物群の検出、新道(清輝小)遺跡では奈良時代の火葬施設や土器が出土しているが、集落遺構の存在はよくわかっていない。

中世に入っても同様の状況で、藤原摂関家の荘園であった鹿田遺跡や、伊福定国前遺跡、新道(清輝小)遺跡などで僅かに集落関連遺構が確認されているが、西岸域での他の調査では水田遺構のみが検出されることから、古代以来の水田化がさらに進められていったと考えられる。

戦国期になると丘陵上には半田山城、妙見山城といった山城が築かれるが、平地でも天正18(1590)年以降、宇喜多秀家によって岡山城と城下町の建設が進められている。関ヶ原の合戦後も、岡山城主となった小早川秀秋が城内の整備や外堀を掘削するなどして城下町の造営を続け、慶長7(1602)年の秀秋の急死以後も池田氏によって引き継がれていき、寛永9(1632)年に池田光政が藩主となつ頃に一応の完成をみる。しかしながら、その後も城下町は旭川の起こす洪水によって幾度となく災害に見舞われ、その度に堀の修復・改築が行われている。今回の調査でも、検出した該期の溝や外堀が砂によって埋没し、その後掘り返された痕跡が確認されている。



第1図 遺跡位置 (1/300,000)



1. 津島遺跡
2. 絵図遺跡
3. 南方(中電)遺跡
4. 南方(済生会)遺跡
5. 南方遺跡
6. 広瀬遺跡
7. 上伊福九坪遺跡
8. 上伊福遺跡
9. 伊福定国前遺跡
10. 上伊福西遺跡
11. 尾針神社南遺跡
- 12~15. 敷地
16. 鹿田遺跡
17. 新道(清輝小)遺跡
18. 天瀬遺跡
19. 岡山城跡
20. 岡山城城下町(郭内)
21. 敷地

第2図 調査地周辺の地形と主要遺跡分 (1/25,000)

版籍奉還・廃藩置県以降は、城下町では堀を埋め立てて民間の宅地とし、津島一帯は明治40年の第十七師団の設置以降に水田地を広範囲に造成し、陸軍の演習地等の軍関係の施設が置かれた。そして、その後も城下町周辺に広がっていた水田の宅地化が進み現在のような景観に変わっていった。

参考文献

- 斎藤伸英 「V. 地形」「岡山県の地理」 福武書店 1978
 谷口澄夫・石田 寛監修「岡山県の風土記」 旺文社 1996
 島崎東・渡邊恵里子編「津島遺跡1」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」137 岡山県教育委員会 1999
 平井勝編「津島遺跡2」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」151 岡山県教育委員会 2000
 杉山一雄編「津島遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」145 岡山県教育委員会 1999
 吉留英敏・山本悦世編「鹿田遺跡I」「岡山大学構内遺跡発掘調査報告」第3冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1988
 杉山一雄編「伊福定国前遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」125 岡山県教育委員会 1998
 岡田博編「北方下沼遺跡ほか」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」126 岡山県教育委員会 1998
 高田恭一郎編「北方地蔵遺跡2・北方藪ノ内遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」149 岡山県教育委員会 2000
 小林青樹・野崎貴博「津島岡大遺跡10」「岡山大学構内遺跡発掘調査報告」第14冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1998
 草原孝典「新道(清輝小)遺跡」「岡山市埋蔵文化財調査の概要1998年度」 岡山市教育委員会 2000
 岡山市史編集委員会編「岡山市史 政治編」 岡山市役所 1964
 巖津政右衛門「岡山城史」 山陽新聞社 1983
 乗岡実編「史跡保存整備事業 史跡岡山城跡本丸中の段発掘調査報告」 岡山市教育委員会 1997
 松本和男ほか「岡山城二の丸跡」 中国電力内山下変電所建設事業埋蔵文化財調査委員会 1998

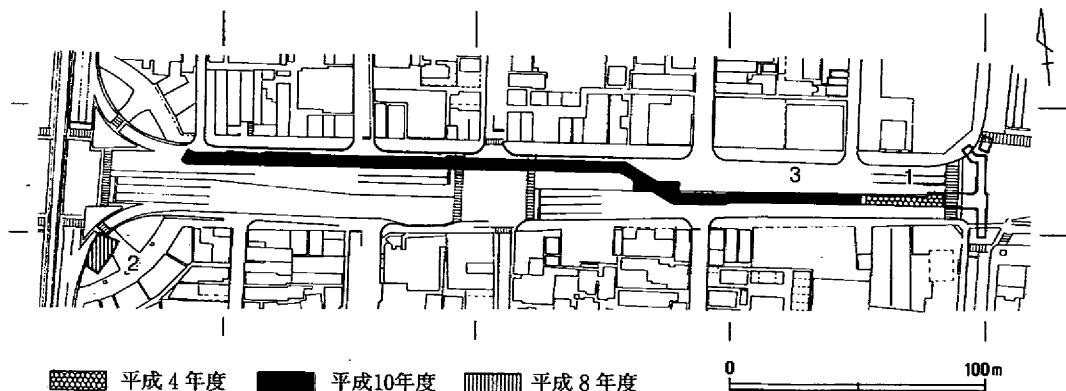
第2章 調査および報告書作成の経緯と体制

第1節 調査に至る経緯と調査経過

岡山市天瀬遺跡(註1)は、旭川西岸平野のほぼ中央の市街地に位置する。遺跡の範囲は、大きくは東は旭川、西は国道30号線、南は桜橋筋近く、北は国道2号線からやや北側までに囲まれる部分が想定されており、少なくとも大雲寺交差点から新京橋交差点間の国道2号路線敷下も例外ではないと認識されていた。

建設省(現 国土交通省)岡山国道工事事務所は、道路景観の整備や消防活動の円滑化などを図るために、県などと取り組んでいる電線類地中化事業の一環として、岡山市中心部の国道路線敷下を利用する共同溝建設を計画し、昭和61年度から一部の建設工事を開始した。国道2号京橋共同溝の計画は、平成3年度くらいから県教育庁文化課と建設省(現 国土交通省)岡山国道工事事務所との調整会議のなかで話題に上っていたが、当時は地下駐車場と共同溝の併設案が模索されていた。その後、平成4年の秋口になって京橋共同溝の一部(新京橋西詰交差点から西へ約30m間)についての工事計画が急浮上したため、両者で急遽協議のうえ、平成4年9月16日付で建設省中国地方建設局(現 国土交通省中国地方整備局)長から岡山県教育委員会教育長あてに、文化財保護法第57条の3に基づく協議書の提出を受けた。そして、周辺の状況等から現状保存は困難であるとの結論に達し、岡山県教育委員会は同年9月24日付で建設省中国地方建設局(現 国土交通省中国地方整備局)に対して、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。以上の協議経過に基づき、とりあえず京橋共同溝の一部について、平成4年11月11日から17日まで、県教育庁文化課の調査員2名で発掘調査を実施した。

その後、京橋共同溝の工事計画については進展がなく、平成7年度末の建設省(現 国土交通省)岡山国道工事事務所との調整会議で岡南共同溝(大雲寺交差点から十日市交差点間)の計画が示され、掘削工事の日程から考えて発掘調査は平成8年度に組み入れることが確認された。そして、この事業は地中深く推進工法によって掘削が行われるため、工事の大半は予測される遺跡の下をトンネルで通過することにより、工事の終点(出口)にあたる大雲寺交差点の南東角の一部(約120m²)のみが調査対



第3図 調査区位置 (1/3,000)

象となった。この部分の発掘調査には、平成8年10月1日から同年12月31日まで、調査員1名があつた。

また、平成9年度になって京橋共同溝の残り部分(大雲寺交差点方向へ約280m間)の工事計画が岡山県教育委員会に示され、調査までに工事側による条件整備が整う工事日程から、発掘調査は平成10年度の下半期が予定された。しかし、実際には工事行程の遅れ等によって、平成10年10月1日から平成11年3月31日まで調査員3名で発掘調査を実施した。そしてこの調査により、これまで計画に上った国道2号の関連共同溝建設事業に伴う発掘調査の全行程を終了することになった。

なお、調査単位ごとの調査年度・担当者・期間・面積・遺物数等は、次の一覧に示すとおりである。

天瀬遺跡調査一覧

年度	番号	遺跡名(調査名)	調査担当者名	期間	面積(m ²)	遺物箱数
H 4	1	天瀬遺跡(第一次京橋共同溝)	柳瀬・亀山	11.11～11.17	272	39
H 8	2	天瀬遺跡(岡南共同溝)	内藤	10.01～12.31	120	25
H10	3	天瀬遺跡(第二次京橋共同溝)	柳瀬・速水・杉山	10.01～3.31	1600	140
合 計					1992	204

註1 出宮徳尚「天瀬遺跡」『岡山県大百科事典 上』 山陽新聞社 1980

第2節 報告書作成の経過

遺物の整理および報告書の作成期間は平成11年10月1日～平成12年3月31日で、調査員1名が任にあたり、文化財センター職員の協力を得て実施した。整理の中で特に近世陶磁器については肉眼鑑定や各産地での窯跡出土資料の実見の機会を設けて産地認定に努めた。

報告書の対象遺物総数204箱のうち、約7割が平成10年度の出土遺物であり、その大半は岡山城外堀跡出土の陶磁器・木器が占める。平成8年度の遺物もほとんどが近世から近代の陶磁器類である。平成4年度の出土遺物39箱の大半は包含層から出土した弥生土器で、土器については紙面の関係もあり、特徴的な器種を抽出・掲載し、器種組成の割合を提示した。また、その他の遺物についても同様な処理を行って、調査対象地区全体での出土傾向が窺えるようにしている。

報告書の構成は、遺物の出土状況が個別遺構からまとまって出土するといった状況でなく、全ての調査において包含層か溝・堀といった新旧の遺物が混在して出土している。そのため、遺物の一括性が望めないので、本書では遺構・遺物で節を分け、さらに遺物も土器類・瓦類・土製品・石製品・金属製品・木製品・骨製品に分類し個別に説明を加えた。

第3節 調査および報告書作成の体制

平成4(1992)年度 調査体制

岡山県教育委員会

教育長

岡山県教育庁

教育次長

竹内 康夫

森崎岩之助

文化課

課長

渡邊 淳平

課長代理

松井 新一

課長補佐(埋蔵文化財係長) 柳瀬 昭彦(調査担当者)

主査

時長 勇

文化財保護主事	亀山 行雄 (調査担当者)	課長補佐 (埋蔵文化財係長) 松本 和男
平成8(1996)年度 調査体制		主 事 三宅 美博
岡山県教育委員会		岡山県古代吉備文化財センター
教 育 長	森崎岩之助	所 長 葛原 克人
岡山県教育庁		次 長 大村 俊臣
教 育 次 長	黒瀬 定生	<総務課>
文 化 課		総務課長 小倉 昇
課 長	大場 淳	課長補佐 (総務係長) 安西 正則
課長代理	松井 英治	主 査 山本 恭輔
課長代理	臼井 洋輔	<調査第三課>
参 事	葛原 克人	調査第三課長 柳瀬 昭彦 (調査担当者)
課長補佐 (埋蔵文化財係長)	平井 勝	課長補佐 (第一係長) 岡田 博
主 任	若林 一憲	文化財保護主事 速水 章人 (調査担当者)
岡山県古代吉備文化財センター		主 事 杉山 一雄 (調査担当者)
所 長	河本 清	平成11(1999)年度 整理体制
次 長	高塚 恵明	岡山県教育委員会
次 長 (文化課本務)	葛原 克人	教 育 長 黒瀬 定生
文化財保護参事	正岡 瞳夫	岡山県教育庁
<総務課>		教 育 次 長 宮野 正司
総務課長	丸尾 洋幸	文 化 課
課長補佐 (総務係長)	井戸 丈二	課 長 松井 英治
総務主幹	守安 邦彦	課長代理 佐々部和生
主 査	木山 伸一	参 事 正岡 瞳夫
<調査第三課>		課長補佐 (埋蔵文化財係長) 松本 和男
調査第三課長	柳瀬 昭彦	主 任 奥山 修司
課長補佐 (第二係長)	岡田 博	岡山県古代吉備文化財センター
文化財保護主査	内藤 善史 (調査担当者)	所 長 葛原 克人
平成10(1998)年度 調査体制		次 長 大村 俊臣
岡山県教育委員会		<総務課>
教 育 長	黒瀬 定生	総務課長 小倉 昇
岡山県教育庁		課長補佐 (総務係長) 安西 正則
教 育 次 長	平岩 武	主 査 山本 恭輔
文 化 課		<調査第三課>
課 長	高田 朋香	調査第三課長 柳瀬 昭彦
課長代理	西山 猛	課長補佐 (第一係長) 山磨 康平
参 事	正岡 瞳夫	文化財保護主事 杉山 一雄 (整理担当者)

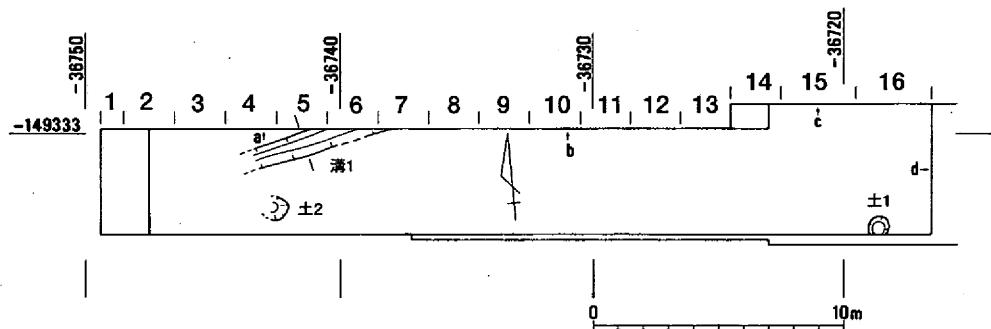
第3章 平成4(1992)年度の調査概要

第1節 遺構

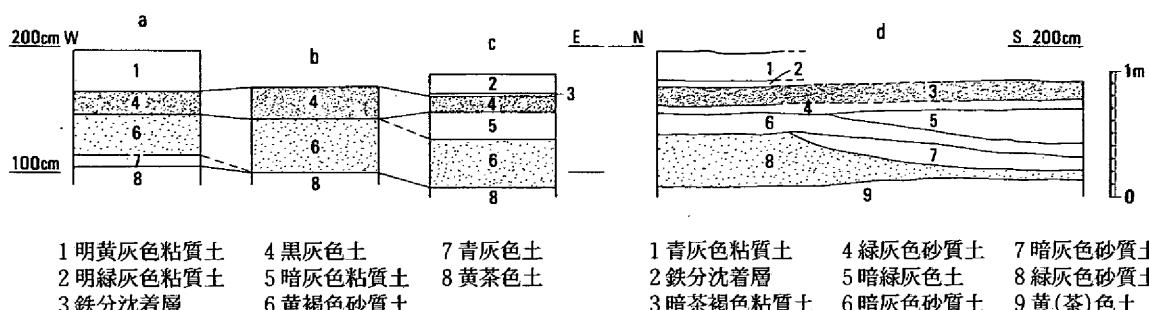
1. 調査の概要

調査の範囲は新京橋西詰交差点から西へ約33m間、幅約4m(一部5m)が対象となり、工事による鋼矢板等の土止め支保工と盛土除去の終了をまって、調査を開始した。調査の基準は工事の基本設計図をもとに、両防護壁を支える切りばり(2m間隔、一部3m間隔)の間を一つの区とし、今年度工事終了地点の西側から東側に向けて1~16区を設定し、おもに区ごとに掘り進めた。

調査対象地内は、道路面下深さ1.6m(海拔1.8~1.9m)にわたって、全体的に近・現代の攪乱を受けしており、とくに1~3区は弥生時代後期の基盤層(海拔1.4m)の下まで、調査区のほぼ中央部分では古墳時代後期以降の層(海拔1.7m前後)までその影響が及んでいた。調査区内の基本土層は、海拔1.7~2.0mの灰色系の粘質土が中世の水田層、海拔1.4~1.7m付近の黒灰~暗茶褐色粘質土が古墳時代前期の包含層、それ以下(a~c断面の6層以下、d断面の8層以下)は無遺物層であり、調査区の東寄りでは海拔1.4~1.6m付近で暗灰色土の弥生時代後期の遺物包含層(c断面の5層、d断面の4~6層)が看取された。そして、それぞれの包含層下面で土壌1・2を検出し、a断面の8層上面で溝1を検



第4図 検出遺構配置と土層断面位置 (1/300)



第5図 土層断面柱状模式図相関 (1/60)

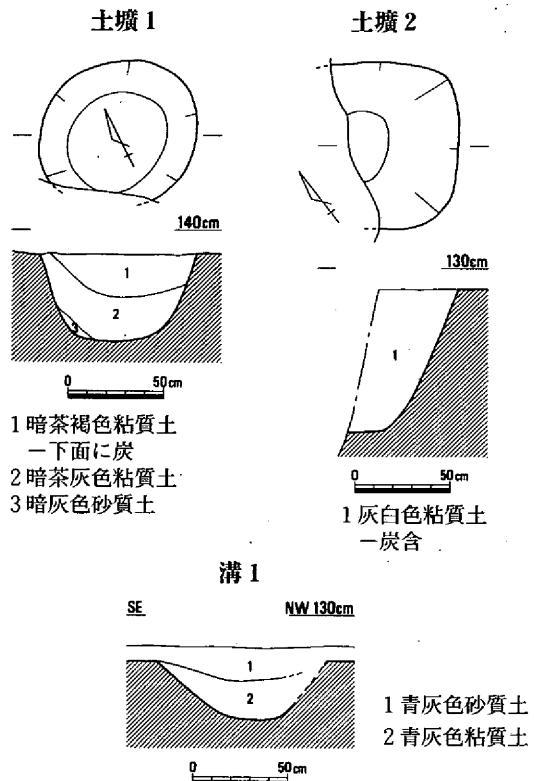
出した。なお、8～15区では遺構は検出されておらず、9～14区ではほとんど遺物の出土をみていな。また、第7図の土器溜まり出土の土器は12区でまとまって出土したが、遺物はおもに7・8区に集中してみつかった。

2. 弥生～古墳時代の遺構

土壙1(第6図、図版1) 16区から検出されたほぼ円形を呈する土壙である。規模は径約80cm、深さ47cmを測る。この土壙の肩部は、弥生時代後期包含層(d断面の6層)下部で検出されたが、実際には6層上面から切り込まれていて、1の壺は土壙上部の海拔130～140cm間から出土しているものの、この土壙に伴う。土器の時期は古墳時代前期を示すが、土壙の性格等は不明である。

土壙2(第6図) 調査区の西寄りの4～5区にまたがり、a断面の6層下部相当で検出された。平面形は隅丸方形と思われ、規模は一辺約90cm、深さ約80cmを測る。埋土は灰白色の炭粒を含む粘質土の単一層で、遺物は図示した甕のほかは数片しかない。時期は弥生時代後期後葉が与えられるが、土壙の機能は特定できない。

溝1(第6図) 4～7区にかけて東北東～西南西方向に検出された、幅約90cm、深さ約30cmの溝である。溝の西側は1区にかけて攪乱を受けていたが、その西側の平成10年度調査にかかる1区の南東隅で、同溝の一部が検出されている。1層は第5図のa断面の7層と対応する。溝の時期は、2層およびa断面の7層に土器の出土をみていないので何ともいえないが、層序関係からすれば弥生時代後期前半あるいは中期に遡る可能性もある。



第6図 土壙1・2、溝1平・断面 (1/40)

第2節 遺物

1. 弥生～古墳時代の遺物

出土した遺物はコンテナ39箱で、石器2点があるのみで、これ以外はすべて土器類である。土器類は、古墳時代の土師器や14世紀後半の土師器椀、16世紀後半から17世紀代の陶磁器が僅かに含まれるが大半は弥生土器である。これらの土器は遺構に伴うものは少なく、包含層出土の土器が主体だが全体の器形がわかるものが多い。また、出土状況として13・14区において遺物の出土が全く認められないことから、調査区全体を東西に分けて代表的な器形の土器類を図示する。

土器類

土壙1出土土器(第7図、図版5) 土師器壺1が1点出土したのみである。口径約13cmで、口縁端

部は強いナデによって内側に僅かに拡張し面を持ち、1条の沈線が廻る。体部外面にはハケメがみられるが、下半部は板状工具による丁寧なナデを施す。内面にはヘラケズリ痕が明瞭にみられる。土器の時期は、古墳時代前期に属する。

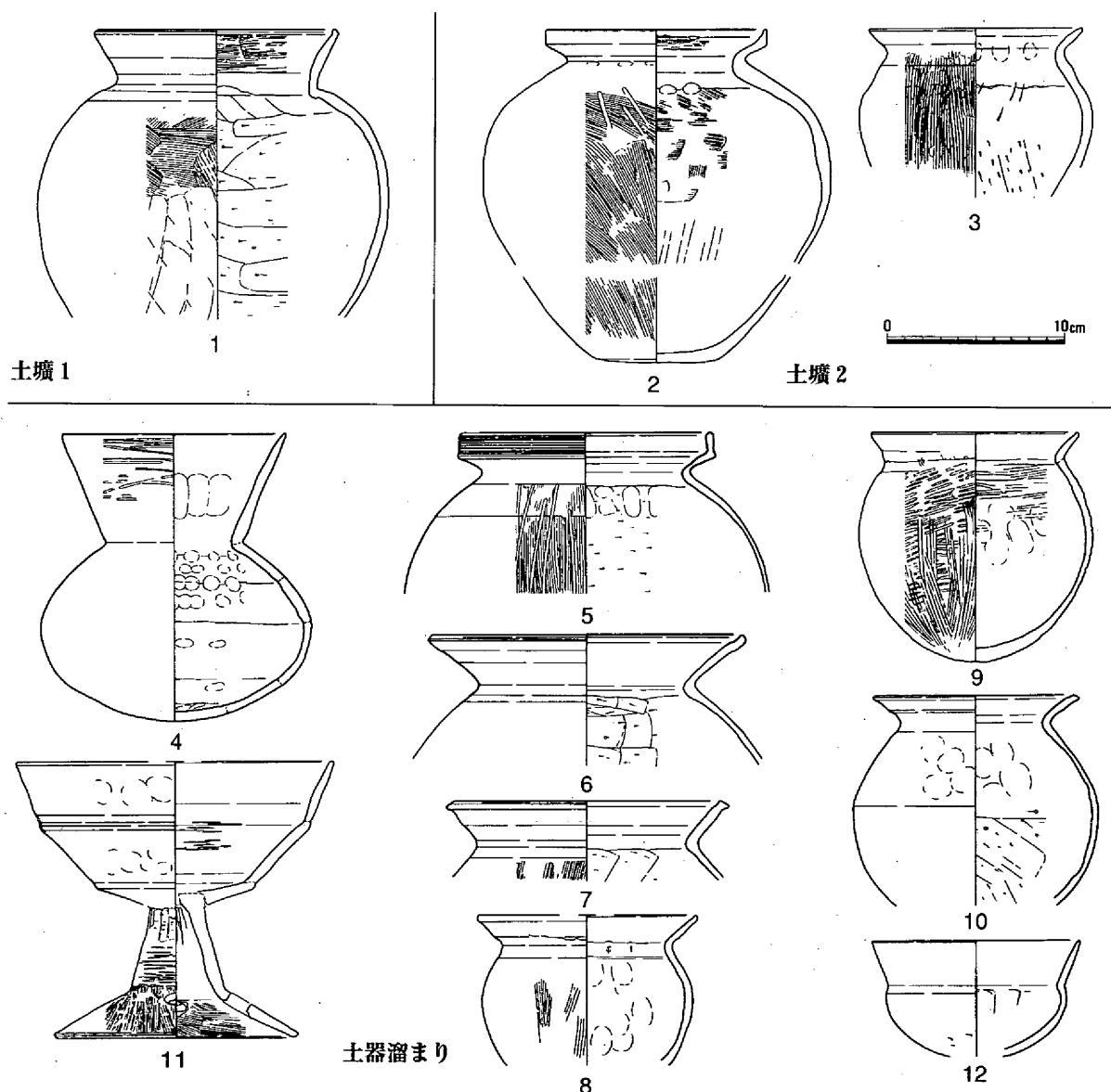
土壤2出土土器(第7図、図版5) 図示した以外は甕の小片が約20点ある。2は精製の胎土の甕で口径約12cm、器高は推定復元で約19cmを測る。全体に磨滅していく調整は不明瞭だが、体部外面は細かいハケの後にミガキを施す。内面も上半部にハケがみられ、下半部は工具ナデの痕跡が観察できる。3も口径12cmの甕で外面は被熱による赤化と煤がみられる。体部外面は指オサエの凹凸が顕著でその後に粗いハケメを施す。内面は下半部までハケメが観察でき、肩部付近に幅1cm前後の板状工具痕が残る。3は2よりも古い様相を示しているが、2は弥生時代後期後葉の時期に属する。

土器溜まり出土土器(第7図、図版5) 12区の土壤状の落ち込みから出土した土器群で、図示した以外にも小片が27点ある。4の直口壺は表面の磨滅が顕著で調整の詳細は不明瞭だが、口縁部外面は横方向の細かいミガキ、体部内面には押圧痕がみられる。5~10は甕で、5の口縁外面には9条の櫛描き沈線が廻る。9は外面に5条/15mmの単位でタタキをおこない、その後にタテハケを粗く施す。高杯11は精製粘土を用いており、杯部と脚部は差し込みによって接合している。表面の磨滅が顕著だが、杯部外面は押圧痕が明瞭に残り、内面には僅かに横方向のミガキが施されている。脚部はハケメがみられ、柱部外面は横方向のケズリを杯部との接合部分に施した後にミガキをしている。柱部内面にはシボリ痕が看取できる。脚部の透かし穴は4個で脚部と柱部の境付近に穿つ。塙12は表面のナデにより調整痕が不明瞭だが、体部外面にはケズリ痕、内面には板状工具によるナデが残る。これら土師器の時期は、古墳時代前期に位置付けられる。

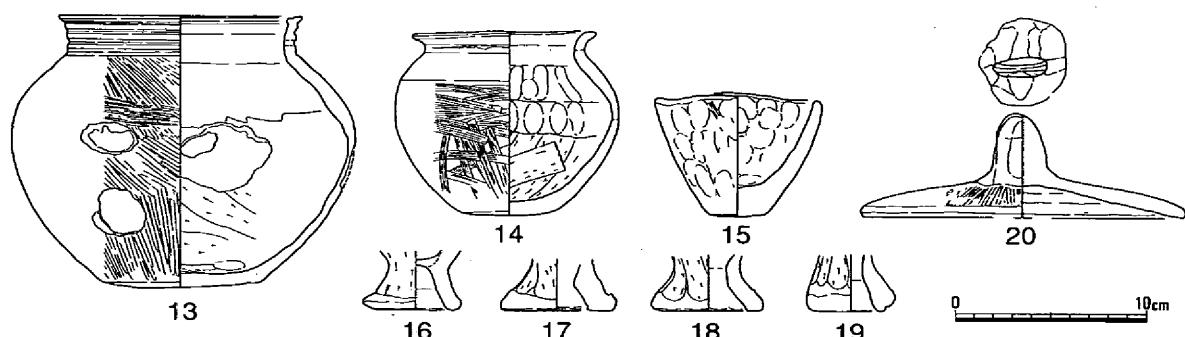
15・16区出土土器(第8図、図版5) 調査地東端に位置する調査区で、弥生時代後期前半を主体とした土器が出土している。出土した弥生土器の器種組成を最小個体数でみてみると、壺9個体(12%)、甕31個体(41%)、高杯7個体(9%)、製塩土器18個体(24%)、器台1点、蓋1点で計75個体がある。総数に比して製塩土器の比率が高いが、体部片も含めて赤化が顕著で使用後の廃棄と考えられる。図示した土器は、13が短頸壺、14~19は鉢、20は蓋である。13は頸部に4条の凹線を廻らせた後に2個一対の穿孔を施す。体部には外面からの敲打による穿孔2ヶ所と未穿孔1ヶ所がみられ、内面には煤が付着している。14は外面に幅5mm程の工具による不整方向のナデがみられる。15は内外ともに指頭圧痕が顕著にみられ、外面には僅かにハケメが残る。16~19の製塩土器の脚は被熱による赤化が顕著である。20は円板に薄い板状のつまみの付く蓋で、内面の特に天井部に被熱痕が観察できる。土器の帰属時期は、13~15は16区でまとまって出土していることから弥生時代後期前半、16~19も同時期で、20のみが後期後半の時期と考えられる。

4~11区出土土器(第9~13図、図版5~7) 調査地西側の調査区で、9・10区が弥生時代後期後半を主体とし、その他の調査区は後期前半を主体とした土器が出土する。弥生土器の器種組成を最小個体数でみると、壺86個体(11%)、甕384個体(50%)、高杯121個体(16%)、鉢148個体(19%)、器台9個体(1%)、製塩土器26個体(3%)で、総個体数775個体である。総個体数のうち640個体(83%)が7~10区で出土しているが、全調査区にほぼ共通して壺が非常に少なく、甕が他器種よりも圧倒的に高い比率を示すことが注目される。また、壺・甕・器台に共通して製作時に粘土で補修しているものや焼成時に接合部から剥がれて使用されたとは考えにくいものなどが目に付く。出土した土器の中には、備中の小田川流域で特徴的な胎土を持つ弥生時代後期前半の高杯2点がある。図示した土器は、

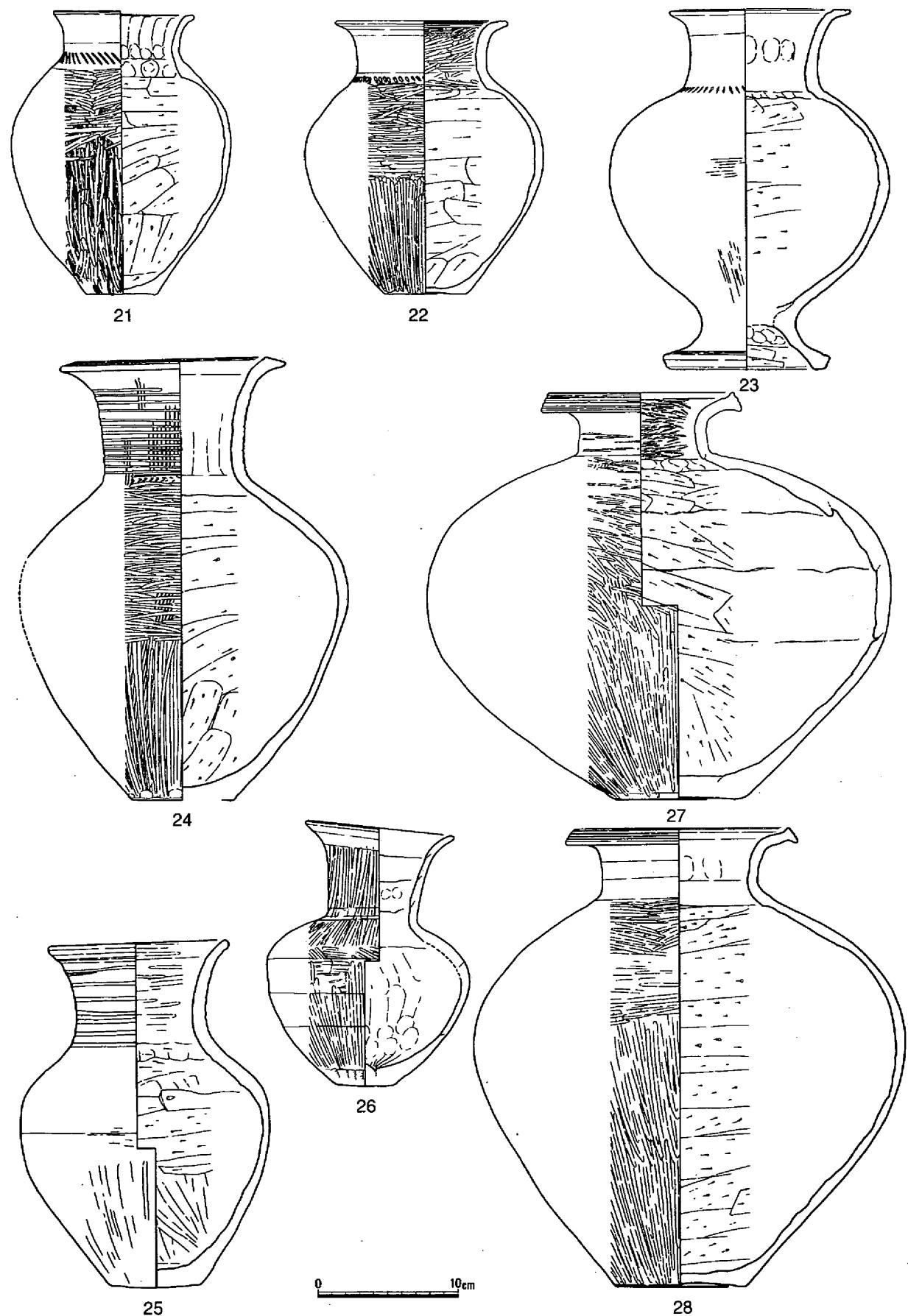
21~34が壺、35~39が甕、40~50が高杯、51~58は鉢、59は蓋、60・61は器台、62・63は線刻のある壺片である。壺は21~29・31・32は弥生時代後期前半で、頸部の沈線は24が螺旋、25が1本ずつ施す。26の肩部にはミガキの下に僅かにタタキがみられる。30は鈍い橙色を呈する壺で、外面調整は磨滅が顕著で不明だが、内面にはケズリが明瞭にみられることから弥生時代後期前半頃と判断さ



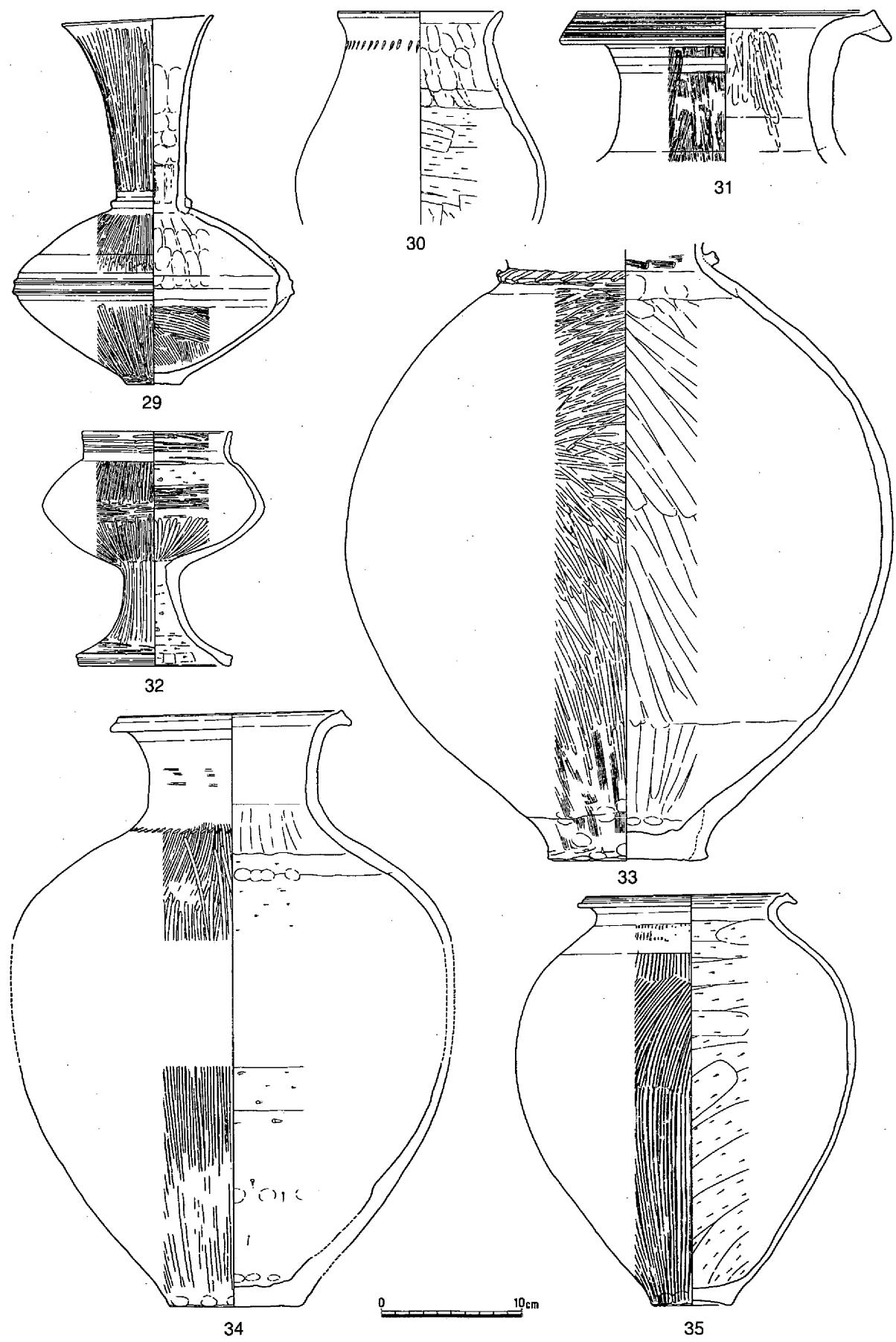
第7図 土壙1・2、土器溜まり出土土器 (1/4)



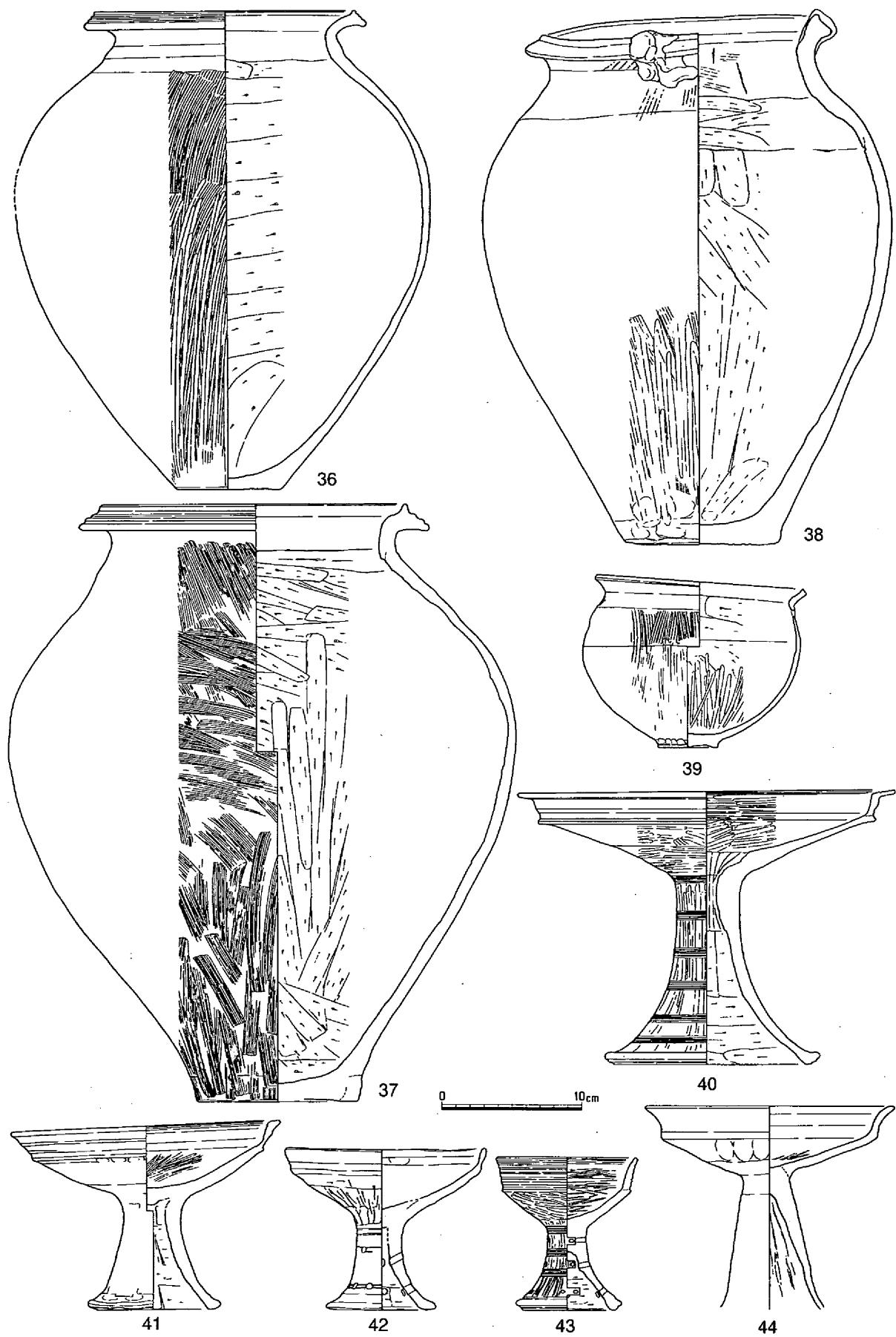
第8図 15・16区包含層出土土器 (1/4)



第9図 4~11区包含層出土土器① (1/4)



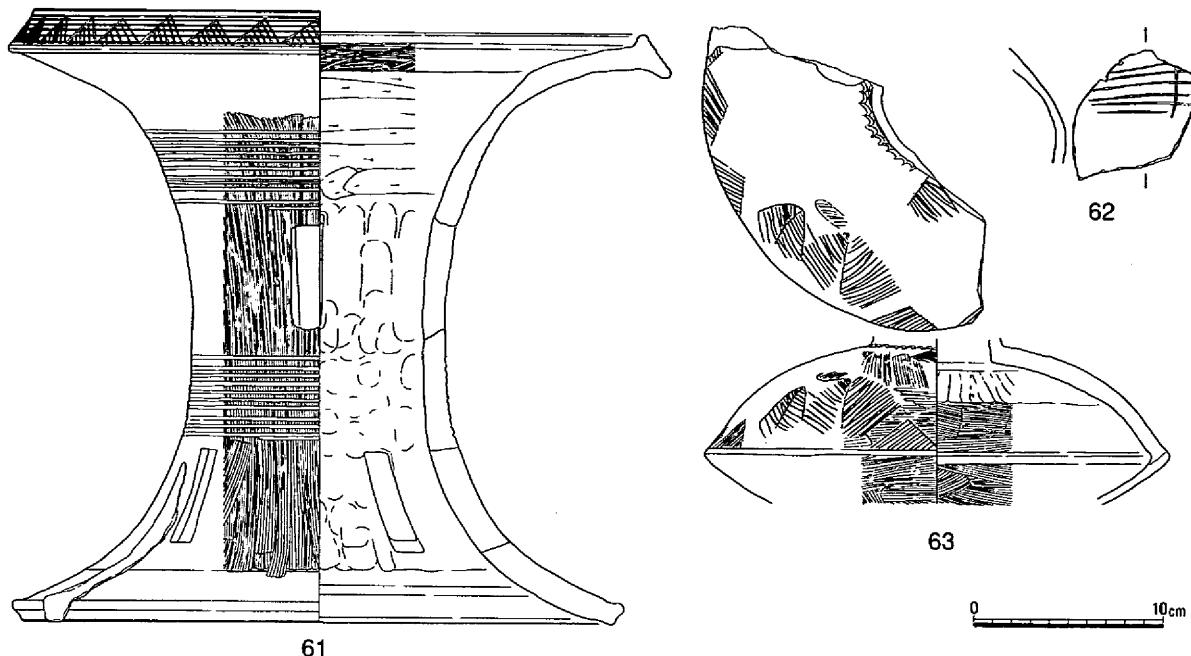
第10図 4～11区包含層出土土器② (1/4)



第11図 4~11区包含層出土土器③ (1/4)



第12図 4~11区包含層出土土器④ (1/4)

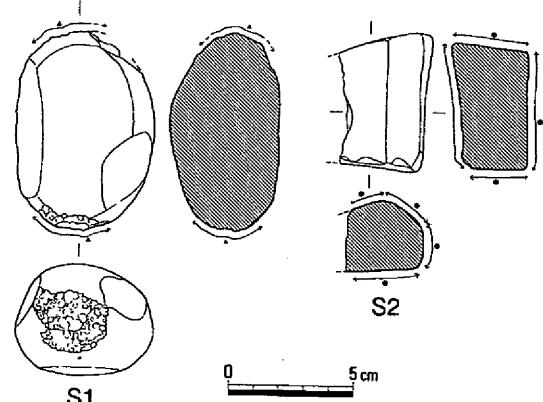


第13図 4~11区包含層出土土器⑤ (1/4)

れる。33の体部は倒卵形で頸部に貼り付け凸帯が付き、西部瀬戸内系の壺の形態に似ているが、色調は黄橙色で焼成良好、比較的堅緻であることから、在地産と考えられる。34は体部に接点がなく全形は明確でない。橙色を呈し焼成不良で、頸部には沈線が僅かに残されている。33・34の時期は弥生時代後期中葉頃と考えられる。35~39は弥生時代後期前半の甕で、38は橙色で精製粘土を用い、口縁に焼成前の粘土紐による補強がみられる。39は体部下半が被熱により白色化しており、煤も付着していることから甕としての用途が考えられる。40~50は弥生時代後期前葉から中葉の高杯で、杯部と脚部の接合方法は、40~42・47~50は円盤充填、44~46は差し込みで柱部内面にシボリ痕を残している。50は外面全体に煤が付着しており、杯部のみを蓋として転用したと考えられる。51~57は弥生時代後期中葉の鉢で台の付くものはすべて円盤充填である。57の外底部には押圧痕がみられる。鉢58は口縁の端部から内面にもハケメがみられ、体部内面は粗いハケメが残る。時期は胎土・調整から弥生時代後期と推察される。59は弥生時代後期中葉の蓋で一対の穴がある。60・61は弥生時代後期中葉の器台で、61も脚部に焼成前の粘土紐による補強がみられる。62は壺の肩部にほぼ平行に横線6本を1本ずつ引いた後に、それらに直交するように縦に1本引いている。破片のためモチーフの不明瞭だが、建物を表現している可能性が高い。63は直口壺の体部上半から頸部にかけて波状文と鋸歯文と同一工具によって線刻がされている。頸部の線刻は62と似ているが、体部のモチーフは不明である。62・63ともに胎土・器形から弥生時代後期前半頃と考えられる。

石器(第14図)

S1は両端に敲打痕のある叩き石、S2は土器溜まりから出土した砥石片で、全周に砥面がみられる。石器の帰属時期は不明だが、出土状況からS1は弥生時代後期、S2は古墳時代前期と考えられる。



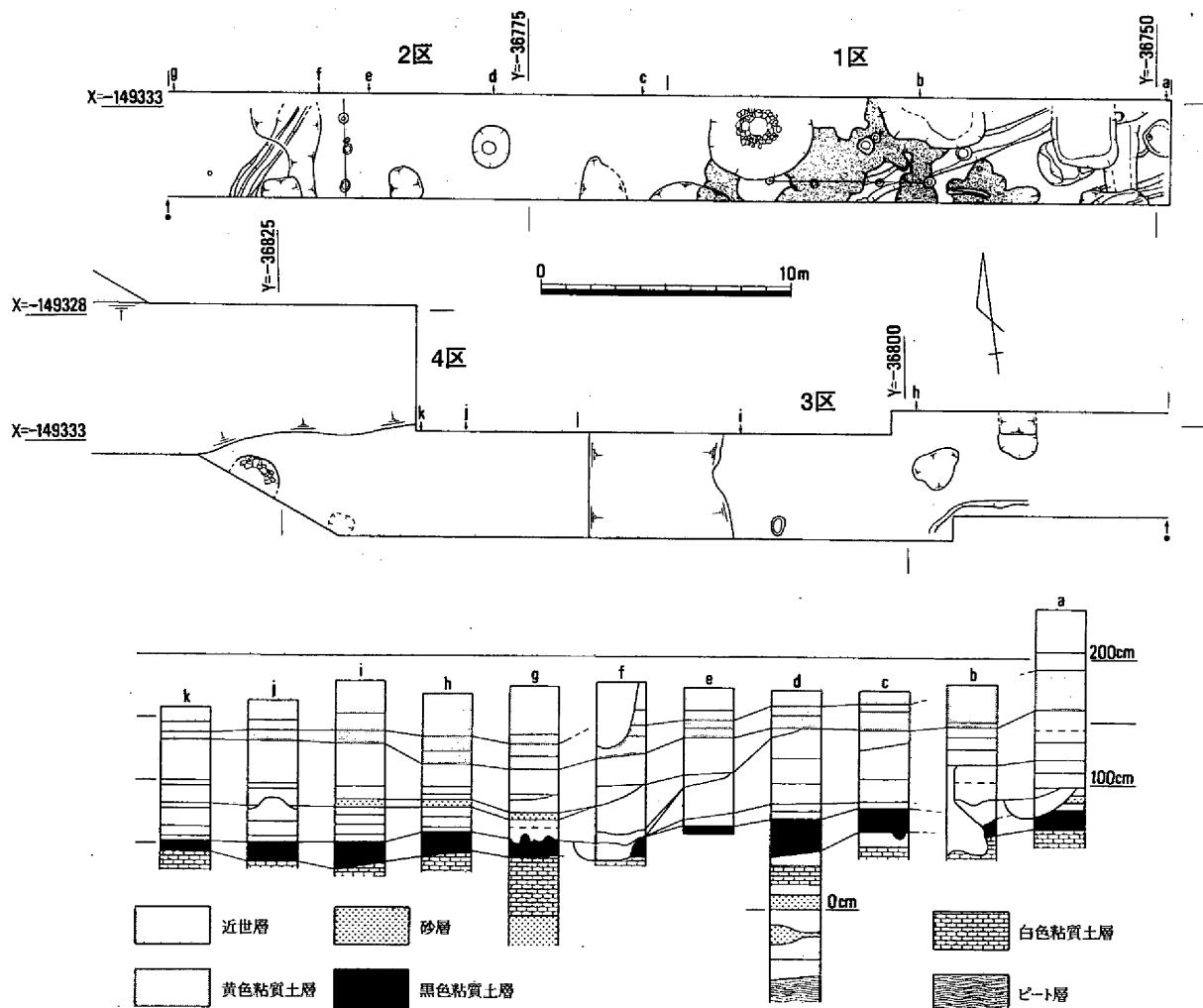
第14図 石器 (1/3)

第4章 平成10(1998)年度の調査概要

第1節 1～4区の遺構

1. 調査の概要

平成4年度に調査した1区の西側に隣接した調査区で、東側から20m間隔で1～4区を設定した。調査は、道路面から約150cmの造成土を機械により掘削した後に人力により行った。1～3区は幅約4mについて全面を掘り下げたが、4区は現有道路下にあたり、過去の下水管埋設の際に大きく攪乱されていることが想定されたため、幅1mのトレンチで攪乱状況を確認し、調査可能な部分についてのみ全面を掘り下げた。



第15図 1～4区検出遺構と土層断面位置 (1/300) 及び土層断面柱状模式図相関 (1/60)

掘削面では昭和20年に受けた空襲の片付けのための土壌が多く検出され、それらによって攪乱された状況で中・近世の遺構が海拔170cm前後で検出できる。1区では海拔約120cm以下で弥生土器が多量に出土し、土壌・溝など弥生時代後期後半の遺構が密集して存在することが確認された。2~4区では溝と高まりが検出され、土層断面で一部水田畦畔と考えられる高まりが確認されたのみで、遺物もほとんど出土していない。

第15図の下段に土層断面柱状模式図を示した。近世以前の地形は、黄色土層の堆積状況をみるとa地点からk地点に向かって緩やかに下がっている。海拔140cm前後では、d地点より西は砂・砂質土が堆積しているのに対してa~c地点は砂質の弱い土が堆積している。これらのことと遺構のあり方から考えて、弥生時代後期を中心とした微高地の核となる部分がa~c地点にあり、c地点以西はそれ以降の旭川の堆積作用によって微高地が拡大していった状況を示していると推測される。

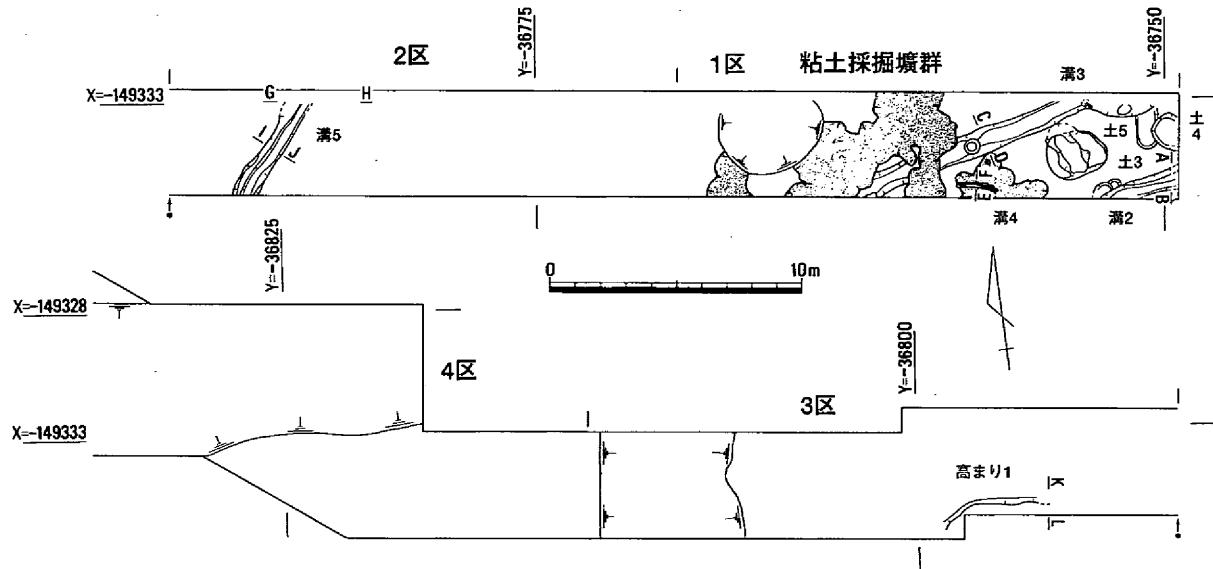
2. 弥生~古墳時代の遺構

該期の遺構には、土壌・溝・高まり・ピットなどがある。遺構の大半は弥生時代後期後半で、それらの遺構を切る状況で検出したものについては古墳時代に入る可能性があるが、出土遺物中には古墳時代の土師器・須恵器は数点みられるのみである。

土壌3(第17図) 1区東端に位置し、溝2と土壌4に切られる。長楕円形を呈し、微砂で埋没している。出土遺物は土器の小片があるのみで、それらから時期は弥生時代後期中頃と考えられる。

土壌4(第17図) 1区東端に位置し土壌3を切っている。平面形は円形に近い方形と想定できる。調査区壁面の土層断面で海拔116cmから掘り込まれ、基盤層の第7層土を中心としたブロック土で人為的に埋められているのを確認した。第8層まで掘り込まれていないが、粘土採掘場として掘削されたと判断できる。時期は、出土遺物等から弥生時代後期後半と考えられる。

土壌5(第17・41図、図版1) 1区東側に位置する楕円形の土壌である。断面形が袋状を呈し底面も凹凸が顕著だが、白色粘質土層を縦横に掘り込んだ結果の状況と判断できる。埋土は基盤層のブロック土で人為的に埋められており、出土遺物は第1層土以上で完形に近い土器が多く出土する。これ



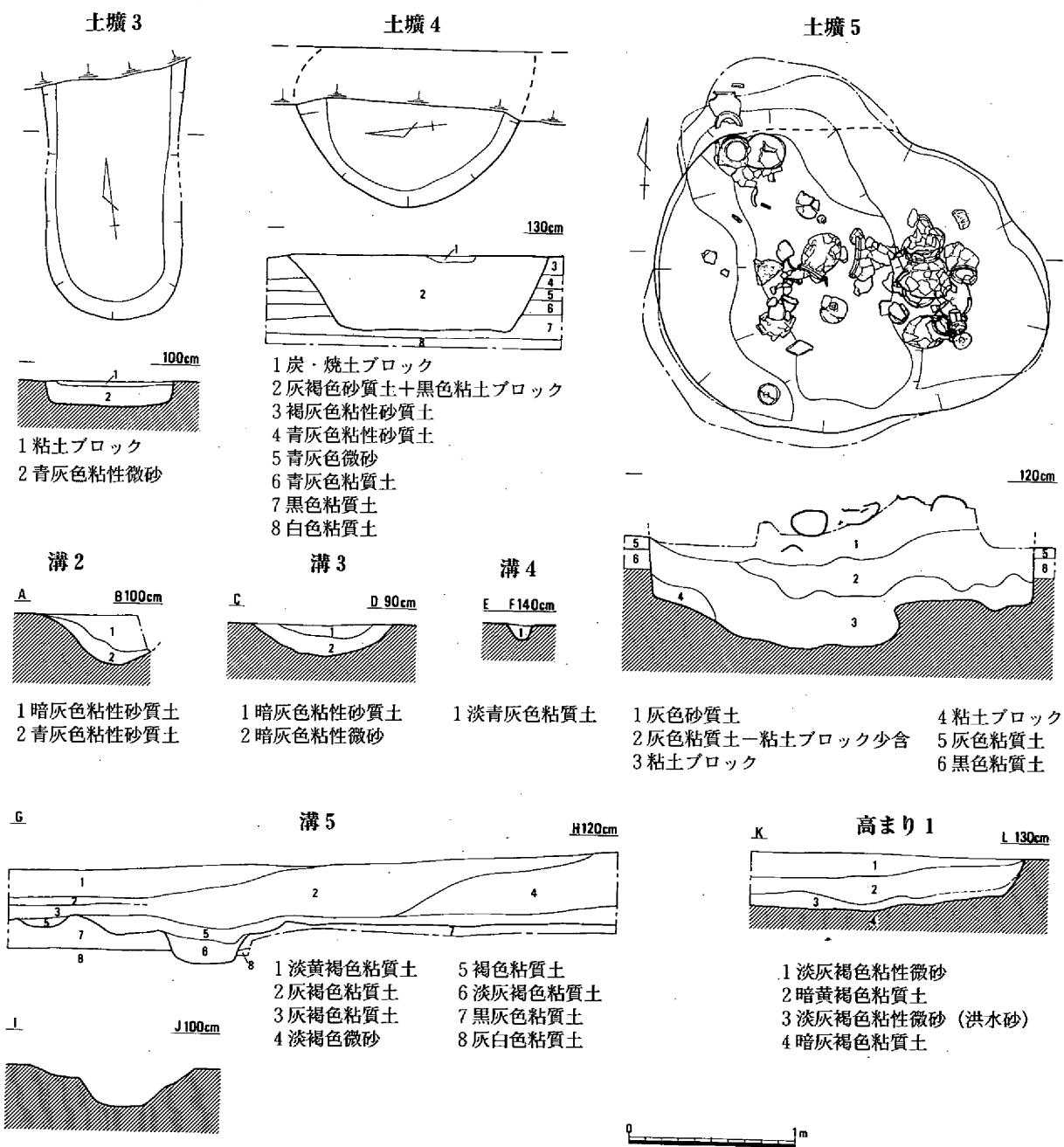
第16図 1~4区弥生・古墳時代遺構配置 (1/300)

らのことから、本土壙は粘土採掘壙として掘削された後に一部埋め戻してゴミ穴として利用されていたと考えられる。時期は、出土遺物から弥生時代後期後半と判断される。

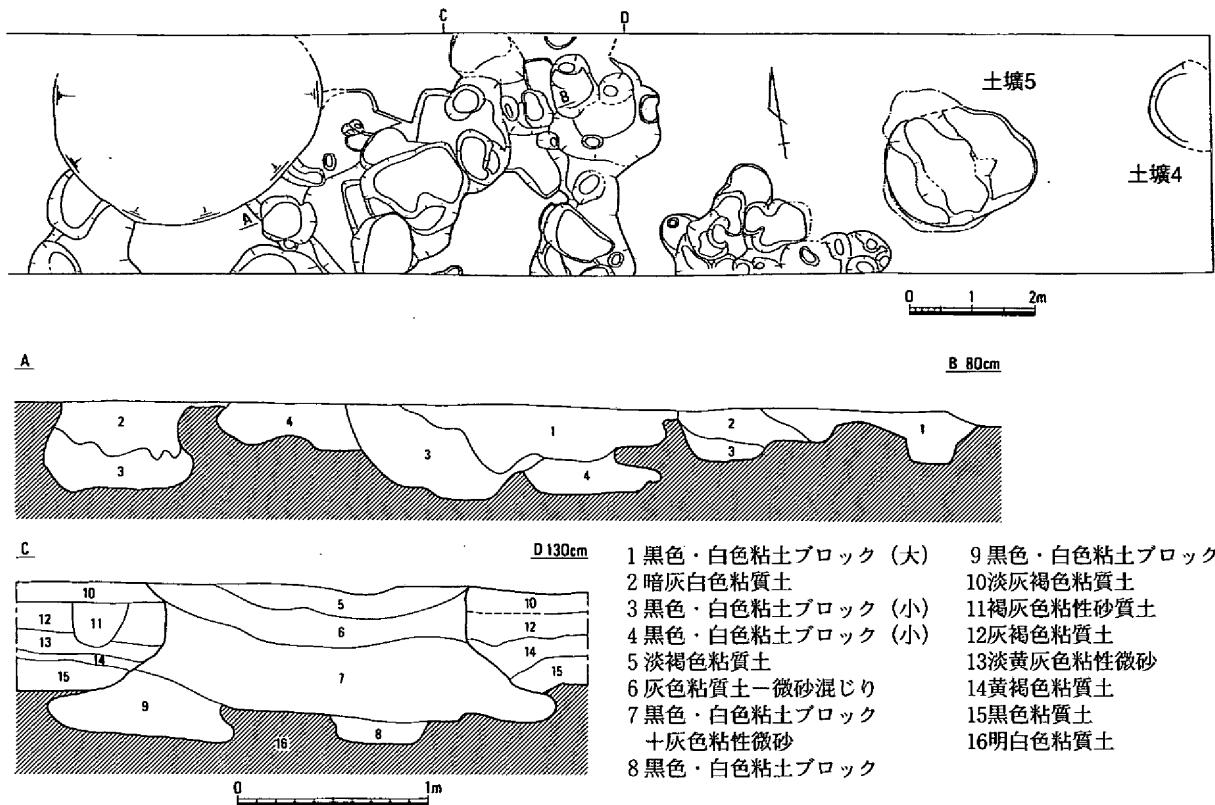
溝2(第17図) 1区南東隅で東西方向に検出した。平成4年度調査の溝1と同一の溝と判断される。出土遺物は小片の土器があるのみだが、それらから時期は弥生時代後期前半と考えられる。

溝3(第17図) 1区東半で粘土採掘壙に切られて検出した。流路方向は北東から南西で溝2とほぼ同一だが、土層観察から溝2よりも新しい時期に掘削されたことを確認している。出土遺物は土器の破片が多くあり、それらから時期は弥生時代後期中頃と考えられる。

溝4(第17図) 1区中央南端で、粘土採掘壙の上面に位置する。幅約16cm、深さ8cmで弧状に検出されたが、性格は不明である。出土遺物は弥生時代後期の土器が僅かにあるが、時期は不明瞭である。



第17図 土壙3～5、溝2～5、高まり1平・断面 (1/40)



第18図 粘土採掘壙群平・断面 (1/120・1/40)

溝5(第17図) 2区西側で北東から南西方向に検出した。上面を1区からつながる第5層によって被覆されている。時期は出土遺物から弥生時代後期中頃と考えられるが、機能は不明瞭である。

高まり1(第17図、図版2) 3区東部の南端で、北側に下がる状況で検出した。高まりの頂部から底面にかけてはほぼ垂直に35cm下がり、底部上面から斜面には微砂層が確認できる。水田面は確認できていないが水田に関係する遺構と推察される。時期は、高まり上部に弥生時代後期後半のほぼ完形に復元できる鉢が貼り付いて出土したことから該期に機能していたと考えられる。

粘土採掘壙群(第18図、図版2) 1区全面で検出した土壤群である。c-d断面に示したように白色粘質土層近くから袋状を呈し、その下層まで掘り込むものがほとんどないこと、そして人為的に埋め戻していることから白色粘質土の採取を目的とした粘土採掘壙と判断した。検出面が白色粘質土層上面であったため土壤相互の関係については明らかでないが、平面的なあり方が溝状に列をなしたり、群としてまとまっている状況が認められる。また、掘り方に方形と円形の二種がみられることから、大きくは二時期に計画的に掘削されたと推察される。時期は、出土遺物から弥生時代後期後半を中心として後期末までと考えられる。

他の遺構 平面的には検出できなかったが、2区から3区の調査区土層断面で水田畦畔と推察される高まりを確認した。これらの高まりを持つ粘質土層は、自然科学的分析の結果、イネ属の短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体が検出されたことから水田層の可能性が高い。時期は、高まり1と同時期に機能していたと考えられる。しかし、この上層に堆積した砂層の状況と合わせて検討すると、百間川遺跡群で検出される弥生時代後期末の洪水砂で埋没した水田と同様な状況を呈しており、時期的な差異が認められる。したがって、今回は弥生時代後半から後期末の幅を持たして捉えておきたい。

3. 中世～近世の遺構

該期の遺構には、井戸・土壙・溝・柱穴列がある。中世の遺物が包含層を中心に僅かに出土しているが、中世の遺構と断定できるものは少ない。

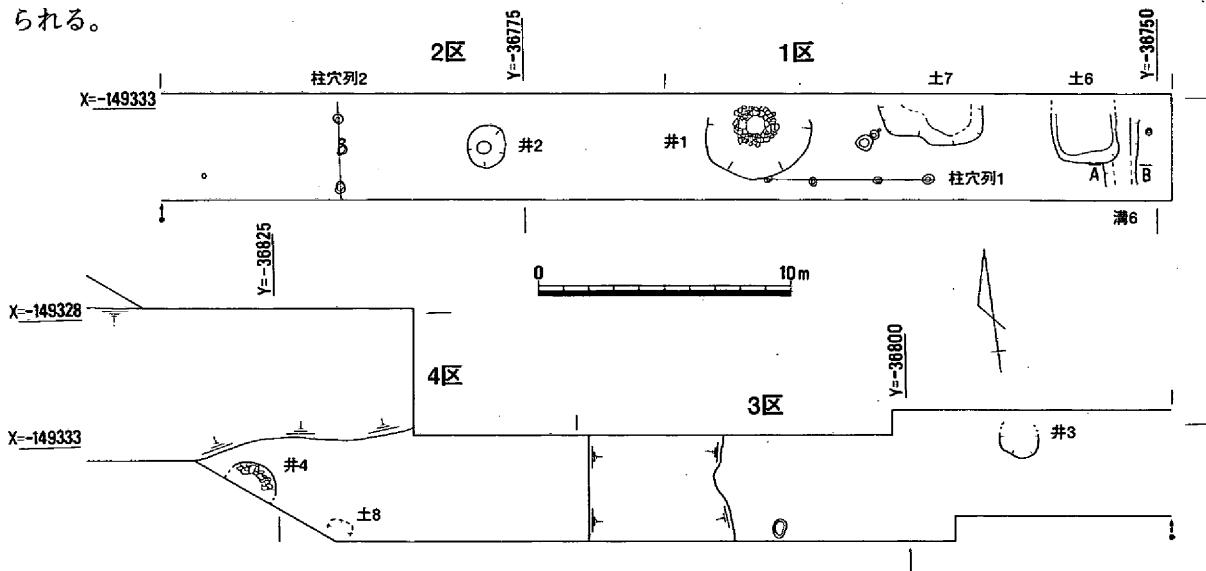
井戸1（第20図、図版2） 1区西部に位置する。径約410cmの掘り方中央に、加工していない石を組んで内径80cmの井戸側を築いている。水溜底面までの深さは335cmで海拔高は-173cmを測る。

井戸の築造順序は、先ず掘り方を広く垂直に掘り下げ、中程で一旦テラスを設けてさらに水溜よりやや深めに掘り下げている。ただ、西側の土層堆積を観察すると2度の掘り方線がみられ、また壁面が大きく抉れていことから、西側については掘り下げ中に壁面が崩落したために当初よりも内側に控えて、改めて掘削し直していると理解される。掘り方掘削後、10cm前後の繰り石を敷き、その上に水溜となる径85cm、深さ95cmの木桶を置き、さらに繰り石を木桶の裏側（外側）上面まで充填する。この面で大型の長手の石を木桶の周囲に小口を見せて並べ、その上位に大きく三段階に分けて裏込土を締めながら石を積んでいる。木桶は、厚さ2～3cmで1枚の幅が10cm前後の板に側面の上下2ヶ所に穴をあけて、互いを木釘で接合してある。さらに外側は竹籠で締め、内側底部には切り込みを入れた厚さ2cmで幅4cmの棒状の板を曲線にあわせてまわし、外圧によって桶が倒れないようにしている。

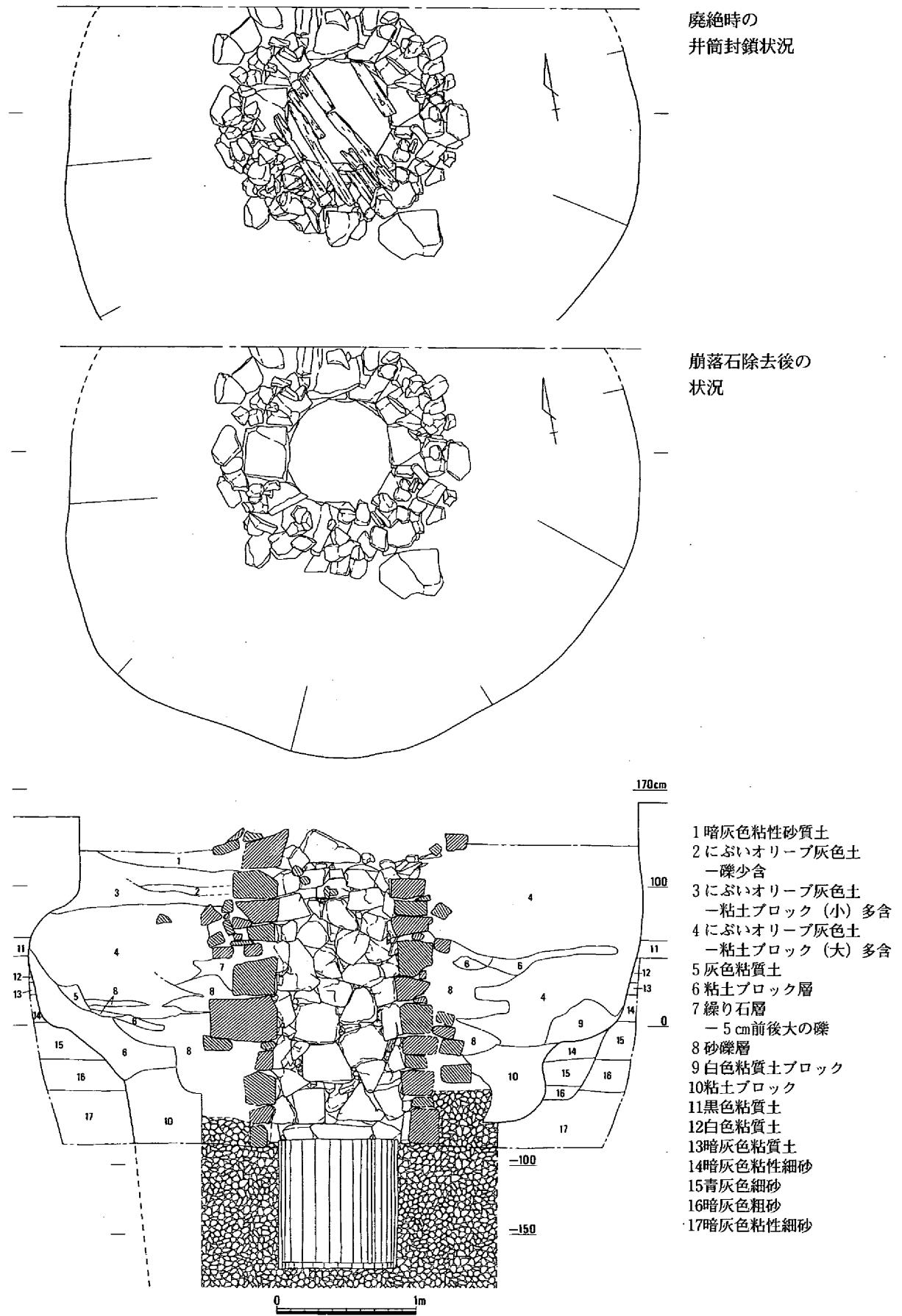
対して廃絶時は、井戸側内の埋土が水溜まで基本的に粘土ブロックを含んだ土の単層で、人為的に埋められたと推察されることから、一気に井桁付近まで埋め戻したと推察される。そして、井桁材と考えられる木材を石に渡して封鎖し、さらに土砂をかけて埋めている。井戸の廃棄の際に、竹筒を埋める習俗が多くみられるが、本井戸を含めて今回調査した井戸ではみられなかった。

出土遺物はほとんどないが、掘り方中に桃山期の備前焼擂り鉢片、井戸側埋土に近世の国産陶器片が少数みられる。したがって、時期については明確にできないが、概ね17世紀前葉に作られ、江戸時代全般にわたって使用されたと考えられる。

井戸2（第21図、図版2） 2区中央部に位置する。径167cmの掘り方中央に径約60cm、深さ65～70cmの木桶を重ねて井戸側を築いている。木桶は2段が残存しているが本来は3段はあったと考えられる。



第19図 1～4区中・近世遺構配置 (1/300)

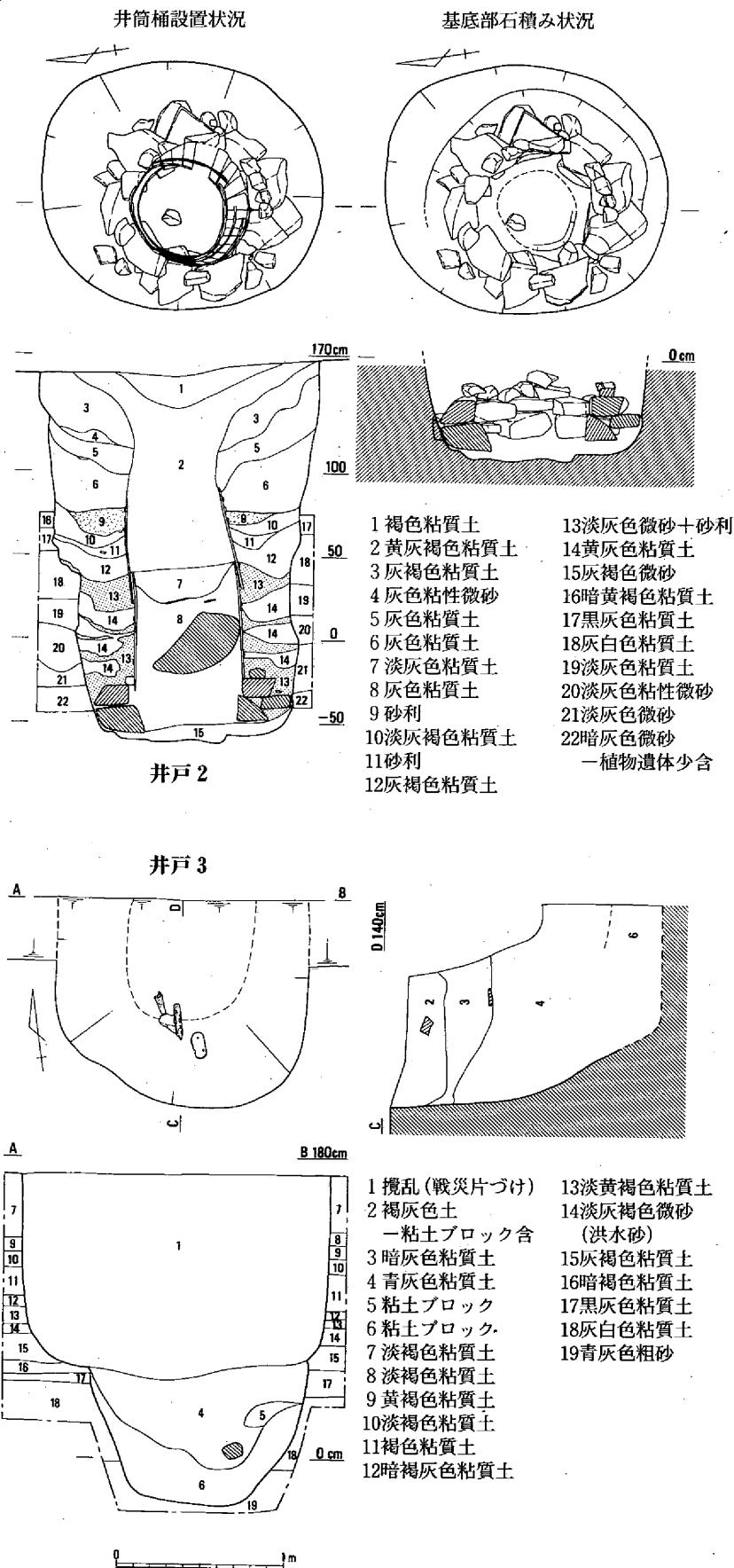


第20図 井戸1平・断面 (1/40)

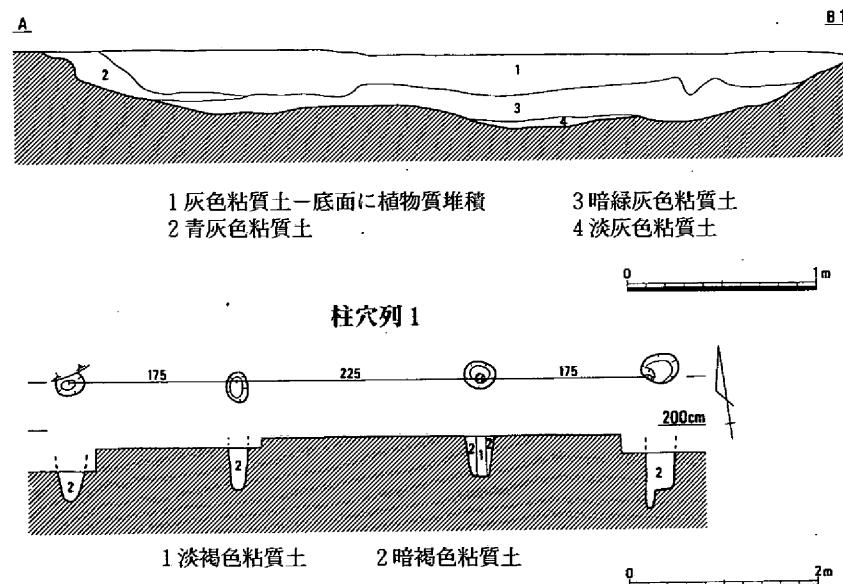
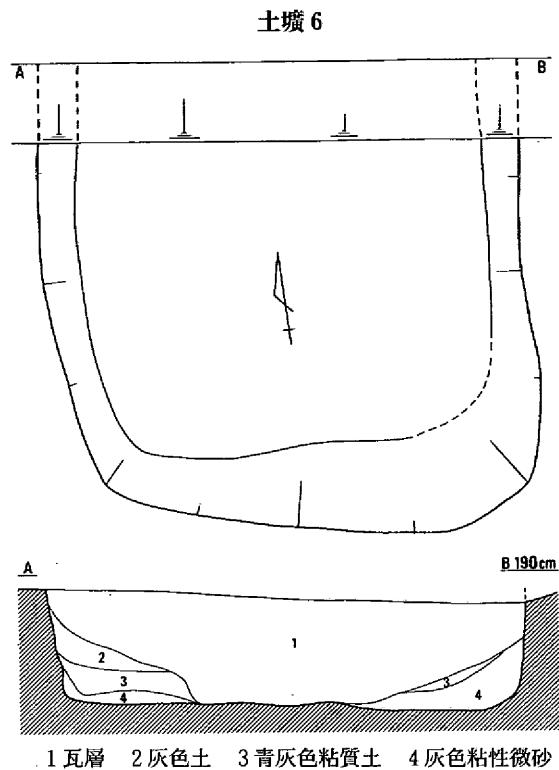
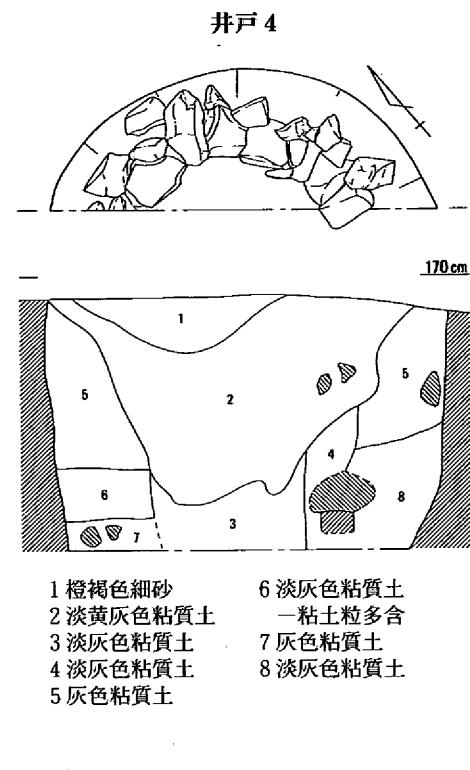
井戸の築造順序は、先ず掘り方を垂直に掘り下げる、中程で狭いテラスを設けてさらに垂直に深さ約230cmまで掘り下げる。この際、水溜部にある底面中央は10cm程凹めておく。底面全体に第15層の微砂を敷き、その上に内径60cm弱になるように小振りな自然の板石を二段積んで水溜を作る。そしてこの石積みを根石にして木桶を積んで井戸側を築くが、裏込土は残存している木桶二段までは砂・砂利と粘質土を丁寧に互層に入れて締めている。しかし抜き取られた桶の部分の裏込土は非常に雑に詰めている。井戸側に使われている木桶は井戸1の水溜に用いられているものより小型で厚さ1cmで1枚の幅約6cmを測る。板の組み方は同様で桶の外側には竹籤でそれぞれ3ヶ所を締めている。

対して廃棄時は、上段の桶をはずした後に井戸の周辺で使用していた石なのだろうか、巨石を投げ込み一旦第7層までを埋めてそれから一気に上面まで埋め戻している。

出土遺物は、掘り方から桃山期の備前焼擂り鉢や17世紀前半の肥前陶器椀がある。また、井戸側内の埋土中からは備前焼や18世紀末以降の肥前系陶磁器・関西系陶器がみられる。したがって、本井戸は



第21図 井戸 2・3 平・断面 (1/40)



第22図 井戸 4、土壤 6～8、柱穴列 1・2、溝 6 平・断面 (1/40・1/80)

17世紀前半頃に築かれ19世紀代に廃絶したと考えられる。

井戸3(第21図) 3区東部北端に位置し、上層の大半を近代に攪乱を受けている。上面形は隅丸方形を呈し、底面までの深さが約2mを測ることから素掘りの井戸と判断した。埋土は大きく四層に分層でき、第3層以下は粘性が強くしまりが悪いことから使用時に堆積したと考えられる。それに対して第2層は多くの粘質土ブロックがみられることから人為的な埋土と判断される。出土遺物は第4層上面に集中しており、多量のカエルの骨、牛角や下駄などがある。牛角や下駄は人為的な投げ込みと考えられるが、カエルは多量に四肢骨がまとまって出土することから井戸内で孵化・生長した個体が死滅した結果と理解できる。このことから、第4層以下が堆積した後も掘り返さずに使用していたと推察される。時期は第6層中から出土した肥前陶器から17世紀末以降に機能していたと考えられる。

井戸4(第22図) 4区東部南端に位置し、約半分のみが残存している。径約210cmの掘り方に加工していない石を組んで、内径約90cmの井側を築いている。検出面が低かったため明確でないが、第1・2層の堆積状況から廃絶時に井桁付近の石組みを壊して埋めたと推察される。出土遺物が瓦片のみのため時期の詳細は不明だが、石組みの状況と廃絶時の方法・埋土から井戸1と同期間に機能していたと考えられる。

土壙6(第22図) 1区北東部に位置し、方形を呈する。約60cmの深さまで垂直に掘削し、第2～4層が埋没した後に再度掘り返して、平瓦を主体に丁寧に詰め込んでいる。上位の瓦は1/2～1/4程度の大きな破片だが下位のものは小片から碎片である。機能については、明確でないが、瓦の充填状況から水溜施設の可能性がある。出土遺物は瓦類のほかに備前焼・肥前系陶磁器・瀬戸・美濃系陶器・関西系陶器などがある。時期は、陶磁器から18世紀末から19世紀前半に造られたと考えられる。

土壙7(第22図) 1区中央北端に位置する不整形の土壙である。底面は凹凸が顕著で、埋土は粘性が非常に強く、第1層の底面には植物質の堆積がみられる。出土遺物は僅かで、備前焼・肥前系陶磁器などがあるが機能については明らかでない。時期は16世紀末から17世紀初頭のものが主体的だが、17世紀後半頃の陶磁器がみられることから該期に掘削されたと判断される。

土壙8(第22図) 4区東部南端に位置するが、形状は不明である。埋土には、基盤層の粘土の小ブロックと多量の炭が混在しているが、性格は不明である。出土遺物はほとんど採集できていないが、備前焼・瀬戸・美濃陶器などがみられ、これらから時期は17世紀前半以降と判断される。

溝6(第22図) 1区東部に位置し、南北方向で検出した。出土遺物には備前焼や土師器の小片があるのみで、時期・性格については明確にできない。しかしながら、土壙6との切り合いと遺物から近世前半と推察される。

柱穴列1(第22図) 1区西部に位置する。東西方向に並ぶ柱穴が4基のみで、北側にも同様の埋土を持つピットを検出したが、まとまりは不明確である。柱痕跡のみられるものから推測して柱径は5cm前後を測る。時期は、井戸1の掘り方に切られ、埋土中から14世紀前半の高台付土師器碗が出土していることから室町時代と判断される。

柱穴列2(第22図) 2区中央に位置し、柱穴4基が南北方向に並んで検出された。柱穴には径6cmの柱を繰り石を詰めて押さえているものがみられる。時期は、埋土中から14世紀前半の高台付土師器碗と糸切りの土師器小皿が出土していることから室町時代後半と判断される。埋土の色調と質は柱穴列1と同じで方向が直交することから同時期に機能していた可能性が高い。

第2節 5～8区の遺構

1. 調査の概要

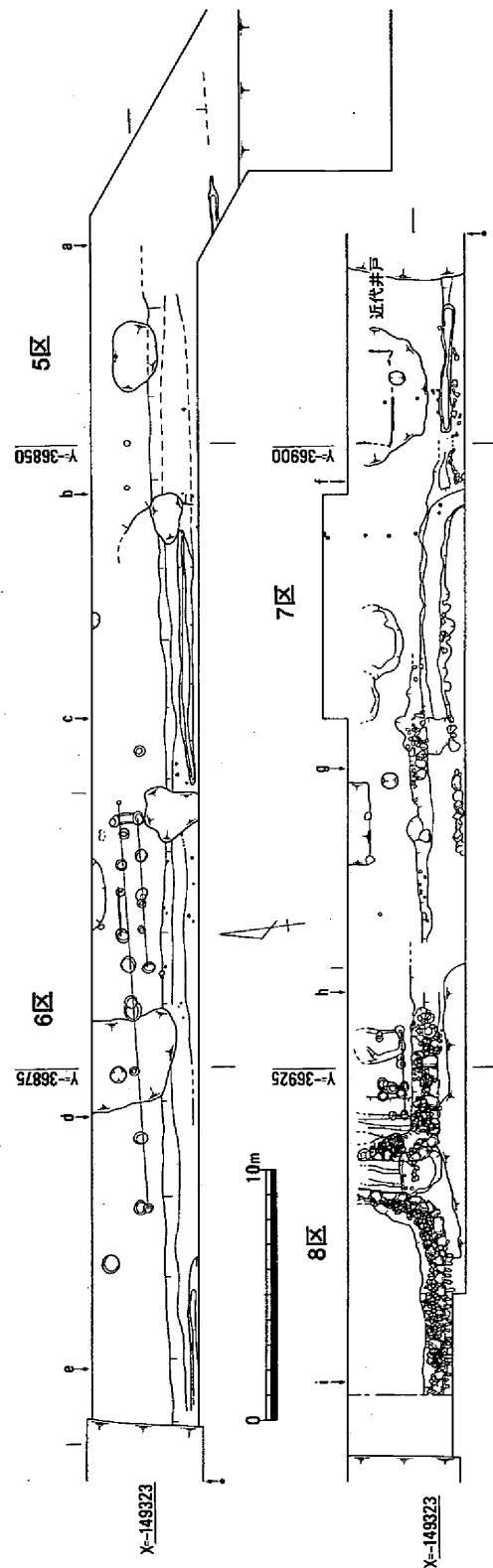
現有国道の北側に位置し、調査区は、現在の交差点下にある下水管やガス・水道管などの埋設時の攪乱範囲を境界とし、東から5～8区を設定した。

調査は、5～7区は道路面から約170cm、8区は約150cmまでの現代造成土などを機械によって掘削し、それ以下について人力により調査を行った。

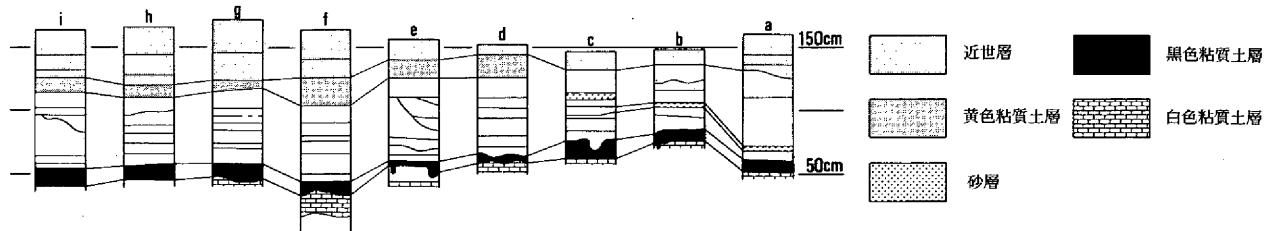
機械掘削面では1～4区同様、昭和20年に受けた空襲の片付けのための土壌や明治以降の井戸によって近世以前の遺構が攪乱された状態で検出される。近世の遺構は海拔170cm前後で検出でき、また、海拔約120cmで弥生時代と考えられる高まりと、土層観察のみだが、5・6区では3・4区と同様に砂層の下層に水田層と推察される粘質土層を確認した。

近世遺構面以下の調査は、2～5区の調査結果では中世以前の土器が少量出土するのみで遺構が明確でなかった。したがって、6～8区では調査区北半の南北幅2mを基盤層の白色粘質土層まで東西に掘り下げ、部分的にトレンチ状に全面の確認を行った。しかし、遺構は確認されず、遺物も弥生時代後期中頃の土器が少量出土したのみである。

第24図に土層断面柱状模式図を示した。近世基盤層下の黄色土層をみるとe-d地点を最高所として東西に地形が緩やかに下がるが、それ以下の堆積状況はe地点を境に東西で大きく異なる。東側は砂質が強くe地点でみられる弥生時代頃の高まり以東では、水田層と考えられる粘質土層の上面に砂層が確認できるが、以西では粘質土はみられるが、砂・砂質土がみられない。黒色粘質土以下には白色粘質土が薄くみられるが、それも黒色粘質土のブロックと混在する状況である。この層がみられない地点では、しまりの悪い粘性微砂の水性堆積層があり、本地点全体が弥生時代以前は大きな湿地・河道といった様相を呈していたと推察される。



第23図 5～8区検出遺構と土層断面位置 (1/300)

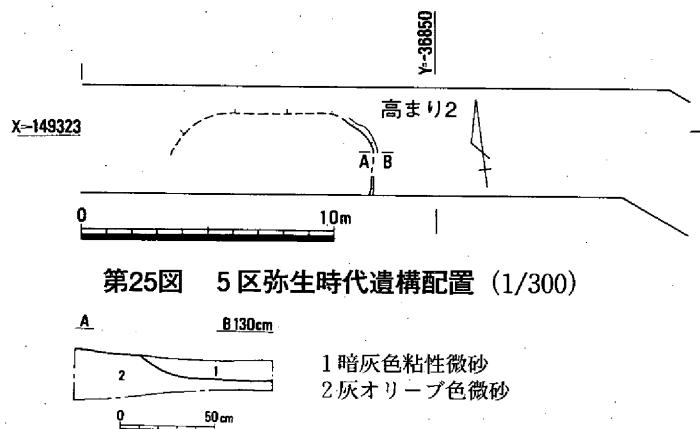


第24図 5～8区土層断面柱状模式図相関 (1/60)

2. 弥生時代の遺構

該期の遺構としては、平面的に検出した高まり1基と、土層断面の観察で確認した水田層がある。

高まり2(第26図) 5区西半に位置し、東辺のみを確認した。調査区北壁断面には確認できず、西側については微砂の堆積状況から推察して東西幅約8mの高まりに復元できる。海拔120cmの高まり頂部から緩やかに約15cm下がる。北壁で水田層が確認できることから水田に関係する遺構と判断できる。時期は第1層およびその下層出土土器から弥生時代後期後半以降と考えられる。



第25図 5区弥生時代遺構配置 (1/300)

第26図 高まり2断面 (1/40)

3. 中世～近世の遺構

該期の遺構には、井戸・土壙・柱穴列・溝があるが、中世まで遡る遺構は溝のみである。包含層中からは少量だが鎌倉時代の土師器の高台付椀が出土している。

井戸5(第28図) 6区北東端に位置し、掘り方の一部のみを検出した。鋼矢板による搅乱との境付近に人頭大の自然礫が残っていることから井筒は石組みであったと考えられる。掘り方の南側には、断面3×6cmの長方形の角材が埋め込まれているが、井戸の周囲に巡らせた囲いの可能性が考えられる。時期は、掘り方中から18世紀後半の陶磁器類が出土しているが、鋼矢板による上層遺物の混入の可能性もあることから、近世を主体に機能したと推察するに止める。

土壙9(第28図) 5区西部北端に位置し、北側を鋼矢板によって切断された状況で検出した。本来は径約40cmの木桶を掘り方内に置いていたと考えられる。埋土はほとんど残されておらず不明だが、底板付近から象眼のある煙管の吸い口M66が出土したのみで、そのほかに出土品はない。したがって、詳細な時期や性格は不明ながら、近世に埋められたものであることは確実である。

土壙10(第28図) 6区中央北部に位置する円形の土壙である。埋土はしまりの良くない粘質土で、掘り方壁面には鉄分の固結が顕著にみられる。また、土壙を中心同心円状に地山が脱色されて、鉄分の円が認められる。埋土の下半部がグライ化が顕著であることとあわせて水分の多い環境であったと推察される。出土遺物は燻し平瓦のみで、時期は近世と判断されるが、機能については不明である。

土壙11(第28図) 7区中央北部で、半分のみを検出した不整形の土壙である。埋土中には、種は不

明だが植物遺存体が間層を挟み厚く堆積している。また、底面の凹凸は顕著でグライ化も著しい。機能については不明だが、検出状況が土壌7と近似していることから、時期は出土遺物はないが、17世紀前半頃と推察される。

土壌12(第28図) 8区東部に位置し、柱穴列5・6の下位で検出した。平面は方形を呈し、埋土はしまりの良い灰褐色粘質土の単層である。出土遺物は全くなく機能も明確でないが、埋土の状況から17世紀前半頃と推察される。

柱穴列3・4(第29図) 6区で溝8の北側に位置する。柱間距離や柱穴の深さ・規模に統一性は認められない。柱穴に切り合いがないが、溝8との関係から、柱穴列3が古段階で柱穴列4が新段階に柵列として機能していたと推察される。

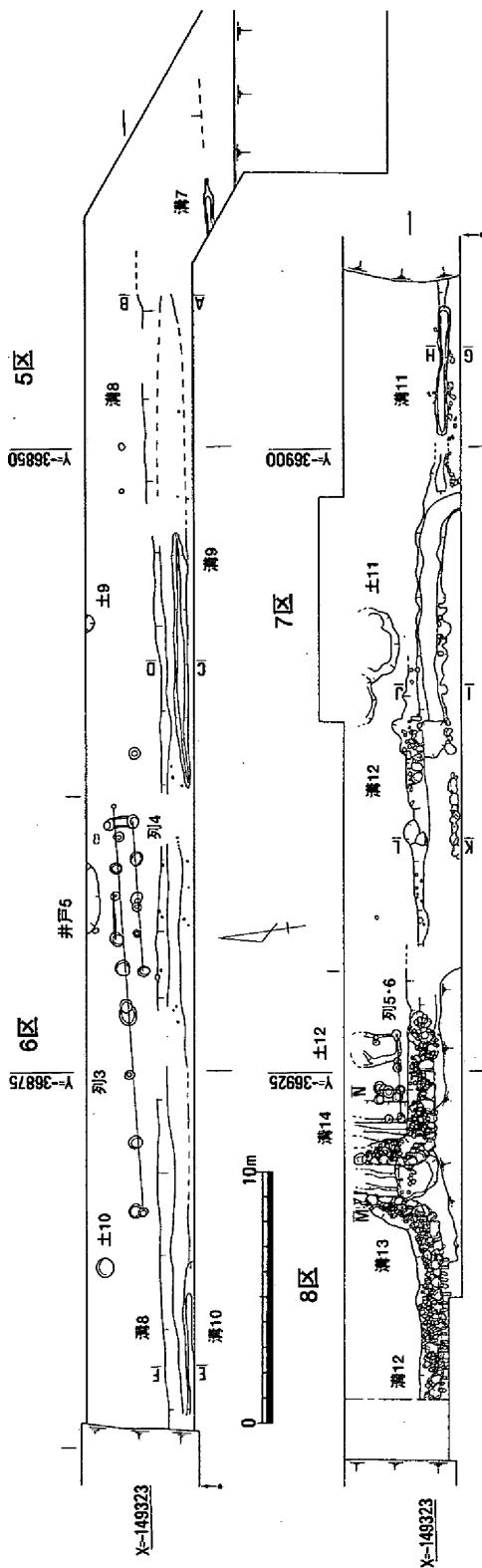
柱穴列5・6(第29図、図版2) 8区で溝12・13の北東角に位置する。柱間距離はまちまちだが、柱穴の深さは総じて深い。柱穴には切り合い関係がみられるが溝13・14との関係は明確でない。城下町絵図から番屋の柱列として機能していたと推察される。

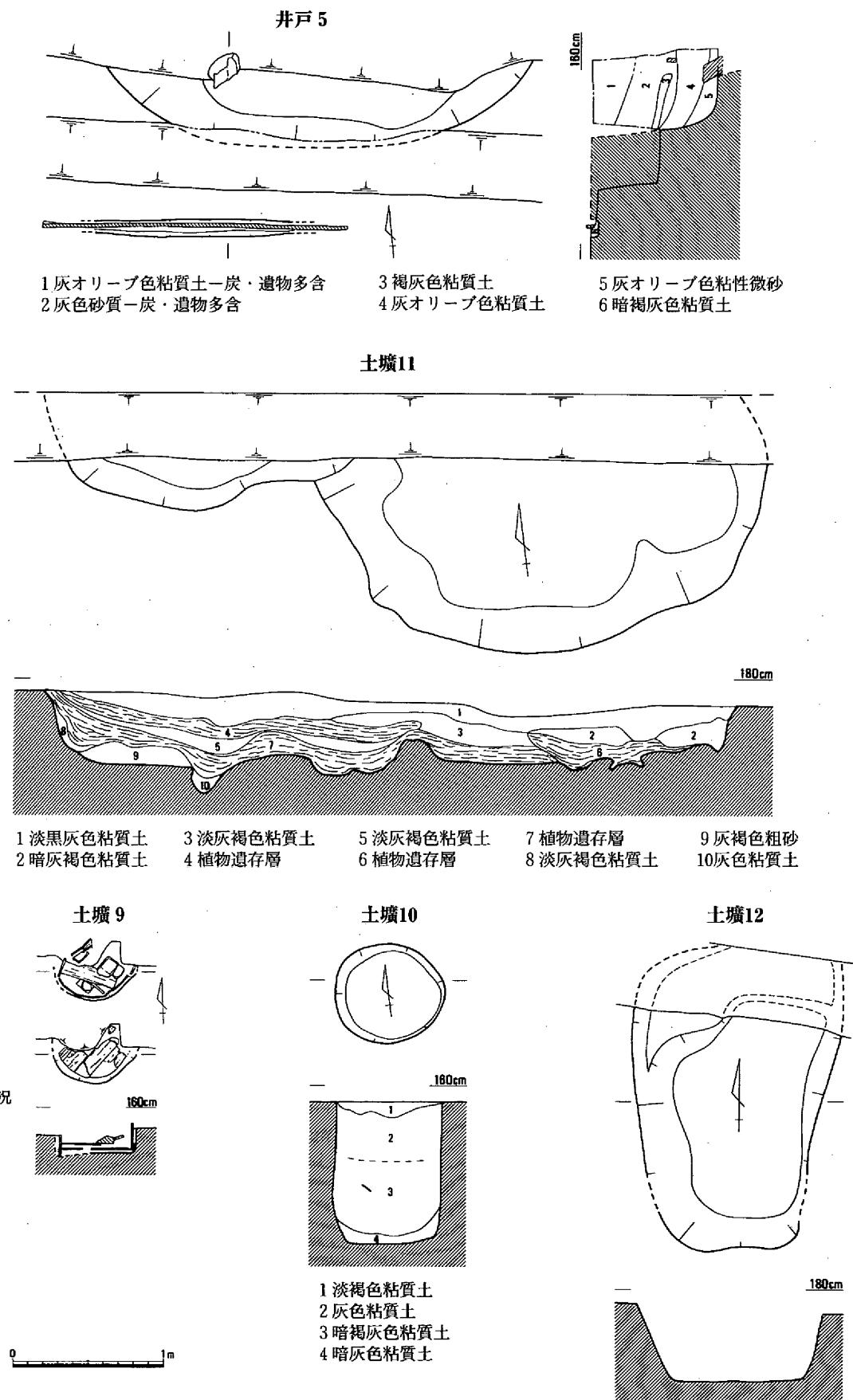
溝7(第27図) 5区中央南部で東西方に向に幅30cm、深さ10cmほどで検出した。埋土は灰色粘質土である。出土遺物がなく時期や性格は不明瞭だが、本来は溝8の底面に位置し、溝9・10と同時期に機能していたと考えられる。

溝8(第30図) 5区から7区にかけて、調査区の主軸よりもやや南に振って流路を取る。埋土の堆積状況から数回にわたって掘り返しが認められるが、大きくは新・古段階の二時期に分かれる。両段階共に石垣を持っておらず、6区では岸に杭がみられるが明確な護岸施設は不明である。時期は古段階が16世紀末から17世紀前半ごろ、新段階が17世紀後半まで機能していたと推察され、調査区外の南側に近世以降の大通りがあることから、道路として機能していたと考えられる。

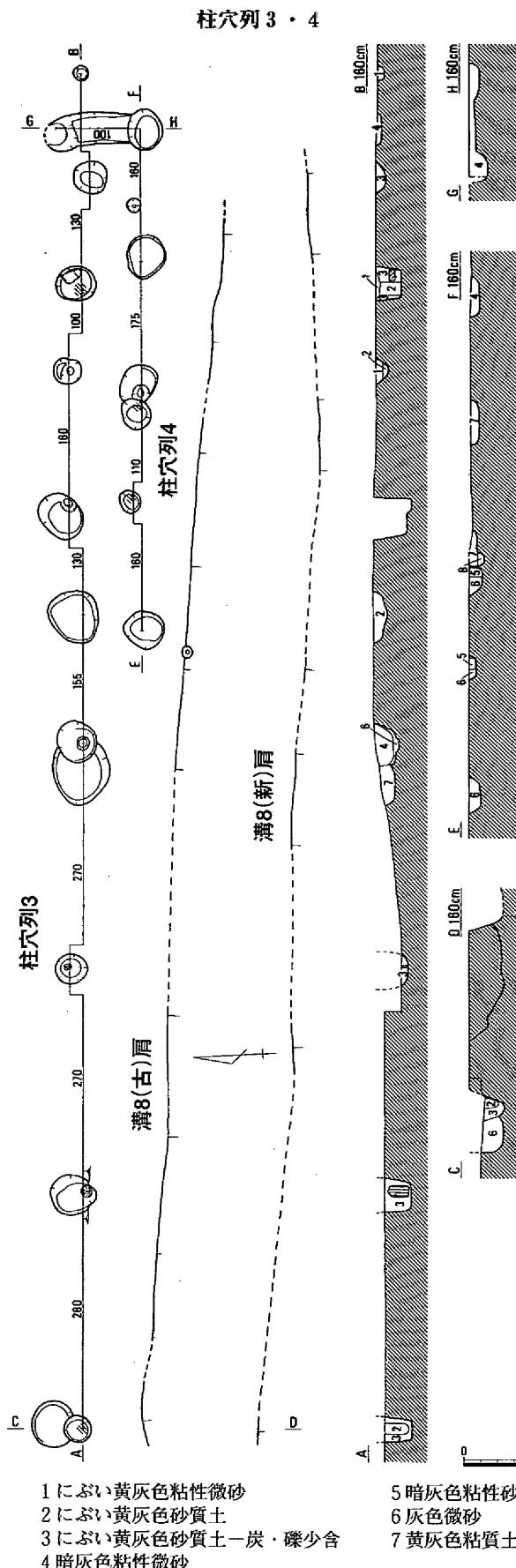
溝9・10(第30図) 溝9は5区西部、溝10は6区西部で溝8古段階の底面で検出した。溝8に付

第27図 5～8区近世構造配置(1/300)





第28図 井戸 5、土壤 9～12平・断面 (1/40)



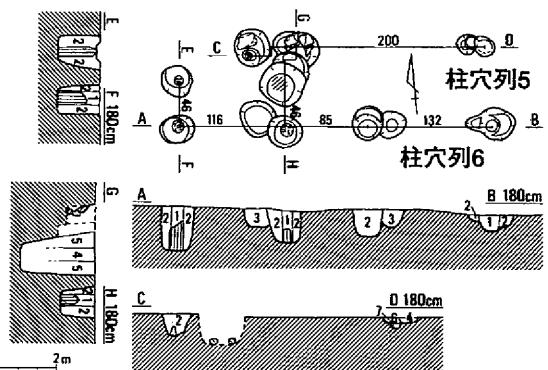
随して機能していたと考えられる。時期は出土遺物がないが、溝8古段階と同時期の16世紀末から17世紀前半と考えられる。

溝11(第30図) 7区東端で溝8の上面に位置する。部分的に拳大の石が列をなしてみられることから、簡単な石組みの溝と考えられる。時期は出土遺物から、近世後半以降と判断される。

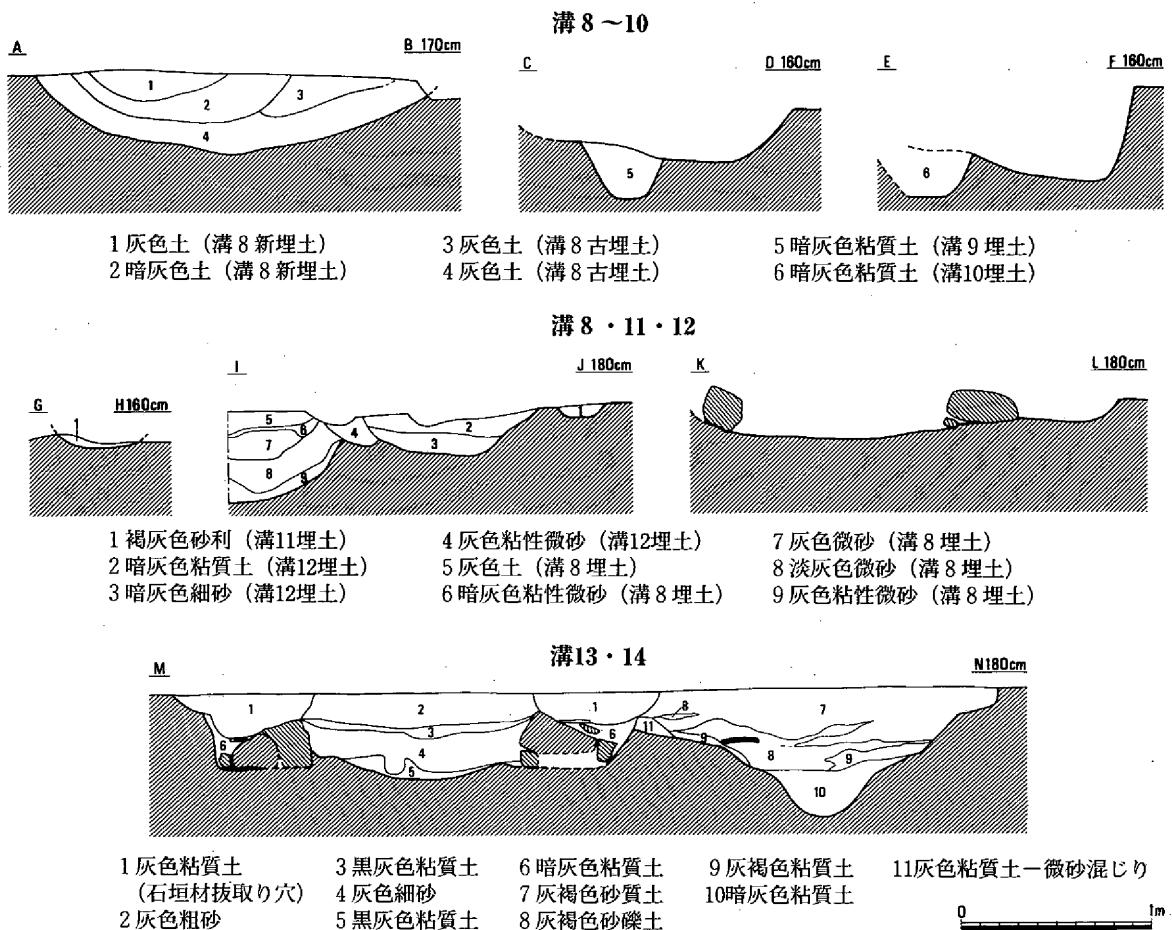
溝12(第30・31図、図版2) 7・8区で、溝8の埋没後に一部切る形で検出した。流路は東側で溝11が合流し、南へ大きく変える。西側は擾乱のため確認できていないが、外堀へ流れ込むと考えられる。石垣の石材は割石で、蟻痕のみられるものもある。溝13との合流部よりも西側には石垣の補強のためか松杭が打ち込まれている。出土遺物は溝13との合流部に集中し、溝が埋まるほど多量にみられる。時期はこれらの遺物から、17世紀末以降に築かれ、明治時代になって埋められたと推察される。

溝13・14(第30・31図、図版2) 8区中央北端で、南北方向の流路で検出した。溝13は石組み、溝14は素掘りの溝で、埋土の状況から溝13を造る際に溝14は埋められたと判断される。出土遺物から溝14を16世紀末頃に掘削し、17世紀末頃に溝13を溝12と共に石組みで築いたと考えられる。城下町絵図ではこの地点に細堀が存在していることから、両溝がこれにあたると推察される。

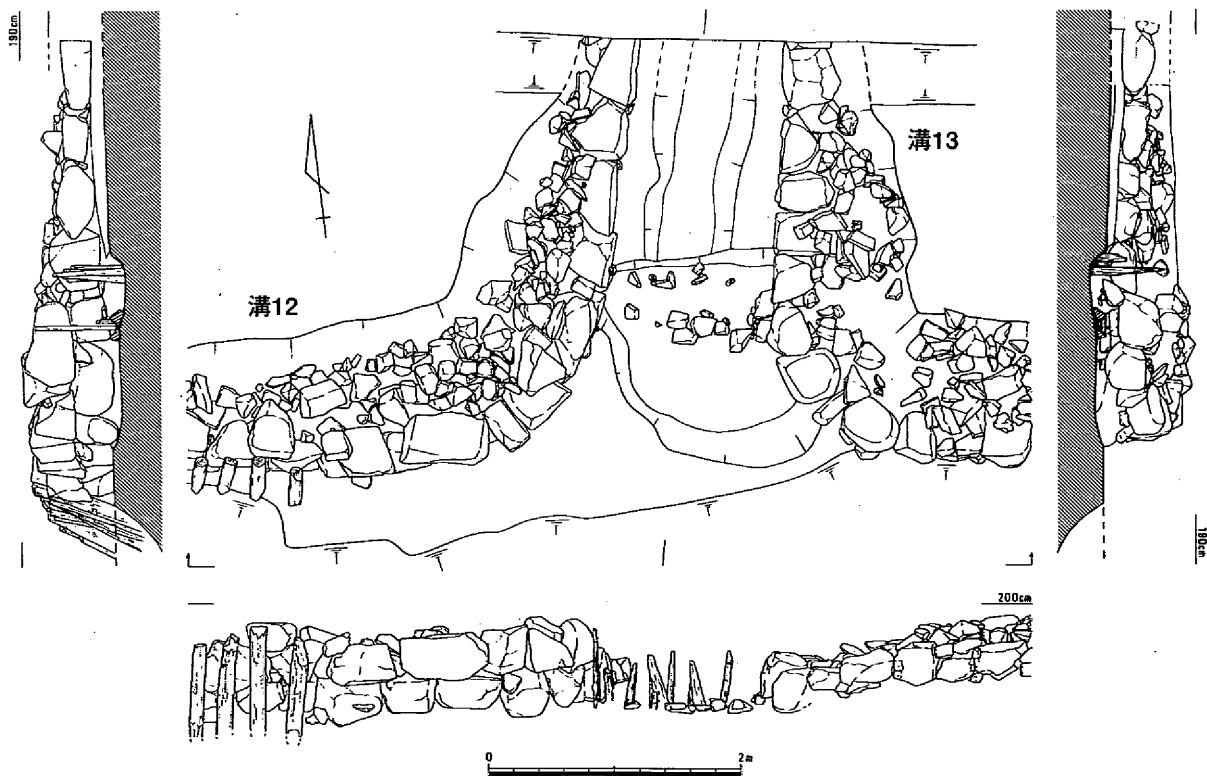
柱穴列5・6



第29図 柱穴列3～6平・断面 (1/80)



第30図 溝8～14断面 (1/40)



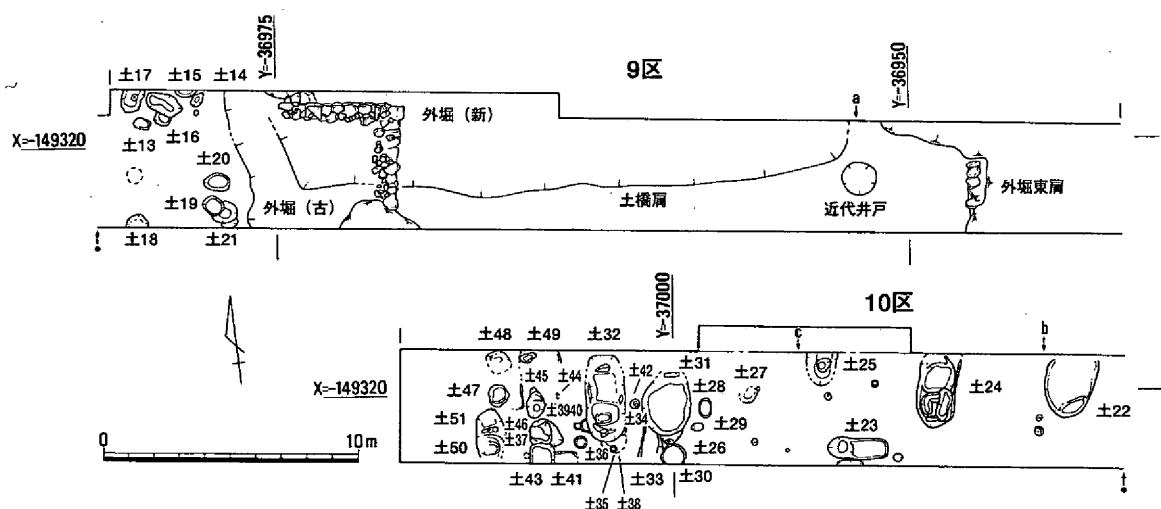
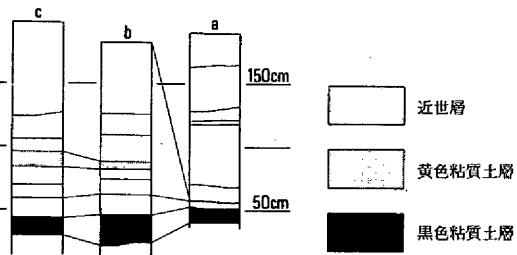
第31図 溝12・13合流部平・立面 (1/60)

第3節 9・10区の遺構

1. 調査の概要

8区の西側で外堀部分を9区、外堀以西を10区として調査した。9区東端は8区から続く長さ約6mの現代攪乱のために、溝12と外堀との関係は明らかにできなかった。また、10区西側については大雲寺交差点の東角にあたるため覆工板を上げることができないので、投光器を使用して調査を行った。近世の遺構は海拔180cm前後で検出され、道路面から遺構面までの厚さ約150cmの現代造成土を機械によって除去した。近世遺構面の下層の調査は、10区東部の東西6m間は全面を掘り下げ、以西については北側部分に南北幅50~80cmのトレーナーを設定して基盤層まで掘り下げた。その結果、下層からは水田層の可能性のある粘質土層はみられたが、明確な遺構・遺物は確認されなかった。

第32図に土層断面柱状模式図を示した。a地点は検出面以下は外堀の埋土で、海拔54cmで自然堆積層がみられる。b・c地点では近世の基盤層は微砂質土で、下位にある黄色粘質土層もほぼ水平に堆積している。8区の土層観察では、同一の層序が約15cm高位にみられるが、8区以東についての堆積状況と基本的に同様な傾向であることから、10区についても中世以前は地形的に低かったと推察される。このことは、黒色粘質土層の下層に8区以東でみられた白色粘質土がなく、細砂質の強い粘質土が堆積していることから考えても弥生時代以来低い土地であったと判断できる。



第32図 9・10区検出遺構と土層断面位置 (1/300) 及び土層断面柱状模式図相関 (1/60)

2. 近世の遺構

該期の遺構は外堀と土壙がある。すべての土壤は近世の大雲寺境内にあり、共伴遺物や埋土の状況から墓と鍛冶関連遺構と推察される。

土壙13(第33図) 9区北西隅に位置する。歪な長方形を呈し、深さ7cmを測る。埋土中には小炭・スラグ・小礫が多く含まれるが底面や壁面に被熱痕跡はみられない。

土壙14(第33図) 9区北西端に位置する。北辺に張りだしのある長方形を呈し、深さは11cmを測る。埋土中には小炭・スラグが密に含まれ、底面には羽口片がある。底面や壁面に被熱痕跡はみられない。

土壙15(第33図) 9区北西隅で半分のみを検出した。円形を呈し、深さは10cmを測る。埋土中には小炭・スラグが含まれるが、底面や壁面に被熱痕跡はみられない。

土壙16(第33図) 9区北西隅に位置する。西辺に張り出しのある不整形を呈すが、2基の土壙に分かれる可能性もある。深さは17cmを測り、埋土中には小炭・スラグが密に含まれる。底面には破損しているが1個体に復元できる備前焼擂り鉢がある。底面や壁面に被熱痕跡はみられない。時期は、遺物から17世紀前半と推察される。

土壙17(第33図) 9区北西隅に位置する。歪な方形を呈し、南の第2層下面に方形の平らな石がみられる。底面には浅い凹みがある。第1層は粘土ブロックの堆積で意図的に埋められたと理解されるが、第2～3層は炭・焼土・スラグが多く、しまりも悪い。壁面と底面に明瞭な被熱痕はみられない。

土壙18(第33図) 9区南西隅に位置する。不整形で埋土は白色に近い淡灰色粘質土で、わずかに炭・焼土が入るが被熱痕は認められない。出土遺物がなく性格・時期は不明である。

土壙19(第33図、図版3) 9区南西部に位置する。80×69cmの楕円形の掘り方に備前焼大甕の底部のみが残存している。甕内部には礫と炭・焼土・スラグ等が充填されており、スラグは再結合しているものが多い。掘り方埋土中には炭・スラグの小片が多く含まれる。性格としては鍛冶関連の廃滓土壙と考えられ、出土遺物に洪武通宝がみられることと、備前焼の大甕から17世紀前半頃と推察される。

土壙20(第33図、図版3) 9区南西部で土壙19の北隣に位置する。100×71cmの楕円形を呈し、埋土中には炭・スラグ・羽口が多量に入る。壁面・底面には明確な被熱痕は認められない。鍛冶関連の廃滓土壙と考えられ、時期は土壙19と同時期と判断される。

土壙21(第33図) 9区南西部に位置し、土壙19に切られている。87×97cmの楕円形で深さ約40cmの土壙南側に浅い張り出しがある。埋土中には、炭やスラグ、砂鉄が含まれるが被熱痕は認められない。鍛冶関連土壙と考えられ、時期は切り合い関係等から17世紀前半と推察される。

土壙22(第33図) 10区北東に位置し、楕円形を呈する。断面を観察すると掘方中央の幅約120cmの中に多量のスラグが廃棄されているが、第3～7層は互層状を呈しスラグはみられない。また、南側底面の浅い凹みには羽口と石がまとまって出土した。性格としては鍛冶関連の土壙を廃滓土壙として利用したと考えられる。時期は、肥前陶器が出土したことから17世紀代と判断される。

土壙23(第33図) 10区中央南端に位置し、東西軸の楕円形を呈する。土壙は、西側に径約90cm、深さ約60cmの円形の穴があり、その東側に長さ140cm、深さ15cmの浅い溝状のものが付随する。円形部分の埋土を観察すると、3回以上の掘り返しが確認できる。炭層やスラグはみられるが壁面や底面に被熱痕は認められない。性格としては鍛冶関連の土壙と推察されるが、時期は出土遺物に陶磁器類がなく明らかでない。

土壙24(第34図、図版3) 10区東部北側に位置し、南北軸の長方形を呈する。南側底面には溝状の凹みが顕著にみられ、木材や礫がないが、北側には木材や石が底面に棺台や棺材のように確認できる。このことから第1～3層は掘り返し後の埋土と判断され、遺物には第43図に示した肥前陶磁器・備前焼や銅錢があることから墓の可能性が高い。時期は、出土遺物から18世紀後半に移築等の理由で掘り

返されているが、掘削当初は17世紀代と考えられる。

土壌25(第34図) 10区中央北部に位置し、楕円形を呈する。埋土は単層で、下層はグライ化が顕著で底面には浅い凹みがあり、鉄分の沈着がみられる。性格と時期は不明である。

土壌26(第34図) 10区中央南部で、土壌30・31によって南北をそれぞれ切られている。径約30cmの円形を呈し、深さ48cmと深い。埋土は単層で柱穴の可能性もあるが、検出面から約5cmの位置に炭が層状にみられることから、鍛冶関連の遺構と判断した。時期は明確でない。

土壌27(第34図、巻頭図版1) 10区中央部に位置し、ほぼ南北軸の隅丸方形を呈する。土壌は、まず掘り方の側面に石を詰めたり炭混じりの粘質土を貼り、その内側底面に厚さ8cm程小炭を敷く。そして中央に第1層土で埋没している56×29cmの楕円形の掘り込みを築いている。出土遺物は、第1層中から多数の鉄片とスラグ等の鍛冶関連遺物がある。壁面・底面に明確な被熱痕は認められないが、第2層とした炭層がカーボンベッドと判断できることからも鍛冶関連土壌と考えられる。時期は桃山期の備前焼掘り鉢が掘り方から出土したことから、17世紀前半頃と考えられる。

土壌28(第34図) 10区中央に位置し、南北軸の楕円形を呈する。深さ4cmのみが残存しており、埋土中には粘土ブロックと炭・スラグが含まれる。壁面に被熱痕はみられず、時期も明確にできない。

土壌29(第34図) 10区中央に位置し、東西軸の隅丸方形を呈する。深さ6cmのみの残存で、埋土中には炭・スラグが含まれ、西側底面には径14cmの円形の浅い凹みがみられる。壁面には被熱痕は認められず、時期も明確にできない。

土壌30(第34図、図版3) 10区中央南部に位置する円形の土壌である。土層観察から径約130cmの円形の掘方中央に径62cmの掘り込みがみられる。掘り込み内は粘土ブロックで埋められているが、第2・3層は礫・スラグ・炭を多く含んだ土である。出土陶磁器がなく時期は不明確だが、鍛冶に関係する機能が推察される。

土壌31(第34図) 10区中央部に位置する。平面は南北軸の楕円形を呈するが、土壌24と埋土の状況が似ることから、後世に掘り返されたと考えられ、掘削当初の平面形は土壌24と同様と推察される。埋土は壁際隅の第6層が掘削当初の埋土で、この土中から漆椀が出土した。北小口には板石が置かれているが、南側底面に木材と一緒に同様の板石があることから、本来は南北小口に板石が置かれていたと判断できる。性格は明確でないが木材や漆椀の出土状況から墓と考えられ、掘削時期は17世紀代で18世紀後半以降に掘り返されたと判断される。

土壌32(第35図、図版3) 10区西部に位置し、土壌31と60cmと近接している。平面形は南北軸の長方形を呈し、埋土の状況が土壌31と同様であり、底面の凹凸が顕著であることから後世に掘り返されたと考えられる。南北小口部には平らな岩が当初は立てられていたものがずり落ちた状態でみられる。また、北側には長さ約50cm、径約15cmの未加工の丸太2本が並列してみられるが機能については明らかでない。底面付近には板材が残存しているが、このほかに木材はない。出土遺物には明の染付磁器や肥前系陶器、備前焼といった17世紀前半のものと18世紀後半以降の関西系陶器椀や瀬戸・美濃系陶器がある。土壌の時期・機能は土壌31と同様と推察される。

土壌33(第35図) 10区中央南端部に位置し、北側を土壌31に切られている。深さ8cmと浅く、溝状を呈する。明確な被熱痕は認められず、機能は不明である。時期は埋土の状況と切り合い関係から17世紀前半頃と考えられる。

土壌34(第35図) 10区中央部に位置し、西側を土壌31に切られている。埋土に炭・焼土が僅かに入

るが壁面には明確な被熱痕はみられない。時期は切り合い関係から17世紀前半頃と考えられるが、機能は明確でない。

土壙35(第35図) 10区南西部で、土壙38の上面に位置する。径24cmの円形を呈し、深さは6cmと浅いが、埋土には炭・焼土・スラグを含む。壁面に明確な被熱痕は認められないが、鍛冶関連の機能が推察される。時期は、周辺の状況から17世紀前半と考えられる。

土壙36(第35図) 10区西部南側に位置し、円形で深さ6cmのみが残存していた。埋土には粘土ブロックと炭・スラグが含まれ、鉄釘片等の鉄片が多く出土した。壁面には被熱痕はみられず、時期も明確でない。

土壙37(第35図) 10区南西部に位置し、南側を土壙43に切られている。検出時の平面形は不整形だが、断面観察から3回以上の掘り返しが確認でき、本来は方形に近い形状であったと推察される。埋土中には炭・スラグが僅かに含まれているが、明確な被熱痕は認められない。

土壙38(第35図) 10区西部に位置し、北側を土壙32に切られている。土層の堆積状況から1回以上の掘り返しが推察されるが、第1層中にわずかに炭が含まれるのみで出土遺物や被熱痕は認められない。時期は埋土と周辺の状況から17世紀前半頃と考えられる。

土壙39・40(第35図) 10区中央に位置し、土壙40の東側は土壙32によって切られ、土壙39は40によって切られている。両者共深さ4cmと浅く、埋土中に炭やスラグを含んでいる。土壙39の底面から壁面は赤化が認められるが、被熱によるものか鉄分の自然沈着によるものかは明確でない。時期・性格は周辺の状況と切り合い関係から17世紀前半頃の鍛冶関連の土壙と考えられる。

土壙41(第35図) 10区南西端に位置し、西側を土壙43に切られている。浅い溝状を呈し、埋土に僅かに炭を含むが、被熱痕はみられない。

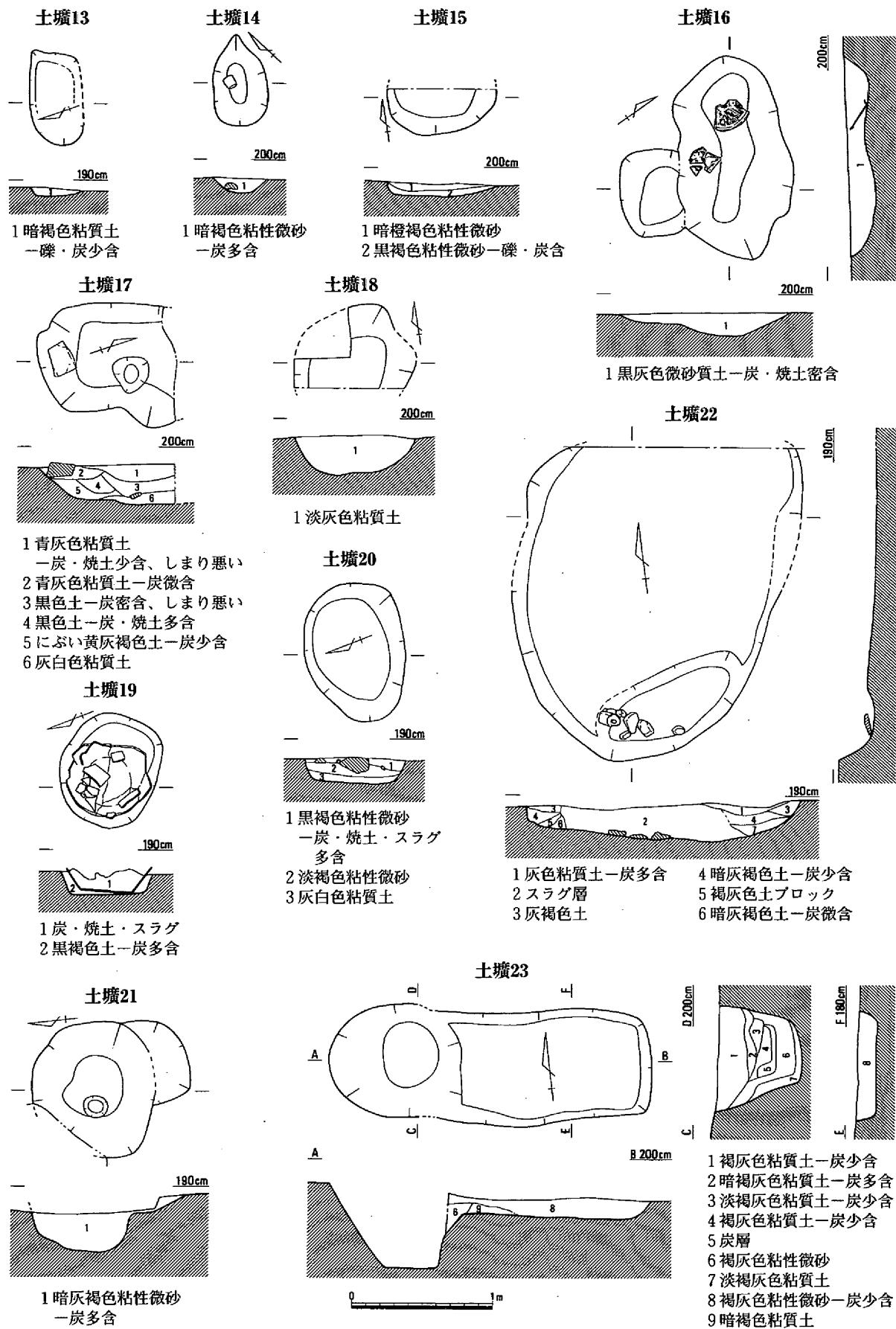
土壙42(第35図) 10区西部中央で、土壙31と32の間に位置する。径30cm前後の円形を呈し、埋土のうち第1層に炭・スラグが多く含まれることから土壙として扱った。しかし、底面に柱痕跡状の落ち込みがみられることから柱穴上面の凹みに第1層が堆積しているだけの可能性も否定できない。時期は埋土の状況や周辺の状況から17世紀前半頃と推察される。

土壙43(第35図) 10区南西部に位置する。平面形は隅丸方形を呈し、深さ33cmで大きめの掘方を掘削後に一旦第3層で埋め、再度深さ14cmと浅く掘り込んでいる。第1層中には多量の炭に混じってスラグがみられる。出土遺物は土師器小皿の完形に復元できるものが14個体あるが、これらは第2層上面にバラバラに置かれていたものが土圧で潰れた状況であった。また第3層中からは銅錢が1点出土している。時期は、周辺の状況から17世紀前半頃と推察されるが、性格は明確でない。

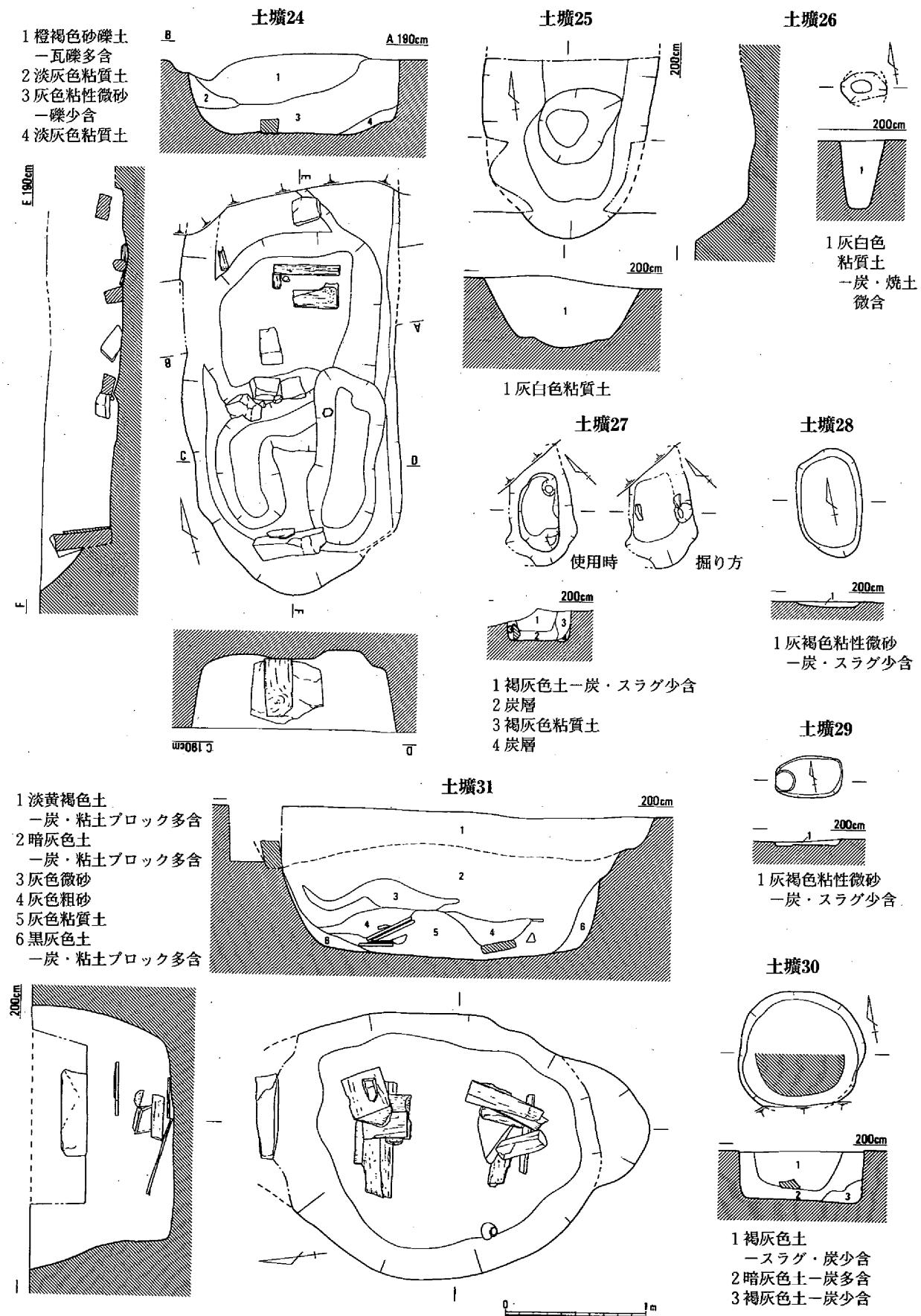
土壙44(第36図) 10区西部中央に位置し、埋土の大半を後世の攪乱を受けているが、遺存状況から平面形は方形を呈すると推察される。埋土中には炭とスラグが多く含まれているが、時期のわかる遺物はない。性格としては鍛冶関連と考えられる。

土壙45(第36図) 10区西部中央に位置する。楕円形を呈する深い掘り込みの北側に浅い張り出しがあり、径4cmの杭が3カ所に打ち込まれている。第1・2層中には焼土塊や炭が入るが、壁面に被熱痕は認められない。時期・性格は明らかでない。

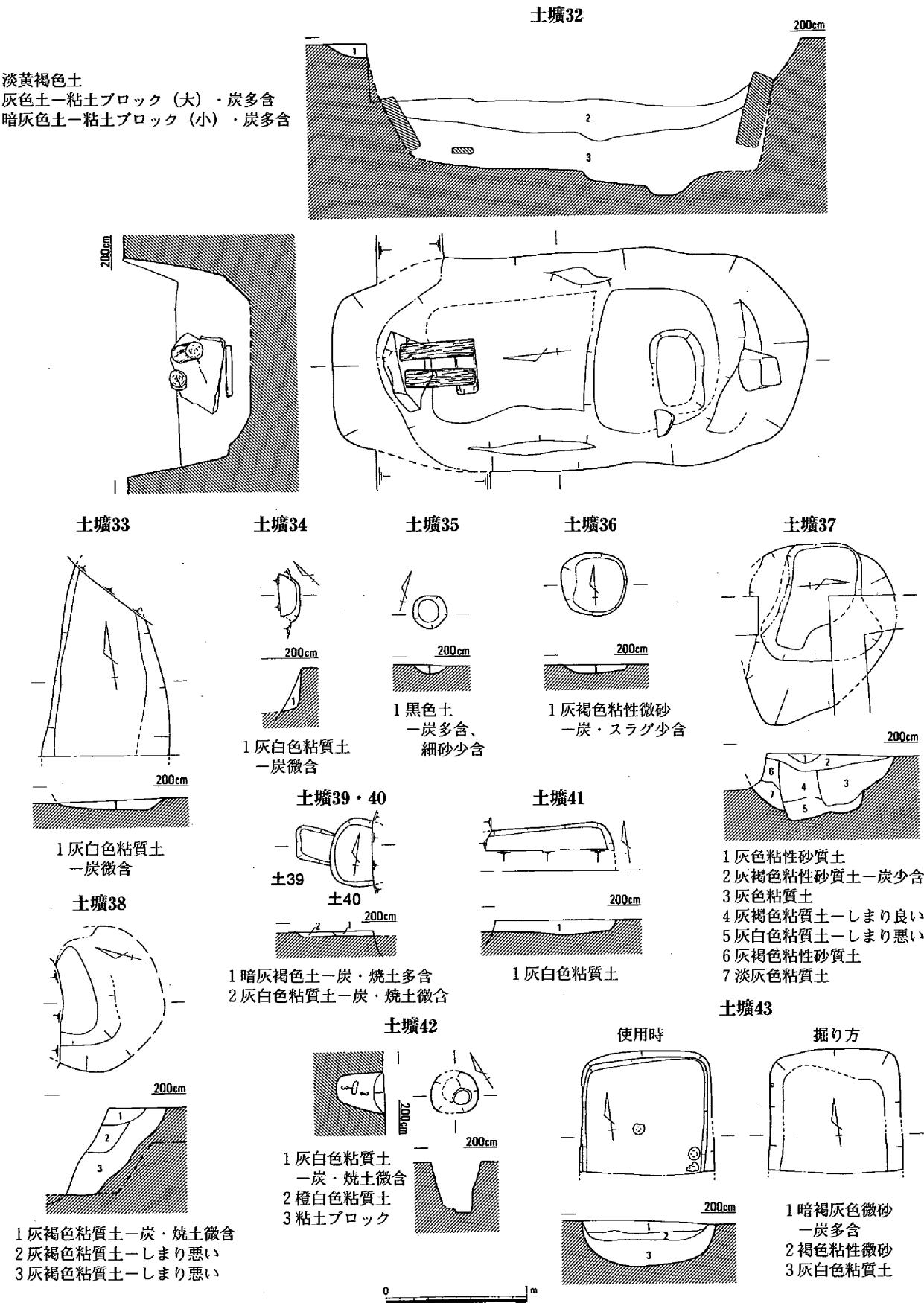
土壙46(第36図) 10区西部中央に位置し、西側を後世の攪乱を受けているが、深さ6cmと浅い溝状を呈する。埋土は単層で、炭がわずかに含まれるが明確な被熱痕はみられない。時期・性格については明確でないが、周辺の状況から17世紀前半と考えられる。



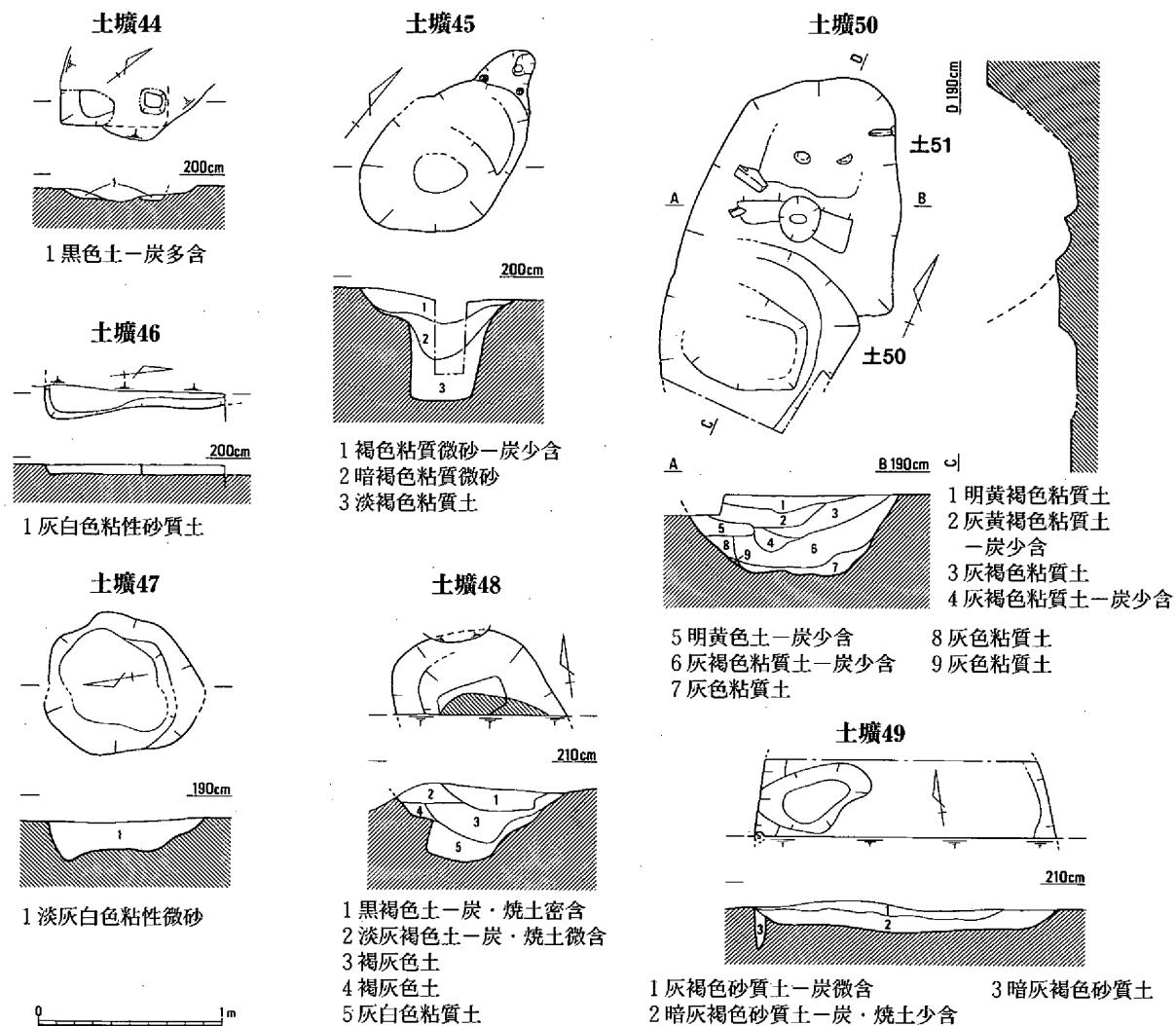
第33図 土壌13~23平・断面 (1/40)



第34図 土壌24～31平・断・立面 (1/40)



第35図 土壌32～43平・断・立面 (1/40)



第36図 土壌44～51平・断面 (1/40)

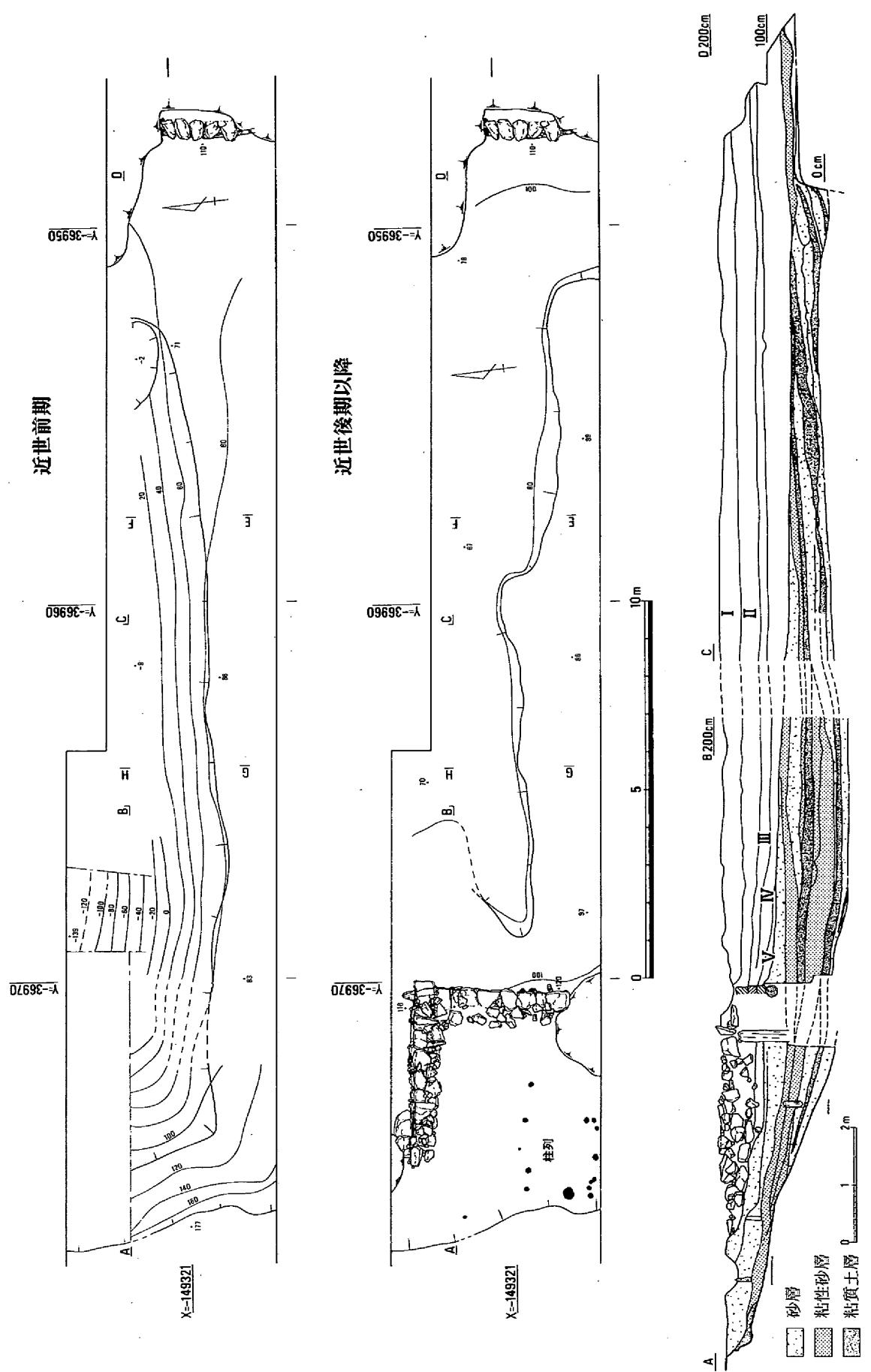
土壌47(第36図) 10区西部中央に位置し、平面形は不整形を呈する。埋土は単層で、炭がわずかに含まれるのみで出土遺物はなく、時期や性格は明確でない。

土壌48(第36図、図版3) 10区北西部に位置する。隅丸方形の掘方の中央部に、形状は不明瞭だが深さ15cmの掘り込みを行っている。この掘り込みの埋土には炭・スラグが多く含まれるが、壁面には被熱痕は認められない。断面の観察から2回以上の掘り返しが看取される。時期と性格は周辺の状況から17世紀前半頃の鍛冶関連の土壌と推察される。

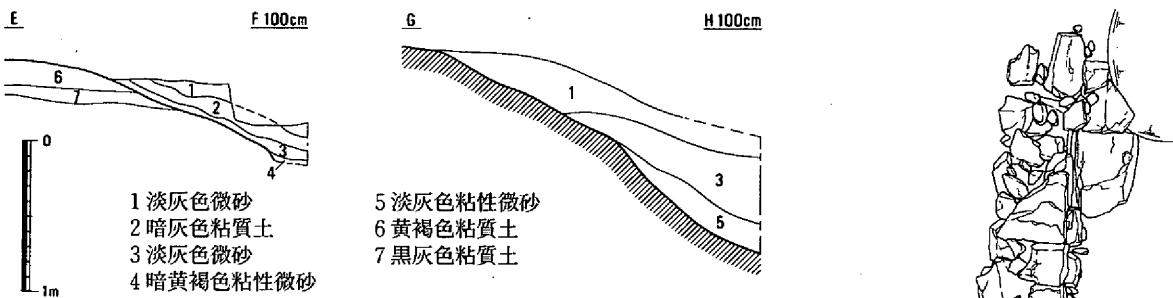
土壌49(第36図) 10区北西部に位置する。形状は明確でないが深さ17cmと浅く、埋土中には炭が少量含まれる。西側の壁際に杭痕跡がみられるが、本土壌に伴うものかどうかは不明である。壁面に明確な被熱痕は認められない。時期は周辺の状況から、17世紀前半と推察される。

土壌50(第36図) 10区南西部に位置し、土壌51と切り合い関係にある。検出時の状況から、土壌51によって切られていると判断されるが判然としない。平面形は方形に復元され、埋土中には炭・スラグが含まれるが被熱痕は明確でない。性格は明らかでないが、時期は土壌51との関係から17世紀前半と考えられる。

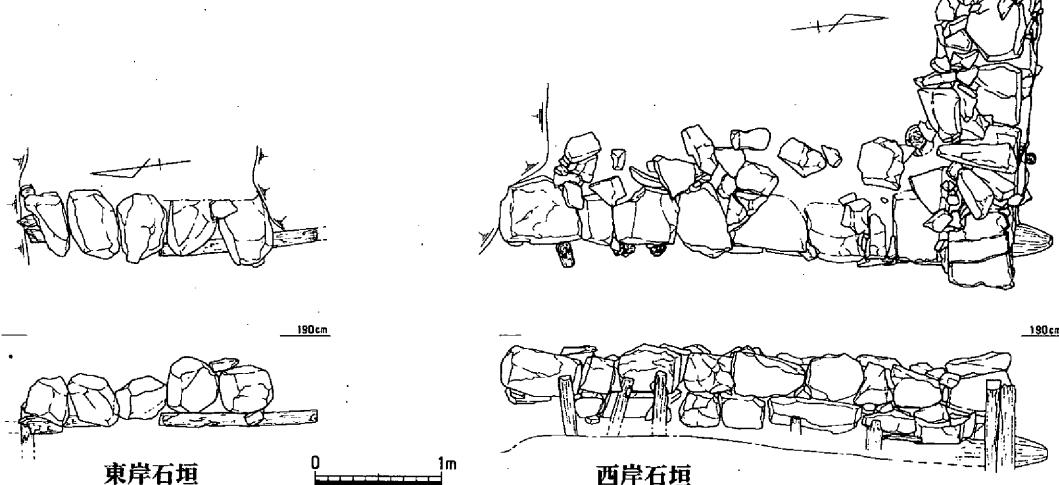
土壌51(第36図) 10区南西部に位置する方形に復元される土壌である。底面は凹凸が顕著だが鉄分



第37図 外堀平・断面 (1/150・1/100)



第38図 外堀断面 (1/50)



第39図 外堀石垣平・立面 (1/60)

が沈着して赤橙色を呈している。埋土中には炭やスラグが含まれるが、中国製白磁皿・土師器小皿などが出土地する事から墓の可能性もあるが明らかでない。時期は17世紀前半と判断できる。

外堀(第37~39図、図版2・3) 9区全域に位置する。検出した石垣は、東側には加工していない岩を用い、西側の石垣には割石を用いていることから、東側は外堀が築造された1601年当時のものと考えられる。しかし、西側は後世に築かれたことが埋土の堆積状況からも確認された。したがって、古段階の外堀は西側の石垣の存否は不明ながら、東西幅約28m、新段階には約23mを測ることが明らかとなった。埋土は、第I~IV層が石垣間にのみみられることから、第I層が明治8年の埋め戻し土で、第II~IV層が新段階の堆積物と判断される。さらに、第IV・V層よりも下位には砂と粘質土の互層が確認できることから、洪水による堆積物と推察される。第IV・V層を除去した面の状況を第37図中段に示した。近世中・後期の絵図には土橋の表現があるものの、石垣の間には土橋の痕跡は僅かにみられるのみである。さらに、砂層等を除去した面の状況を第37図上段に示した。残っている土橋の頂部が海拔86cmで、そこから地山を削って土橋を造り、調査区中の最低海拔高は-138cmを測る。

出土遺物は、特に第II層と西側石垣の裏込土から多量にみられる。新段階では第V層中まで19世紀前半の陶磁器が出土することから、近世においては堀の管理が厳しく行われていたことがわかる。また古段階の遺物を含む裏込め土では、洪水による堆積物の上層部に多く遺物が入ることから、改修時に土砂とともに陶磁器類や製鉄関連遺物を投棄したと考えられる。これらの出土遺物から、外堀は1601年に築かれた後に、17世紀後半に洪水で埋没したのを契機に大きく改修され、明治8年に埋め戻されるまで外堀として機能し、更に土橋の存在から郭内から郭外を結ぶ出入り口として利用されていたと判断できる。

第4節 遺 物

1. 弥生時代の遺物

弥生時代の遺物としては土器が主体で少量の石器・土製品がある。

土器

弥生土器は、1区で全体の90%近くが出土し、その他の地点では弥生時代後期末と推測される洪水砂層以下の包含層から後期後半を主体に少量が出土している。1区で出土した土器は整理の結果、粘土採掘場群が埋め戻された際の埋土中に含まれていたことが判明した。

土壙5出土土器(第40図、図版8) 完形に復元できるものが多く、甕が主体である。64~66は壺で、64の外面は全面ハケを施しているが、最大胴径以下では12本/cmと細かい工具だが、以上では6本/cmと粗い工具を用いている。65は精製粘土を使用した台付き直口壺、66も精製粘土を使用している。67は短脚の高杯で杯部外面にタタキが残る。68~74は甕で、口縁拡張部には擬凹線が廻り、外面には煤が付着する。72は焼成後に径7mmの孔が開けられ、内面下位には煤の付着がみられる。75~79は鉢で、75は礫を多く含む胎土で、指頭圧痕を強く残す。77・78は精製粘土を使用している。79は礫を多く含む胎土だが内外ともにミガキを丁寧に施す。これらの土器の時期は、弥生時代後期後葉にあたる。

土製品(第41図、図版11)

1区で弥生土器転用の円盤4点と紡錘車未製品1点、5区で玉1点が出土した。C1は径約3cm、重量22.8gの玉で中央に径4mmの貫通孔がある。C2は壺片を転用した径54mmの紡錘車未製品である。C3・C4は土器片を加工した円盤で、C3が径37mm、重量6.1g、C4が径45mm、重量7.1gである。

石器(第41図、図版13)

S3は長さ91mm、幅84mm、厚さ60mm、重量624.5gの花崗岩製の叩き石で、側面部に敲打痕(▲)があり、平坦部や側面の一部に磨滅痕(○)がみられる。S4は角閃石?製の叩き石・磨り石で、長さ111mm、幅63mm、厚さ51.5mm、重量546.7gを測る。使用痕は側面に磨り痕(●)と敲打痕(▲)が残る。S3は外堀埋土中から出土しており、近世まで時期が下る可能性がある。図示した以外に1区からサヌカイト製の剥片が1点出土している。

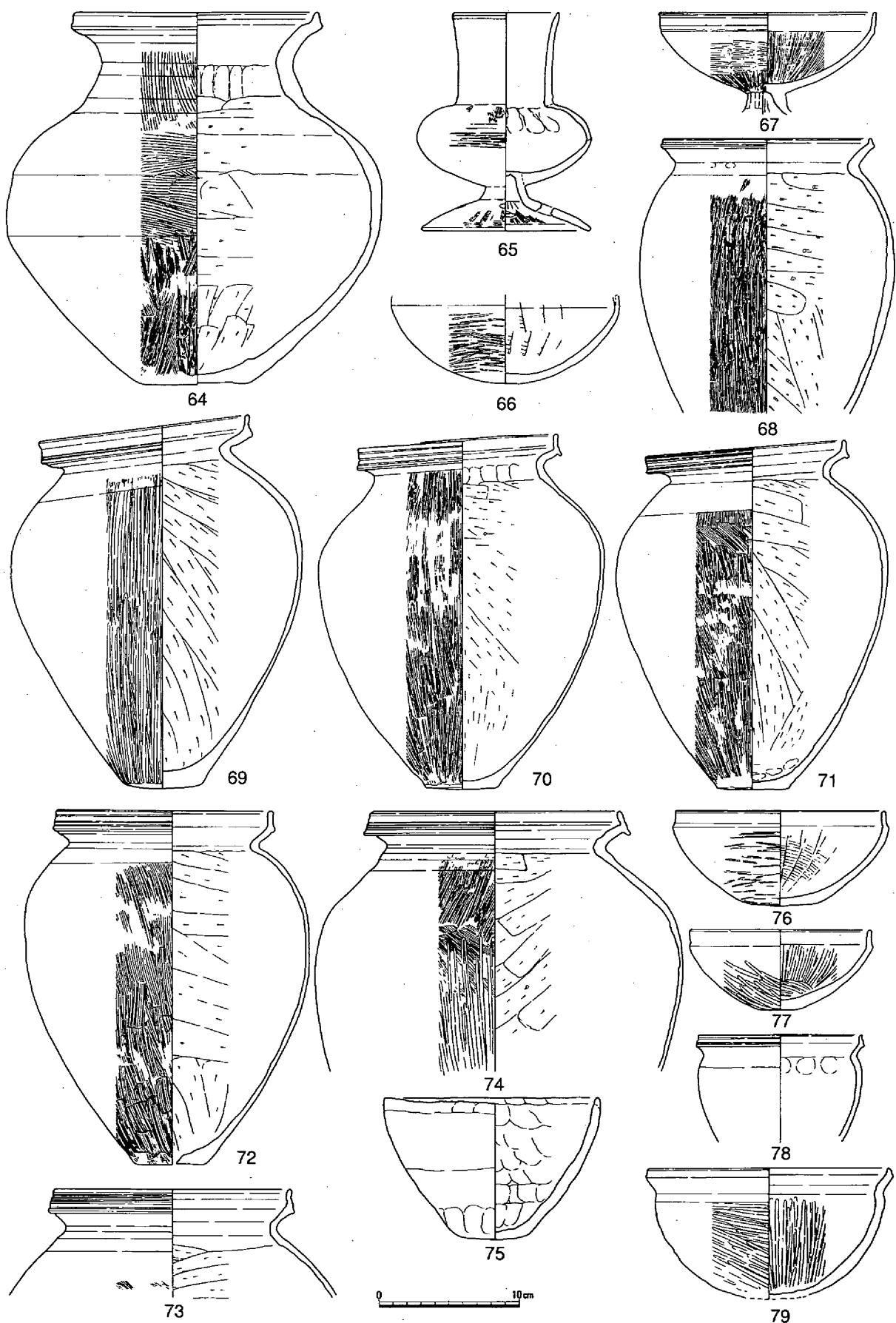
2. 中世以降の遺物

中世以降の遺物としては、土器・陶磁器類が圧倒的に多く、ついで瓦類、動物遺存体、鍛冶関連遺物、木製品、金属製品、土製品、石製品がある。遺物の時期は14世紀代のものが僅かにみられるが、土器・陶磁器類の大半が16世紀末以降のものである。また、土器・陶磁器類以外の遺物は、本来の帰属時期が不明瞭のものが多い。

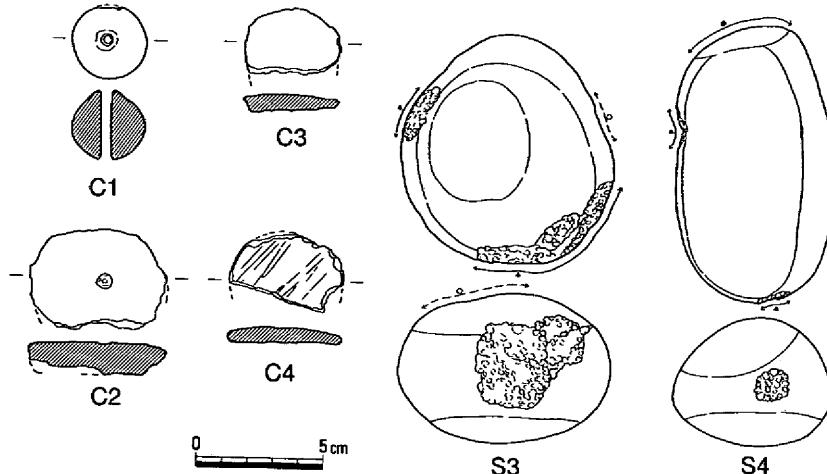
土器・陶磁器

土壙7出土陶器(第42図) 80の備前焼片口はほぼ完形で、暗紫色を呈し、体部にヘラ記号がみられる。焼成から16世紀末頃の製作と考えられる。

土壙16出土土器・陶器(第42図) 2点のみの出土が出土した。81は底部糸切りの土師器皿で、口縁



第40図 土壙5出土土器 (1/4)



第41図 弥生時代の土製品・石器 (1/3)

部に煤が付着することから灯明皿と判断される。82はほぼ完形に復元できた備前焼擂り鉢である。塗り土をせず、卸し目は11本／4cmを一単位としている。時期は17世紀前半頃と考えられる。

土壌19出土陶器(第42図、図版23) 83のみが外容器として据えられて出土した。

底径約41cmの備前焼大甕で、内面にはハケメがみられる。鉄滓と炭が多く量にはいっていたため、内面に鉄滓が付着したり、部分的に熱による変色がみられる。時期は16世紀後半頃と考えられる。

土壌24出土陶磁器(第42図) 97は備前焼盤、98・100~102は18~19世紀の関西系陶器で、98が椀、100が内面露胎の灰落し、101・102が灯明受け皿である。99は鉄釉の掛かった肥前系陶器椀である。103~106は肥前系染付磁器で、103が椀、104が波佐見系の皿、105が有田の皿で底部にハリ痕がある。106は瓶である。時期は99・105が17世紀前半から中葉と古相を示すが、その他は18世紀後半から一部19世紀代に入る。

土壌23出土陶器(第42図、図版21) 84は16世紀後半の瀬戸・美濃系陶器の灰釉皿である。見込み部分は釉剥ぎしている。土壌からは他に肥前系陶器、中国製染付磁器、白磁などが出土している。

土壌33出土磁器(第42図、図版19) 土壌からの出土品は85の中国製染付磁器1点のみである。時期は16世紀後半から17世紀初頭と判断される。

土壌43出土土器(第42図) 土師器皿のみが14個体分出土した。色調は浅黄色から黄橙色を呈し、糸切り底で口縁に煤の付着するものはない。口径78~90mm、底径54~63mm、器高は86が11.5mmと低いが87~92は13.5~14mmを測る。明確な時期は不明だが、概ね17世紀前半頃と考えられる。

土壌51出土土器・磁器(第42図、図版19) 93~95は鈍い橙色を呈する土師器皿で、93・95は非ロクロ成形で全面に押圧痕が残るが、94は底部に回転ヘラ切り痕が残り「X」の線刻がある。96は中国製白磁皿で、高台疊付け以外は透明釉がかかる。また、高台に砂の付着が顕著である。これらの時期は白磁からおよそ16世紀後半から17世紀初頭の時期があてられる。

溝8出土土器・陶磁器(第42図、図版19・21) 5区から7区まで距離は長いが、遺物は量的には少なく、遺物の取り上げを上・下層で分層して行った。しかし、上層は17世紀前葉を中心とした遺物が出土したが、近代の攪乱が著しく、厳密に分層できていない。

107~109は非ロクロ成形の土師器小皿で、精良な胎土で橙色を呈する。110は備前焼の片口で口縁が玉縁状になる。塗り土は行わらず、黒褐色から灰褐色に発色する。111~113は瀬戸・美濃系陶器である。111・112が灰釉の皿で、111は見込みを蛇の目状に釉剥ぎし、112は見込み全体の釉を剥ぐ。113は鉄釉の天目椀である。114は中国製(龍泉窯系)青磁椀、115は中国(福建省南部)製の白磁皿、116~119は中国(景德鎮)製の染付磁器で、116・117・119が皿、118は椀である。107~119は溝8古段階(下層)の出土遺物で、114のように14世紀代まで遡るものもあるが、他は概ね16世紀から17世紀初

頭を中心とした時期が当てられる。

溝14出土土器・陶磁器(第43図、図版19・21・22) 溝12によって南側を切られているので、出土遺物は図示した以外にはほとんどない。

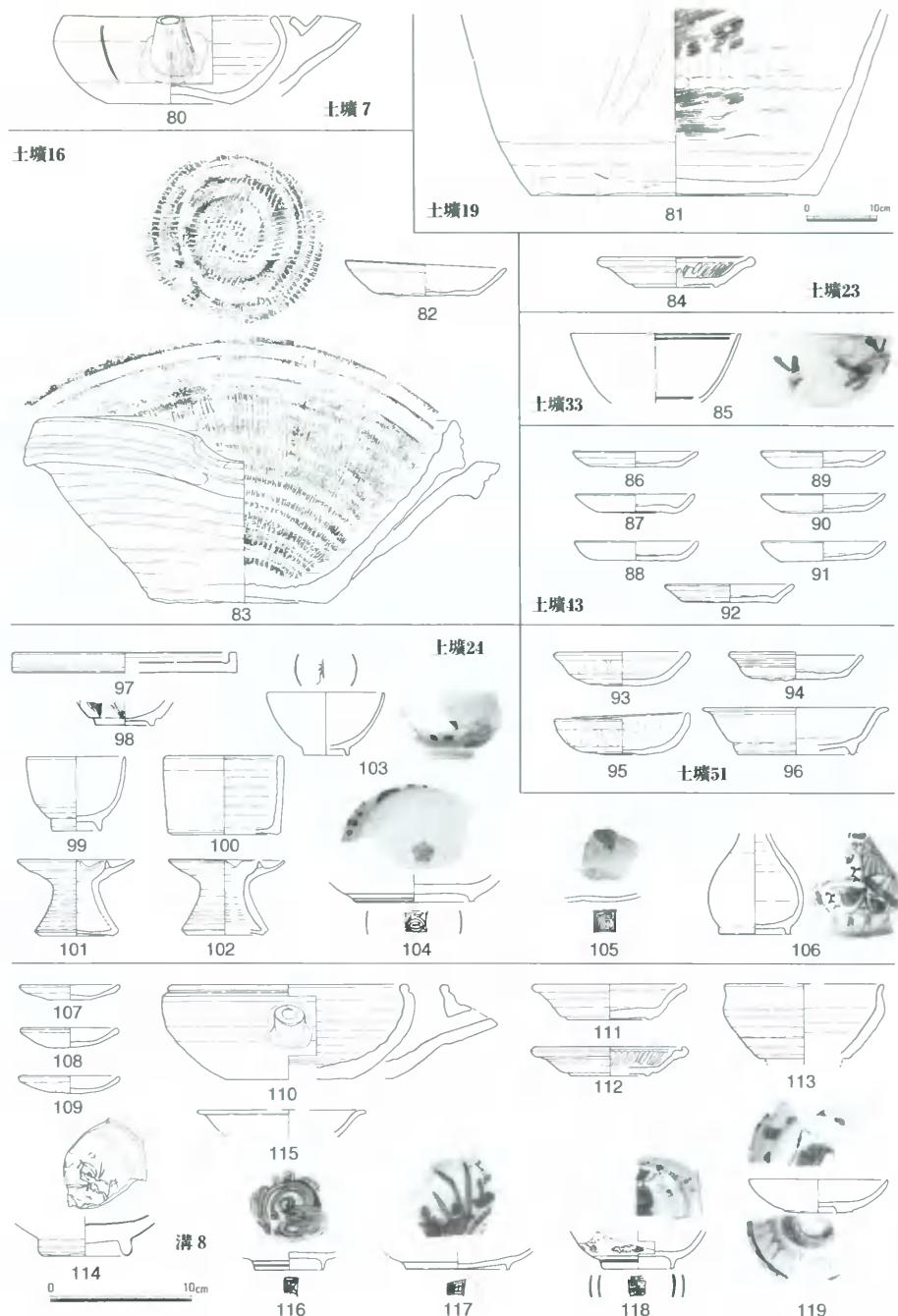
120～123は土師器皿で、121のみが糸切りで他は底部に押圧とナデがみられる。124は備前焼瓶で外底部に窯印のヘラ記号が刻まれている。125は瀬戸・美濃系陶器(志野焼)の皿で、口径約136mm、器高48mmを測る。126は上野高取系陶器の鉢で、藁灰釉と鉄釉の掛け分けをする。復元で口径346mm、器高152mm、高台径140mmを測る。見込みに胎土目痕が残る。127は中国(漳州窯系)製染付磁器皿である。これらの時期は、16世紀後半から17世紀初頭が当てられる。

溝12・13出土土器・陶磁器(第43～46図、図版8・19～23) 土器・陶磁器の出度量は外堀に次いで多く、特に溝12と13の合流部で集中して出土した。

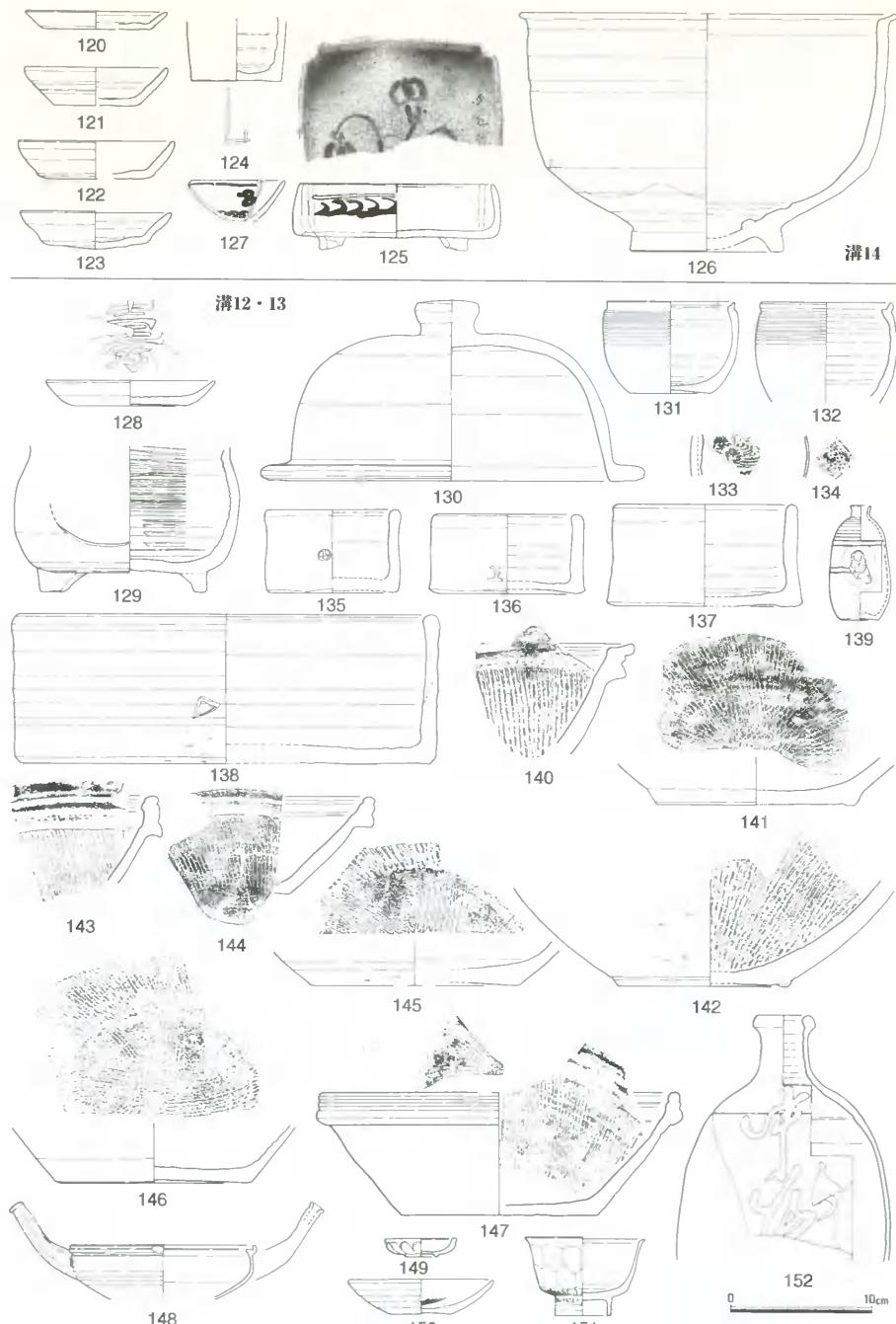
128は型押し成形の白色系の土師器皿で見込みに「寿」の文字がみられる。129は土師器の焜炉で内面に煤の付着が認められる。130は土師器の火消し壺の蓋で、内外共丁寧にミガキが施されている。131～142は備前焼で、131・132が蓋物の小壺、133・134は土型成形の破片で、133が鷺、134が草花状の意匠を型押ししている。135～138は匣鉢で、135・136・138の体部には窯印が刻印されている。139は布袋徳利を小型化した一輪挿しである。140～142は擂り鉢で、141・142の底部には高台が付く。143～147は堺・明石系擂り鉢で、見込み卸し目は放射状に施されている。148～162・166は関西系陶器である。148は内面に柿釉の施された片手鍋、149が紅皿、150は内面に卸し目状の条線がある。151は外面を面取り状の加工をした椀、152は外面に鉄釉を掛け、その上にイッチン描きで文字が書かれている。153と154はセットで急須、155は灯明皿で芯押さえに用いるかきたてである。156・157は土瓶の蓋、158は灯明皿、159は灯明受け皿、160はカンテラである。161は火入れ、162は灰吹き、166は明治から大正の皿である。163は萩焼のピラ掛けの椀である。164～168は瀬戸・美濃系陶器である。164は灰釉の椀で外面に銅綠釉？が模様のように付く。165・168は皿、167は灰釉の盤で外底部に墨書の文字がみられる。168は型紙刷りで絵付けをする。169は肥前系青磁の灰吹き、170～172は肥前系白磁の瓶、盃、椀である。173～176は肥前系色絵磁器の段重と椀、瓶である。177～200は肥前系染付磁器である。177・178は蓋、179～184・187・188は椀で、183が波佐見系で184が有田産である。185は紅皿で、外面に朱で「小町紅…」と書かれている。186は段重、189・190は鉢である。191～197は皿で、193は肥前系青磁染付、195・196は波佐見系である。198は髪油壺、199・200は瓶である。201・202は同一個体で関西系(三田焼)青磁の香炉？、203が関西系赤絵磁器杯、204が関西系染付磁器の杯である。205～211は瀬戸・美濃系染付磁器で、205～209が椀、210が植木鉢、211が皿である。212・213は瀬戸・美濃系青絵磁器の杯、214は瀬戸・美濃系白磁の型押し皿である。215～217は関西系か瀬戸・美濃系の染付磁器で、徳利、急須、蓋である。図示した中で、189～191・197・210はガラスの焼き継ぎ痕跡が残る。これらの時期は、概ね18世紀中葉から幕末までの時期が当たられ、遺物の中心となる時期は19世紀前半である。

外堀古段階出土土器・陶磁器(第46・47図、図版19・21～23) 新段階の西石垣の裏込から出土した物が該期にあたる。

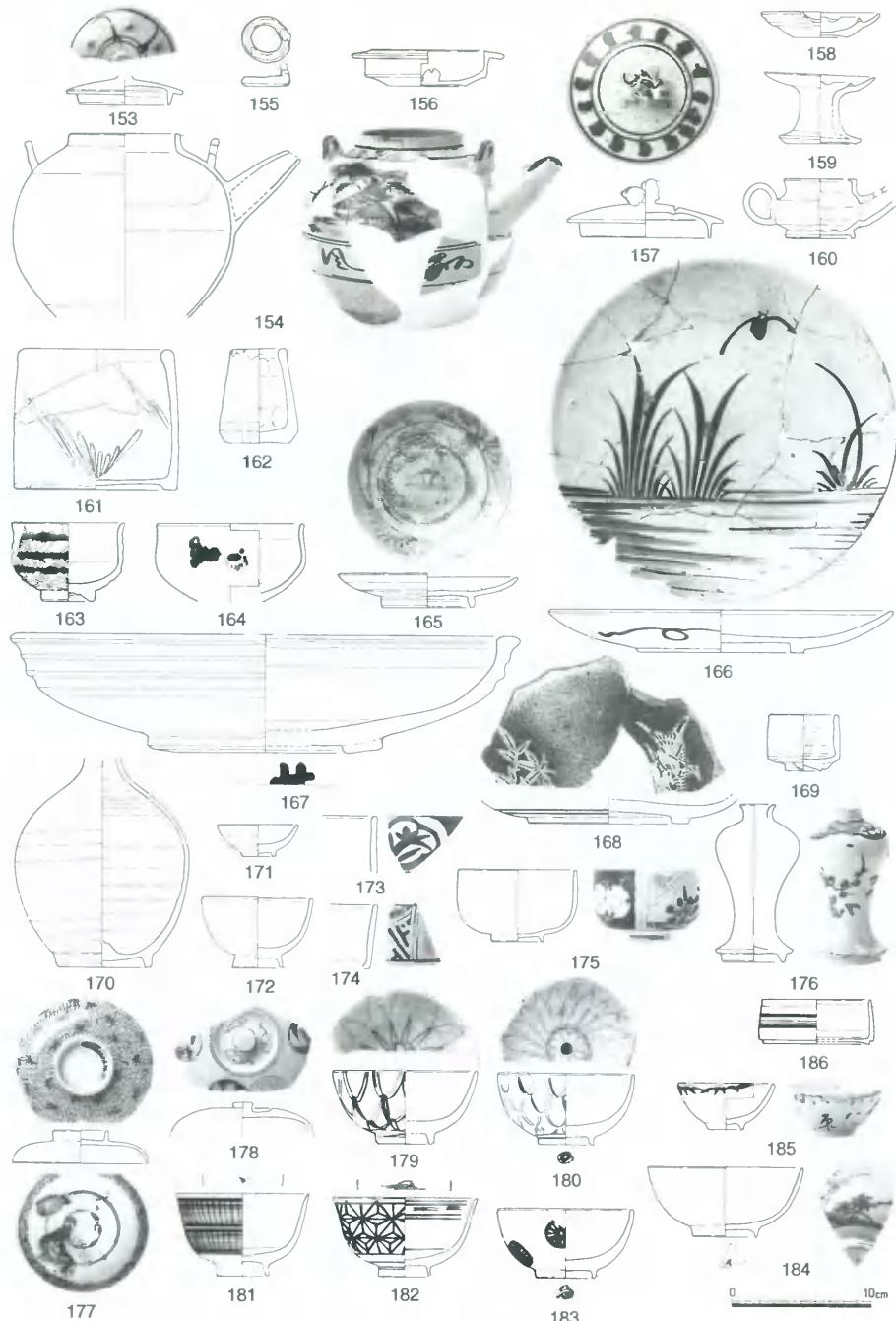
218～228は土師器で、218が底面がタタキで体部内面にハケを施す焙烙、219～228は皿である。224は不明瞭だが、他の皿は糸切りで、219・220・223・227は口縁に煤が付着することから灯明皿と考えられる。229～232は備前焼である。229・230は徳利で229は明赤褐色、230はにぶい赤褐色を呈



第42図 土壌7・16・19・23・24・43・51、溝8出土の土器・陶磁器 (1/4、ただし81は1/8)



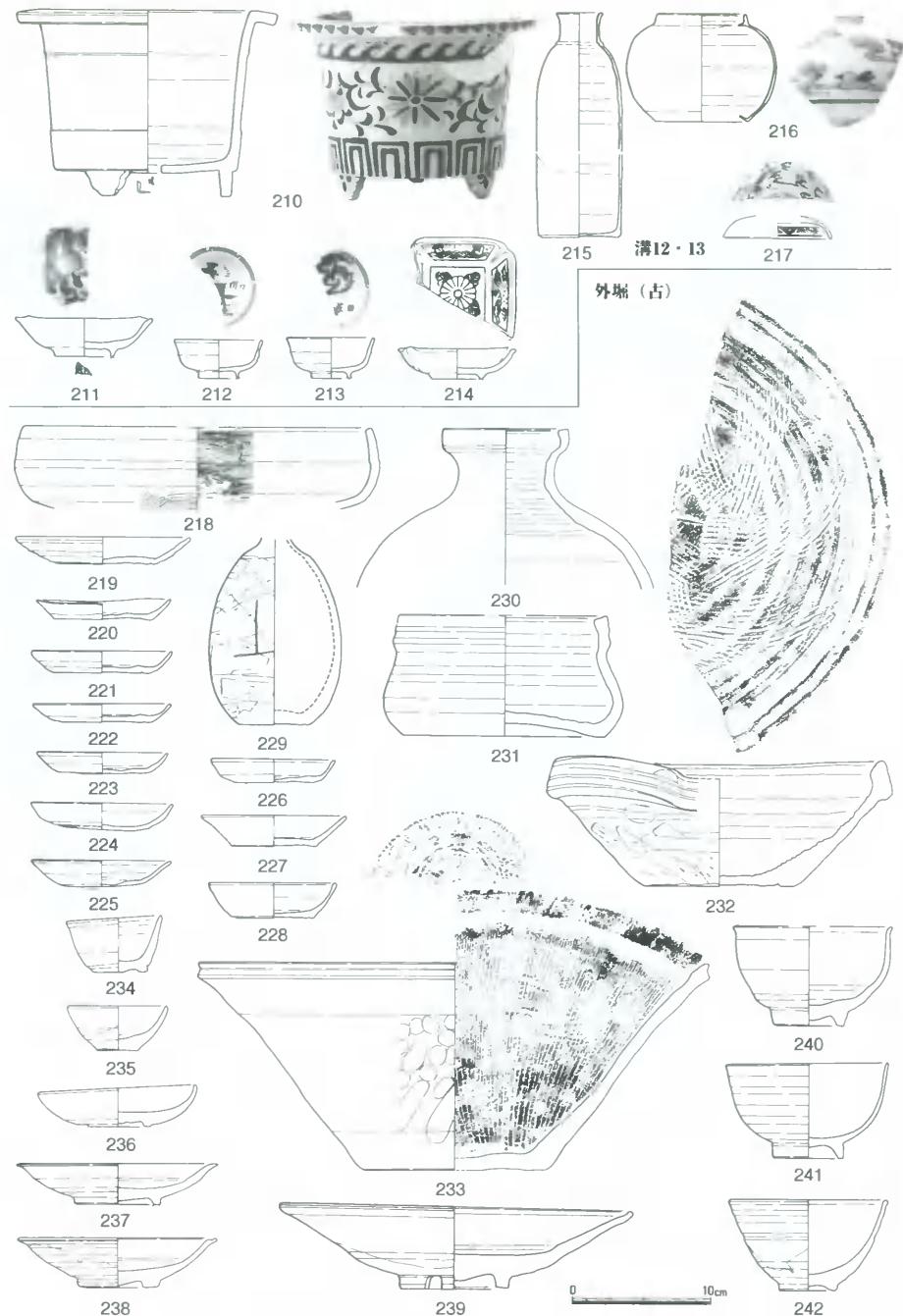
第43図 溝12～14出土の土器・陶磁器 (1/4)



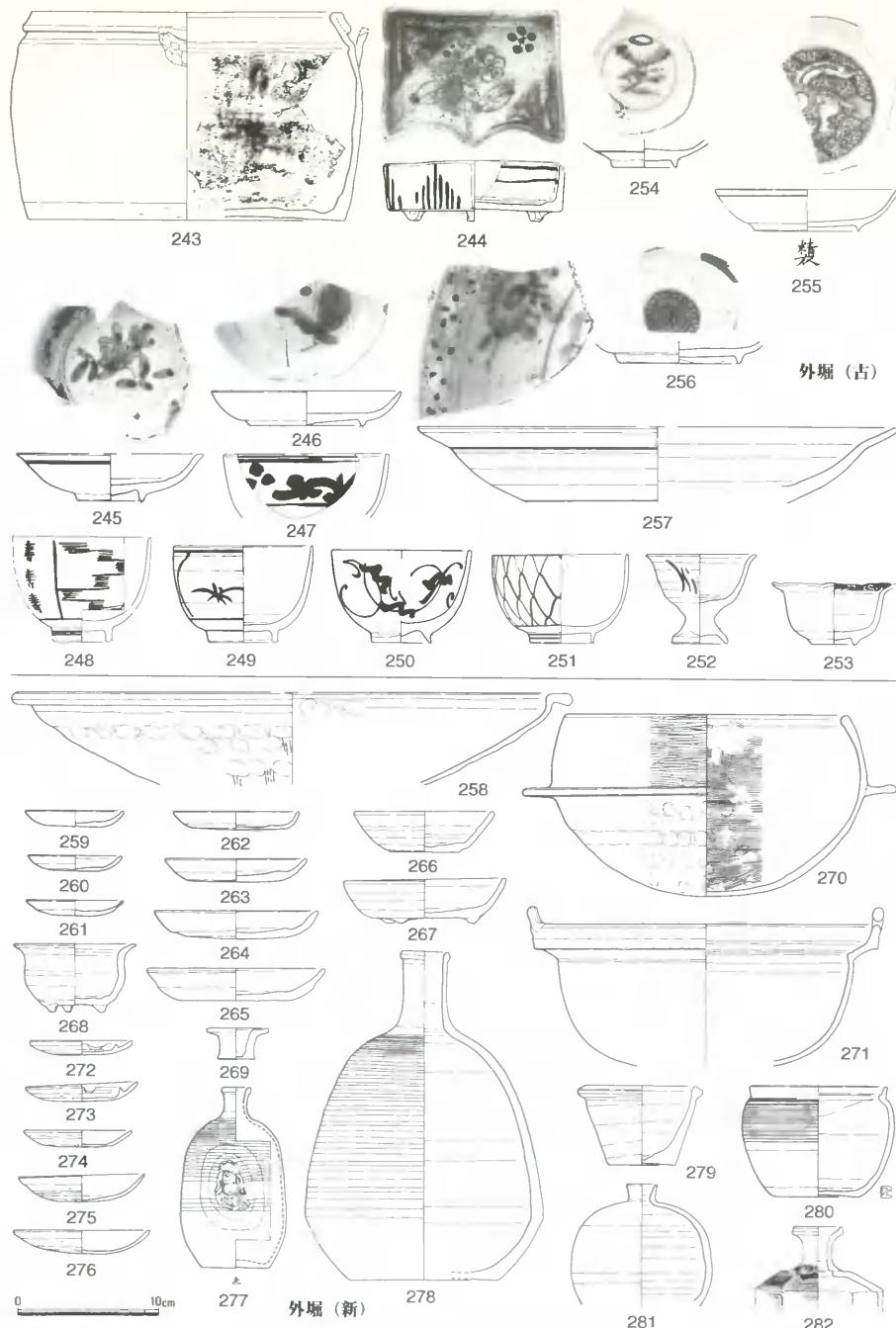
第44図 溝12・13出土の陶磁器 (1/4)



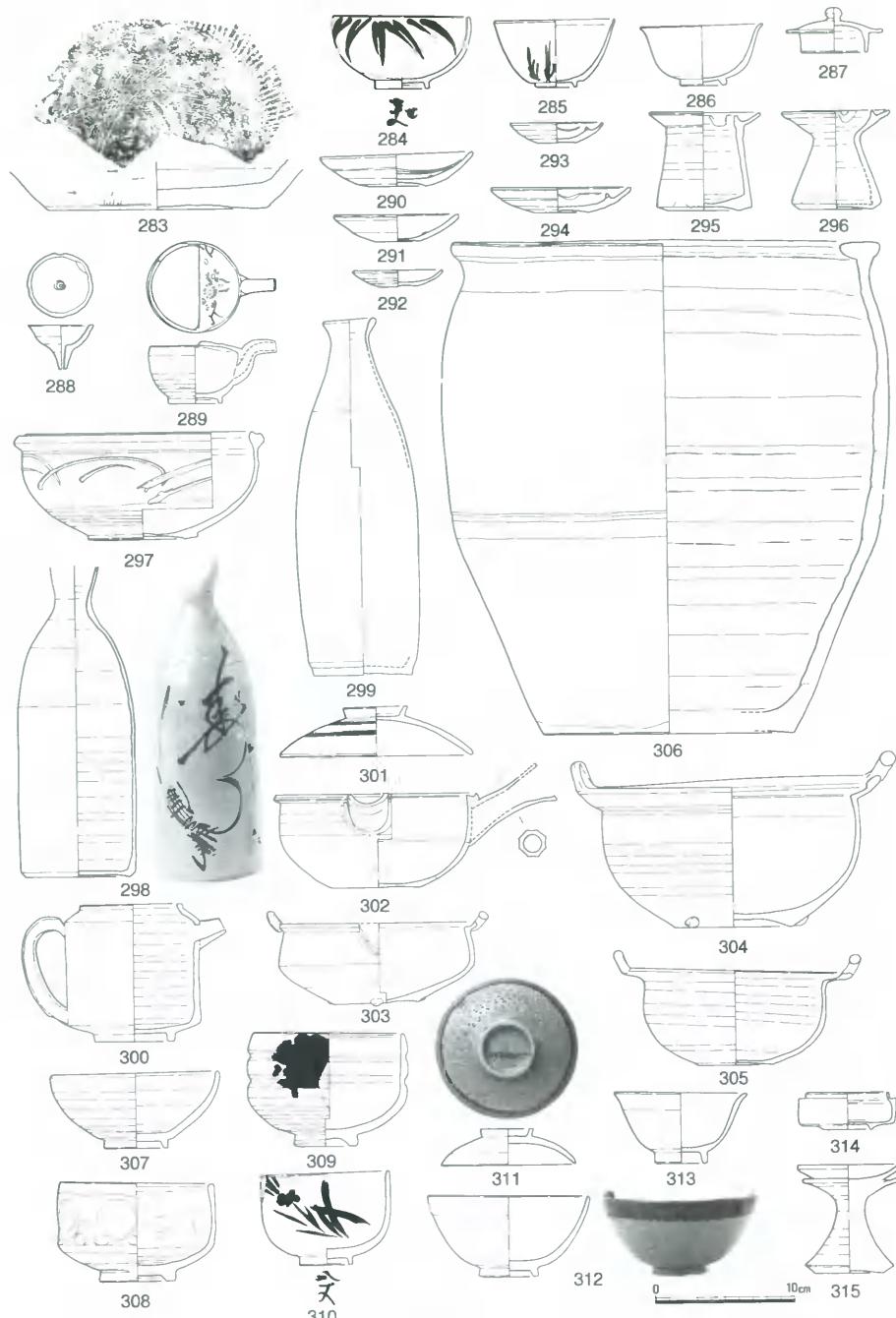
第45図 溝12・13出土の磁器 (1/4)



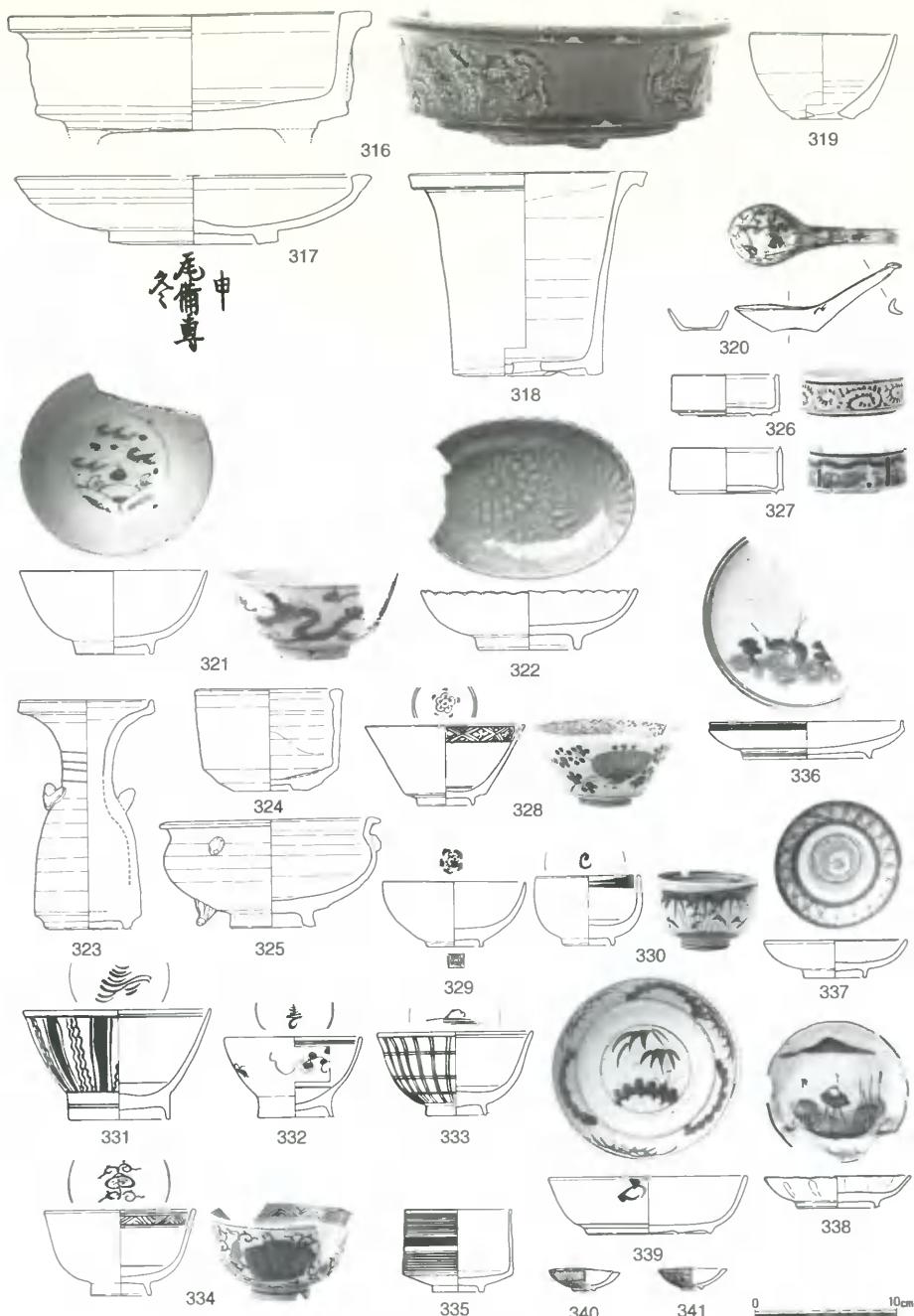
第46図 溝12・13、外堀古段階出土の土器・陶磁器 (1/4)



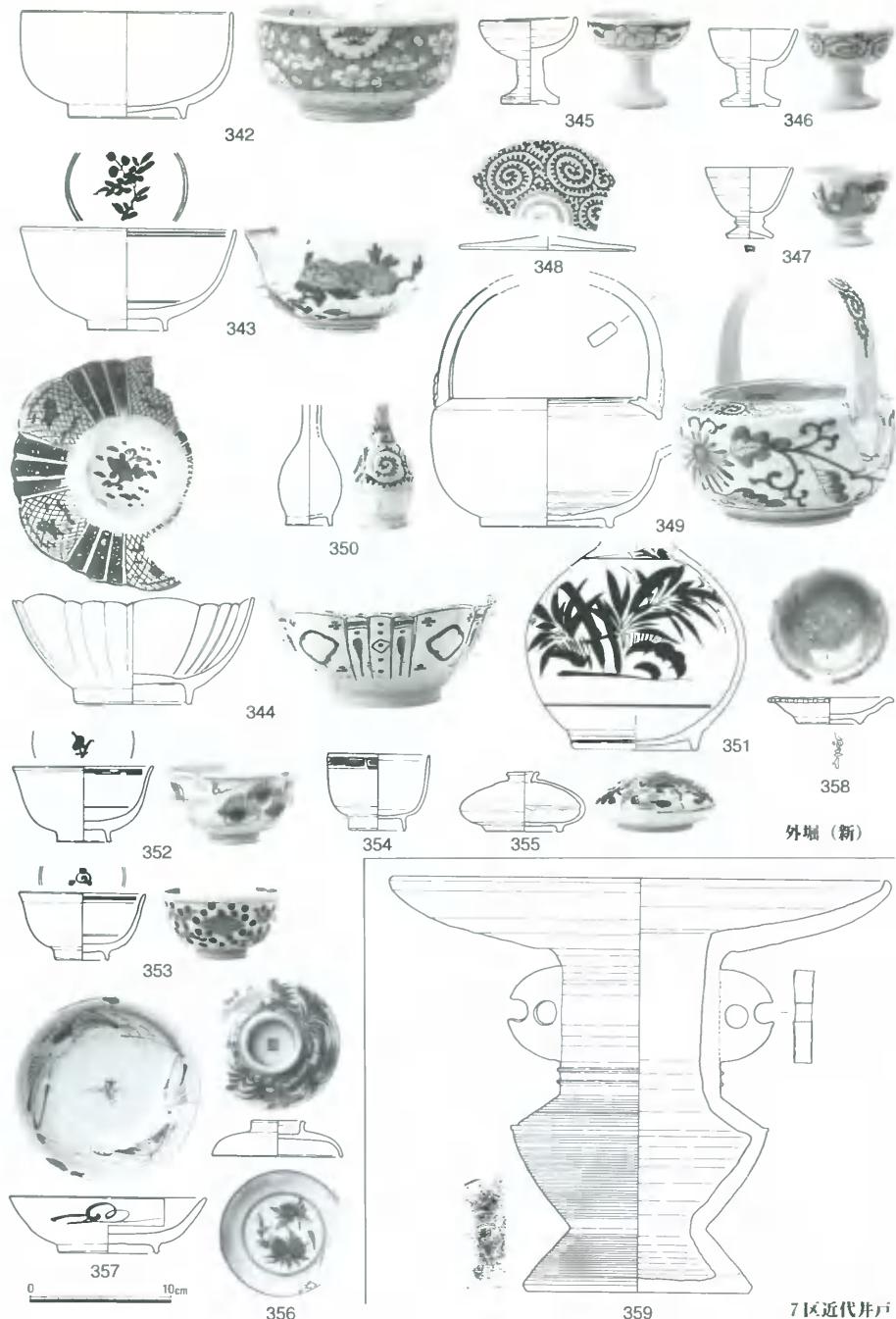
第47図 外堀古・新段階出土の土器・陶磁器 (1/4)



第48図 外堀新段階出土の陶器 (1/4)



第49図 外堀新段階出土の陶磁器 (1/4)



第50図 外堀新段階、包含層出土の陶磁器 (1/4)

7区近代井戸

する。231は建水、232は擂り鉢である。229の体部には窯印と思われるヘラ記号がある。231は体部内面の上半から外底部まで極暗紫色の塗り土が施される。233は丹波焼の擂り鉢で、胎土に砂礫が目立ち、外面に指頭圧痕が顕著に残る。234～242は灰釉の肥前陶器で、234・235は杯、236～239は皿、240～242は椀である。237～239は砂目が確認できる。243は片口の付く叩き甕で、胎土と形状から上野高取系陶器と考えられる。底面には貝目が残る。244は美濃陶器(織部)の皿で、体部に漆継ぎの痕跡が確認できる。245～253は肥前染付磁器で、245・246は皿、247～251は椀、252は仏飯器、253は鉢である。249は釉下彩の辰砂がみられる。また、245・246・248・249・251は疊付けに砂が付着する。253は口縁内面に墨弾きによる花唐草文が施される。254・257は中国(漳州窯系)産染付磁器の皿、255・256は中国(景德鎮)産染付磁器皿である。255は漆継ぎの痕跡がみられる。これらの時期は、252が17世紀中葉から後半に位置付けられやや新相を示すが、他のものは16世紀後半から17世紀中葉が当てられる。

外堀新段階出土土器・陶磁器(第47～50図、図版8・19～23) 外堀の石垣内から出土したもので、第Ⅰ～Ⅴ層に分層して取り上げたが、最下層の第Ⅴ層にも19世紀代の遺物が入ることから、埋土を一括して扱う。なお遺物の8割近くは第Ⅱ層からの出土である。

258～269・271は土師器で、258は焙烙、259～267は皿、268は三足の鉢、269は器種は不明瞭だが盆台か蓋であろうか。皿はすべて糸切り底で、261の口縁に煤が付着する。また、260の内底面に糸切り痕がみられることから円柱状の粘土塊からロクロを使用した一連の製作が推察される。271は2ヶ所に持ち手の付く鍋で、外面体部に煤が厚く付着する。270は瓦質の鍋で、外面調整は鎧以下では指頭圧痕、鎧以上はミガキである。内面は丁寧なハケを施す。272～282は備前焼である。272～276は皿で、口縁に煤の付着がみられることから灯明皿と考えられる。277・278・281・282は徳利で、277は体部に布袋の人形を貼り付けたいわゆる人形徳利である。282は土型で作った部品を組み合わせて作られた角徳利で、いわゆる保銘酒徳利である。279は鉢、280は蓋物の小壺である。253は堺・明石系擂り鉢で、見込みの卸し目はウールマーク状を呈し、外底部には砂の付着が目立つ。284～305は関西系陶器である。284～286は椀で、284の絵付けは緑と赤で筆葉が描かれており、外底部には墨で「せ 七十八」と書かれている。287は灰白色の釉のかかる蓋、288は漏斗、289は水滴、290～294は皿で、291・293は口縁に煤が付着することから灯明皿と考えられる。290・291の見込みにはピン痕跡が残り、290には三本の条線がある。295・296は台付き灯明受皿、297は体部にイッチン描きで施文する鉢、298・299は徳利で、298は鉄絵で海老を描き、299は全面に白濁釉がかかる。300は水差しである。301・302はセットで柿釉のかかる軟質陶器の行平鍋で、302の体部下半には煤が付着する。303～305も軟質陶器の鍋で、303が灰釉、304・305が柿釉がかかる。306は中国地方産の陶器の甕で褐釉がかかる。307～309・316～318は瀬戸・美濃系陶器である。307～309は椀で、316は緑釉のかかる三足の水盤、317は盤で外底部に墨で「尾備專 申冬」と書かれている。318は灰釉のかかる植木鉢である。310～312・314は関西系か瀬戸・美濃系陶器で、310は体部に呉須で絵付けをした椀で、外底部に墨書で「八丈」とある。311・312蓋と椀で、内面に透明な鉄釉がかかり、外面はトビガンナ状の刺突文が全面に付く。311は312とは口径がまったく違うので皿になるかもしれない。314は合子である。313は肥前系?陶器椀で、灰釉の上から緑灰色の釉を三ヵ所垂らしている。見込みにはピン痕跡が残る。315は肥前系か福岡産の陶器の台付き灯明皿受で全面に黒色の鉄釉がかかり、外底部は露胎で糸切り痕を残す。319は肥前陶器の椀(1600～1630年代製作)を、底部を穿孔して植木鉢に転用している。

320は中国(福建省)産染付磁器の散り蓮華で、18世紀末から19世紀中葉の製作である。321は中国産の写しの肥前染付磁器の碗(1655~1670年製作)である。322~326は肥前系青磁である。322は型押しの皿で、楕円形の皿部に円形の高台が貼り付けられる。323がは瓶、324が火入れ、325は香炉である。326~329・331~339・342~351は肥前系染付磁器である。326・327は段重、328・329・331~335は碗、336~339は皿で、336は有田産の優品である。342~344は鉢、345・346は仏飯器で、347は高脚杯での外底部には墨書で「口」がある。348・349はセットで急須である。350・351は瓶である。340・341は肥前白磁の紅皿である。330は中国地方産の染付磁器の碗である。352~354・356・357は瀬戸・美濃系染付磁器で352~354が碗、357が皿、358が蓋である。355は瀬戸・美濃系色絵磁器の髪油壺である。358は関西系(三田焼)の型押しの青磁皿で、ガラスの焼き継ぎがある。三田市三輪明神窯跡出土の土型に同型のものがある。これらの時期は、古い物もあるが、概ね18世紀末から19世紀中葉を中心とした時期が当たられる。

その他の陶器(第50図、図版23) 359は備前焼の仏花瓶で、7区の近代の大型井戸の東脇に意図的に割られて一括して遺棄されていた。口径354mm、器高約300mmを測る。精良な胎土で、筒状の頸には円孔のあく板状の耳が二個貼り付く。口縁内面から外面全体に暗赤褐色の塗り土を施す。ロクロ成形した体部に板状の底部を貼り付けているが、一部漆継ぎの痕跡が残る。また、外底部に焼成前にヘラで「清三良之作」の銘が掘られている。製作時期は明確でないが、19世紀代と推察される。

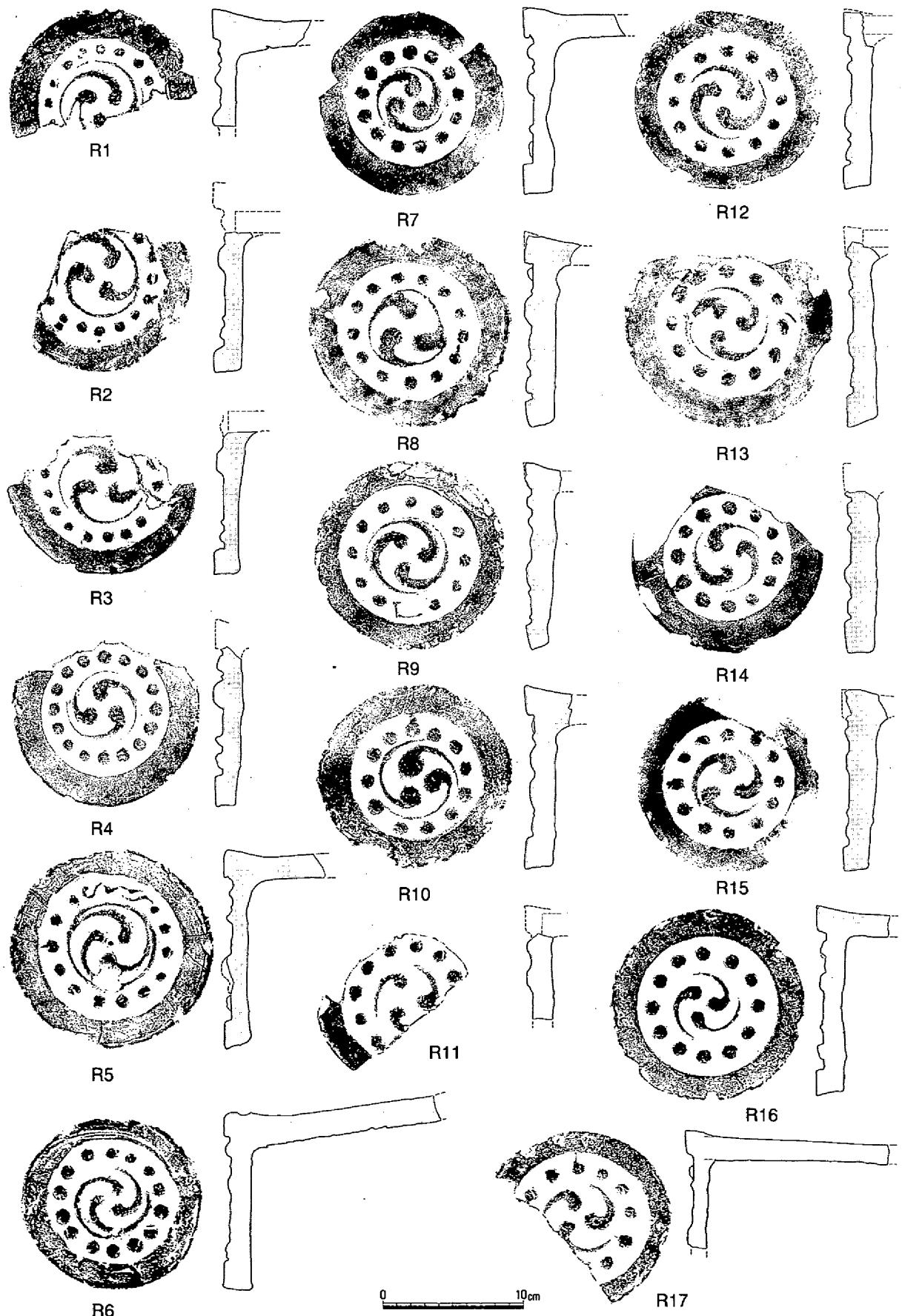
瓦類(第51~53図、図版9~11)

軒丸瓦(R 1~R 29) 91点が出土したが本来の製作時期が推定できるものは少ない。瓦当文様を中心みると、すべて三つ巴文で左巻きと右巻きの両者があり、珠文の数は8~16個がある。R 5は珠文を結ぶように唐草が入り、R 9は珠文部に鈎文がみられる。製作技法では観察できるものはすべて瓦当部裏面に段を設けて刻みを入れ、丸瓦を補強粘土で接合する(R 2・R 11・R 12・R 18・R 23・R 27)。また、R 4・R 7・R 20・R 25は瓦当面にキラコが観察され、製作時期が岡山城などの出土例から18世紀中葉以降と考えられる。図示した中で外堀古段階の出土資料は、R 1~R 3・R 5・R 10・R 26・R 29があり、廃棄時期が17世紀後半であることから製作時期は17世紀前葉から中葉と判断される。

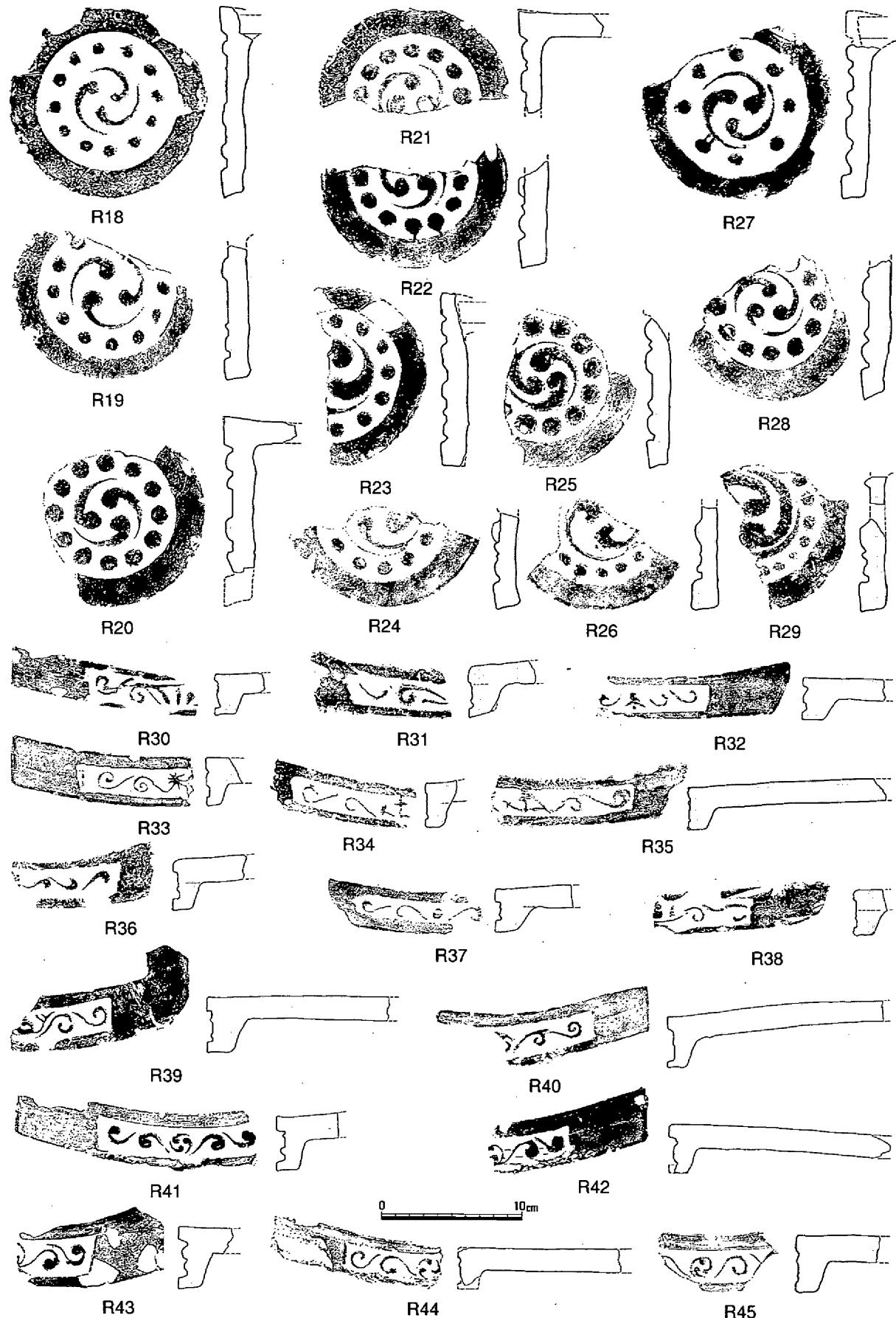
軒平瓦(R 30~R 45) 31点が出土したが、出土状況は軒丸瓦と同様である。瓦当文様は均整唐草文で中心飾りはそれぞれ、R 30・R 31・R 34・R 35は三つ葉、R 32・R 36・R 40は不明瞭、R 33は星、R 37~R 39は宝珠、R 41・R 42は右巻きの三つ巴、R 43~R 46は左巻きの三つ巴文である。図示した中で外堀古段階の出土資料は、R 31・R 34があり、廃棄時期が17世紀後半であることから製作時期は17世紀前葉から中葉と判断される。また、R 41~R 43が瓦当面にキラコがみられる。

道具瓦(R 46・R 47) 合計9点が出土した。R 46は外堀古段階出土で、亀形の留蓋と考えられ、外面は線刻で甲羅や爪を表現し、内面は余分な粘土を削りとっている。R 47はL型の瓦で内面にスサの入った粘土が付着する。

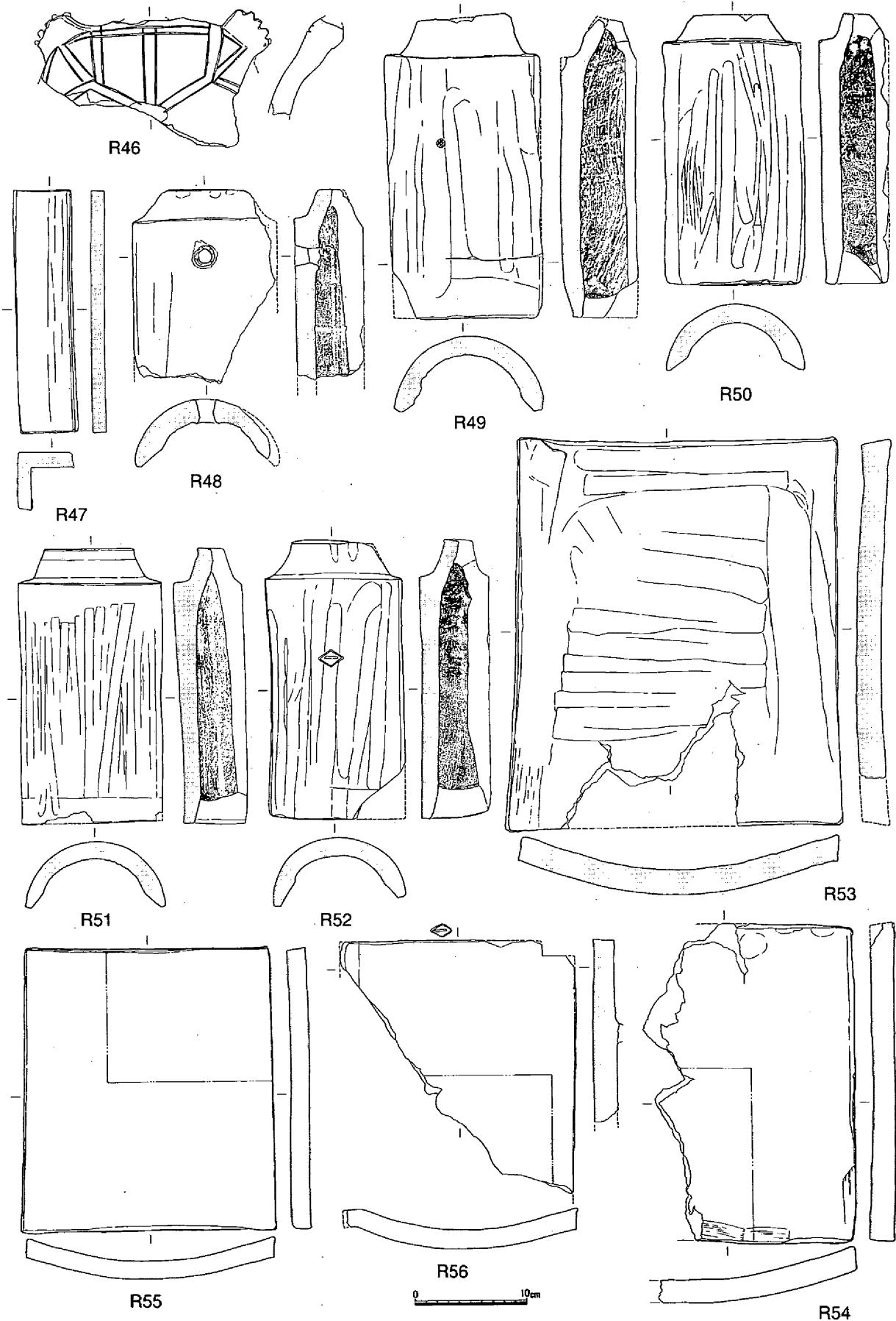
平・丸瓦(R 49~R 54) 外堀を中心に多量に出土した。丸瓦R 48~R 52は、R 49が外堀古段階出土で胎土に赤色土粒が多く入り、焼成が甘く、凸面に「井」の刻印がある。R 50は溝14出土で、やはり焼成が甘い。他の丸瓦は外堀新段階出土で、非常に硬質である。R 52の凸面には△内に「一」の刻印がある。R 53~R 55は平瓦で、R 53・R 54は溝14出土でR 53は凹・凸面に粗いヘラ削りが残る。R 56は棟瓦で狭端部にR 52と同一の刻印があり、凸面には突起の痕跡がみられる。図示した瓦では、外堀古段階と溝14が17世紀代で、古相を示す。



第51図 軒丸瓦 (1/4)



第52図 軒丸瓦・軒平瓦 (1/4)



第53図 道具瓦・丸瓦・平瓦 (1/5)

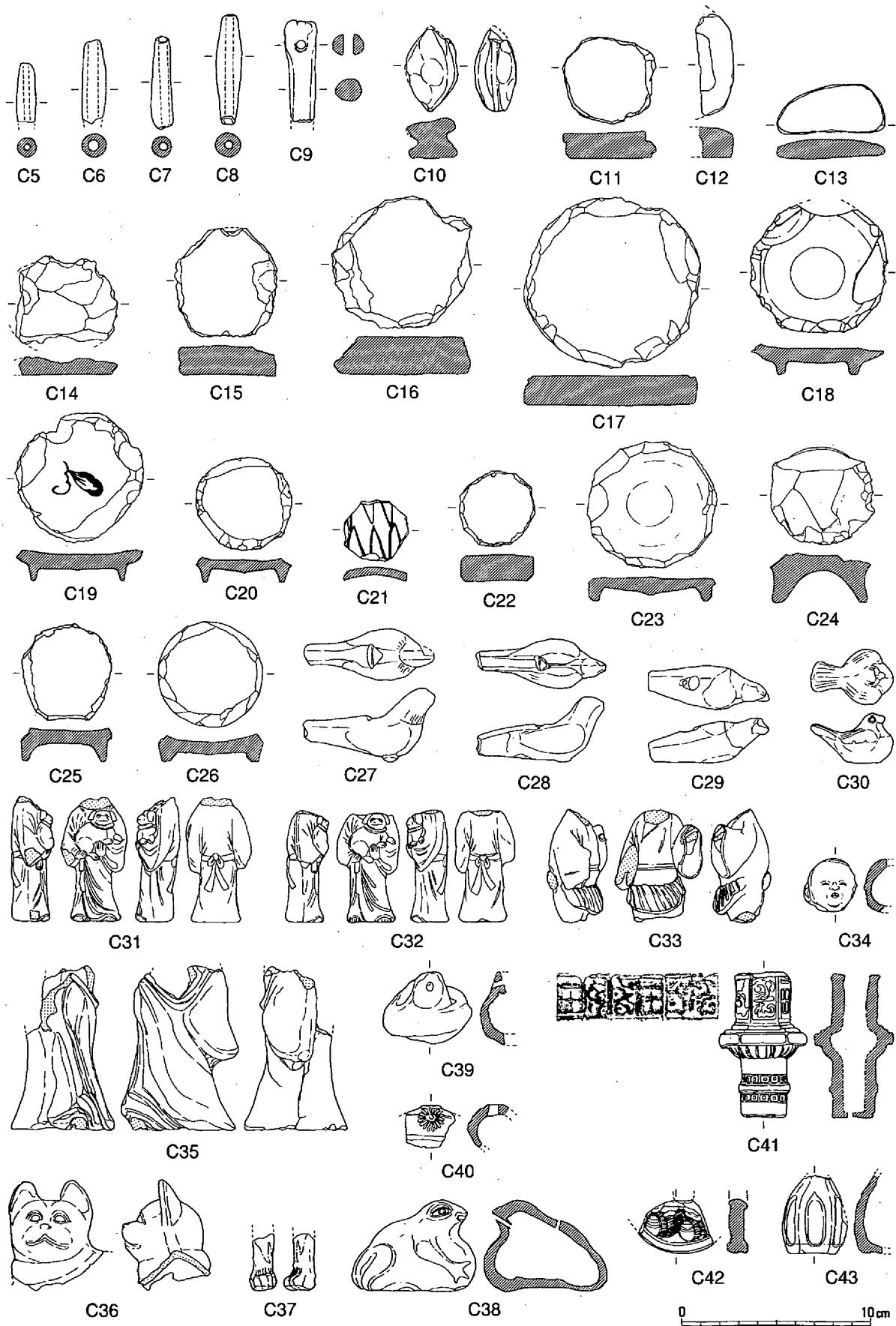
土製品(第54・55図、図版11・12)

錘(C5～C10) C5～C8は管状で完形のC8で長さ58mm、孔径4mm、重量8.7gを測る。棒状のC9は孔径6mmで現存量12.3gである。有溝のC10はほぼ完形で長さ45mm、最大幅26.5mm、最大厚21mm、重量20.2gを測り、側面に溝が廻る。これら以外に管状が2点ある。C8が井戸2の掘り方内出土で近世前半と考えられる以外は、いずれも近世後期までと判断される。

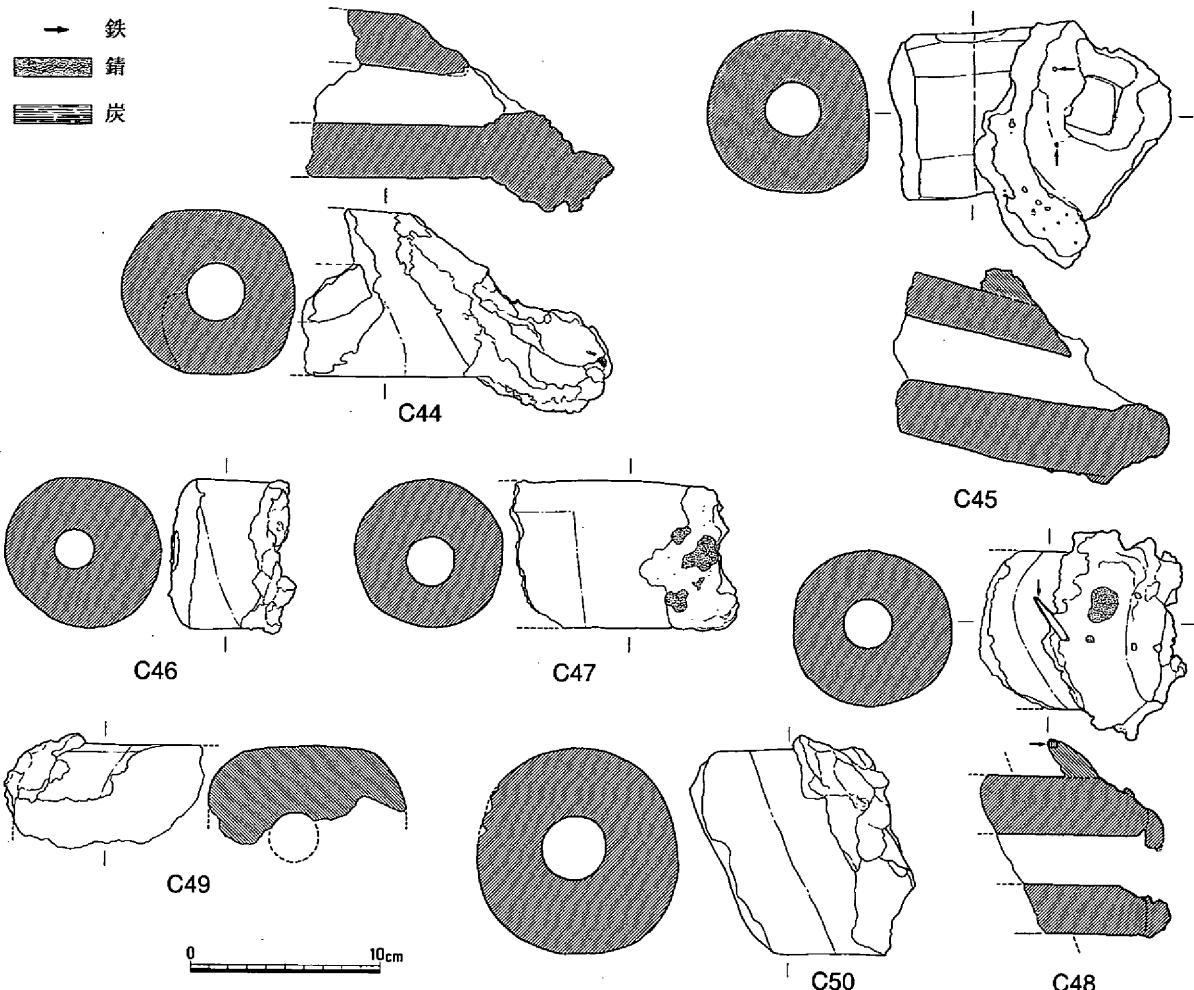
円盤(C11～C26) 合計24点が出土したが、C20が土壙31から出土した以外は外堀と溝からの出土で、時期は近世以前としかいえない。C11～C17は瓦転用で、C11は側面の一部に、C12は側面に、C13は全面に研磨がみられるが、その他は敲打痕が認められるのみである。C18～C21は肥前系磁器碗転用で、敲打痕のみがみられる。C22は備前焼、C23～C26は肥前系陶器碗転用で、やはり敲打痕のみがみられる。材質による計測値の差異は認められず、径34～95mm、重量6.5～148.6gを測る。特に明瞭に煤の付着などの使用痕は看取されない。

玩具ほか(C27～C43) C27～C29は陶質の鳩笛で、C29は特に硬質で透明釉がかかる。C30は軟質の鳩像で、羽の部分に緑釉がかかり底部に孔径3.5mmの穴がある。C31～C33は緑・黄色釉で彩色された陶質の唐人像で、C31とC32は同一の合わせ型で作られたと思われるが、C31が焼成が悪くやや素焼きに近い。C33は粘土を貼りあわせて作られている。C34・C35は素焼きの人形で、両者とも合わせ型製作で中空である。C39・C40は軟質の鈴である。C41は土壙24から出土した表面に緑釉で彩色された陶質の灯籠で、粘土汁を型に流し込んで作られている。傘と台座の接合を漆で行っていた痕跡が残る。C36は合わせ型製作の素焼きの犬、C37は白磁に緑釉の彩色のある犬か獅子の脚である。C38は合わせ型製作の表面に濃緑釉の彩色のある硬質の蛙で、口と背の2ヶ所に空気穴がある。C42は大黒像の型押しのある素焼きの面子で、中央に方形の穴があく。C43は釣り鐘と思われる軟質の型物で、表面に濃緑釉の彩色を施すが底部は露胎である。

羽口(C44～C50) 外堀を中心に90点以上が出土した。C44は土壙22出土で、外径87～91mm、内径31mm、被熱変化の角度は62°を測る。胎土中にはスサ・小礫が目立ち、先端面の溶解部には5mm前後の炭が付着する。C45～C48は外堀埋土中から出土した。C45は外径約87mm、内径31mm、被熱変化の角度は76°を測る。上部に厚さ35mmの炉壁と考えられる粘土が残る。C46は使用後に切断され廃棄されたと考えられ、長さ66mm、外径82mm、内径21mm、被熱変化の角度は71.5°を測る。C47は外径79mm、内径25mm、被熱変化の角度は84°を測る。先端の溶解部に膜状に鉄錆がみられる。C48は外径92mm、内径26mm、被熱変化の角度は69°を測り、先端の溶解部には鉄錆がみられる。上部には一部精製粘土が残り、この厚さ約45mmの粘土部が炉壁部と考えられる。炉壁部ほぼ中央に補強のためと考えられる鉄釘が埋め込まれている。C49は断面形が蒲鉾形を呈しているが、意図的な形状か乾燥時の偶然の形状かは1点のみの出土のため不明である。現存での最大径105mm、内径26mm、被熱変化の角度は60°を測る。図示できていないが胎土中に鉄釘が埋め込まれている。C50もC46同様で切断されて廃棄された状態を示す。長さ120mm、外径約108mm、内径34mm、被熱変化の角度は71°を測る。外堀出土の計測可能なものでみたとき、胎土に小礫が目立つ粗いものと目立たない緻密なものの二者に大別されるが、前者が圧倒的に主体を占め、外径68～101mm、内径15～39mm、被熱角度61°～85°とばらつきが大きい。後者は外径70～92mm、内径18～36mm、被熱角度65°～81°でややまとまりがみられる。しかし、前者と後者の間においては明確な差違は認められない。羽口の時期は、外堀新段階の出土量が多いが、鍛冶関連の土壙の時期が17世紀代であることから、本来は該期に帰属すると推察される。



第54図 土製品① (1/3)



第55図 土製品② (1/4)

石製品(第56図、図版13)

墓石(S 5～S 7) 外堀新段階と溝12から、ガラス質安山岩製(S 5・S 7)と溶結凝灰岩製の黒石3点が出土した。時期は明確でないが、近世後期から明治時代初頭と考えられる。

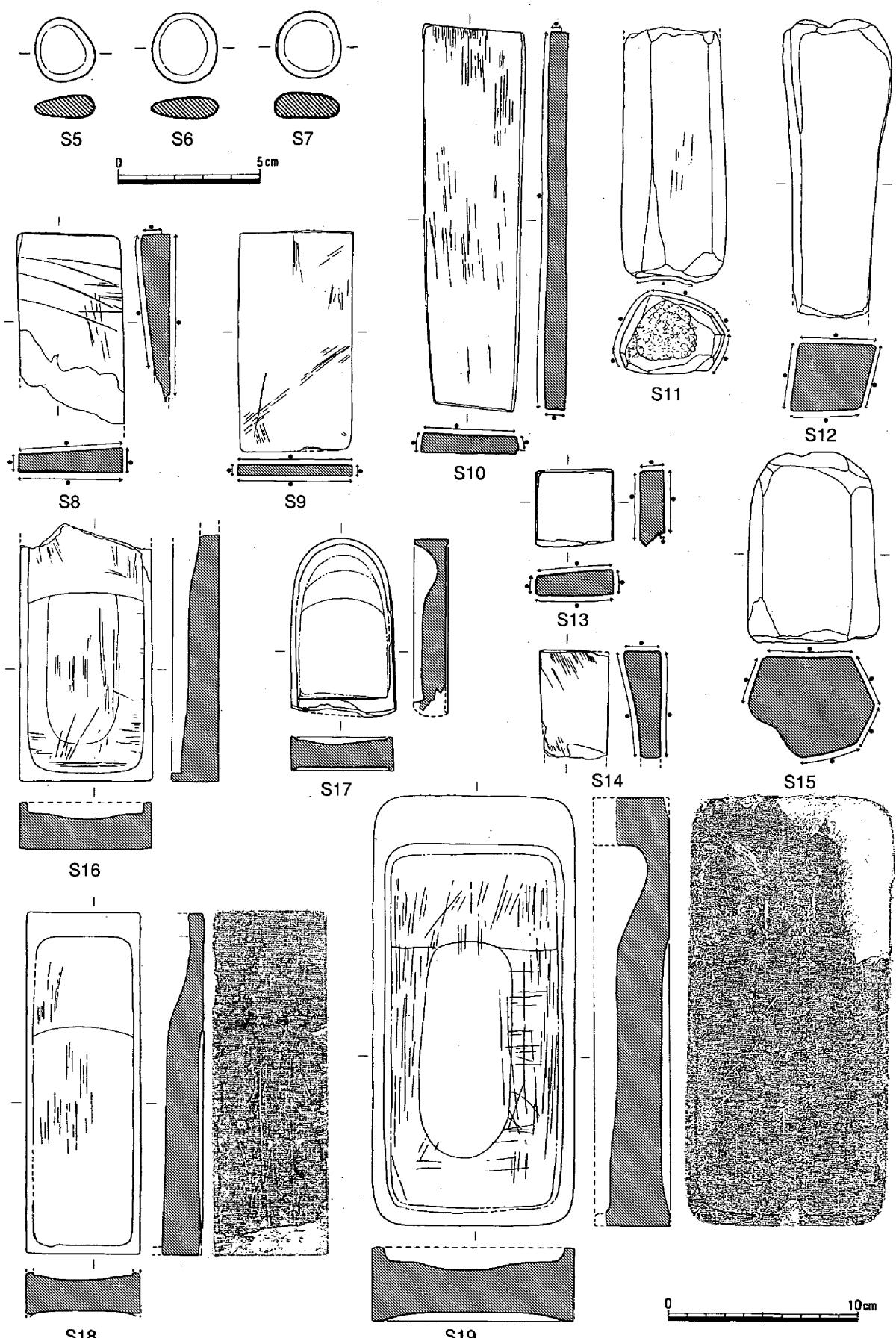
砥石(S 8～S 15) 頁岩製10点、砂岩製5点、流紋岩製2点、安山岩製1点が外堀を中心に出土した。総出土数のうち6点が外堀古段階のもので、17世紀代の所産と考えられる。S 8～S 10・S 13は頁岩製、S 11・S 12・S 15は砂岩製である。S 11の端部には敲打痕がみられる。

硯(S 16～S 19) 合計6点が出土し、頁岩製2点のほかは粘板岩製である。図示したものはすべて外堀新段階の埋土中から出土したものである。S 18の裏面中央に文字を消すような線条痕がみられる。S 19は第Ⅱ層上面で蒔絵杯などとまとまって出土したが、裏面に「文化四卯年 △長?谷川」の文字の線刻がみられる。

その他 これら以外に近世から明治時代の安山岩(豊島石)製のU字溝が出土している。

金属製品(第58・59図、図版14・15)

銭(M 1～M 49) 合計137点が出土した。内訳は文字の読めるもので、祥符通宝(M 1～M 3)3点、祥符元宝(M 4)1点、天聖元宝(M 5)1点、皇宋○宝(M 6)1点、元豐通宝(M 7～M 9)3点、紹聖元宝(M 10)2点、紹豐通宝1点、洪武通宝(M 11・M 12)2点、永樂通宝(M 13・M 14)2点、寛永通宝108点(古寛永(M 15～M 22)47点、文銭(M 43～M 45)3点、新寛永(M 23～M 42)58点)、無文銭(M



第56図 石製品 (S 5～S 7は1/2、その他は1/3)

46・M49) 3点、雁首銭(M47・M48) 2点がある。寛永通宝のうち背面に文字のあるものはM39が「長」、M40が「足」、M41・M42が「元」である。M49は銅製で径26.8mm、厚さ0.1mm、重量1.17gを測り、他の銅錢と計量値では差違がみられないが、中央に穿孔がないことから錢でない可能性もある。

煙管(M50～M75) 雁首19点、吸い口14点が出土したが、組み合わせの分かるものは少ない。材質は銅が主体で、一部真鍮製があると思われるが、鋳化が進んでいないものが多く判然としない。M50～M52・M54・M67・M69・M70は外堀古段階出土で17世紀代と判断できるが、M54は混入の可能性もある。M50は胴部に「本大弗」の刻印があり、元和年間(1615～1623)に製作されたといわれる「大仏煙管」である。M63は胴部に金糸がまかれる。M64・M65は胴部に同様の亀甲形の彫金がみられることから組み合う物と判断できる。M66は花(菖蒲?)の彫金が施される。

その他の銅製品(M76・M77) M76は土壙26出土の飾り金具、M77は外堀新段階出土の管状の取手である。図示した以外に針金や火皿片などがある。

装身具(M78・M79) M78は棒状の銀製の簪で頭部に耳搔きがつき、千鳥の飾りがある。M79は板状の銅か真鍮製の簪で、頭部先端に耳搔きがつき、「寿」と脚部に唐草状の彫金がある。両者共外堀新段階出土で、近世後期頃と考えられる。

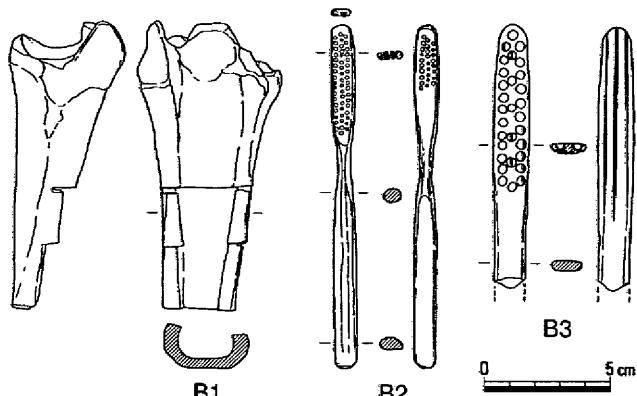
生活用具(M80～M90) M80～M90は鉄製である。M80は鉄、M81～M84は包丁、M85は槌、M86・M87は釘、M88・M89は鎌、M90は鎌である。M85は柄の部分に鉄製の楔が打ち込まれている。M89の鎌は厚さ7mm前後の板金を2枚重ねて鍛打して作られている。M82・M88は外堀古段階出土で17世紀代と判断され、その他は近世から明治初頭と考えられる。

鍛冶関連遺物(第60図、図版16)

M91は土壙32出土の鉄塊系遺物で、重量313.7gを測る。M92は外堀新段階出土の小割鉄で、長さ201.5mm、幅32mm、厚さ13mm、重量395.2gを測る。M93～M98は土壙27、M99～M105は土壙17、M106～M119は土壙27、M120～M124は土壙30、M125～M129は土壙45出土の鉄釘や鉄片で、いずれも10区に位置する土壙から炭や鍛冶関連遺物とともに出土した。これらは、土壙からまとめて出土すること、表面が熱により変質したり炭の付着が目立つこと、長さが2～3cm位と計測値がまとまる傾向がある、といった特徴がある。また、製品としての形状が整っている物もあるが、大半は破片で元の形状が不明なものが多いことから、古鉄の再加工のための原料と推察される。図示していないが、9区の外堀と土壙22を中心に総重量200kgを越える大鍛冶滓が出土した。10区の土壙群の埋土中からは鍛錬鍛冶滓や砂鉄、鍛造剥片、粒状滓が出土しており、外堀の西側の地域で精錬から鍛錬の一連の鍛冶作業が行われていたことが分かる。これら遺物の時期は、遺構の切り合ひ関係や出土遺物から17世紀代を中心とした時期と考えられる。

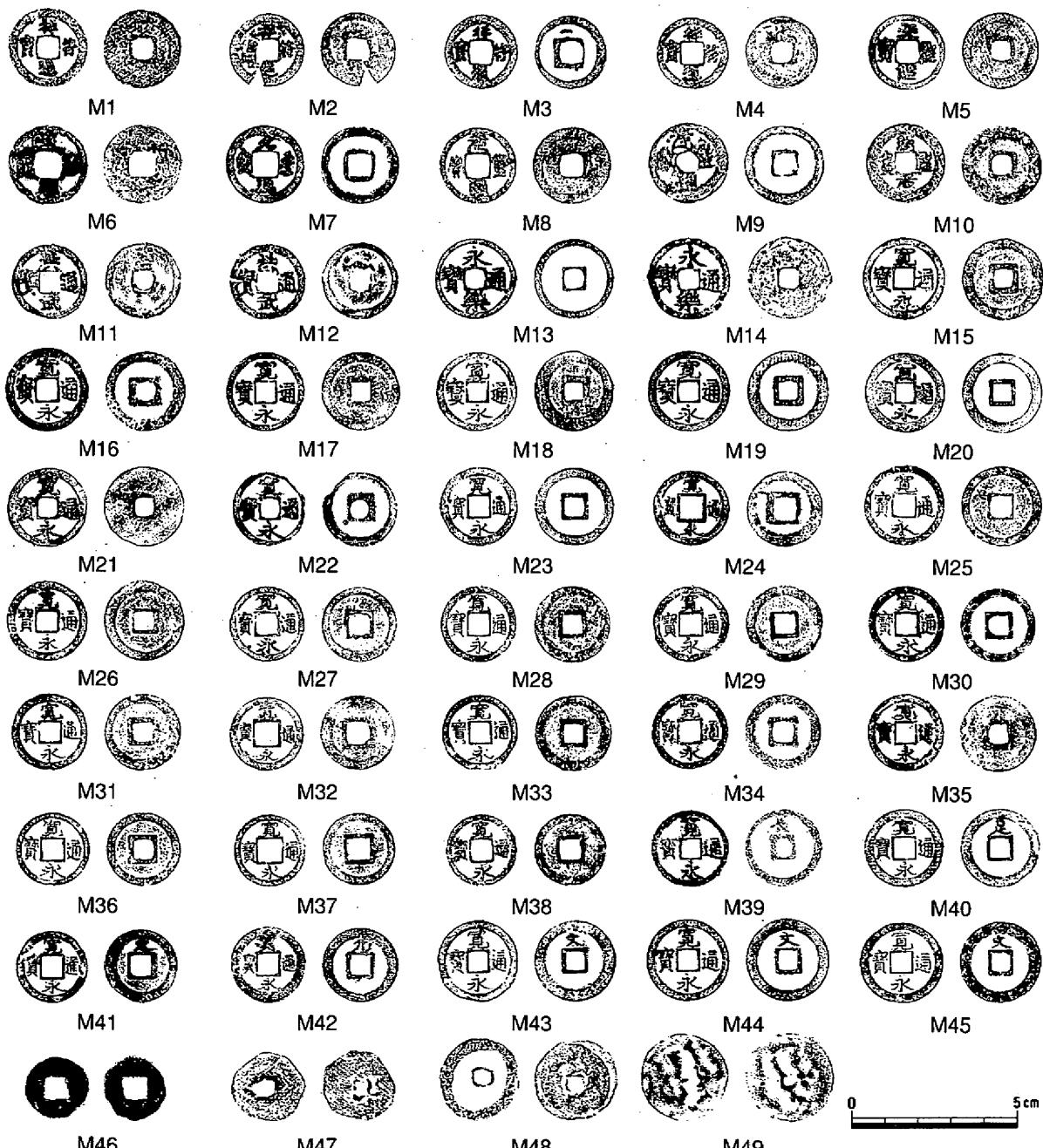
木製品(第61～63図、図版16～18)

溝と外堀を中心に大量に出土したが、本来の帰属時期は明確でない。

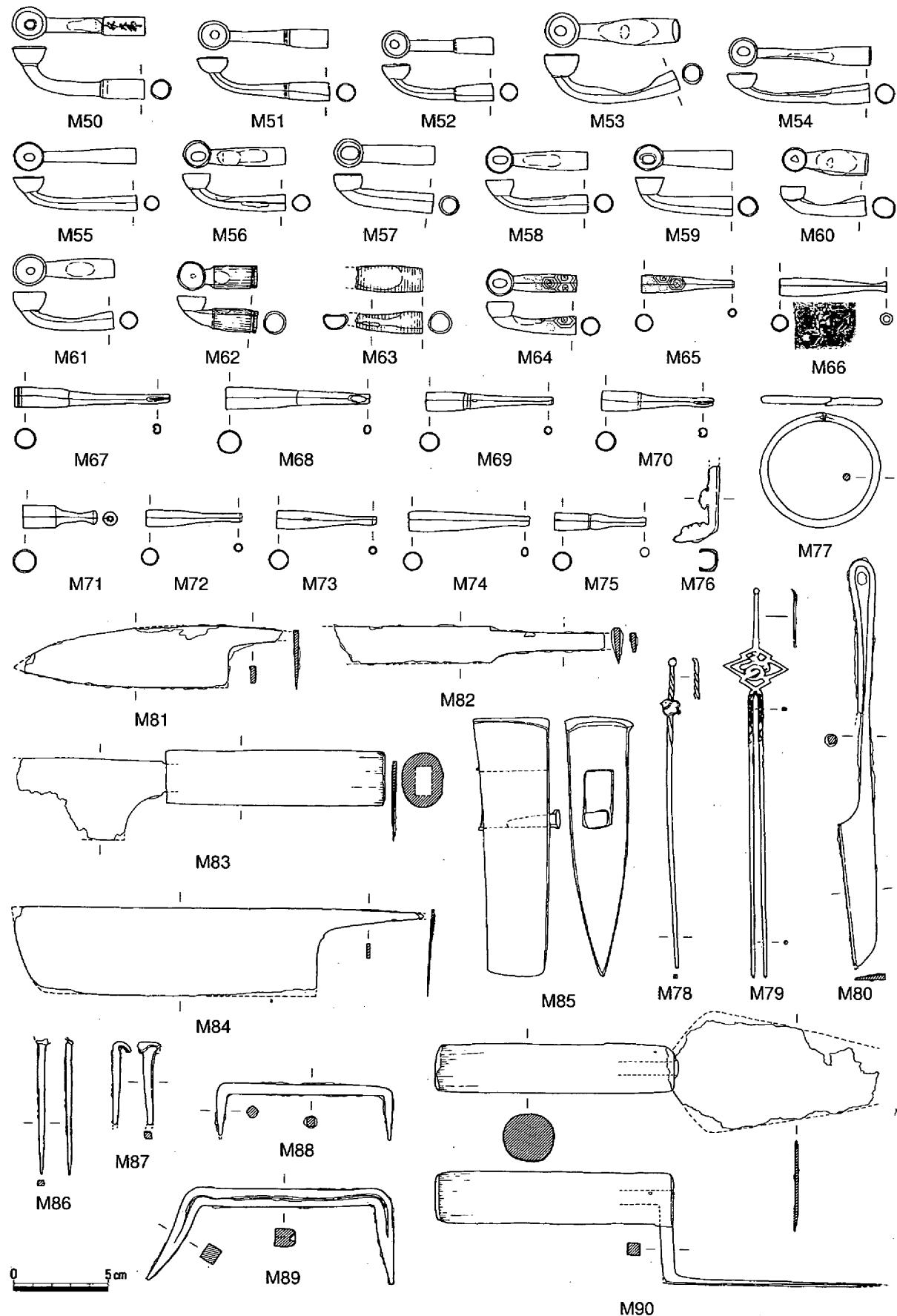


第57図 骨製品 (1/3)

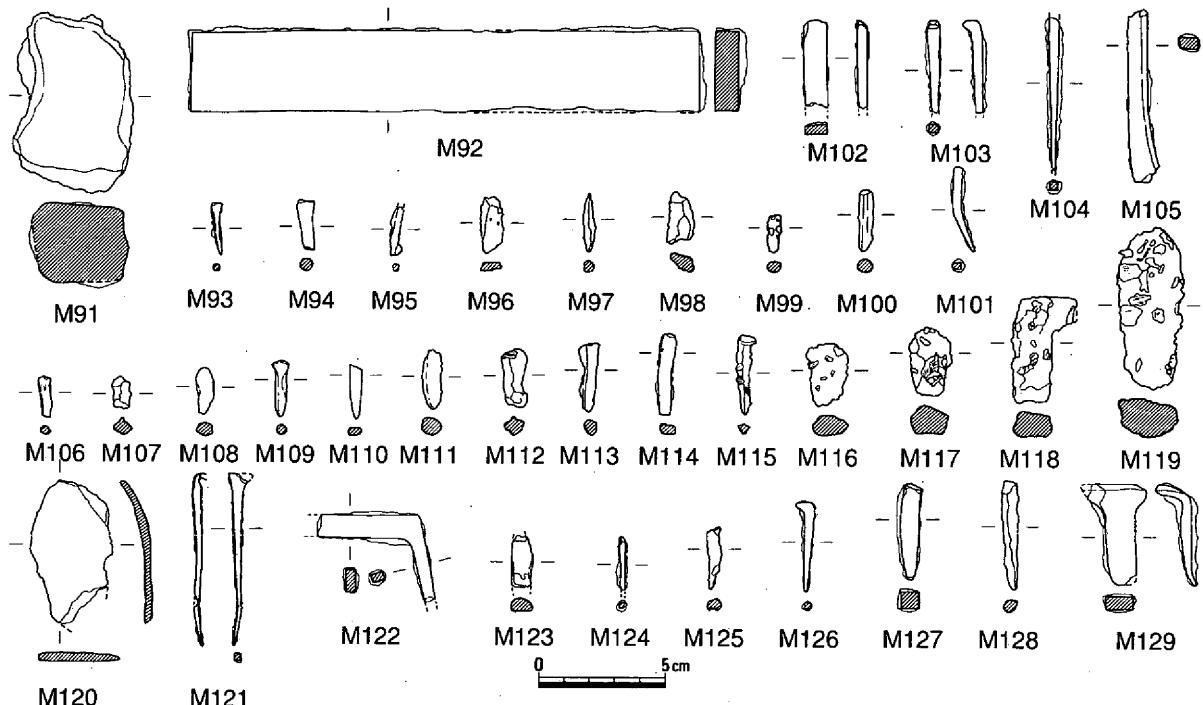
W1・W2は内面朱漆で外面は黒漆塗りに朱漆の絵の描かれた蓋、W3は黒漆塗りの金蒔絵の盃である。W4～W20は漆塗りの椀で、W8・W14が内外とも黒漆塗りで、その他は内面朱漆で外面黒漆塗りである。W6・W11・W18は金蒔絵、W7・W16は朱漆で絵付けをし、W13は底部外面に朱漆で文字を書く。W21～W23は黒漆塗りの皿でW21は朱漆で絵を描く。W24はイヌエンジュ製の黒漆塗りの筒、W25は黒漆塗りの櫛である。W26～W32は墨書のある札である。W26は「津高郡白石村」「(栄カ三カ郎カ)」、W27は「田原□(様カ)□□□□」、W28は「友作硯七十八メ 坂(本)村 嶋屋(分カ) 布屋孫助様行」「坂本村 嶋屋(義兵衛カ) 布屋孫助様行」、W29は「岡山市西大寺町 福岡屋吉兵衛様行 久長坂 はそん物相用(也カ)」「九月十四日 瀬戸帶地□」、W30は「備前岡山 浜(野カ)万蔵様(へ)」「□□□(物カ)(多カ)(目カ) □ 白石□□□式(目カ)入」、W31は「備前岡



第58図 金属製品① (1/2)



第59図 金属製品② (1/3)

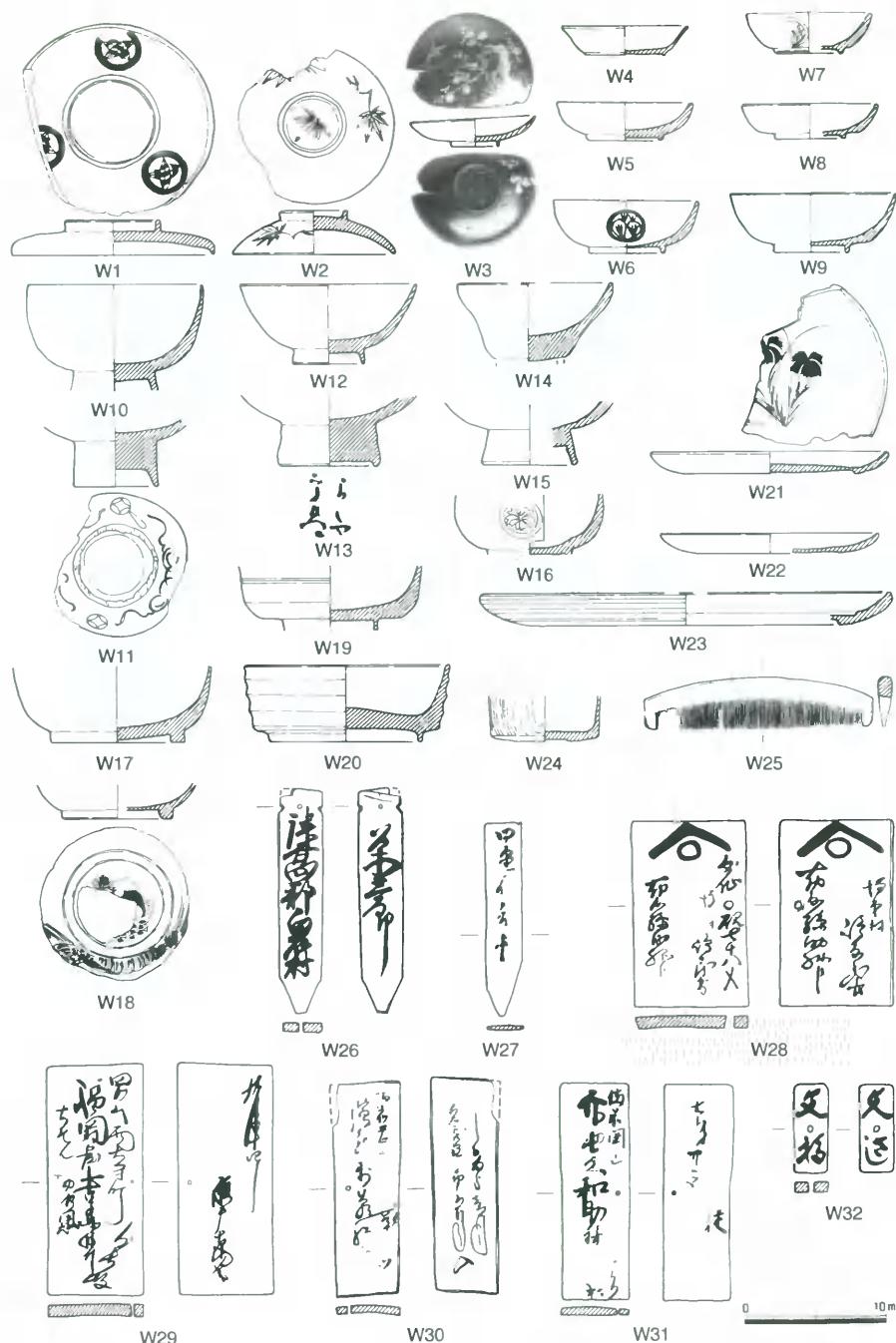


第60図 金属製品③ (1/3)

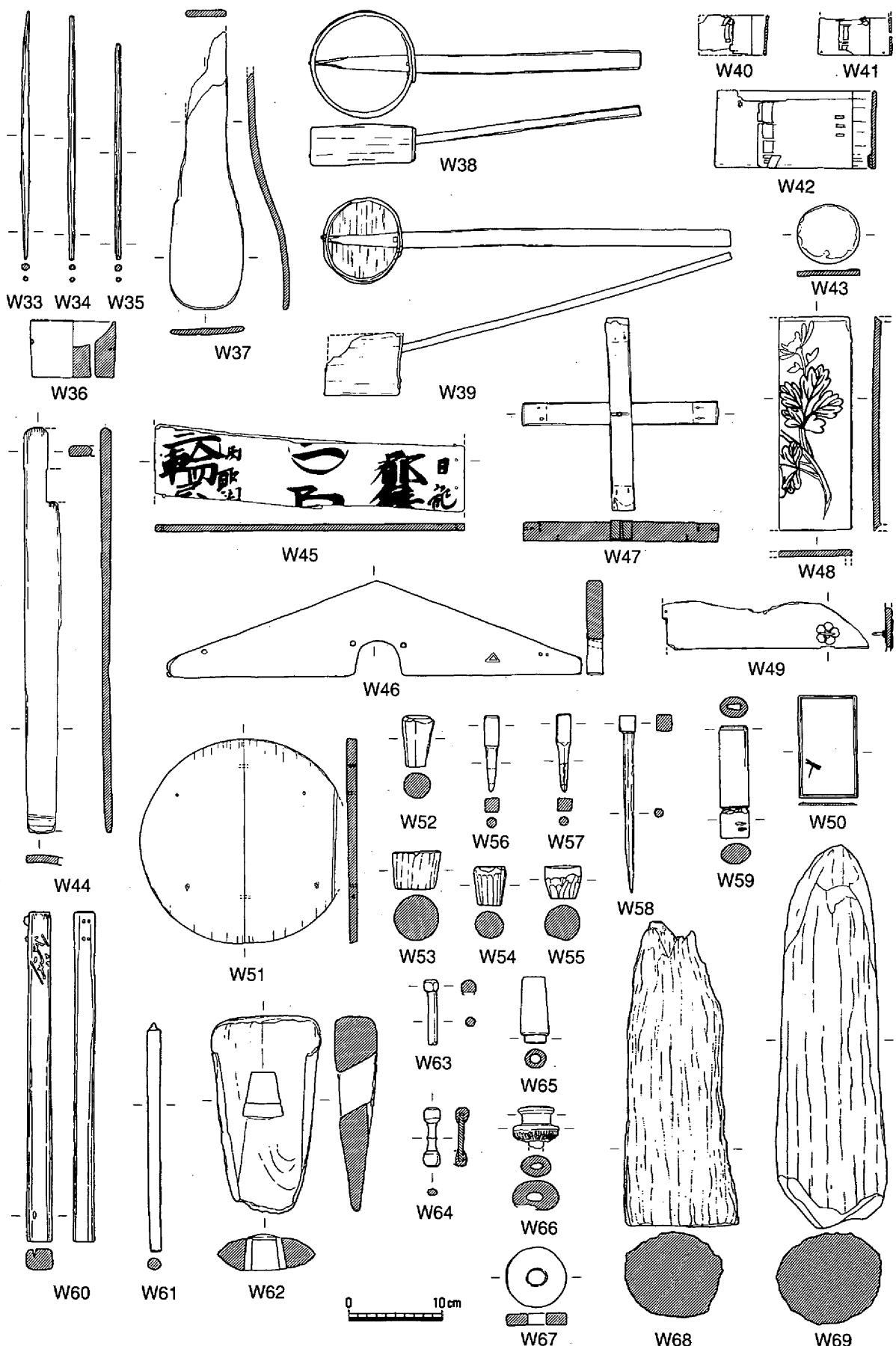
山 竹口屋和助様□□ □□「七月廿三日□」、W32は「文福」「文さし」と書かれている。W33～W35はスギ製の箸、W36は臼型、W37はしゃもじ、W38・W39は杓、W40～W42は曲げ物、W43は底板で内面に黒漆が付着する。W44は桶の柄、W45は墨書きのある箱の側板、W46は桶蓋の持ち手で、「△」の刻印がある。W47は漆塗りの箱の底部の骨組みである。W48は蒔絵の箱の蓋で、W49は漆塗りの箱の一部で、銅製の飾り金具がつく。W50も箱の蓋で、トンボの絵が朱書きされている。W51は蓋で、木ねじを用いて中央で接合している。W52～W58は栓、W59は包丁の柄、W60は焼き印がある工具の柄で、W61は錐、W62は鍬先である。W63・W64は糸巻きで、W63は頭部を削り出しているが、W64は軸棒に別の材を装着して頭部を作り出している。W65・W66は傘の部品で、W65には銅製の環がつく。W67は直径63.5mmの戸車と考えられる。W68・W69は柱穴列5・6の柱穴出土の柱材で、W68が底面平らなのに対してW69は底部が尖るように加工している。W70～W72・W81・W83～W85は連歯下駄、W73～W77は差歛下駄、W78・W79・W82は無歛下駄でW78は未製品である。W79・W82・W84・W85はオモテのつくものである。下駄の材質は鑑定した物はスギかヒノキ製である。図示していないが、中折れ下駄も出土している。W86は墨書きで筆筒を表現した物で、ままごとの道具と思われる。W87は太鼓で鉄鉢が打ち込まれている。W88・W89は独楽で黒と朱で同心円の絵を描いている。W90はヒノキ製の女性の人物の首で、頭部には毛を埋め込んでいた穴がみられる。

骨製品(第57図、図版13)・動物遺存体

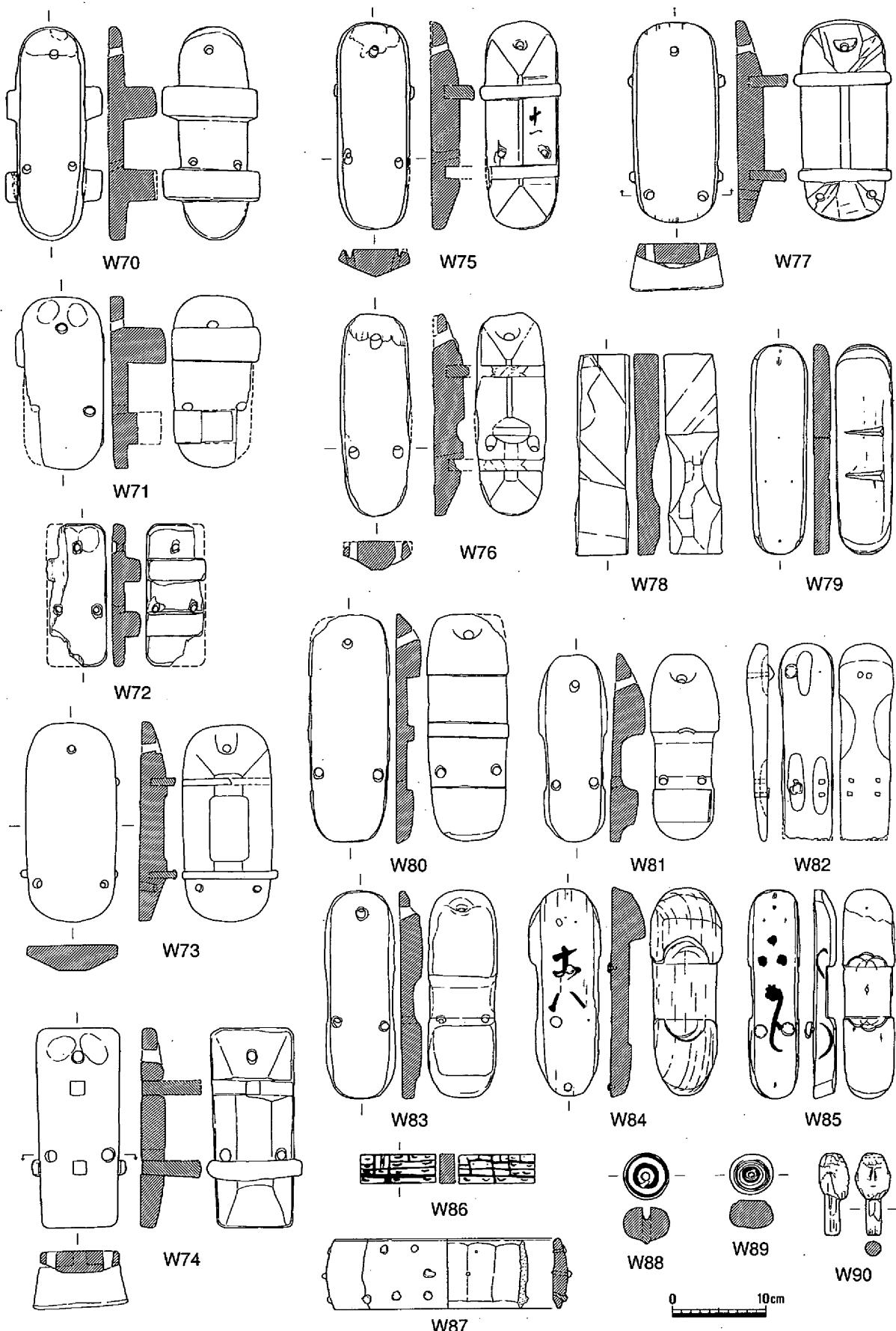
製品2点と素材1点が出土した。B1はウシの脛骨を鋸で切断した痕跡がみられる。B2・B3は櫛払いである。完形のB2は全長137mm、厚さはブラシ部が3mm、柄尻部が4.5mmを測る。ブラシは頭部先端部にも付けられていた痕跡がある。B3は頭部のブラシ部のみの残存だが、B2よりも大型である。B2は近代の攪乱中、B3は外堀第II層出土であることから、B2が近代の可能性があるが、B3は19世紀代と推察される。図示した以外に富岡先生による鑑定の結果、加工痕のある骨が明らかとなっているが、詳細は他の動物遺存体の鑑定結果と合わせて、附編2を参照されたい。



第61図 木製品① (1/4)



第62図 木製品② (1/6)



第63図 木製品③ (1/6)

第5章 平成8(1996)年度の調査概要

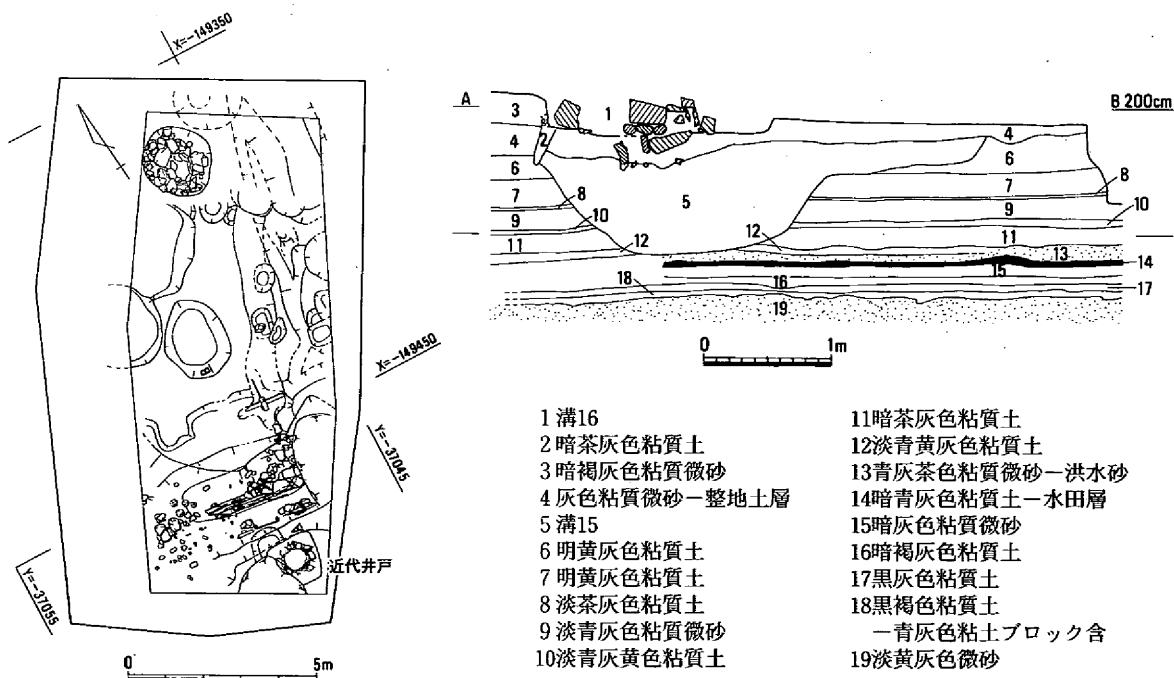
第1節 遺構

1. 調査の概要

国道2号(及び30号)十日市から大雲寺交差点までの共同溝工事はシールド工法により地中で施工されたため、豊坑が掘削される大雲寺交差点のみを発掘調査した。調査対象地は、大雲寺交差点の南東隅に位置し、現行の車道端から緑地帯にかかる地点にあたる。調査に際しては、工事による迂回の歩道や大型車両の通行に考慮して、掘り下げの法面を充分に確保したため、下層遺構の検出などは非常に狭い範囲にとどまることとなった。発掘調査は、調査区全体の造成土や瓦礫など1m強におよぶ表土を重機で除去した後、排土処理などの関係から調査区を南北に二分して実施した。

当調査区では、調査区南部の造成土直下に暗褐色粘質微砂(第3層)があり、江戸時代後半(幕末)の井戸・土壤・水路状遺構などが検出される。なお、調査区北部では、岡山空襲による瓦礫の穴も同時に検出された。また、南隅で検出された内径約60cm深さ3mを越える石組みの井戸は、裏込めに1錢硬貨があり昭和初期のものであることが明らかとなった。これらの遺構と近世前半期の溝・土壤などは、整地土層(第4層)により分離されるが、均一でなく時期の不明瞭な遺構もみられる。

その下1m程は、中世水田層を中心とした堆積(第6~11層)で、その下海拔80cm程において弥生時代後期末の洪水砂(第13層)に覆われた水田層(第14層)が、調査区全域において確認された。

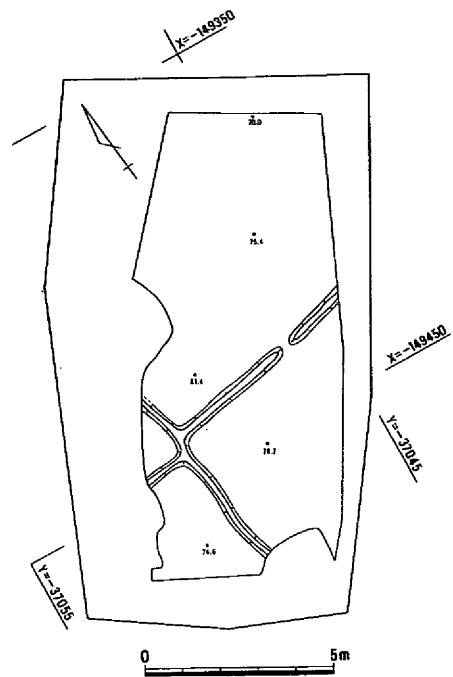


第64図 検出遺構と土層断面位置 (1/200) 及び調査区土層断面 (1/60)

2. 弥生時代の遺構

水田(第65図、図版4) 現在の道路面から2.5m程下の海抜80cm前後において畦畔を伴う水田面が検出された。畦畔は、幅30cm・高さ5cm程で断面が蒲鉾形を呈し、東西方向のものと南北方向のものがある。双方の畦畔は、調査区の中央やや南西寄りにおいてほぼ直角に交差しているが、東西方向のものは南北方向の畦畔を境に少しずれている。なお、東西方向の畦畔は、交点から約3.5m東で幅20cm程途切れしており、いわゆる「水口」が設けられている。検出された水田面の高さは、東側が若干下がっているが、畦畔の両側には差がないことから後世の堆積土の影響と考えられ、ほぼ同レベルであったと推定される。

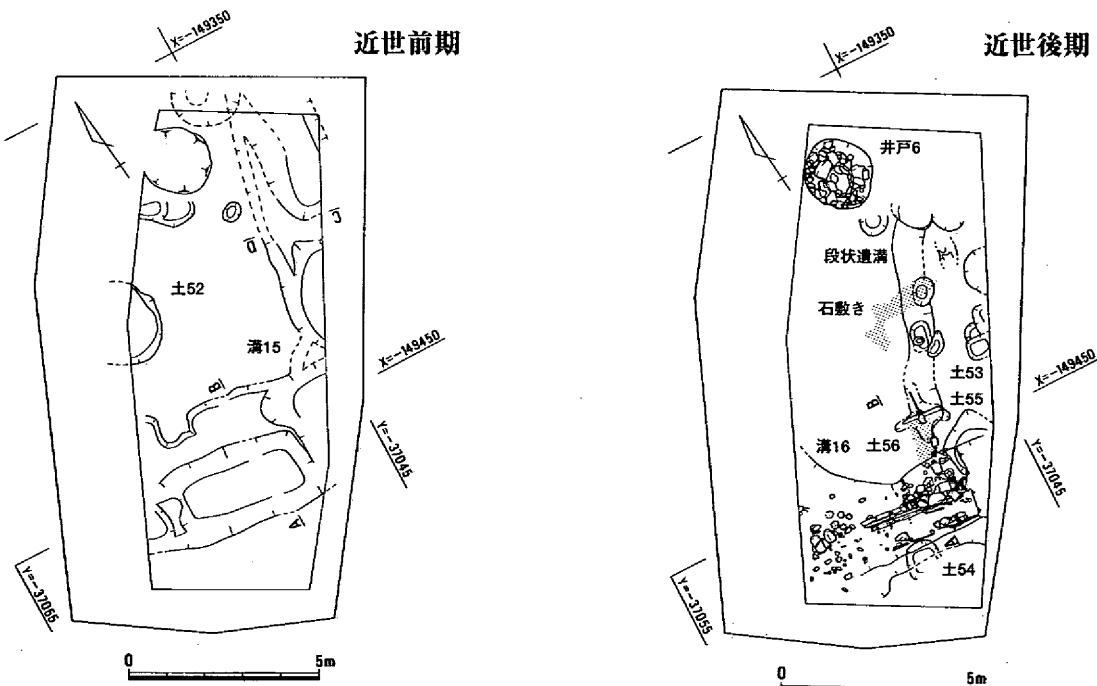
水田層は全面厚さ10数cmの洪水砂で覆われている。この洪水砂と水田層に挟まれて土器の細片が出土したことから、弥生後期末頃の洪水で埋没した水田と考えられる。



第65図 弥生時代遺構配置 (1/200)

3. 近世の遺構

井戸6(第67図、図版4) 調査区の北端部において検出された石組の井戸である。掘り方は、直径175cm前後のやや角張った円形を呈し、検出面からの深さは2m程を測る。底から60cm程は石が捨てて石状に落ち込んでいる。また、一番底には石を支えるものか、直径6cm前後の丸太材3本が差し渡されている。なお、この井戸の内径は検出面で70~78cm、底部近くで55~60cm程の規模で、やや方形を



第66図 近世遺構配置 (1/200)

志向した様相が窺える。深さは約140cmを測る。裏込めから備前焼の大皿が、埋土中から肥前系陶磁器の椀・備前焼の擂り鉢の細片が出土しており19世紀代まで機能したものと考えられる。

土壤52(第67図、図版4) 調査区中央の北西壁際において半分程が検出された遺構で、検出面においては、直径220cm程のやや歪んだ円形を呈し、深さは約140cmを測る。底面は少し凹凸が認められる。埋土中には、建築廃材を含む灰層などが堆積し、中層(第2~11層)はレンズ状に堆積している。ゴミ穴と考えられ、17世紀前半頃の備前焼・肥前陶器や瓦などが出土している。

土壤53(第67図) 調査区中央の南東壁際において検出された遺構で、検出面において一辺59cm程の方形を呈する柱穴状の土壤で、深さ56cmを測る。淡灰褐色粘質土の埋土中から備前焼・肥前系磁器などの陶磁器のほか、鍛冶滓・羽口や煙管の雁首などが出土地している。19世紀以降と考えられる。

土壤54(第67図) 調査区南部、溝16の肩口に検出された遺構で、南端部は昭和初期の井戸などで削平されている。検出面で一辺88cmの方形に近い平面形を呈するもので、深さ25cm程のごく浅い土壤である。陶磁器などの細片がみられるが、溝16埋没後の18世紀後半以降の時期が考えられる。

土壤55(第67図) 調査区南東部壁際において検出された遺構で、南部は後世に削平されている。検出面で径165cmの方形に近い平面形を呈し、深さ95cm程の底近くから直径90cm程の曲げ物が破損した状態で出土しており井戸が想定される。埋土からは、備前焼・肥前系などの陶磁器や櫛・漆椀などと共に獸骨片が多く出土している。時期は、検出状況などから18世紀後半以降と考えられる。

土壤56(第67図、図版4) 調査区中央より少し南において検出された遺構である。南北・東西方向とも長さ150cm前後・幅30cm程の規模で十字形に掘り下げ、その中に柱を据えていたとみられる遺構である。柱材は一辺10cm程の角材で、根本から20cm程のところから枘穴を穿っている。この穴に板材を通し、柱の沈みを防いでいたものと考えられる。なお、柱材は少し北側に傾いた状態で検出された。時期は、遺構の切り合いなどから19世紀以降と考えられる。

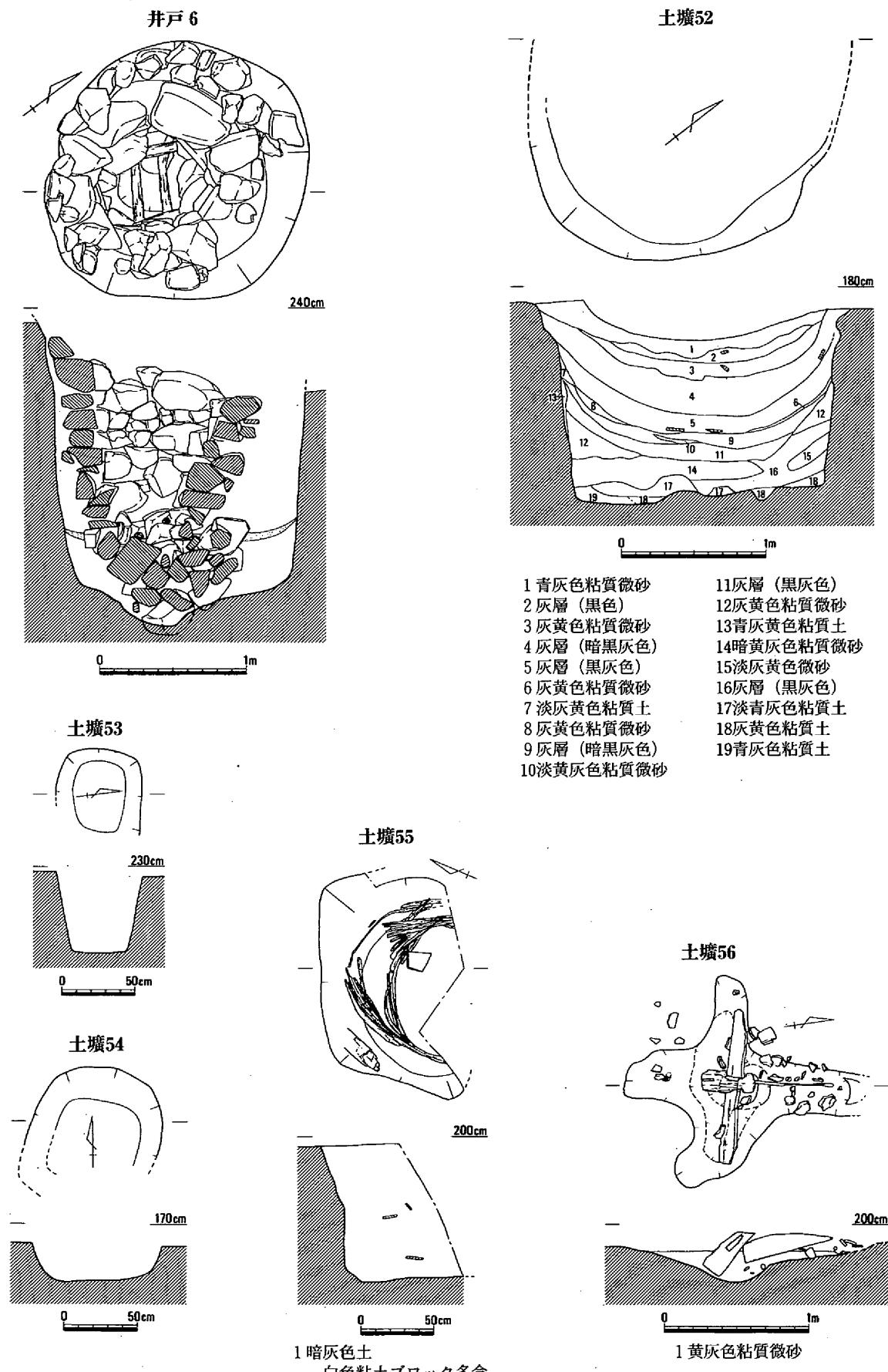
土壤57 調査区の北東部において検出された遺構で、北側は大きく後世の削平を受けており判然としないが、下部が少し広がった袋状を呈する土壤である。備前焼・肥前系などの陶磁器や瓦のほか、動物などを象った土製品が出土している。時期は出土遺物などから18世紀後半以降である。

溝15(第66・69図、図版4) 調査区南・東部において検出された溝状の遺構で、幅4m・深さ55~80cmを測る。埋土は粘質土や微砂・灰層がレンズ状に堆積し、下層(第17~21層)から17世紀初頭頃の備前焼・肥前系の陶器や明の染付けが、中層(第6~16層)から18世紀代にかけての瀬戸・美濃系や肥前系の陶器椀・肥前系磁器の染付けが、上層(第4層)から18世紀後半から19世紀代の備前焼・肥前系などの陶磁器が出土している。16世紀末頃から19世紀代まで機能していたとみられる。

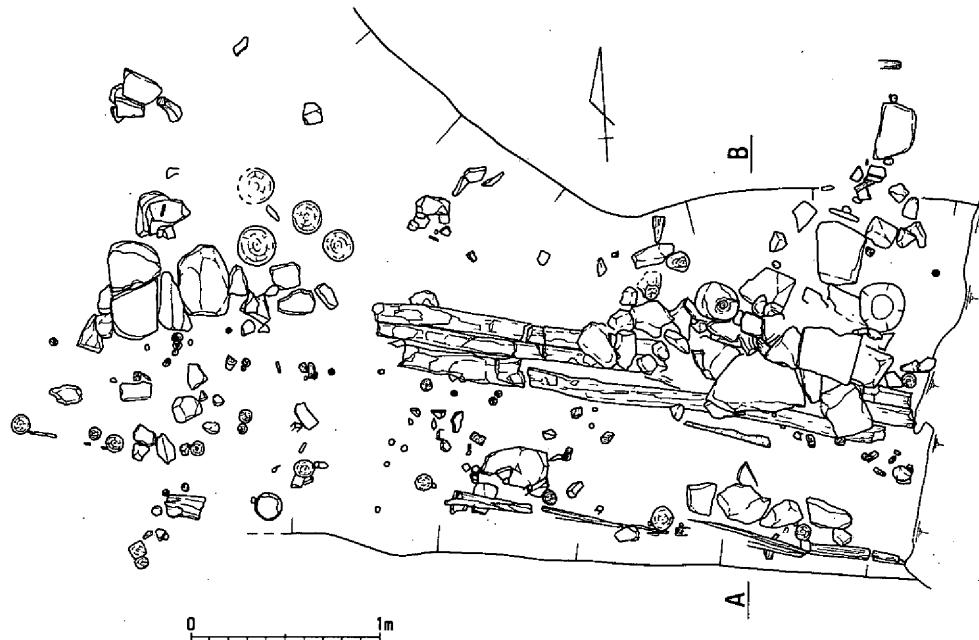
溝16(第66・68・69図、図版4) 調査区南・東部において溝15の埋没後に造られた遺構である。後世の杭などで崩されているが、北側は直径10cm前後の丸太材を3本敷き並べて根太にし、その上に石を積み上げている。南側は細い角材や枝材・竹を支え材に打ち込み、下部に割り竹を上部に板材を挟み込んで石垣と平行する面を造り水路としている。時期は、出土遺物などから19世紀以降と考えられる。

石敷き(第66図、図版4) 溝16の北側から土壤56を経て調査区の中央部まで、幅50cm程の規模に10cm程の礫を含む数cmの砂利石を敷き詰めた遺構である。後世の削平により遺存状態も悪く詳細は不明なもの、溝16との関連が推定される。

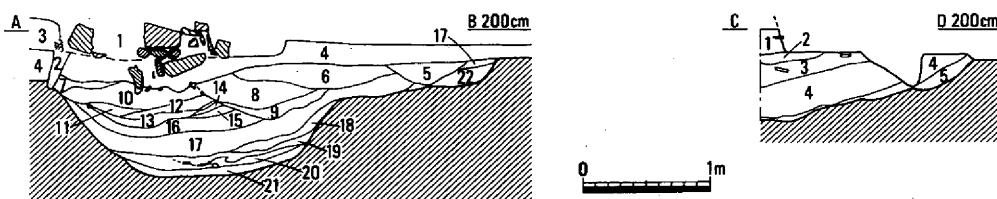
その他の遺構(第66図) 石敷きの東側は、20~35cm高く造成して段差が設けられている。この造成



第67図 井戸 6、土壤52~56平・断面 (1/40)



第68図 溝16平面 (1/40)



- | | | |
|-----------------|---------------|------------|
| 1 溝16 | 12 淡青黄灰色粘質土 | 1 暗黃灰色粘質微砂 |
| 2 暗茶灰色粘質土 | 13 灰層 | 一段状遺構盛り土 |
| 3 暗褐灰色粘質微砂 | 14 淡青黄灰色粘質土 | 2 淡灰黄色粘質微砂 |
| 4 灰色粘質微砂—整地土層 | 15 灰層 | 3 暗黃灰色粘質微砂 |
| 5 灰色粘質微砂+黃褐色粘質土 | 16 淡青灰色粘質土 | 4 淡灰黄色粘質微砂 |
| 6 淡青灰色粘質微砂 | 17 青灰色粘質微砂 | 5 淡灰色粘質微砂 |
| 7 暗灰色粘質土 | 18 灰層 (暗灰色) | |
| 8 暗黃灰色粘質微砂 | 19 灰層 (暗灰色) | |
| 9 灰層 (黒灰色) | 20 灰層 (暗灰色) | |
| 10 灰層 | 21 にぶい暗青灰色粘質土 | |
| 11 暗灰色微砂 | | |

第69図 溝15・16断面 (1/60)

第2節 遺 物

1. 中世以降の遺物

出土した遺物はコンテナ25箱で、土器・陶磁器類、瓦類、土製品、石製品、金属製品、木製品、鉄滓・動物遺存体がある。これらは、大半が溝15・16と近世の造成土から出土しており、遺物の帰属時期の一括性は認められない。土器の中には、近世遺構面以下の掘り下げ時に弥生土器、古墳時代前期の土師器が僅かに出土しているが、いずれも小片のため図示していない。したがって、以下では中世以降の遺物を種類別に図示し説明を加える。

土器・陶磁器類

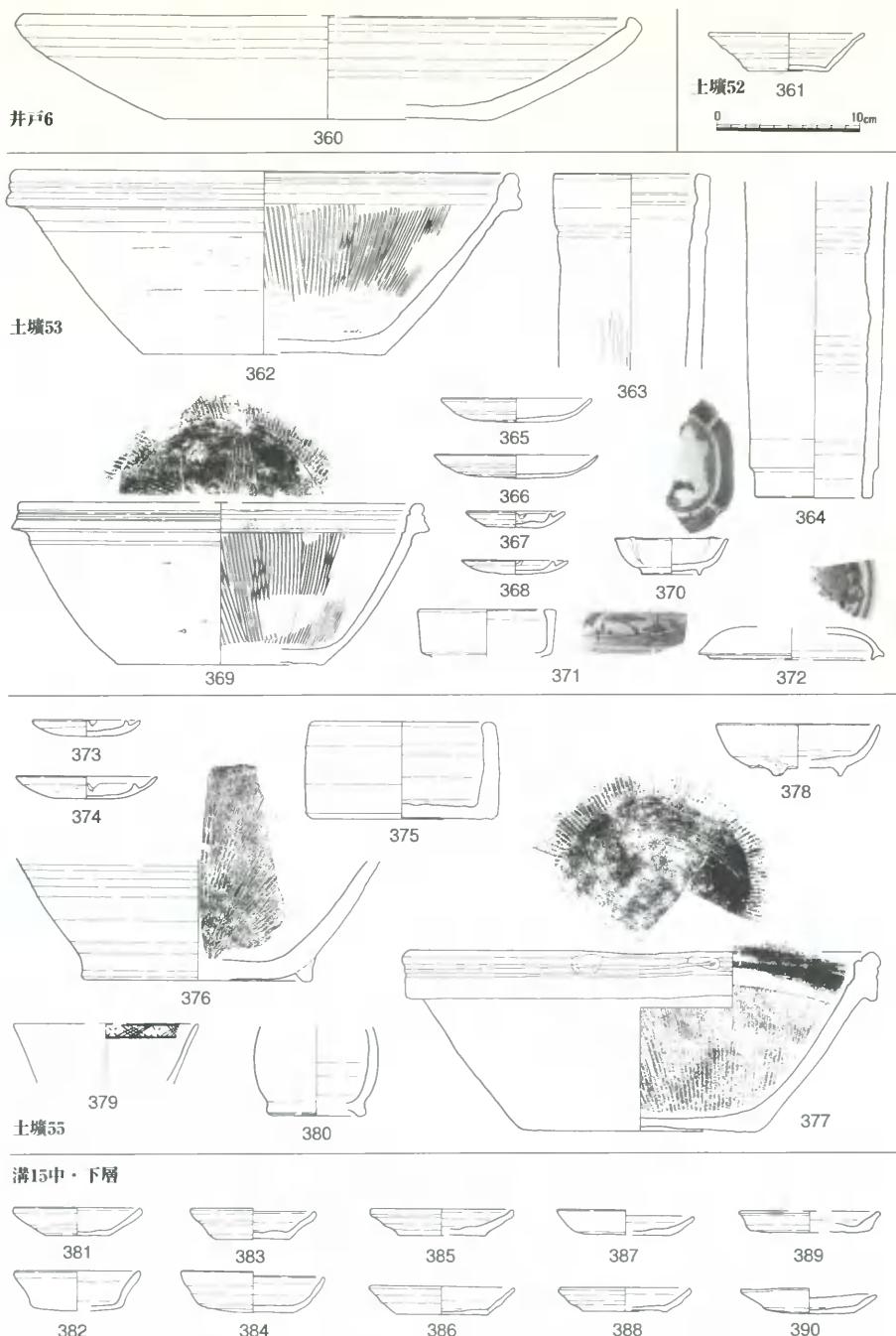
井戸2出土土器・陶磁器(第72図) 埋土中からは、17世紀前半の肥前陶器の叩き甕片と椀、肥前系染付磁器椀、備前焼の大皿と擂り鉢・壺、瀬戸・美濃系陶器片、18世紀後半から19世紀前半の関西系陶器の行平鍋片が出土した。石組みの裏込め土には土師器焰焰・さな、備前焼の擂り鉢・大皿360、肥前系陶磁器片がある。これら出土遺物から、井戸は18世紀頃から19世紀中頃まで使用されたと判断される。備前焼360は、口径約43cmに復元される大皿で全面ににぶい橙色の塗り土をする。

土壌52出土土器・陶磁器(第72図) 埋土中から、17世紀前半の土師器皿、中国製染付磁器皿、備前焼の壺・徳利、肥前陶器の皿が出土した。土師器361はにぶい橙色を呈する糸切りの皿で、口縁に煤が付着することから灯明皿として使用されたと考えられる。

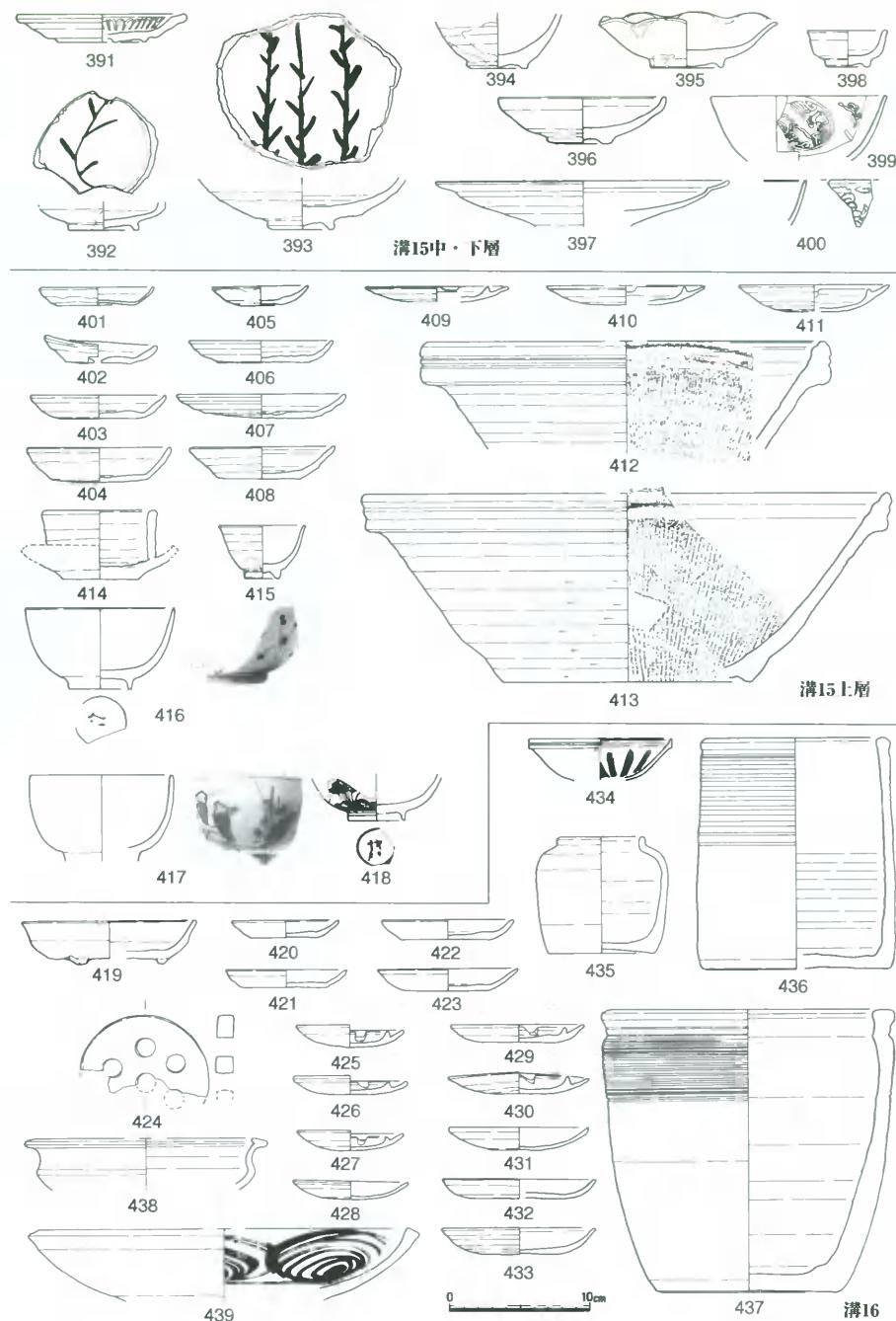
土壌53出土土器・陶磁器(第72図・図版8) 埋土中からは、土師器の小皿・鍋・火鉢、肥前系染付磁器の蓋・椀・油壺・段重、瀬戸・美濃系染付磁器の皿、備前焼の小皿・擂り鉢・甕・土管、堺・明石系擂り鉢、関西系陶器の壺・行平鍋・椀がある。これらは、18世紀後半から19世紀前半を中心とした時期が当てられる。図示した、363~368は備前焼、362・369は堺・明石系擂り鉢、370が瀬戸・美濃系染付磁器の型押しの手塙皿、371・372は肥前系染付磁器の段重と蓋である。土管363・364はにぶい赤褐色を呈し、口縁部内径約9cmを測る。類例が少なく時期は不明瞭だが、他の土器類とほぼ同時期と推察される。371は17世紀前葉から中葉に製作されており、他の陶磁器よりも古い。

土壌57出土土器・陶磁器(第72図) 出土遺物は比較的多量で、土師器の皿・鉢・鍋・椀、中国製染付磁器の皿、肥前系染付磁器の椀・徳利・蓋・仏飯器、肥前系青磁瓶、肥前系陶器皿、備前焼の擂り鉢・小皿・壺・甕・匣鉢、堺・明石系擂り鉢、関西系陶器碗がある。これらの遺物は、18世紀代を中心として19世紀前半までのものがみられる。373~376は備前焼、377は堺・明石系擂り鉢、378は土師器の脚付椀、379は肥前系青磁染付磁器の椀、380は肥前系青磁の瓶である。376の擂り鉢は貼り付け高台を持つ。377は痕跡程度の注ぎ口がみられる。

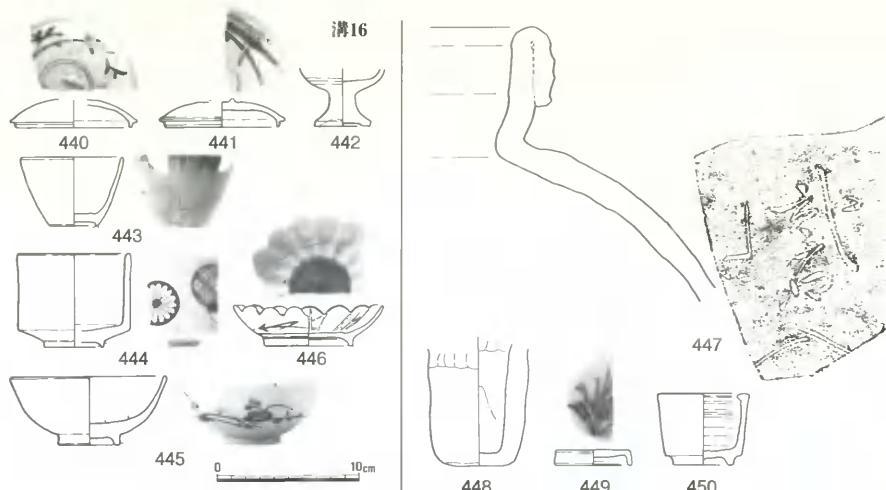
溝15出土土器・陶磁器(第72・73図) 出土遺物は、上・中・下層で分層して取り上げを行った。下層は16世紀末から17世紀初頭を中心に、中層では17~18世紀代を中心とした遺物群が出土するが、中・下層での接合率が高いことから中・下層を一括して扱う。中・下層からは、中国製染付磁器、肥前陶器、瀬戸・美濃系陶器、備前焼、肥前系染付磁器、土師器などがある。上層からは、19世紀前半までを主体とした土器類が出土し、土師器、備前焼、肥前系染付磁器がある。381~400は中・下層出土で、381~390は土師器小皿で、381・382・385・390は底部ナデ、384・386~389は底部糸切りである。384・386~388は灯明皿として使用されている。391は瀬戸・美濃系灰釉陶器皿、392・393は肥前鉄絵陶器皿で、393の底部には粉殻目が残る。394~398も肥前陶器で394は椀、395~397は皿、398は灰釉の小杯、399は中国製白磁碗で内面に馬と飛雲文が陰刻している。400は中国製染付磁器碗である。土師器以外は16世紀末から17世紀初頭の磁器が当てられることから、土師器も近い時期と考えられる。401~418は上層出土で、401~404・406~408は土師器の皿で、401が底部ナデでその他は糸切りで、402の底部穿孔は焼成前である。口縁部の煤の付着は404にのみ看取される。405は関西系灰釉陶器皿で、見込みにピン痕が残る。409~413は18世紀代の備前焼で、409~411は皿で丁寧な塗り土を施す。擂り鉢412・413のうち413には底部に削り出し高台が付き、体部外面の1/2ほどのところまでケズリを施す。414は18世紀代の肥前系陶器と考えられる鉄釉灯明台で、415は17世紀中葉の肥前白磁小杯である。416~418は肥前系染付磁器碗で、416・418は18世紀前半、417は17世紀後半の時期が



第70図 井戸6、土壤52・53・55、溝15出土の土器・陶磁器 (1/4)



第71図 溝15・16出土の土器・陶磁器 (1/4)



第72図 溝16、包含層出土の陶磁器（1/4）

溝16出土土器・陶磁器(第73・74図) 出土遺物は多量で、埋土中を中心として石垣の下面からも出土した。肥前陶器、備前焼、肥前系染付磁器、瀬戸・美濃系陶磁器、関西系陶器、土師器などがあるが、18世紀後半から19世紀前半を主体に、近世全般に渡るもののが混在している。419～424は土師器で、419が脚付きの皿、420～423は糸切り底の皿で、421・423は口縁に煤が付着する。424はさなである。425～437は備前焼で、425～433は灯明皿、434は口径10.2cmの挿り鉢、435は壺、436・437は甕である。438は18世紀代の福岡産と考えられる鉄釉香炉、439は18世紀後半から19世紀前半の瀬戸・美濃系陶器の馬の目文皿である。440～446は肥前系磁器で、440・441は18世紀後半の染め付け蓋、442は18世紀代の白磁仏飯器、443は18世紀中葉の染め付け猪口でコンニャク印判による雨降り文がみられる。444は18世紀後半の染め付け椀、446は18世紀後半の型押し染め付け皿、445は18世紀後半の波佐見系の椀で見込みに蛇の目釉剥ぎを施す。肥前系磁器の染め付け蓋449と青磁香炉450も溝16から出土したが、両者とも17世紀後半の時期が当たられ、溝よりも古い。

その他の土器・陶器(第74図) 447は16世紀後半の備前焼大甕片で、肩部に「式石入」の線刻と窯印が看取できる。448は土師器の17世紀代の焼き塙壺で、調査区からは1点のみ出土した。

瓦類(第75図、図版9・10)

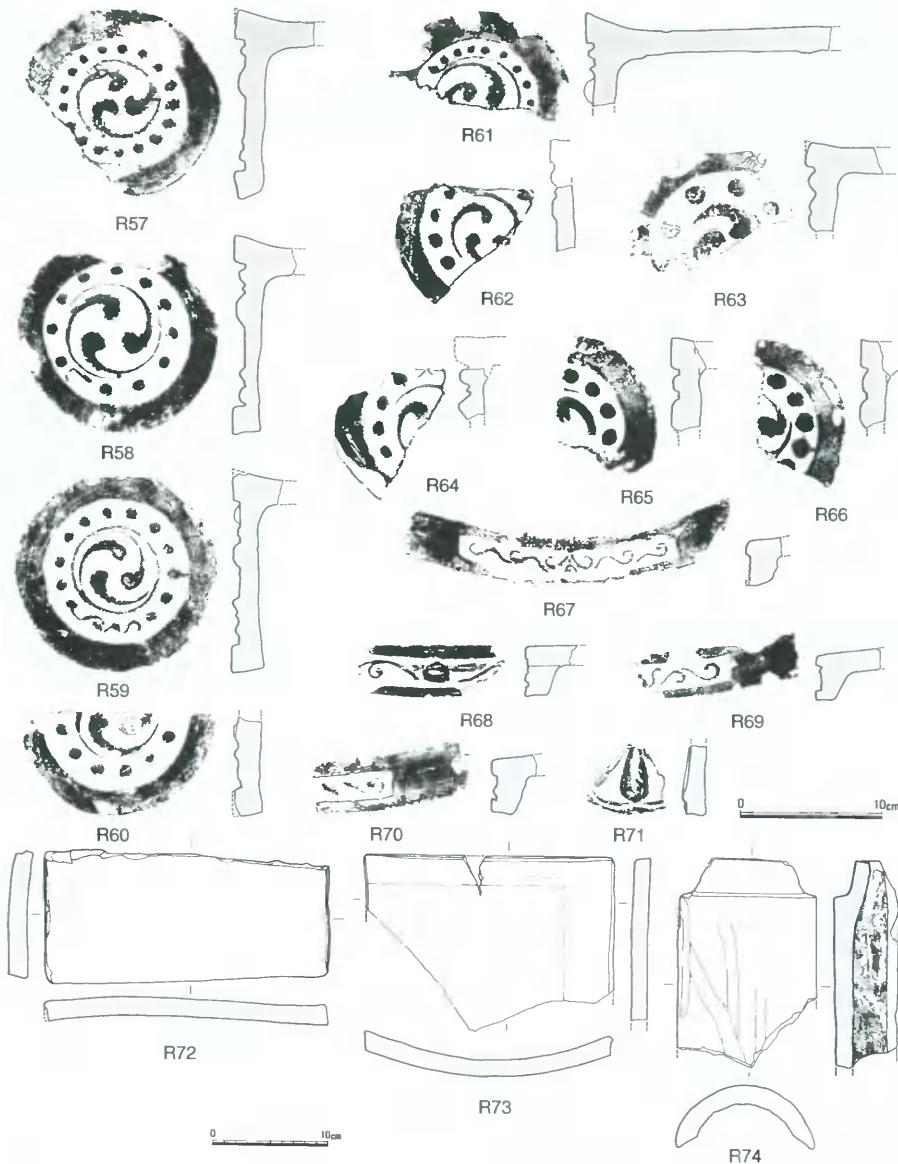
軒丸瓦(R 57～R 66) 小片を含めて50点が出土した。全形の分かるものは溝16か溝15の検出中に出土しており、其伴遺物から製作時期を推定することは困難であった。瓦当文様は左巻きの三つ巴文が主体で、少数だが右巻きの三つ巴文を持つものR 65がある。R 58は珠文の間に部に鈎状文、R 59は珠文を結ぶように唐草文がみられる。

軒平瓦(R 67～R 70) 15点が出土したが、軒丸瓦同様に製作時期については明らかでない。瓦当文様は均整唐草文で、中心飾りは分かるもの(R 67・R 68)は宝珠である。唐草はR 67が上方向に三転する以外は、上下に転回する。

道具瓦(R 71・R 72) R 71は溝15の中層から出土した瓦で、蓮華文を持ち、復元径約11cmを測る。一見すると古代の軒丸瓦にみえるが、胎土は精良で焼成も他の近世瓦と同様に瓦質であることから近

世と判断した。R72は平瓦を半裁した熨斗瓦で、切断面に表裏から鑿状の工具を用いて切断した痕跡が残る。

九・平瓦(R73・R74) 調査区全域から多量に出土しているが、全形の知れるものはない。平瓦R73は四面に使用時の重なり痕跡と考えられる色調変化が残る。R74は玉縁式で、棟瓦が僅かに出土しているものの大半がこの形式である。



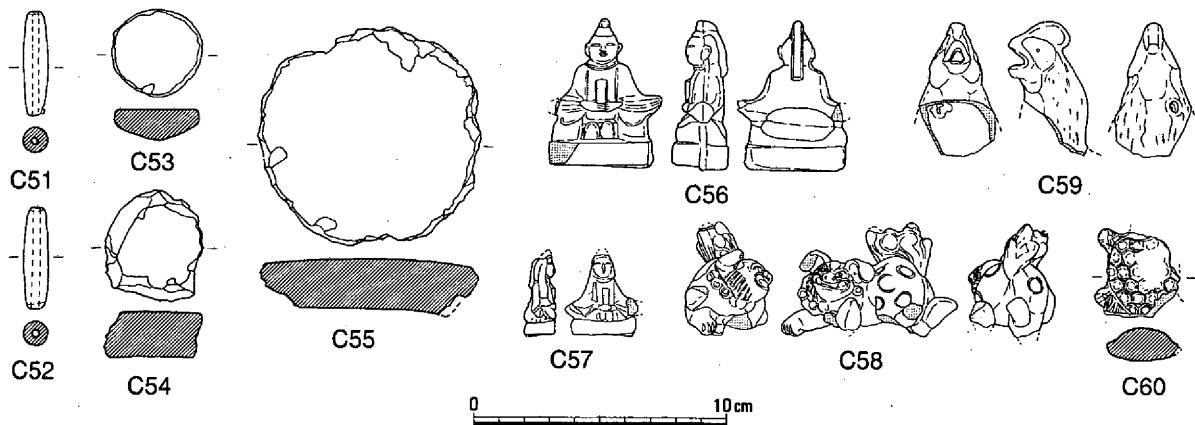
第73図 瓦 (1/4、R72～R74は1/5)

土製品(第76図、図版10・11)

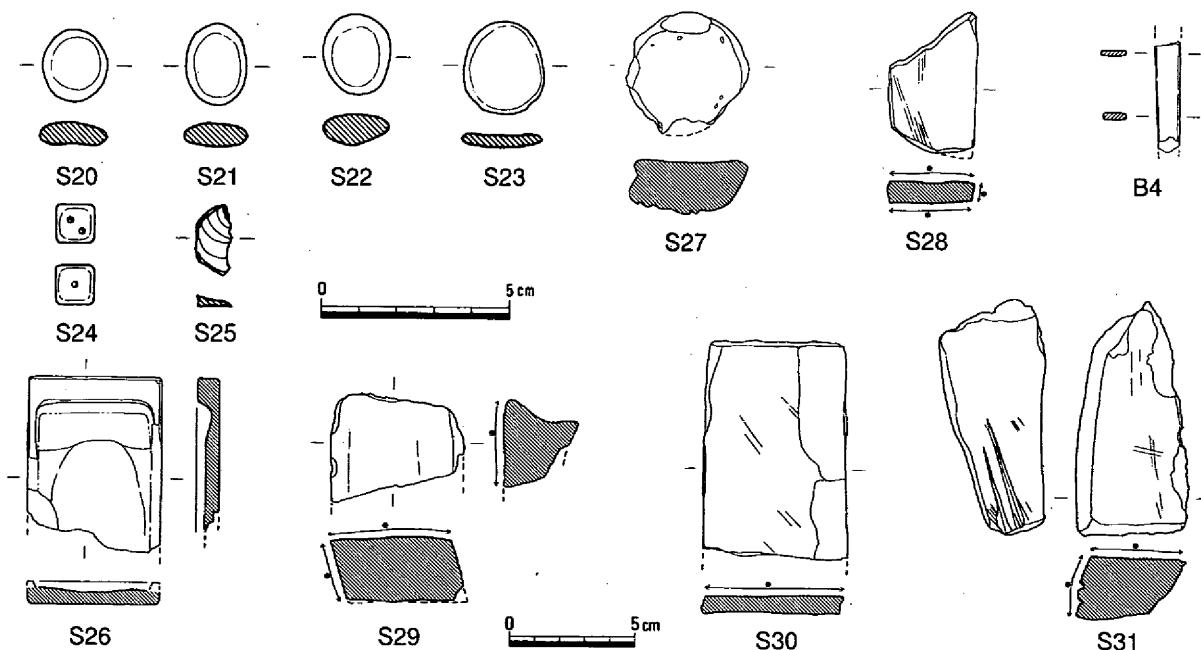
錘4点、円盤4点、像7点があり、いずれも近世以降のものである。C51・C52は溝15中層出土の管状土錘、C53～C55は平瓦を転用して作られた円盤で、C53は側面を研磨しているがC54・C55は打ち欠いたままである。重量はそれぞれC53が12.3g、C54が30.6g、C55が148.4gである。C56・C57は合わせ型製作の天神像で、C56が素焼きで底部に径14mm、深さ30mmの円孔があり、C57は陶質で橙色の彩色がされる。C58は陶質の獅子像で、手捻りで作られており全面に薄く黄色の彩色を施す。C59は白磁の鶏像で、鶏冠など部分的に赤彩している。頸部に焼成前の穿孔がみられる。C60は素焼きの亀像である。

石製品(第77図、図版13)

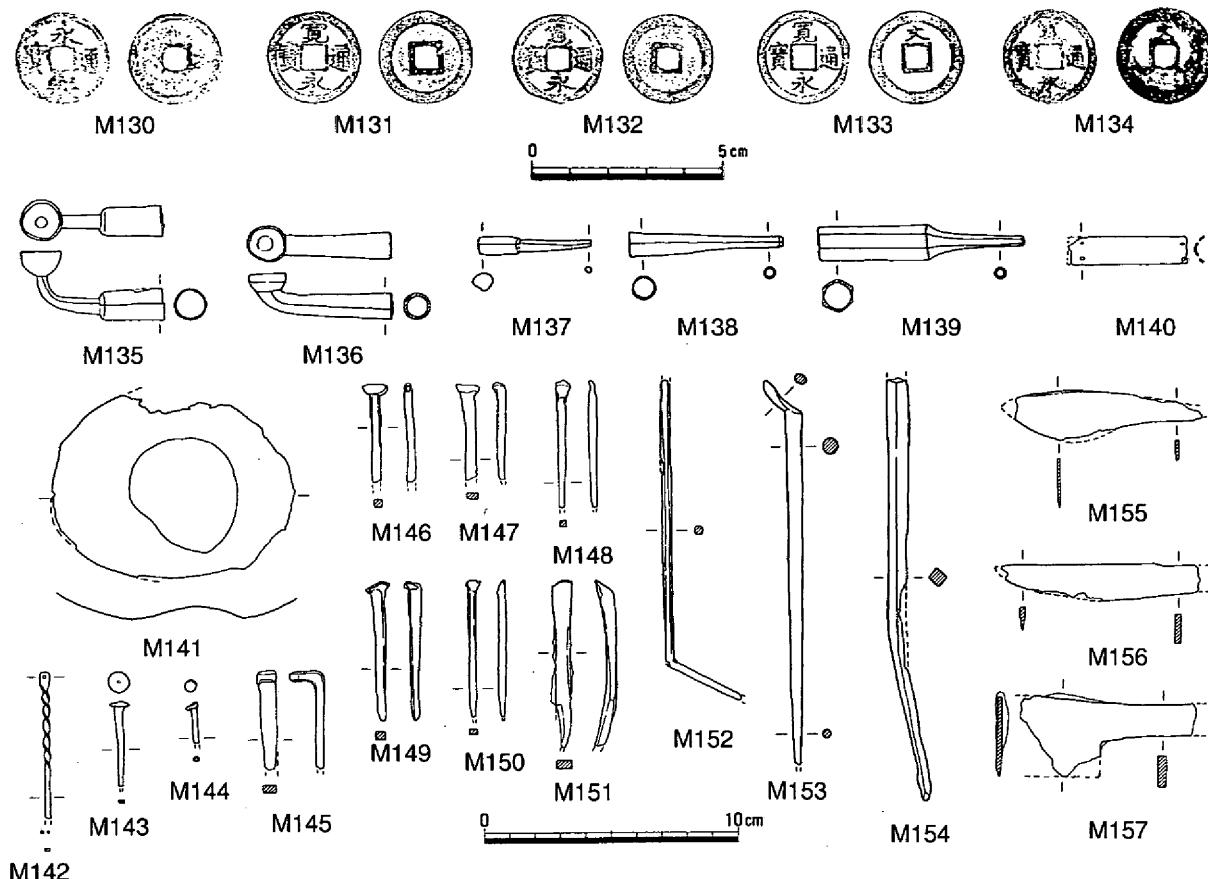
硯1点、賽子1点、碁石4点、砥石7点、火打ち石片、加工石等がある。S20～S23は黒の碁石、S24は長石製と考えられる賽子で目の部分には赤色顔料が詰められている。S25は青色系のチャート片で火打ち石の破片である。S26は粘板岩製の硯、S27は軽石を円形に加工した重さ約8.5gの加工



第74図 土製品 (1/3)



第75図 石製品 (S20～S25は1/2、その他は1/3)、骨製品 (1/3)



第76図 金属製品 (M130~M134は1/2、その他は1/3)

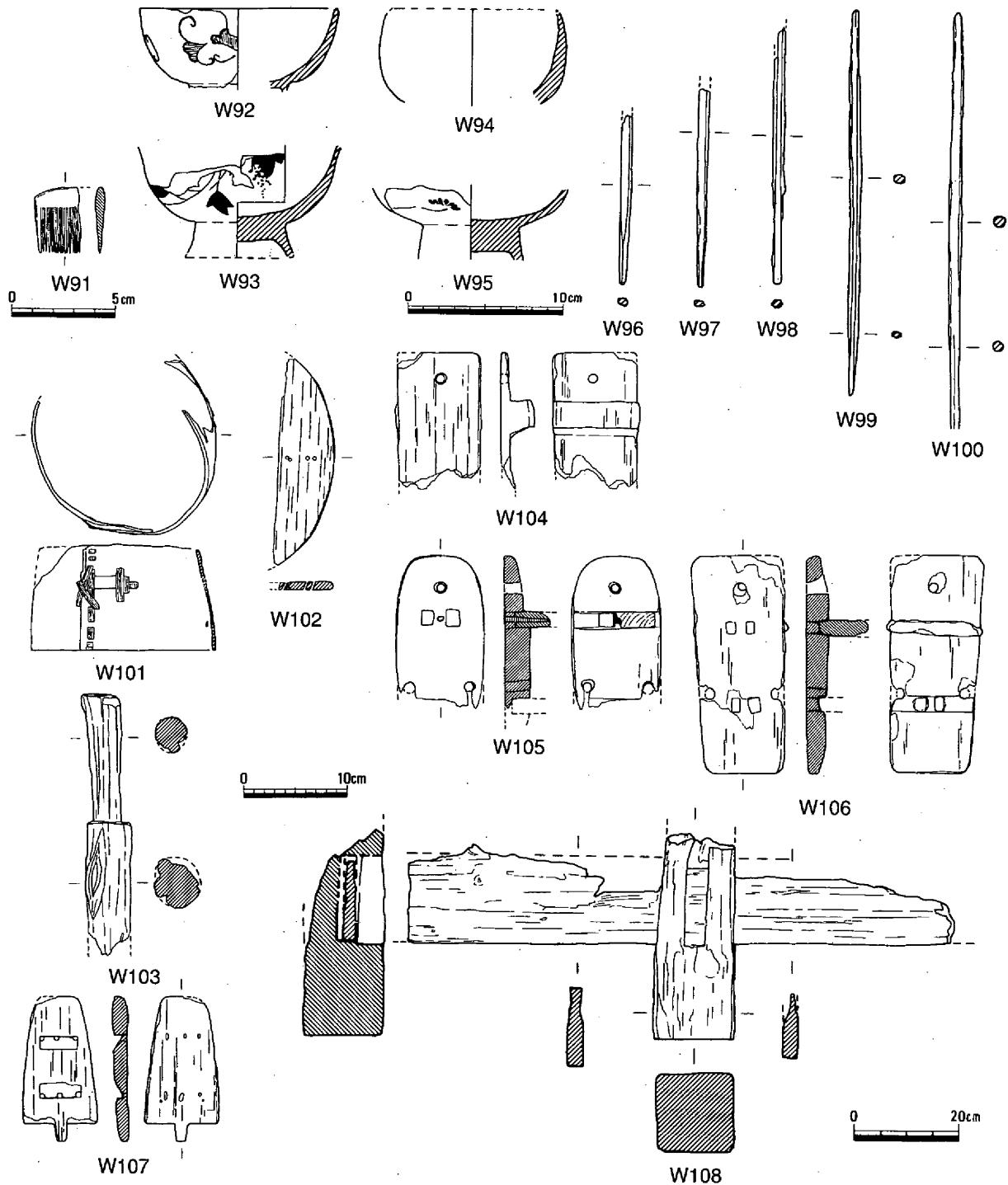
石で用途は不明である。S28~S31は砥石で、S28は頁岩製、S29・S30は流紋岩製、S31はホルンフェルス製である。これらは近世を中心として一部明治に入るものもあると推察されるが、S20・S24は溝15下層出土で17世紀初頭頃、S23・S27・S30は溝15中層出土で17~18世紀頃と判断できる。

金属製品(第78図、図版14・15)

銅製品としては、銭10点、煙管(雁首・吸い口)9点、柄杓1点がある。鉄製品としては刀子・包丁4点、釘97点と真鎧製品片1点がある。これらの金属製品は他と同様に詳細な帰属時期は不明である。M130~M134は銅銭で永楽通宝はM130の1点のみ、寛永通宝のうち古寛永はM131・M132のほかに1点あり、文銭はM133・M134の2点のみである。M135・M136は煙管雁首で他に火皿側面に穿孔のある古い型式のものがある。M137~M139は煙管吸口である。M140は銅製の金具で凸部表面に漆が塗布されている。M141は銅製の厚さ約0.2mmの皿状のもので形状から柄杓と考えられる。M142は真鎧製の棒状製品で上部に径1mmの穿孔がある。M143・M144は鉄釘で、M145~M154は鉄釘、M155~M157は包丁である。鉄釘の形状はまちまちで、頭部形態も折り曲げたもの(M146・M147・M149・M150)・打ち出したもの(M145)や明瞭な頭部を作出しないもの(M148・M151)もある。

鍛冶関連遺物

図化していないが、溝15・16を中心に調査区全体から20kgを越える量の大鍛冶滓、小鍛冶滓、ガラス質滓、鉄塊系遺物などが出土し、また、鞴の羽口も出土している。これら遺物の時期は、溝15下層から溝16まで近世全般にわたる遺構・層位から出土しているため詳細は不明だが、17世紀初頭には小鍛冶を中心とした作業が行われていたことは確実である。



第77図 木製品 (W91は1/2、W92~W100は1/4、W101~W107は1/6、W108は1/12)
木製品 (第79図、図版17)

溝15・16から出土した櫛(W91) 1点、漆塗り椀7点、蓋2点、箸(W96~W100) 5点、曲げ物(W101) 1点、下駄4点、木打ち(W103) 1点のほか柄や板材がある。W92~W95は漆椀で内面朱漆、外面黒漆塗りに朱漆で絵付けをする。下駄はW104のみが連歯式で他は差歎式である。W105は前歙を鉄釘で補強している。W107は明瞭な使用痕もなく不明品である。W108は土壌56出土の建築材である。

骨製品・動物遺存体(第77図)

骨製品はB 4の簪片と思われる加工品1点が出土したのみである。動物遺存体は魚介類を主体に破片で218点が出土した。詳細は富岡先生の鑑定を受け、附編2に玉稿を掲載している。

第6章 まとめ

1. 遺構の変遷

3年度にわたる調査は、天瀬遺跡の北部に東西に幅約4mの長大なトレント調査を実施した形となつた。このため、調査区内で検出した遺構の相互関係や広がりは必ずしも明確にできたとはいえない。ここでは、遺物の出土状況や土層の堆積状況から明らかとなった主要遺構について時期別にまとめる。

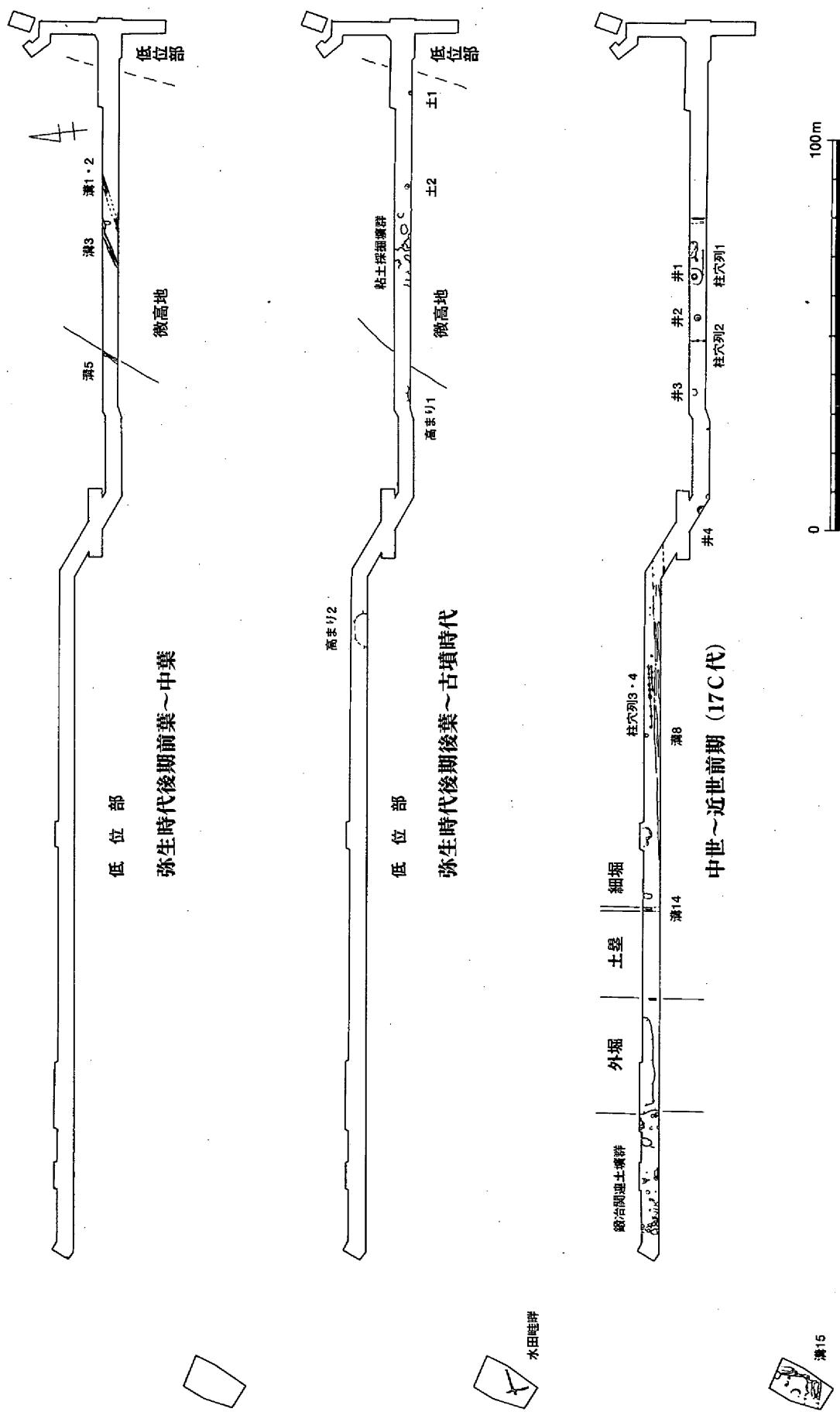
弥生時代後期前葉～中葉(第78図) 溝1～3・5と土壙3がある。溝1・2は同一の溝と判断され、流路方向から溝1と溝3は該期の近い時期に機能していた可能性が高く、溝5はこれらより更に新しい時期に掘削されたと判断される。調査区土層断面の観察から、溝5が微高地裾を廻る溝と判断でき、これより以西は低位部で以東が微高地部になる。さらに、平成4年度調査区の東側の工事区の立会調査でも低位部の状況が確認されていることから、微高地部の東西幅は、調査区の中で80m前後であると推察される。また、微高地部の特に東部で該期の土器が多量に出土していることから、本調査区が微高地北端部にあたると判断できる。

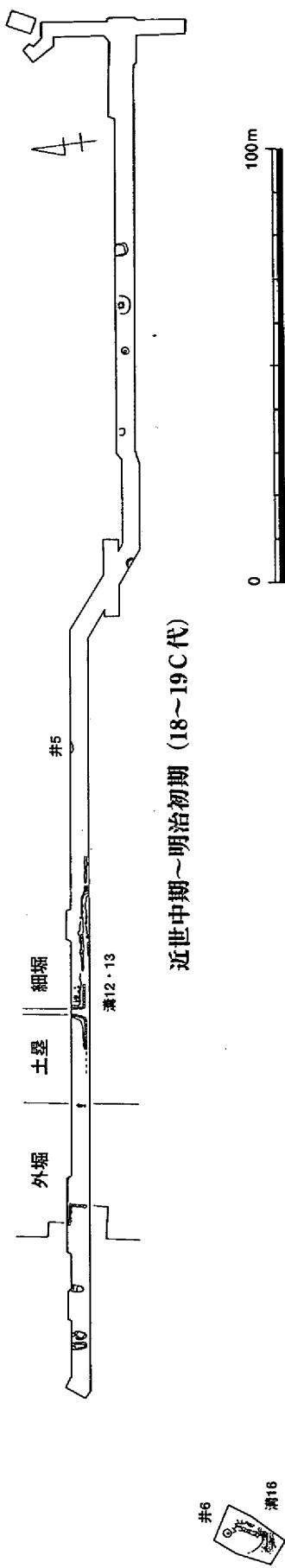
弥生時代後期後葉～古墳時代(第78図) 弥生時代後期後葉には微高地上に土壙2・4・5と粘土採掘壙群がある。粘土採掘壙群は掘削方法に異なる状況がみられ、すべてを該期に含めたが出土土器から推測して、中葉まで遡るものも含まれるかも知れない。粘土採掘壙が埋没後の後期末頃に溝4が掘削されているが機能は不明である。西側低位部では、砂で埋没した水田層に伴う高まり2基と畦畔を確認している。旭川東岸域の百間川遺跡群では後期末の洪水砂が著名だが、本調査区で検出した砂層がこれと同時期かどうかは、西岸域の調査例が希少なため断定はできない。古墳時代の遺構には、前期の土壙1があるのみで、遺物も調査区全体でみても後期の須恵器片が数点みられるのみである。

中世～近世前期(第78図) 古代から鎌倉時代の遺構・遺物は皆無で、室町時代でも前半の遺物は数点あるのみで、室町時代後半以降が主体である。柱穴列1・2は室町時代後半と考えられ、井戸1～4は近世全般にわたって機能していたと推察される。柱穴列3・4は溝8に伴うと思われ、素掘りの溝8は出土遺物から、天正19(1591)年の宇喜多秀家による城下町経営以降に掘削されたと考えられる。外堀が慶長6(1601)年に小早川秀秋により掘削されており、溝14が後世の細堀の位置に当たることから、溝14も外堀と同時期の掘削年代が当てられよう。外堀の古段階は17世紀中葉を主体とし、252の仏飯器のみが17世紀中葉から末頃の製作年代が当てられる。埋土から洪水の影響を受けていることが明らかとなっているが、該期に城下町に被害を与えた洪水としては、承応2(1653)年が著名である⁽¹⁾。しかし、これ以降も数回にわたって被害を受けていることは延宝8(1680)年の城下町絵図(巻頭図版2)から明らかで、このことが改修の理由と推察される。外堀西側の旧大雲寺境内には土壙群があり、17世紀初頭頃の大雲寺造営に伴う鍛冶関連の土壙と判断できる。

近世中期～明治時代初期(第79図) 18～19世紀中葉の時期が当てられ、井戸1～6が該期に機能し、明治頃には埋められている。外堀は17世紀末頃に改修されてから明治8(1875)年の埋め立てまで機能している⁽²⁾が、検出した西岸の石垣は、文政13(1830)年の絵図に前年に石垣を築いた記載があることから、19世紀になってからのものと判断できる。石組みの溝12・13のうち溝13は細堀、柱穴列5・

第78図 遺構変遷① (1/1,500)





6が番屋として絵図に記述されているが、溝12の記載は歴年の絵図にみられないため性格は明確にできない。外堀西側の土壙24・31・32はもともとは大雲寺の境内にあったものが、町屋として境内を分割する際に18世紀後半頃に掘り返されたと考えられる。また、平成8年度調査区の溝15の埋没後の遺構は、大半が幕末頃に機能していたと推察され、溝16も明治時代に入っても機能している。

2. 鍛冶関連遺構・遺物について

外堀とその西側を中心に鍛冶関連遺構・遺物が検出された。17世紀前葉という時期と検出された位置から、大雲寺の造営に関わるものと推察される。ここでは、これらについて簡単にまとめたい。第32図に示したように鍛冶関連と判断される土壙は土壙24・25・31・32・51以外の34基が所在する。土壙は切り合いを持ちながら存在し、東群(土壙13~22)と西群(土壙26・28~50)に大別され、その中間に土壙23・27が位置する。形状は円形や楕円形のものが主体で、溝状を呈するもの(土壙33・46)もある。いずれの土壙も壁面に被熱痕は認められない。近世の遺構面が検出面よりも数十cm高かったことが推測されることから、土壙群は下部構造のみが検出されたと考えられる。このことは、岡山城二の丸跡で検出されている同時期の鍛冶土壙の下部構造の状況からも明らかといえる⁽³⁾。土壙からの出土遺物を下の一覧表に示した⁽⁴⁾。鍛錬鍛冶滓が主体だが精錬滓もみられる。さらに、鍛造剥片や粒状滓があることから小鍛冶が行われたことがわかる。砂鉄が含まれる土壙があるが、埋土を水洗選別しても含まれないものがあることから、意図的に入れられたと考えられる。また、第60図と図版16に示したような、比較的長さの揃った鉄釘片などが出土している。

以上、土壙と出土遺物の概要を述べてきた。明確な被熱痕は認められないが、検出状況から土壙群は鍛冶炉等の下部構造と推測した。出

鍛冶関連遺物出土状況一覧

遺構名	鉄製品等	焼形滓 (点)	鍛造剥片	粒状滓	砂鉄 片(点)	羽口 炉壁片 (点)	炭の大きさ (mm)	備考
土壙14						1		
土壙16	○	5				1 ○		
土壙17	○	13	○ ○	○ △	2	×		
土壙19	○	5	○		1	○		
土壙20	◎	14				2 ○	20×10	
土壙21	○	×	○			×	○	
土壙22	◎					1	○	
土壙23	○	×	○ ○	○	◎	×	×	
土壙27内	14	○	×	○ ○ ○ ○	1	○	22×28	
土壙27底層		○	×	○ ○ ○ ○	○	×	27×26	
土壙28		○	×	○ 1 ○ ○ ○	○	×	10×6	
土壙29		○	×	○ ○ ○ ○	○	×	×	
土壙30内	9	○	×	○ ○ ○ ○	◎ 1	×		
土壙30外	(内鉄塊系4)	○	×	○ ○ ○ ○	◎	×		
土壙36	8(内鉄塊系2)	○	×	○ ○ ○ ○	○	×	○	
土壙37		×	×	×	△	×	×	
土壙40		○	×	○	×	○	×	
土壙43		○	×			×	×	
土壙45	5	○	×	○ ○	○	×	10×15	

凡例：1. ○○△×は相対的な出土量を示す。

2. 空欄はサンプリングをしていないため不明であることを示す

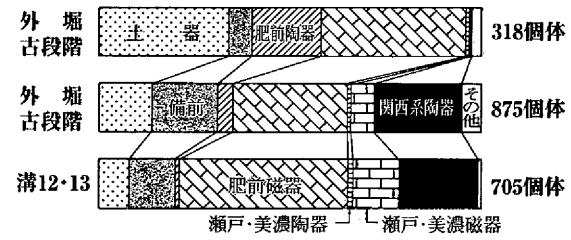
土鉄滓の種類と量から精錬から小鍛冶までの作業が行われていたことは確実である。同様の状況が窺える消費遺跡には、広島県草戸千軒町遺跡(15世紀前半)⁽⁵⁾で精錬から小鍛冶までの作業が確認されているほかに、江戸遺跡でも精錬が確認されている地点がある⁽⁶⁾。また、土壌出土の鉄器は、岡山城二の丸跡で金属学的調査がなされている⁽⁷⁾が、製品ではなく廃鉄器の再加工の材料と考えられる。近年、中世の原料鉄は、規格化された鋼素材と銑鉄が商品として広域に流通していることが明らかになりつつある⁽⁸⁾。本遺跡では、近世初頭の消費地における鍛冶の一例がみられたと共に、鉄素材の形状・流通を考えるうえでの貴重な資料が得られたといえる。

3. 近世の土器・陶磁器について

今回の調査では、溝や外堀を中心に、中世末から明治初頭にかけての土器・陶磁器が多量に出土した。その中でも比較的時期幅を限定できる資料について第80図に組成表を示し、岡山城下町での土器・陶磁器の変遷をみていく⁽⁹⁾。なお比較資料として使用した遺構の時期は、外堀古段階は17世紀後半を主体に17世紀末まで、外堀新段階は第Ⅱ層のみを用い、幕末から明治8(1875)年の埋め立て年代を下限とする19世紀中葉である。溝12・13は19世紀代を中心とする時期があてられ、一部大正期の混入がみられるが、明らかに新しいものは削除している。外堀古段階は、高率な順に肥前系磁器(38%)、土器(34%)、肥前陶器(18%)、備前焼(6%)、中国製磁器(3%)、瀬戸・美濃系陶器(0.6%)、丹波焼(0.4%)である。土器の比率が高いが、119点中98点(82%)が皿類で、備前焼の皿が皆無なのに対して注目され、廃棄された地区が旧大雲寺境内に位置することに起因すると思われる。

外堀新段階では、肥前系磁器(30%)、関西系陶器(23%)、備前焼(17%)、土器(14%)、瀬戸・美濃系磁器(6%)、肥前系陶器(4%)と1%前後の比率で関西系磁器、瀬戸・美濃系陶器、中国製磁器と萩焼がみられる。溝12・13では、肥前系磁器(44%)、関西系陶器(22%)、備前焼(12%)、瀬戸・美濃系磁器(12%)、土器(8%)、瀬戸・美濃系陶器(1.6%)と1%未満で肥前系陶器、中国製磁器、関西系磁器がある。外堀古段階から比べると肥前系磁器の比率が下がり関西系陶器が高率になる。これは、器種的には肥前系磁器の碗類と土器の鍋が関西系陶器主体に変わっているためといえる。次に外堀新段階と溝12・13を比較すると、同時期にもかかわらず肥前系磁器と瀬戸・美濃系陶磁器が両者ともに溝12・13の方が高率を占め、差異が認められる。このことは、外堀新段階が郭外の職人町の組成を強く反映しているのに対して、溝12・13が郭内の商人町の組成を示しているためと考えられる。つまり19世紀代においては、肥前系陶磁器や関西系陶器と比較して、瀬戸・美濃系陶磁器がまだ流通量が少なく高価であったと推察される。同時期の他の消費地での状況をみても、江戸遺跡では瀬戸・美濃系磁器が30%を占める⁽¹⁰⁾のに対して、広島県三原城では2.5%を占めており⁽¹¹⁾、関西では低率な状況が伺える。

以上、組成表を中心に土器・陶磁器の出土状況をみてきたが、17世紀代の状況は各地で明らかにされつつあり、岡山でも備前焼が比較的高率だが、他地域同様に肥前陶磁器が高率を示している。しかし、19世紀代については県内を含めて調査例が少なく、比較が難しいのが現状といえるが、概ね肥前陶磁器の比率が下がり、関西系陶器と瀬戸・美濃系磁器が比率を伸ばす状況が窺えた。



第80図 土器陶磁器組成

註

- (1) 川津正右衛門『岡山城史』 山陽新聞社 1978
 (2) 岡山市史編集委員会『岡山市史 政治編』岡山市役所 1964
 (3) 河本清 編『岡山城二の丸跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書78』岡山県教育委員会 1991
 (4) 大澤正己・鈴木瑞穂による肉眼同定の結果を参考に、同定後の整理作業で確認した遺物も加えている。そのため、作成した表についての責は杉山にある。
 (5) 福島政文『草戸千軒町遺跡における鉄関連遺構と遺物』『季刊考古学 第57号』雄山閣 1996
 (6) 金属文化研究会『出土関連遺物の組織解析結果の検討(その1)』『たたら研究 第39号』たたら研究会 1999
 (7) 大澤正己『岡山城二の丸遺構出土鍛冶関連遺物の金属学的調査』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書78』岡山県教育委員会 1991
 (8) 赤沢秀夫ほか「出土遺物からみた中世の原料鉄とその流通」『製鉄史論文集』たたら研究会 2000
 (9) 組成表は未掲載の資料も含めて、最大個体数で比較している。個体数の計算は、各器種とも口縁部と底部を数え、多い方の数値を個体数としている。ただし、染め付けなど個体認定が容易な物については、両者を加えて個体数としている。
 また、陶磁器の産地同定は一部鑑定を依頼したが、大半は杉山が胎土・色調等から同定作業を行った。
 (10) 成瀬晃司他「消費地遺跡における陶磁器の基本的操作と分析」『医学部付属病院地点』東京大学遺跡調査室 1990
 (11) 竹政寿幸「三原城」『広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第156集』財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 1997

井戸・土壙一覧表

掲載遺構名	調査時遺構名	規模(cm)					掘り方規模(cm)					備考
		平面形	上部径	底径	深さ	底面海拔高	平面形	上部径	底径	深さ	底面海拔高	
井戸1	98年1区井戸1	円	内法75×71	径80	335	-173	円	407×(296)				石組井戸、底に桶
井戸2	98年2区井戸2	円	径60	42×42	227	-67	円	167×148	124×124	227	-67	桶組井戸
井戸3	98年3区土壙13	隅丸方	151×(124)	65×	198	-28						素掘り井戸
井戸4	98年4区井戸3	円	95×(27)				円?	210×(74)				石組井戸
井戸5	98年6区井戸4	円					円?	(284)×(59)	(168)×(27)			石組井戸?
井戸6	96年井戸2	円	78×70				円	177×176	126×124	210	20	
土壙1	92年16区土壙	円	87×78	55×48	47	81						
土壙2	92年4区土壙	隅丸方	88×(67)	37×(22)	76	43						
土壙3	98年1区土壙6	長楕円	(158)×86	(144)×65	16	74						
土壙4	98年1区土壙5	隅丸方	120×(130)	(114)×101	46	70						
土壙5	98年1区土壙4	楕円	240×183	180×85	95	16						粘土探掘痕
土壙6	98年1区土壙1	方	250×(250)	217×(208)	63	116						瓦詰め
土壙7	98年1区土壙2	不整方	423×(157)	285×(119)	44	137						
土壙8	98年4区土壙15				30	113						
土壙9	98年5区土壙16	円(桶)		径50	17	132	円	54×(39)			16	130 桶組
土壙10	98年6区土壙18	円	73×66	58×64	94	55						
土壙11	98年7区土壙21	不整	458×(172)	430×(143)	58	114						
土壙12	98年8区土壙22	隅丸方	202×140	90×(135)	52	119						
土壙13	98年9区土壙43	楕円	67×37	27×	7	178						
土壙14	98年9区土壙44	楕円	66×38	29×14	11	176						
土壙15	98年9区土壙45	楕円	78×(33)	58×(20)	10	179						
土壙16	98年9区土壙46	不整	147×125	107×34	17	170						
土壙17	98年9区土壙47	不整方	(98)×88	(69)×47	28	159						
土壙18	98年9区土壙49	不整円	87×(60)	54×(37)	28	159						
土壙19	98年9区土壙38	円(壺)		径35	16	160	楕円	80×69	65×52	20	158	
土壙20	98年9区土壙40	楕円	100×71	76×53	19	158						
土壙21	98年9区土壙39	不整楕円	112×97	44×43	41	142						
土壙22	98年10区鍛冶土壙	楕円	(270)×184	171×(210)	27	156						
土壙23	98年10区土壙24	長楕円	230×81	46×40	61	122						
土壙24	98年10区墓1	楕円	(293)×153	(254)×127	57	123						
土壙25	98年10区土壙23	楕円	(130)×120	(102)×64	51	146						
土壙26	98年10区土壙57	円	32×(19)	14×9	48	149						
土壙27	98年10区土壙28	楕円	56×29	42×22	16	179	楕円	(83)×(57)	44×32	23	172	
土壙28	98年10区土壙26	楕円	79×46	65×39	4	189						
土壙29	98年10区土壙29	隅丸方	47×30	44×26	6	187						
土壙30	98年10区土壙25	円	63×	40×	28	167	円	89×(82)	79×75	37	158	
土壙31	98年10区墓2	楕円	(280)×188	185×146	105	89						
土壙32	98年10区墓3	楕円	337×153	234×83	110	84						
土壙33	98年10区土壙58	長楕円	(137)×90	(134)×60	8	183						
土壙34	98年10区土壙55	隅丸方	(36)×(15)	31×(12)	31	162						
土壙35	98年10区土壙42	円	径24	16×14	6	187						
土壙36	98年10区土壙27	円	47×45	39×34	6	187						
土壙37	98年10区土壙53	不整	136×(108)	78×45	48	145						
土壙38	98年10区土壙41	不整円	104×(72)	63×(23)	62	129						
土壙39	98年10区土壙54	隅丸方	(25)×24	(21)×19	4	190						
土壙40	98年10区土壙50	楕円	50×(30)	41×(26)	4	190						
土壙41	98年10区土壙52	方	(35)×(92)	(85)×(31)	11	179						
土壙42	98年10区土壙56	円	34×30	15×	36	154						
土壙43	98年10区土壙33	隅丸方	89×(84)	(83)×83	14	181	隅丸方	93×(88)	93×(73)	33	163	
土壙44	98年10区土壙30	方	(58)×(20)	45×(15)	6	186						
土壙45	98年10区土壙31	不整楕円	125×72	29×22	62	132						
土壙46	98年10区土壙51	長楕円	(99)×(19)	(96)×(15)	6	190						
土壙47	98年10区土壙32	不整	85×78	64×49	24	154						
土壙48	98年10区土壙34	隅丸方	(55)×(20)		15	183	隅丸方	81×(74)	37×29	43	155	
土壙49	98年10区土壙36	不整	163×(42)	131×(42)	17	183						
土壙50	98年10区土壙37	方	100×	(31)×	49	126						
土壙51	98年10区土壙35	方	130×103		48	127						
土壙52	96年土壙2	円	220×(151)	170×(140)	140	30						
土壙53	96年土壙7	方	59×(61)	48×35	56	171						
土壙54	96年土壙5	方	88×(70)	57×(36)	26	131						
土壙55	96年土壙4	方	165×(104)	114×(69)	95	100						
土壙56	不整	(167)×147		21	160							
土壙57	96年土壙6	隅丸方	100×	100×	100	104						

附編1 天瀬遺跡出土粘土採掘場粘土の分析

岡山理科大学自然科学研究所

白石 純

分析目的

同遺跡では、弥生時代後期後葉の粘土採掘場が検出された。そこで、この分析では粘土採掘場の粘土と採掘場内から出土した土器の胎土が同じかどうか胎土分析を実施し、比較検討した。また、津島遺跡の土壤⁽¹⁾で粘土塊と共に出土した土器も併せて分析し、天瀬遺跡との差異について調べることを目的とした。

分析の方法は、エネルギー分散型X線分析装置（セイコーインスツルメンツ株式会社卓上型蛍光X線分析計 SEA2010L）を使用して、分析資料は粘土および土器を粉末にしたものを作成し、コイン状にプレス加工し測定資料とした。

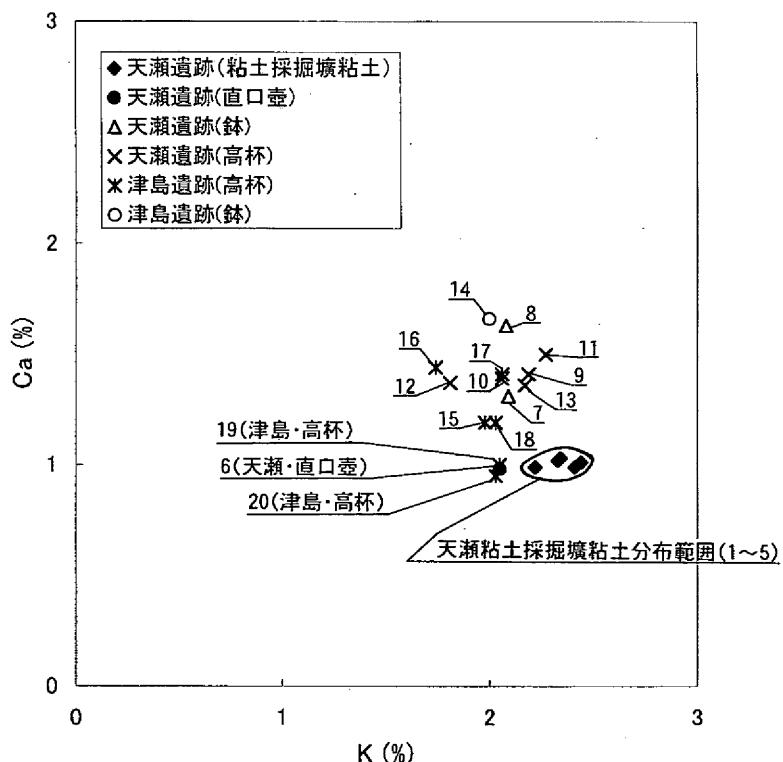
分析した資料は第1表に掲載した20点で、詳細は天瀬遺跡粘土採掘場粘土5点、天瀬遺跡出土土器8点（壺・鉢・高杯）、津島遺跡出土土器7点（鉢・高杯）である。

分析結果

Ca、K、Rb、Srの元素に差があることからこれら元素を使用しXY散布図を作成し、差異について検討した。

第1図K-Ca散布図、第2図Rb-Sr散布図より、天瀬遺跡の粘土採掘場の粘土は同遺跡台付直口壺（6）と胎土的にはほぼ同じ値となった。また、津島遺跡の高杯（19・20）なども近い分布をなしている。その他では天瀬遺跡の高杯、鉢がほぼ一つにまとまっている。その他では天瀬遺跡の高杯、鉢がほぼ一つにまとまっている。

以上のように、天瀬遺跡粘土採掘場の粘土は、遺跡出土の台付直口壺がもっとも類似した分析結果となった。また天瀬遺跡の高杯や鉢もほぼ一つにまとめられ、分析的には粘土と比べて、Ca量やSr量が若干多く含まれているが、今回分析した粘土は1つの粘土塊（20×20cm）からサンプル場所を



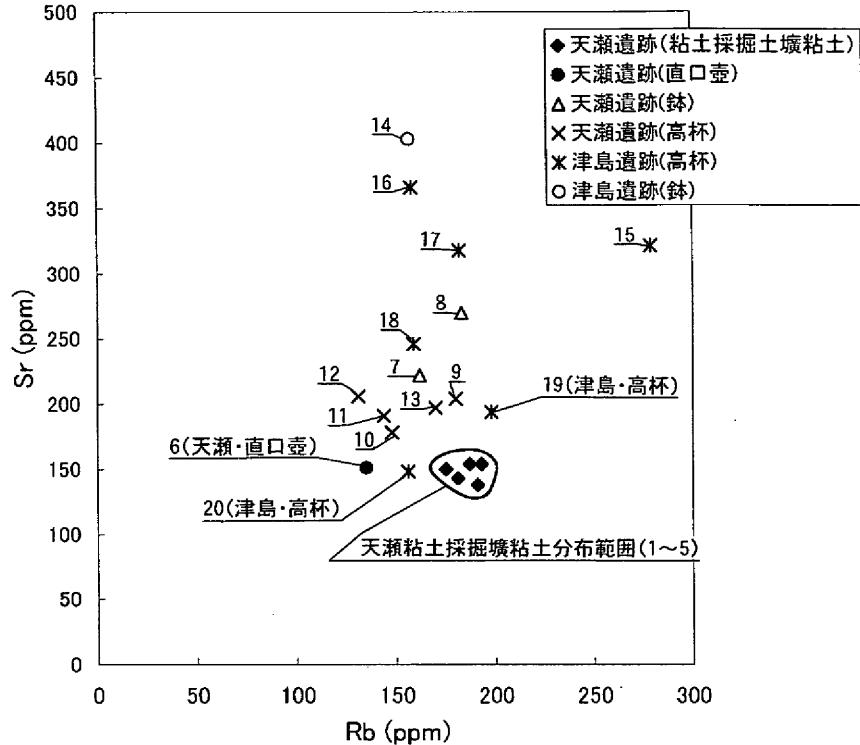
第1図 天瀬遺跡出土粘土と土器の比較①

変えて5ヶ所サンプリングしたものを分析試料としたものであるが、第1・2図のように同一の粘土塊でもばらつきがみられ、分布範囲に広がりがみられる。このため粘土採掘場の粘土を分析するには採掘構全体から粘土を採取し（最低でも30ヶ所から採取する）比較する必要がある。このため、今回の高杯や鉢と分析値が若干異なった原因はこれに起因すると考えられ、高杯や鉢にもこの粘土を使用して焼成されていることが推測される。

この分析機会を与えていただいた岡山県古代吉備文化財センターの職員の方々にはいろいろお世話をになった。記して感謝いたします。

第1表 胎土分析試料一覧表 (%) ただし、Rb,Sr,Zrはppm

番号	遺跡名	遺構	器種	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr
1	天瀬遺跡	1区粘土採掘場	粘土	64.94	1.05	19.15	6.02	0.07	1.97	1.03	3.12	2.34	0.15	181	143	242
2	天瀬遺跡	1区粘土採掘場	粘土	59.99	1.02	18.50	11.67	0.10	1.82	0.99	3.34	2.22	0.23	187	154	222
3	天瀬遺跡	1区粘土採掘場	粘土	64.50	1.06	19.26	7.02	0.07	1.87	1.01	2.46	2.44	0.10	191	138	256
4	天瀬遺跡	1区粘土採掘場	粘土	65.44	1.04	19.00	5.64	0.06	1.83	0.99	3.28	2.41	0.15	175	150	235
5	天瀬遺跡	1区粘土採掘場	粘土	63.00	0.99	18.80	9.16	0.09	1.87	1.02	2.39	2.33	0.16	193	154	226
6	天瀬遺跡	1区土壤4	台付直口壺	63.01	1.12	19.26	8.16	0.10	2.03	0.98	2.72	2.05	0.40	135	151	276
7	天瀬遺跡	1区土壤4	鉢・口縁部	62.53	1.09	18.81	7.81	0.17	1.79	1.31	2.67	2.09	1.48	162	222	260
8	天瀬遺跡	1区土壤4	台付鉢	59.38	0.95	17.24	11.80	0.24	1.76	1.63	2.89	2.08	1.74	183	270	271
9	天瀬遺跡	1区包含層(粘土採掘場)	高坏・口縁部	60.95	1.07	18.48	9.42	0.12	2.01	1.41	2.87	2.19	1.25	180	204	270
10	天瀬遺跡	1区包含層(粘土採掘場)	高坏・口縁部	60.37	1.14	19.20	9.82	0.17	1.81	1.39	2.68	2.06	1.19	148	178	282
11	天瀬遺跡	1区包含層(粘土採掘場)	高坏・脚部	65.50	0.89	17.82	5.97	0.07	1.80	1.50	3.09	2.27	0.90	144	191	265
12	天瀬遺跡	1区包含層(粘土採掘場)	高坏・脚部	58.47	1.10	19.43	10.11	0.16	1.82	1.37	3.41	1.81	2.18	131	206	277
13	天瀬遺跡	1区包含層(粘土採掘場)	高坏・脚部	60.67	0.99	18.44	9.36	0.15	1.86	1.36	3.19	2.17	1.56	170	197	254
14	津島遺跡	土壤8	鉢・口縁部	61.59	0.98	17.56	7.75	0.07	1.68	1.66	2.62	2.00	3.78	157	403	256
15	津島遺跡	土壤8	高坏・口縁部	55.26	0.92	20.90	12.03	0.08	1.75	1.19	2.31	1.98	3.26	279	322	373
16	津島遺跡	土壤8	高坏・口縁部	59.91	0.74	19.83	7.98	0.08	1.74	1.44	2.88	1.74	3.32	158	366	285
17	津島遺跡	土壤8	高坏・口縁部	63.73	0.86	17.40	7.04	0.07	1.66	1.41	3.12	2.06	2.35	182	318	234
18	津島遺跡	土壤8	高坏・口縁部	60.45	1.02	18.51	10.10	0.10	1.88	1.19	2.66	2.03	1.87	159	246	237
19	津島遺跡	土壤8	高坏・坏部	60.93	0.97	18.82	10.16	0.09	1.94	1.00	2.75	2.05	1.07	198	194	235
20	津島遺跡	土壤8	高坏・脚部	61.35	1.00	18.99	10.02	0.09	1.84	0.95	2.79	2.03	0.76	156	148	250



第2図 天瀬遺跡出土粘土と土器の比較②

註

(1) 杉山一雄「津島遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』145 岡山県教育委員会 1999

附編2 天瀬遺跡出土の動物遺存体の分析

—岡山県岡山市の近世遺跡出土動物遺存体資料の調査—

岡山理科大学理学部

富岡 直人

第1節 出土状況

岡山県岡山市天瀬遺跡は、岡山平野を南北に流れる旭川の形成した沖積低地に所在する近世・近代遺跡である。1996・98年度に岡山県古代吉備文化財センターによって調査・発掘され堀、溝、土壙、井戸が検出され、それに伴って江戸時代前～後期に属する動物遺存体が出土した。本報告は、この資料群(304件、96年度218点、98年度602点)について実施した鑑定・分析などの結果を記すものである。

多くの資料は低湿地性の埋存環境に影響され茶褐色に変化し、一部はビビアナイト(藍鉄銅(Vivianite: $\text{Fe}_3\text{P}_2\text{O}_8 \cdot 8\text{H}_2\text{O}$))を析出し、脆弱化している。

第2節 出土動物遺存体の特徴

検出された動物遺存体のうち綱目科属種の分類名が明らかになったものについて、標準和名と学名を第1表に掲げる。

送付された資料の「番号」は件数に従って付されており、1件中に複数個体が含まれた場合は「補助番号」1、2を付して整理し、注記を行った。データ集計整理の便宜のために種別ソーティングを行い、「整理番号」を付したが、本報告の記載は遺物に注記が実施された「番号」で示した。文章中では96年度資料番号20の資料の表記は「96-20」とした。出土資料の属性は、属性表に示す。これらのうち残存状況が良好なものを写真撮影し、図版に示した。

以下に、主な出土資料について、生物分類の階級「門、綱、目、科」に従って記載を行う。

第1表 天瀬遺跡出土動物遺存体種名表 List of the animal remains from Amase site

腔腸動物門	Coelenterata	スズメガイ科	Hipponicidae
花虫綱	Anthozoa	キクスズメガイ	<i>Sabia conica</i> (Schumacher)
ウスチャキクメイシ	<i>Favia pallida</i>	斧足綱	Pelecypoda
軟体動物門	Mollusca	マルスダレガイ科	Veneridae
腹足綱	Gastropoda	ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i> (Rödding)
アキガイ科	Muricidae	ウチムラサキガイ	<i>Saxidomus purpuratus</i> (Sowerby)
アカニシ	<i>Rapana venosa</i> (Valenciennes)	シジミガイ科	Corbiculidae
イトマキボラ	<i>Pleuroloca trapezium</i> (Linnaeus)	ヤマトシジミ	<i>Corbicula japonica Prime</i>
ミミガイ科	Haliotidae gen. et sp. indet.	フネガイ科	Arcidae
リュウテンサザエ科	Turbinidae	アカガイ	<i>Scapharca broughtonii</i> (Schrenck)
サザエ	<i>Batillus cornutus</i> (Lightfoot)	ハイガイ	<i>Tegillarca granosa</i> (Linnaeus)

附編2 天瀬遺跡出土の動物遺存体の分析

サトウガイ	<i>Scapharca satowi</i> Dunker	ヒラメ	<i>Paralichthys olivaceus</i>
トマヤガイ科	Carditidae		(Temminck et Schlegel)
トマヤガイ	<i>Cardita leana</i> Dunker	両生綱	<i>Amphibia</i>
イタボガキ科	Ostreidae	無尾目(カエル目)	<i>Anura fam. indet.</i>
イタヤガイ科	Pectinidae	爬虫綱	<i>Reptilia</i>
イタヤガイ	<i>Pecten albicans</i> (Schroter)	カメ目	<i>Testudinata</i>
節足動物門	Arthropoda	スッポン科	<i>Trionychidae</i>
甲殻綱	Crustacea	スッポン	<i>Trionyx sinensis japonica</i>
完胸目	Thoracica	ウミガメ科	<i>Cheloniidae gen. indet.</i>
フジツボ科	Balanidae gen. et sp. indet.	鳥 綱	<i>Aves</i>
短尾亜目(カニ亜目)	Brachyura	キジ目	<i>Galliformes</i>
イシガニ	<i>Charybdis japonica</i>	キジ科	<i>Phasianidae</i>
脊椎動物門	Vertebrata	キジ属	<i>Phasianidus sp. indet.</i>
軟骨魚綱	Chondrichthyes	ニワトリ	<i>Gallus gallus domesticus Brisson</i>
板鰓亜綱	Elasmobranchii	ガンカモ目	<i>Anseriformes</i>
エイ目	Rajiformes	ガンカモ科	<i>Anatidae</i>
硬骨魚綱	Osteichthyes	カモ類Aタイプ	wild ducks A type
ナマズ属	Siluriformes	カモ類Bタイプ	wild ducks B type
ナマズ科	Siluridae	マガン	<i>Anser albifrons</i> (Scopoli)
ナマズ	<i>Silurus asotus</i> Linnaeus	コウノトリ目	<i>Ciconiiformes</i>
スズキ目	Perciformes	サギ科	<i>Ardeidae</i>
スズキ科	Serranidae	アオサギ	<i>Ardea cinerea jouyi</i> Clark
スズキ	<i>Lateolabrax japonicus</i> (Curvier et Valenciennes)	哺乳綱	<i>Mammalia</i>
タイ科	Sparidae	ウシ目(偶蹄目)	<i>Artiodactyla</i>
マダイ	<i>Pagrus major</i> (Temminck et Schlegel)	ウシ科	<i>Bovidae</i>
ボラ科	Mugilidae gen. et sp. indet.	ウシ	<i>Bos taurus domesticus</i> Gmelin
カサゴ目	Scorpaeniformes	イノシシ科	<i>Suidae</i>
フサカサゴ科	Scorpaenidae sp. indet.	イノシシ類	<i>Sus scrofa</i> subsp. indet
コチ科	Platycephalidae	ブタ	<i>Sus scrofa domesticus</i>
コチ属	<i>Platycephalus</i> sp. indet.	シカ科	<i>Cervidae</i>
フグ目	Tetraodontiformes	ニホンジカ	<i>Cervus nippon</i> Temminck
フグ科	Tetraodontidae	ウマ目	<i>Perissodactyla</i>
ウナギ目	Anguilliformes	ウマ科	<i>Equidae</i>
ハモ科	Muraenesocidae	ウマ	<i>Equus caballus</i> Linnaeus
ハモ属	<i>Muraenesox</i> sp. indet.	ネコ目(食肉目)	<i>Carnivora</i>
カレイ目	Pleuronectiformes	イヌ科	<i>Canidae</i>
ヒラメ科	Paralichthyidae	イヌ	<i>Canis familiaris</i> Temminck
		ネコ科	<i>Felidae</i>

イエネコ	<i>Felis catus</i>	ウサギ目(兔目)	Lagomorpha
サル目(靈長目)	Primates	ウサギ科	Lepuridae
ヒト科	Hominidae	ノウサギ	<i>Lepus brachyurus</i> Teminck et Schelgel
ヒト	<i>Homo sapiens sapiens</i>	ネズミ目(齧歯目)	Rodentia
ニホンザル	<i>Macaca fuscata</i> (Blyth)	ネズミ科	Muridae

1 花虫綱 Anthozoa

ウスチャキクメイシ *Favia pallida*

東北大学理学部中森亨先生の御教示を賜り、非造礁サンゴでいわゆる菊目石と呼ばれる一種のウスチャキクメイシであることが判明した。本種は房総半島以南の本州～沖縄、台湾に広く分布がみられる。出土資料はこれらの地域から採集されたものと考えられるが、成長線の概況等から、沖縄諸島より北方の所産の可能性が高いことを中森先生から御教示頂いた。

本資料は比較的小型であることから、置物に向いているとは考えにくい。漢方薬や手工業製品の原料としても利用された可能性が高いであろう。

岡山県内では以前に岡山城二の丸跡からより同属の大型の個体が出土している。従来、江戸前・中期にサンゴは稀少品であると考えられ、二の丸出土資料も特殊な例と考えたが、本出土例の追加によってその点の再考が指摘された。つまり、当時の市街地域からも検出されたことで、稀少品であっても庶民層が入手・加工が可能なものであったと考えられよう。

2 腹足綱 Gastropoda

アキガイ科 Muricidae

アカニシ *Rapana venosa* (Valenciennes) と、イトマキボラ *Pleuroplaca trapezium* (Linnaeus) が出土している。アカニシは、内湾泥底の水深5～20mに多く生息する肉食性の巻貝で、岡山周辺の遺跡で多く出土する種であり、天瀬遺跡の巻貝類で最も多く出土した種でもある。

ミミガイ科 Haliotidae gen. et sp. indet.

アワビ類のミミガイ科の破片が検出されている。殻頂は失われていた。

リュウテンサザエ科 Turbinidae、サザエ *Batillus cornutus* (Lightfoot)

蓋および、貝殻各部が出土している。棘が発達しない内湾生息タイプのものと考えられ、児島湾およびその周辺の内湾で捕獲されたものであろう。

スズメガイ科 Hipponicidae

アワビ類などの殻表に生息する生態を持つキクスズメガイ *Sabia conica* (Schumacher) が検出されている。アワビ類とともに遺跡内にもたらされたのである。

3 斧足綱 Pelecypoda

マルスダレガイ科 Veneridae

附編2 天瀬遺跡出土の動物遺存体の分析

内湾砂底に生息するハマグリ *Meretrix lusoria* (Rödding) と内湾砂礫底に生息するウチムラサキガイ *Saxidomus purpuratus* (Sowerby) が出土している。

シジミガイ科 Corbiculidae

汽水域に生息するヤマトシジミ *Corbicula japonica* Prime が出土している。

フネガイ科 Arcidae

水深10~50mの内湾泥底に生息するアカガイ *Scapharca broughtonii* (Schrenck)、湾奥の砂泥質の干潟潮間帯に生息するハイガイ *Tegillarca granosa* (Linnaeus)、水深10~30m程の外洋の細砂底に生息するサトウガイ *Scapharca satowi* Dunkerが検出されている。

トマヤガイ科 Carditidae

岩礁に着床し生息するトマヤガイ *Cardita leana* Dunkerが出土している。

イタボガキ科 Ostreidae

属種不明の資料が出土している。破片の状況からマガキの可能性が高いが、特定できなかった。

イタヤガイ科 Pectinidae

沿岸砂泥底の水深10~30mに生息するイタヤガイ *Pecten albicans* (Schroter)の破片が出土している。穿孔されており、貝杓や行燈の皿として利用されたと考えられる。

4 甲殻綱 Crustacea

96年度調査において、フジツボ科 *Balanidae* gen. et sp. indet. と短尾亜目(カニ亜目)Brachyura、イシガニ *Charybdis japonica* が出土している。フジツボ科の背面にはアワビ類の殻表面の痕跡が残されており、さらに内部の硬組織も破損しないまま残っていることから、これが直接食用とされたのではなく、アワビ類とともに遺跡内にもたらされたものと考えられる。イシガニは浮動指と可動指の先端破片である。食用とされた可能性が考えられる。

5 軟骨魚綱 Chondrichthyes 板鰓亜綱 Elasmobranchii

エイ目 Rajiformesの椎骨(96-139,140)と、目不明の板鰓亜綱の椎骨(98-28)が出土しているが、いずれも中型程度の体格と推定される。

6 硬骨魚綱 Osteichthyes

ナマズ科 Siluridae、ナマズ *Silurus asotus* Linnaeus

96年度調査の江戸中期の溝から左歯骨が出土した(96-150)。

スズキ科 Serranidae

外洋岩礁域から内湾、さらに汽水域から淡水域にも生息・侵入するスズキ *Lateolabrax japonicus*

(Curvier et Valenciennes)が数多く出土している。

タイ科 Sparidae

日本各地の沿岸に生息するマダイ *Pagrus major* (Temminck et Schlegel)。岡山の海岸部の遺跡で時代を通じて広く検出される魚種である。頭部を加工した痕跡を残す顔骨が多量に検出されている。

ボラ科 Mugilidae gen. et sp. indet.

沿岸～汽水～淡水域に生息するボラ科の主鰓蓋骨が出土した。

フサカサゴ科 Scorpaenidae sp. indet.

沿岸～内湾に生息するフサカサゴ科が江戸前期の井戸から出土した(98-1)。

コチ科 Platycephalidae

沿岸～内湾に生息するコチ属 *Platycephalus* sp. indet.が出土した。コチ属の歯骨(98-130)にも頭部が加工された解体痕跡が残されている。

フグ科 Tetraodontidae

沿岸～内湾に生息する属・種不明のフグ科が出土した。特に98年度調査の外堀から出土した左歯骨(98-90、整理番号123)は全長50cmを越す大型の個体と推定される。

ハモ科 Muraenesocidae、ハモ属 *Muraenesox* sp. indet

96年度調査の江戸時代各期の遺構から4点が検出されている。

ヒラメ科 Paralichthyidae、ヒラメ *Paralichthys olivaceus* (Temminck et Schlegel)

96年度資料から江戸中・後期に属する3点が検出されている。いわゆる五枚おろしに加工されたため、椎骨が破損している。当時の料理法をうかがわせる貴重な資料である。

7 爬虫綱 Reptilia

スッポン科 Trionychidae、スッポン *Trionyx sinensis japonica*

明確な加工痕跡は、肋骨板の内面側から切創(カット・マーク)が検出された。ただし、痕跡が残るものは一部に止まる。出土した一部は、自然死した個体が混入した可能性が考えられる。

ウミガメ科 Cheloniidae gen. indet.

背甲が散乱して江戸後期の外堀から検出された(98-74,75,76,77,78)。

全ての資料は比較的大型の一個体に由来し、アオウミガメ・アカウミガメ・タイマイなどの可能性が考えられる。内面に切創がみられ、内臓類の切除も行われたと考えられ、食料としても消費された可能性があるが、甲羅のみが搬入された可能性も考えられ、いずれの場合も鼈甲細工に供された可能性がある。

8 鳥 級

Aves

キジ科

Phasianidae

キジ属 *Phasianidus* sp. indet. とニワトリ *Gallus gallus domesticus* Brissonが出土した。

多くの部位が検出され、その大部分に加工痕跡が確認された。

サギ科 Ardeidae gen. et sp. indet.

江戸時代広く食用とされた鳥類の一種である。出土した右鳥口骨(98-152)は、大きさや形状から大型のサギであるアオサギ *Ardea cinerea jouyi* Clark と同定された。

ガンカモ科 Anatidae

カモ類Aタイプに分類されるマガモクラスの比較的大型の右上腕骨(98-154)が出土し、カモ類Bタイプに分類される中型程度のカモは尺骨が出土している(96-115,116)。

さらにマガソ *Anser albifrons* (Scopoli) は左大腿骨が出土している(96-122)。

9 哺乳綱

Mammalia

ウシ科 Cavicornia、ウシ *Bos taurus domesticus* Gmelin

溝などの遺構で多く検出された。いわゆる在来和牛の特徴を持つ小型のウシであった。切創も多くみられ、加工処理されていたことが明確である。

ウマ科 Equidae、ウマ *Equus caballus* Linnaeus

溝などの遺構で多く検出された。いずれも在来馬の特徴を持つ小型のウマであった。96年度資料に多くの切創がみられた。

イノシシ科 Suidae イノシシ類 *Sus scrofa*

イノシシは亜種として本州、四国、九州に生息するニホンイノシシ *Sus scrofa leucomystax*、南西諸島に生息するリュウキュウイノシシ *S. scrofa riukiuensis* が設定されているが、日本各地でブタと交配し一部は野生化している通称イノブタがかなり広くみられる。出土資料は破片が多く、形質的にブタ *S. scrofa domesticus* と断言できる資料は98-146の右下顎骨のみであった。しかし、本来はブタがイノシシと分別できない可能性があることより、本報告ではブタも含むカテゴリーとしてイノシシ類 *S. s. subsp. indet* として報告する。

今回の分析資料には、岡山県内では2件目となる近世のブタ(前例には岡山城二の丸)の下顎骨(146、整理番号594)が含まれており貴重である。この近世のブタは比較的小型のメスで、下顎は細い。さらにこの下顎骨の第1,2後臼歯の咬耗から、飼育されていたにしては比較的長命な3.5~6.5歳以上であるものの、第2,3前臼歯と第3後臼歯の歯列が乱れていることから飼料の質はあまり良好ではなかったと推定される。

シカ科 Cervidae、ニホンジカ *Cervus nippon* Temminck

ニホンジカは一亜種 *C. n. nippon* にまとめられることもあるが、6つの亜種に分類し、本州産のも

のをホンシュウジカ *C. n. centralis*、九州、四国産のものをキュウシュウシカ *C. nippon nippon* とする分類もある(大泰司 1983)。本報告ではニホンジカ *C. nippon* として記述する。

巻狩や害獣駆除の対象としても知られるが、これほど数多く近世の岡山市街域から検出されることは今回が初めてである。切創も数多く検出されており、丁寧に食肉加工した残滓と考えられる。

イヌ科 Canidae、イヌ *Canis familiaris* Temminck

切創を残す資料が数多くみられる。愛玩用のみならず、タカ類の餌や皮革製品、筆などの原料としての利用にも供されたと考えられる。

ネコ科 Felidae、イエネコ *Felis catus*

わずかながら資料には切創がみられ(98-79,135)、愛玩用のみならず、タカ類への餌や皮革製品などの原料としてもイヌとともに供されたと考えられる。ただし、イヌに比較すると切創のみられる率は低い。

96年度調査において昭和初期に属する個体が検出されているが、これは井戸からまとまって検出されている。

ニホンザル *Macaca fuscata* (Blyth)

切創とネズミの噛痕を残す左橈骨が出土した(98-66)。江戸時代にサルも加工処理されていた可能性を示す貴重な資料である。

ヒト科 Hominidae、ヒト *Homo sapiens sapiens*

特に、頭蓋骨と肋骨に切創がみられ、意図的に損壊されていることが明らかである。肋骨は正面から突き刺して上部に抜けた鋭利な刺創・切創がみられ、意図的に損壊されたものであることが明らかである。これは突き刺された痕跡であることから、肉類を削ぐような行為ではなく、胸を刺し通すような行為の痕跡と考えられる。上腕骨では、近位端と遠位端に関節や腱を損壊する際の切創が残されており、解体行為が行われたと考えられる。

ただし、他の動物残滓と一緒に出土しているものの、肉を削ぐような切創はみられず、人食の目的での解体である可能性は低いと考えられる。

出土状況も一括性が低く、いわゆる散乱状態であることから、いずれにせよ分散して廃棄された可能性を考えられる。ただし、埋葬人骨の墓が崩れ、遺構中に混入した可能性も残される。

謝辞

岡山県立古代吉備文化財センター各位には資料の提供とともに様々な御教示御援助を頂いた。また、分析にあたっては、岡山理科大学大学院生沖田絵麻さん、同大学学生田中紀子さん、中村友美さん、重名佐紀さん、中務明子さん、手塚さおりさん、阿部沙織さんの多大なる御協力を得た。さらに、東北大学理学部中森亨先生、根本潤氏、奈良国立文化財研究所松井章先生、国立歴史民俗博物館西本豊弘先生、岡山理科大学総合情報学部波田善夫氏、基礎理学科名取真人氏に比較標本の提供と御助言、御教示を頂いた。また、東北大学文学部須藤隆先生には、終始様々な御指導、御教示を頂いた。記し

て感謝の意を表します。

参考文献

- 阿部 永他 1994 『日本の哺乳類』(東海大学出版局)
- 阿部宗明 1987 『原色魚類大図鑑』(北隆館)
- 今泉吉典、岡田弥一郎 1983 『学研生物図鑑 動物』(学研)
- 内田 亨 1979 『新編日本動物図鑑』(北隆館)
- 内田 亨他 1972 『谷津・内田 動物分類名辞典』(中山書店)
- 内田 亨 1979 『新編日本動物図鑑』(北隆館)
- 大泰司紀之 1980 「遺跡出土ニホンジカの下顎骨による性別・年齢・死亡季節査定法」
『考古学と自然科学』13,pp.51-74
- 大泰司紀之 1983 「シカ」 『縄文文化の研究 2 生業』 pp.122-135
- 大泰司紀之 1984 「ニホンジカの比較骨学および地理的時代的変異」
『古文化財の自然科学的研究』 pp.555-558
- 岡田 要(校閲) 今泉吉典(著) 1960 『原色日本哺乳類図鑑』(保育社)
- 岡田 要 内田清之助 内田 亨 1965 『新日本動物図鑑』下(北隆館)
- 蒲原稔治 1966 『標準原色図鑑全集 第4巻 魚』(保育社)
- 小池裕子、大泰司紀之 1984 「遺跡出土ニホンシカの齢構成からみた狩猟圧の時代変化」
『古文化財の自然科学的研究』 pp.508-517
- 小池裕子、林 良博 1984 「遺跡出土ニホンイノシシの齢査定について」
『古文化財の自然科学的研究』 pp.519-524
- 後藤仁敏、大泰司紀之編 1986 『歯の比較解剖学』(医師薬出版株式会社)
- 高野伸二 1982 『フィールドガイド日本の野鳥』(日本野鳥の会)
- 常田邦彦 1982 「イノシシの分布」『アニマ』118,p.46
- 千葉徳爾 1964 「日本列島における猪・鹿の生息状況とその変動」『地理学評論』37,pp.575-592
- 富岡直人 1998 「岡山城二の丸跡出土の動物遺存体」『中国電力内山下変電所建設に伴う調査報告 岡山城二の丸跡』 pp.136-163
- 林 良博 1983 「イノシシ」『縄文文化の研究 2 生業』 pp.136-147
- 林 壽郎 1968 『標準図鑑全集 動物 I』(保育社)
- 林 壽郎 1968 『標準図鑑全集 動物 II』(保育社)
- Angela von den Driesch 1976 "A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites"
Peabody Museum Bulletin 1, Museum of Archaeology, Harvard University

96年度分 天瀬遺跡出土の動物遺存体属性表

分類番号	整理遺物名	調査時の出 土遺構名	位	時 約	大 分類	小 分類	LR	部 位	部 分	破 損	風 化	成 長 度	重 量 (g)	色 調	備 考
1 166	江戸後期以前	上層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	-	外骨	骨片	骨片	不明	不明	4.1	-	-	-
2 167	逃	上層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	-	骨片	骨片	骨片	不明	不明	8.11	166と接合	-	
3 168	石垣	下層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	-	骨片	骨片	骨片	不明	不明	2.7	166と接合	-	
4 170	石垣	石垣	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	-	骨片	骨片	骨片	不明	不明	22.2	-	-	
5 196	土壁5	土壁4	中層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	-	骨片	骨片	不明	不明	17.58	-	-	
6 194	土壁5	土壁4	中層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	-	骨片	骨片	不明	不明	14.53	-	-	
7 200	土壁5	土壁4	中層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	-	骨片	骨片	不明	不明	0.3	高さ113.68	-	
8 210	土壁5	土壁1	中層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	-	骨片	骨片	不明	不明	74.75	高さ10.22	-	
9 212	土壁5	土壁1	中層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	-	骨片	骨片	不明	不明	40.22	最大幅差28.15、此處一部現存	-	
10 213	土壁5	土壁1	中層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	-	骨片	骨片	不明	不明	75.96	高さ55.40	-	
11 215	土壁5	土壁1	上層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	-	骨片	骨片	不明	不明	5.15	-	-	
12 217	土壁5	土壁1	南東上部	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	-	骨片	骨片	不明	不明	7.17	-	-	
13 218	土壁5	土壁6	上層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	-	骨片	骨片	不明	不明	1.09	-	-	
14 202	土壁5	土壁4	中層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	-	骨片	骨片	不明	不明	15.8	-	-	
15 191	土壁5	土壁4	中層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	-	骨片	骨片	不明	不明	5.25	最大幅差28.15、此處一部現存	-	
16 189	土壁5	土壁4	中層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	-	骨片	骨片	不明	不明	6.04	-	-	
17 171	土壁5	土壁1	上層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	-	骨片	骨片	不明	不明	0.38	-	-	
18 209	土壁5	土壁1	中層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	-	骨片	骨片	不明	不明	1.15	高さ21.69	-	
19 169	土壁5	土壁1	上層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	R	骨頭	骨頭	不明	不明	0.02	-	-	
20 172	土壁5	土壁1	上層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	R	骨頭	骨頭	不明	不明	0.38	-	-	
21 173	土壁5	土壁1	上層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	R	骨頭	骨頭	不明	不明	0.06	-	-	
22 174	土壁5	土壁1	上層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	R	骨頭	骨頭	不明	不明	0.14	-	-	
23 175	土壁5	土壁1	上層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	R	骨頭	骨頭	不明	不明	0.19	高さ24.91	-	
24 176	土壁5	土壁1	上層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	R	骨頭	骨頭	不明	不明	4.51	高さ22.15	-	
25 176	土壁5	土壁1	上層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	R	骨頭	骨頭	不明	不明	0.59	-	-	
26 176	土壁5	土壁1	上層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	R	骨頭	骨頭	不明	不明	3.36	-	-	
27 181	土壁5	土壁1	上層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	R	骨頭	骨頭	不明	不明	0.53	高さ17.98	-	
28 182	土壁5	土壁1	上層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	R	骨頭	骨頭	不明	不明	0.68	-	-	
29 183	土壁5	土壁1	上層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	R	骨頭	骨頭	不明	不明	0.74	高さ20.33	-	
30 184	土壁5	土壁1	上層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	R	骨頭	骨頭	不明	不明	1.13	-	-	
31 185	土壁5	土壁1	上層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	R	骨頭	骨頭	不明	不明	1.77	高さ26.86、後壁ぶら下り	-	
32 186	土壁5	土壁1	上層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	R	骨頭	骨頭	不明	不明	1.81	高さ27.16、後壁ぶら下り	-	
33 187	土壁5	土壁4	中層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	R	骨頭	骨頭	不明	不明	0.52	高さ27.13、後壁ぶら下り	-	
34 195	土壁5	土壁4	中層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	R	骨頭	骨頭	不明	不明	0.93	高さ21.32、後壁ぶら下り	-	
35 197	土壁5	土壁4	中層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	R	骨頭	骨頭	不明	不明	7.06	高さ41.07、主牆中段高さ3.80	-	
36 207	土壁5	土壁4	中層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	R	骨頭	骨頭	不明	不明	1.92	高さ29.49、主牆中段高さ1.58	-	
37 211	土壁5	土壁1	中層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	R	骨頭	骨頭	不明	不明	4.01	高さ33.56、後壁の付着あり	-	
38 185	土壁5	土壁2	中層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	R	骨頭	骨頭	不明	不明	3.94	高さ44.20、主牆高さ2.18	-	
39 180	土壁5	土壁1	中層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	R	骨頭	骨頭	不明	不明	4.05	高さ33.84	-	
40 192	土壁5	土壁4	中層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	R	骨頭	骨頭	不明	不明	3.34	高さ33.84	-	
41 193	土壁5	土壁4	中層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	R	骨頭	骨頭	不明	不明	0.31	高さ33.84	-	
42 205	土壁5	土壁1	中層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	R	骨頭	骨頭	不明	不明	14.32	高さ7.14、後壁皮が残る	-	
43 206	土壁5	土壁1	下層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	R	骨頭	骨頭	不明	不明	2.34	動物質の付着あり	-	
44 190	土壁5	土壁4	中層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	R	骨頭	骨頭	不明	不明	4.4	高さ2.44、皮が残る	-	
45 196	土壁5	土壁4	中層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	R	骨頭	骨頭	不明	不明	6.19	-	-	
46 199	土壁5	土壁4	中層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	R	骨頭	骨頭	不明	不明	1.28	動物質の付着あり	-	
47 201	土壁5	土壁6	(下)	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	R	骨頭	骨頭	不明	不明	19.33	-	-	
48 203	土壁5	土壁7	(下)	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	R	骨頭	骨頭	不明	不明	0.38	-	-	
49 204	土壁5	土壁7	(下)	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	R	骨頭	骨頭	不明	不明	0.31	-	-	
50 206	土壁5	土壁1	中層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	R	骨頭	骨頭	不明	不明	14.32	-	-	
51 208	土壁5	土壁4	中層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	R	骨頭	骨頭	不明	不明	5.19	-	-	
52 214	土壁5	土壁1	下層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	R	骨頭	骨頭	不明	不明	4.4	-	-	
53 177	土壁5	土壁6	中層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	R	骨頭	骨頭	不明	不明	1.63	6点、内側の底面が残る	-	
54 198	土壁5	土壁4	中層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	R	骨頭	骨頭	不明	不明	2.28	-	-	
55 152-1	土壁5	土壁4	中層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	R	可動指	可動指	不明	不明	1.04	骨幹長2.40	-	
56 152-2	土壁5	土壁4	中層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	R	可動指	可動指	不明	不明	0.15	骨幹長16.45	-	
57 152-3	土壁5	土壁4	中層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	R	可動指	可動指	不明	不明	0.44	骨幹長23.80	-	
58 199	土壁5	土壁1	中層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	M	椎骨	椎骨	不明	不明	2.31	米褐色	-	
59 140	土壁5	土壁1	中層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	M	椎骨	椎骨	不明	不明	1.63	米褐色	骨幹長12.75	
60 118	土壁5	土壁4	中層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	R	前腕骨	前腕骨	cm (前方)	cm (前方)	1.86	米褐色	-	
61 192	土壁5	土壁4	中層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	R	角骨	角骨	不詳	不詳	0.3	米褐色	-	
62 97	土壁5	土壁4	中層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	R	骨幹	骨幹	不詳	不詳	0.07	米褐色	-	
63 98	土壁5	土壁4	中層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	R	角骨	角骨	不詳	不詳	0.08	米褐色	-	
64 70	土壁5	土壁4	中層	江戸後期以前	魚塚頭	アカニシ	R	角骨	角骨	不詳	不詳	-	米褐色	-	

附編2 天瀬遺跡出土の動物遺存体の分析

附編2 天瀬遺跡出土の動物遺存体の分析

附編2 天瀬遺跡出土の動物遺存体の分析

202	136	塊16	塊1	中層	五戸中層	哺乳類	ウマ	L	兔の足根骨	完形	cm(右内側位骨部) 近位端大靭带 骨頭、前位端(位置)	なし	不明	9.53	茶褐色	124, 126, 127, 128, 133, 142, 143, 149と同一個体
203	142	塊16	塊1	中層	江戸中層	哺乳類	ウマ	L	大顎骨	完形(直立・側久期)	骨頭、前位端(位置)	アカニシ	B,d,f	608.82	茶褐色	124, 126, 127, 131, 136, 143, 149と同一個体
204	122	塊16	塊1	中層	江戸中層	哺乳類	ウマ	L	中手骨	完形	骨頭、前位端(位置)	アカニシ	D,f	9.63	茶褐色	124, 126, 127, 131, 136, 142, 143, 149と同一個体
205	123	塊16	塊1	中層	江戸中層	哺乳類	ウマ	L	中足骨	完形	cm(左外側位・正面骨部)	アカニシ	D,f	14.97	茶褐色	124, 126, 127, 131, 136, 142, 143, 149と同一個体
206	143	塊16	塊1	中層	江戸中層	哺乳類	ウマ	L	中足骨	完形(直立・側久期)	cm(左外側位・正面骨部)	アカニシ	D,f	23.1	茶褐色	124, 126, 127, 131, 136, 142, 143, 149と同一個体
207	124	塊16	塊1	中層	江戸中層	哺乳類	ウマ	R	中足骨	完形	骨頭、前位端(位置)	アカニシ	D,f	7.45	茶褐色	124, 126, 127, 131, 136, 142, 143, 149と同一個体
208	138	塊16	塊1	中層	江戸中層	哺乳類	ウマ	L	兔の足根骨	完形	cm(側直位骨部)	アカニシ	D,f	15.51	茶褐色	124, 126, 127, 131, 136, 142, 143, 149と同一個体
209	149	塊16	塊1	下層	江戸中層	哺乳類	ウマ	L	兔の足根骨	完形	cm(側直位骨部)	アカニシ	D,f	451.44	茶褐色	幅65.18 全長334.5
210	126	塊16	塊1	中層	江戸中層	哺乳類	ウマ	L	腰骨	完形	cm(右外側位・腹)	アカニシ	D,f	72.39	茶褐色	幅65.18 全長334.5
211	119	塊16	塊1	上層	江戸中層	哺乳類	ウマ	L	腰骨	完形	cm(右外側位・腹)	アカニシ	D,f	18.6	茶褐色	幅65.18 全長334.5
212	132	塊16	塊1	中層	江戸中層	哺乳類	ウマ	R	助骨	近位端(骨部・骨端部)	cm(右外側位・腹)	アカニシ	D,f	0.33	茶褐色	幅65.18 全長334.5
213	120	塊16	塊1	上層	江戸中層	哺乳類	ウマ	L	手・足骨	近位端(骨部・骨端部)	cm(右外側位・腹)	アカニシ	D,f	0.59	茶褐色	幅65.18 全長334.5
214	7									完形	骨頭、前位端(位置)	アカニシ	D,f	0.17	茶褐色	幅65.18 全長334.5
215	167	塊16	塊1	中層	江戸中層	哺乳類	ウマ	R	助骨	骨端部	骨端部	アカニシ	D,f	0.05	茶褐色	幅65.18 全長334.5
216	168	塊16	塊1	中層	江戸中層	哺乳類	ウマ	L	助骨	骨端部	骨端部	アカニシ	D,f	0.3	茶褐色	幅65.18 全長334.5
217	162	塊16	塊1	中層	江戸中層	哺乳類	ウマ	R	助骨	骨端部	骨端部	アカニシ	D,f	1.22	茶褐色	幅65.18 全長334.5
218	160	塊16	塊1	中層	江戸中層	哺乳類	ウマ	R	助骨	骨端部	骨端部	アカニシ	D,f	0.21	茶褐色	幅65.18 全長334.5

98年度分 天瀬遺跡出土の動物遺存体属性表

分類番号	整理番号	土地	相軸	出土	調査時	出	土種	層位	時	期	大分類	小分類	LR	部	位	部	分	破	損	風化	成長度	重量(g)	色	調査(計測位単位はmm)	
1	265	9区	外周	江戸中層	第4層	花崗岩	-	表面無	-	-	ウズラヤカミイシ	-	A	骨頭	直立	骨片	なし	骨頭	直立	骨頭	直立	不明	16.01	茶褐色	斜面不規
2	202	1区	土壁7	土壁2	江戸中層	花崗岩	-	表面無	-	-	アカニシ	-	A	骨頭	直立	骨片	なし	骨頭	直立	骨頭	直立	不明	31.45	茶褐色	斜面不規
3		204	1区	土壁7	土壁2	江戸中層	花崗岩	-	-	アカニシ	-	A	骨頭	直立	骨片	なし	骨頭	直立	骨頭	直立	不明	20.9	茶褐色	斜面不規	
4		207	1区	土壁7	土壁2	江戸中層	花崗岩	-	-	アカニシ	-	A	骨頭	直立	骨片	なし	骨頭	直立	骨頭	直立	不明	0.53	茶褐色	斜面不規	
5		235	8区	南13	南12	江戸中層	花崗岩	-	-	アカニシ	-	A	骨頭	直立	骨片	なし	骨頭	直立	骨頭	直立	不明	124.62	茶褐色	斜面不規	
6		6	240	8区	南8	南7	江戸中層	花崗岩	-	-	アカニシ	-	A	骨頭	直立	骨片	なし	骨頭	直立	骨頭	直立	不明	38.4	茶褐色	斜面不規
7		242	8区	南13	南12	江戸中層	花崗岩	-	-	アカニシ	-	A	骨頭	直立	骨片	なし	骨頭	直立	骨頭	直立	不明	62.5	茶褐色	斜面不規	
8		244	9区	外周	外周	北側壁	-	表面無	-	-	アカニシ	-	A	骨頭	直立	骨片	なし	骨頭	直立	骨頭	直立	不明	40	茶褐色	斜面不規
9		247	9区	外周	外周	第1層	-	表面無	-	-	アカニシ	-	A	骨頭	直立	骨片	なし	骨頭	直立	骨頭	直立	不明	41.74	茶褐色	斜面不規
10		203	1区	土壁7	土壁6	江戸中層	-	表面無	-	-	アカニシ	-	A	骨頭	直立	骨片	なし	骨頭	直立	骨頭	直立	不明	6.15	茶褐色	斜面不規
11		197	1区	土壁7	土壁2	江戸中層	-	表面無	-	-	アカニシ	-	A	骨頭	直立	骨片	なし	骨頭	直立	骨頭	直立	不明	11.94	茶褐色	斜面不規
12		205	7区	土壁7	土壁2	江戸中層	-	表面無	-	-	アカニシ	-	A	骨頭	直立	骨片	なし	骨頭	直立	骨頭	直立	不明	28.67	茶褐色	斜面不規
13		203	7区	近代井戸	土壁20	江戸中層	-	表面無	-	-	アカニシ	-	A	骨頭	直立	骨片	なし?	骨頭	直立	骨頭	直立	不明	185.9	茶褐色	斜面不規
14		210	7区	近代井戸	土壁20	江戸中層	-	表面無	-	-	アカニシ	-	A	骨頭	直立	骨片	骨頭	骨頭	直立	骨頭	直立	不明	143.92	茶褐色	斜面不規
15		211	7区	近代井戸	土壁20	江戸中層	-	表面無	-	-	アカニシ	-	A	骨頭	直立	骨片	骨頭	骨頭	直立	骨頭	直立	不明	144.92	茶褐色	斜面不規
16		218	8区	南11	南12	江戸中層	-	表面無	-	-	アカニシ	-	A	骨頭	直立	骨片	骨頭	骨頭	直立	骨頭	直立	不明	66.41	茶褐色	斜面不規
17		230	8区	南12	南11	江戸中層	-	表面無	-	-	アカニシ	-	A	骨頭	直立	骨片	骨頭	骨頭	直立	骨頭	直立	不明	101.92	茶褐色	斜面不規
18		231	8区	南12	南11	江戸中層	-	表面無	-	-	アカニシ	-	A	骨頭	直立	骨片	骨頭	骨頭	直立	骨頭	直立	不明	119.55	茶褐色	斜面不規
19		232	9区	南12	南11	江戸中層	-	表面無	-	-	アカニシ	-	A	骨頭	直立	骨片	骨頭	骨頭	直立	骨頭	直立	不明	277.08	茶褐色	斜面不規
20		234	8区	南13	南12	江戸中層	-	表面無	-	-	アカニシ	-	A	骨頭	直立	骨片	骨頭	骨頭	直立	骨頭	直立	不明	144.92	茶褐色	斜面不規
21		236	9区	外周	外周	第1層	-	表面無	-	-	アカニシ	-	A	骨頭	直立	骨片	骨頭	骨頭	直立	骨頭	直立	不明	64.01	茶褐色	斜面不規
22		248	9区	外周	外周	第1層	-	表面無	-	-	アカニシ	-	A	骨頭	直立	骨片	骨頭	骨頭	直立	骨頭	直立	不明	30.47	茶褐色	斜面不規
23		250	9区	外周	外周	第1層	-	表面無	-	-	アカニシ	-	A	骨頭	直立	骨片	骨頭	骨頭	直立	骨頭	直立	不明	602.16	茶褐色	斜面不規
24		251	9区	外周	外周	第2層	-	表面無	-	-	アカニシ	-	A	骨頭	直立	骨片	骨頭	骨頭	直立	骨頭	直立	不明	369.76	茶褐色	斜面不規
25		257	9区	外周	外周	第2層	-	表面無	-	-	アカニシ	-	A	骨頭	直立	骨片	骨頭	骨頭	直立	骨頭	直立	不明	78.32	茶褐色	斜面不規
26		259	9区	外周	外周	第2層	-	表面無	-	-	アカニシ	-	A	骨頭	直立	骨片	骨頭	骨頭	直立	骨頭	直立	不明	31.17	茶褐色	斜面不規
27		265	9区	外周	外周	第2層	-	表面無	-	-	アカニシ	-	A	骨頭	直立	骨片	骨頭	骨頭	直立	骨頭	直立	不明	372.79	茶褐色	斜面不規
28		267	9区	外周	外周	第2層	-	表面無	-	-	アカニシ	-	A	骨頭	直立	骨片	骨頭	骨頭	直立	骨頭	直立	不明	107.42	茶褐色	斜面不規
29		268	9区	外周	外周	第2層	-	表面無	-	-	アカニシ	-	A	骨頭	直立	骨片	骨頭	骨頭	直立	骨頭	直立	不明	245.66	茶褐色	斜面不規
30		271	9区	外周	外周	第2層	-	表面無	-	-	アカニシ	-	A	骨頭	直立	骨片	骨頭	骨頭	直立	骨頭	直立	不明	393.16	茶褐色	斜面不規
31		272	9区	外周	外周	第2層	-	表面無	-	-	アカニシ	-	A	骨頭	直立	骨片	骨頭	骨頭	直立	骨頭	直立	不明	282.92	茶褐色	斜面不規
32		278	10区	土壁24	土壁24	近世高1	-	表面無	-	-	アカニシ	-	A	骨頭	直立	骨片	骨頭	骨頭	直立	骨頭	直立	不明	29.47	茶褐色	斜面不規
33		281	10区	土壁21	土壁21	近世高2	-	表面無	-	-	アカニシ	-	A	骨頭	直立	骨片	骨頭	骨頭	直立	骨頭	直立	不明	317.86	茶褐色	斜面不規
34		288	10区	土壁26	土壁26	近世高2	-	表面無	-	-	アカニシ	-	A	骨頭	直立	骨片	骨頭	骨頭	直立	骨頭	直立	不明	79.5	茶褐色	斜面不規
35		294	2区	外周	外周	第1層	-	表面無	-	-	アカニシ	-	A	骨頭	直立	骨片	骨頭	骨頭	直立	骨頭	直立	不明	283.05	茶褐色	斜面不規
36		37	1区	土壁6	土壁6	江戸中層	-	表面無	-	-	アカニシ	-	A	骨頭	直立	骨片	骨頭	骨頭	直立	骨頭	直立	不明	117.22	茶褐色	斜面不規
37		190	1区	井戸1	井戸1	江戸中層	-	表面無	-	-	アカニシ	-	A	骨頭	直立	骨片	骨頭	骨頭	直立	骨頭	直立	不明	272.25	茶褐色	斜面不規
38		301	2区	井戸24	井戸24	近世高1	-	表面無	-	-	アカニシ	-	A	骨頭	直立	骨片	骨頭	骨頭	直立	骨頭	直立	不明	50.49	茶褐色	斜面不規
39		277	10区	土壁24	土壁24	近世高2	-	表面無	-	-	アカニシ	-	A	骨頭	直立	骨片	骨頭	骨頭	直立	骨頭	直立	不明	316.94	茶褐色	斜面不規
40		301	3区	井戸24	井戸24	近世高1	-	表面無	-	-	アカニシ	-	A	骨頭	直立	骨片	骨頭	骨頭	直立	骨頭	直立	不明	281.91	茶褐色	斜面不規
41		222	9区	井戸24	井戸24	近世高2	-	表面無	-	-	アカニシ	-	A	骨頭	直立	骨片	骨頭	骨頭	直立	骨頭	直立	不明	7.43	茶褐色	斜面不規
42	</																								

附編2 天瀬遺跡出土の動物遺存体の分析

				組合調	ササエ	- 骨体	完形(骨頭欠損)	なし	不明	78.07	
45	285	1区	黒瓦2	上部	近代	組合調	無形(骨頭欠損)	なし	不明	13.38	
46	302	2区	漆瓦9	上部	江戸後期以前	組合調	無形(骨頭欠損)	なし	不明	4.57	
47	224	7区	漆12	漆11	江戸後期以前	組合調	無形(骨頭欠損)	なし	不明	8.71	
48	237	8区	漆13	漆12	江戸後期以前	組合調	無形(骨頭欠損)	なし	不明	2.5	
49	225	7区	漆12	漆11	上部屋裏	組合調	無形(骨頭欠損)	なし	不明	0.4	
50	249	9区	外壁(仔)	外壁	江戸後期以前	組合調	無形(骨頭欠損)	なし	不明	51.96	
51	264	9区	外壁(仔)	外壁	第4層	アカガイ	L 骨体	無形(骨頭欠損)	不明	2.29	
52	220	8区	漆12	漆11	江戸後期以前	組合調	イタガキ科	L 完形	在L?	82.65/0.06	
53	221	8区	漆12	漆11	江戸後期以前	組合調	イタガキ科	L 完形	無形(骨頭欠損)	白色鮮紅	
54	210	9区	外壁(仔)	外壁	第2層	江戸後期以前	イタガキ科	R 骨体	無形	15.73	
55	259	1区	漆瓦2	上部	江戸後期以前	組合調	イタガキ科	R 骨体	無形	6.44	
56	223	7区	漆12	漆11	江戸後期以前	組合調	イタガキ科	L 骨体	無形	16.65	
57	263	9区	外壁(仔)	外壁	第4層	イタガキ科	イタガキ科	L 骨体	無形(2ヶ所)	計測不観	
58	287	1区	漆22	漆11	江戸後期以前	組合調	イタガキ科	L 骨体	無形	3.16	
59	209	7区	近代半瓦	土壁20	江戸後期以前	組合調	イタガキ科	R 骨体	無形	17.77	
60	213	9区	外壁(仔)	外壁	漆11	江戸後期以前	トマトシジミ	R 完形	不明	9.49	
61	245	9区	外壁(仔)	外壁	北壁屋裏	江戸後期以前	ナメクジ科	R 骨体	無形	0.36	
62	289	9区	外壁(仔)	外壁	第4層	江戸後期以前	ナメクジ科	R 骨体	無形	16.08	
63	290	1区	漆瓦2	上部	江戸後期以前	組合調	ナメクジ科	R 骨体	無形	16.56/0.03	
64	252	区	漆瓦2	萬瓦	江戸後期以前	組合調	ナメクジ科	R 骨体	無形	26.9	
65	65	10区	土壁24	萬瓦	江戸後期以前	組合調	ナメクジ科	R 骨体	無形	1.2	
66	225	10区	土壁24	萬瓦	江戸後期以前	組合調	ナメクジ科	R 骨体	無形	1.31	
67	213	7区	近代半瓦	土壁20	江戸後期以前	組合調	ナメクジ科	R 骨体	無形	1.28	
68	251	9区	外壁(仔)	外壁	土壁20	江戸後期以前	ナメクジ科	R 骨体	無形	2.02	
69	252	9区	外壁(仔)	外壁	土壁20	江戸後期以前	ナメクジ科	R 骨体	無形	23.14	
70	69	254	9区	外壁(仔)	外壁	土壁20	江戸後期以前	ナメクジ科	R 骨体	無形	
71	255	9区	外壁(仔)	外壁	萬瓦	江戸後期以前	ナメクジ科	R 骨体	無形	19.65/0.04	
72	263	9区	外壁(仔)	外壁	萬瓦	江戸後期以前	ナメクジ科	R 骨体	無形	20.72	
73	280	9区	外壁(仔)	外壁	萬瓦	江戸後期以前	ナメクジ科	R 骨体	無形	68.54	
74	274	10区	土壁24	萬瓦	江戸後期以前	組合調	ナメクジ科	R 骨体	無形	7.51	
75	280	10区	土壁24	萬瓦	江戸後期以前	組合調	ナメクジ科	R 骨体	無形	16.50/0.33	
76	74	285	10区	土壁24	萬瓦	江戸後期以前	組合調	ナメクジ科	R 骨体	無形	
77	297	2区	漆瓦2	漆瓦2	江戸後期以前	組合調	ナメクジ科	R 骨体	無形	4.02	
78	74	303	漆瓦2	漆瓦2	江戸後期以前	組合調	ナメクジ科	R 骨体	無形	1.37	
79	303	2区	漆瓦2	漆瓦2	江戸後期以前	組合調	ナメクジ科	R 骨体	無形	2.76	
80	304	2区	漆瓦2	漆瓦2	江戸後期以前	組合調	ナメクジ科	R 骨体	無形	19.65	
81	80	191	区	井戸1	井戸1	井戸1	ナメクジ科	R 骨体	無形	5.35	
82	82	194	区	井戸1	井戸1	井戸1	ナメクジ科	R 骨体	無形	16.37/0.32	
83	85	196	区	井戸1	井戸1	井戸1	ナメクジ科	R 骨体	無形	0.7	
84	84	261	9区	外壁(仔)	外壁	井戸1	ナメクジ科	R 骨体	無形	20.49	
85	86	282	10区	土壁31	萬瓦	江戸後期以前	ナメクジ科	R 骨体	無形	6.31	
86	86	283	10区	土壁31	萬瓦	江戸後期以前	ナメクジ科	R 骨体	無形	2.04	
87	87	284	10区	土壁31	萬瓦	江戸後期以前	ナメクジ科	R 骨体	無形	5.39	
88	88	285	10区	土壁31	萬瓦	江戸後期以前	ナメクジ科	R 骨体	無形	1.01	
89	89	296	2区	漆瓦3	漆瓦3	江戸後期以前	ナメクジ科	R 骨体	無形	13.49	
90	90	299	2区	漆瓦9	漆瓦9	江戸後期以前	ナメクジ科	R 骨体	無形	1.41	
91	91	189	1区	井戸1	井戸1	江戸後期以前	ナメクジ科	R 骨体	無形	8.87	
92	92	192	1区	井戸1	井戸1	江戸後期以前	ナメクジ科	L 骨体	無形	5.02	
93	193	1区	井戸1	井戸1	江戸後期以前	ナメクジ科	L 骨体	無形	7.36	計測不観 色調normal	
94	94	228	7区	漆11	漆11	江戸後期以前	ナメクジ科	L 骨体	無形	6.99	計測不観 色調normal
95	199	1区	土壁6	土壁6	江戸後期以前	ナメクジ科	L 骨体	無形	0.75	計測不観 色調normal	
96	201	1区	土壁6	土壁6	江戸後期以前	ナメクジ科	L 骨体	無形	0.53	計測不観 色調normal	
97	97	214	7区	近代半瓦	近代半瓦	江戸後期以前	ナメクジ科	L 骨体	無形	8.87	
98	98	215	7区	近代半瓦	近代半瓦	江戸後期以前	ナメクジ科	L 骨体	無形	5.02	
99	99	216	7区	近代半瓦	近代半瓦	江戸後期以前	ナメクジ科	L 骨体	無形	0.72	
100	100	233	7区	漆11	漆11	江戸後期以前	ナメクジ科	L 骨体	無形	0.58	
101	218	315	漆13	漆12	漆12	江戸後期以前	ナメクジ科	L 骨体	無形	18.47	
102	239	8区	漆13	漆12	漆12	江戸後期以前	ナメクジ科	L 骨体	無形	24.11	
103	292	1区	漆瓦10	漆瓦10	漆瓦10	江戸後期以前	ナメクジ科	L 骨体	無形	2.04	
104	216	10区	漆12	漆7	漆7	江戸後期以前	ナメクジ科	R 骨体	不明	0.44	
105	198	1区	土壁6	土壁6	漆12	江戸後期以前	ナメクジ科	R 骨体	無形	0.95	
106	198	1区	土壁6	土壁6	漆12	江戸後期以前	ナメクジ科	R 骨体	不明	0.54	
107	203	1区	土壁6	土壁6	漆12	江戸後期以前	ナメクジ科	R 骨体	不明	0.56	
108	209	1区	土壁6	土壁6	漆12	江戸後期以前	ナメクジ科	R 骨体	不明	0.56	
109	227	7区	漆12	漆11	漆11	江戸後期以前	ナメクジ科	R 骨体	不明	1.15	
110	229	7区	漆12	漆7	漆7	江戸後期以前	ナメクジ科	R 骨体	不明	1.14	
111	241	6区	漆8	漆7	漆7	江戸後期以前	ナメクジ科	R 骨体	不明	2.17	
112	248	9区	外壁(仔)	外壁	漆12	江戸後期以前	ナメクジ科	R 骨体	漆油漆	漆油漆	
113	248	8区	外壁(仔)	外壁	漆12	江戸後期以前	ナメクジ科	R 骨体	漆油漆	漆油漆	
114	1	222	井戸2	井戸2	井戸2	井戸2	ナメクジ科	R 骨体	漆油漆	漆油漆	

附編2 天瀬遺跡出土の動物遺存体の分析

件名	発見場所	地質	層位	骨片		上顎骨	骨片	骨片	骨片
				骨片	骨片				
115 2 3区 手取3	手取3	新4層	江戸後期・中期	混生骨頭 マツイ	R 頭骨	不明	viv	viv	不明
116 140 9区北 外堀(新) 外堀	手取3	新4層	江戸後期	混生骨頭 ヨチ原	R 頭骨	不明	viv	viv	不明
117 97 9区西 外堀(新) 外堀	手取3	新4層	江戸後期	混生骨頭 文子牛	L 前頭骨	完形(一部欠)	viv	viv	不明
118 243 9区西 外堀(新) 外堀	手取3	第2層	江戸後期	混生骨頭 ミズキ目	R 頭骨	未形	viv	viv	不明
119 93 9区西 近代(新) 外堀	手取3	第2層	江戸後期	混生骨頭 ミズキ目	R 頭骨	未形	viv	viv	不明
120 212 9区西 外堀(新) 外堀	手取3	第2層	江戸後期~明治35年	混生骨頭 スズキ目	R 頭骨	未形	viv	viv	不明
121 92 9区西 外堀(新) 外堀	手取3	第2層	江戸後期	混生骨頭 スズキ目	R 頭骨	未形	viv	viv	不明
122 217 9区西 外堀(新) 外堀	手取3	第2層	江戸後期~明治35年	混生骨頭 スズキ目	R 頭骨	未形	viv	viv	不明
123 89 9区西 外堀(新) 外堀	手取3	第2層	江戸後期~明治35年	混生骨頭 プラ科	R 頭骨	未形	viv	viv	不明
124 90 9区西 外堀(新) 外堀	手取3	第2層	江戸後期~明治35年	混生骨頭 プラ科	R 頭骨	未形	viv	viv	不明
125 185 9区西 外堀(新) 外堀	手取3	第2層	江戸後期~明治35年	混生骨頭 マツイ	R 頭骨	未形(一部欠)	viv	viv	不明
126 96 9区西 外堀(新) 外堀	手取3	第2層	江戸後期~明治35年	混生骨頭 マツイ	R 頭骨	未形	viv	viv	不明
127 88 9区西 外堀(新) 外堀	手取3	第2層	江戸後期	混生骨頭 マツイ	M 頭骨	未形	viv	viv	不明
128 101 9区西 外堀(新) 外堀	手取3	第2層	江戸後期~明治35年	混生骨頭 マツイ	M 頭骨	未形	viv	viv	不明
129 102 9区西 外堀(新) 外堀	手取3	第2層	江戸後期~明治35年	混生骨頭 マツイ	M 頭骨	未形	viv	viv	不明
130 104 9区西 外堀(新) 外堀	手取3	第2層	江戸後期~明治35年	混生骨頭 マツイ	M 頭骨	未形	viv	viv	不明
131 96 9区西 外堀(新) 外堀	手取3	第2層	江戸後期~明治35年	混生骨頭 マツイ	M 頭骨	未形	viv	viv	不明
132 103 9区西 外堀(新) 外堀	手取3	第2層	江戸後期~明治35年	混生骨頭 マツイ	M 頭骨	未形	viv	viv	不明
133 187 9区西 外堀(新) 外堀	手取3	第2層	江戸後期~明治35年	混生骨頭 マツイ	M 頭骨	未形	viv	viv	不明
134 158 9区西 外堀(新) 外堀	手取3	第2層	江戸後期	混生骨頭 マツイ	M 頭骨	未形	viv	viv	不明
135 140-2 9区西 外堀(新) 外堀	手取3	第2層	江戸後期	混生骨頭 マツイ	M 頭骨	未形	viv	viv	不明
136 126 9区西 外堀(新) 外堀	手取3	第2層	江戸後期	混生骨頭 マツイ	M 頭骨	未形	viv	viv	不明
137 225 8区 手取3	手取3	第1層	江戸後期	混生骨頭 マツイ	M 頭骨	未形	viv	viv	不明
138 - 87 9区西 外堀(新) 外堀	手取3	第2層	江戸後期~明治35年	混生骨頭 マツイ	M 頭骨	未形	viv	viv	不明
139 106 9区西 外堀(新) 外堀	手取3	第2層	江戸後期~明治35年	混生骨頭 マツイ	M 頭骨	未形	viv	viv	不明
140 140 188 9区西 外堀(新) 外堀	手取3	第2層	江戸後期~明治35年	混生骨頭 マツイ	M 頭骨	未形	viv	viv	不明
141 70 9区 外堀(新) 外堀	手取3	第1層	明治58年	混生骨頭 マツイ	M 頭骨	未形	viv	viv	不明
142 184 9区 外堀(新) 外堀	手取3	第1層	江戸後期	混生骨頭 マツイ	M 頭骨	未形	viv	viv	不明
143 163-257 3区 手取3	手取3	第1層	江戸後期	混生骨頭 マツイ	M 頭骨	未形	viv	viv	不明
144 163-149 163-240 3区 手取3	手取3	第2層	江戸後期~明治35年	混生骨頭 マツイ	M 頭骨	未形	viv	viv	不明
150-154 163-241~245 3区 手取3	手取3	第2層	江戸後期~明治35年	混生骨頭 マツイ	M 頭骨	未形	viv	viv	不明
155 163-100 163-312 3区 手取3	手取3	第2層	江戸後期	混生骨頭 マツイ	M 頭骨	未形	viv	viv	不明
156-158 163-115-118 3区 手取3	手取3	第2層	江戸後期	混生骨頭 マツイ	M 頭骨	未形	viv	viv	不明
159-161 163-119~123 3区 手取3	手取3	第2層	江戸後期	混生骨頭 マツイ	M 頭骨	未形	viv	viv	不明
167-170 163-238~249 3区 手取3	手取3	第2層	江戸後期	混生骨頭 マツイ	M 頭骨	未形	viv	viv	不明
171-174 163-255~253 3区 手取3	手取3	第2層	江戸後期	混生骨頭 マツイ	M 頭骨	未形	viv	viv	不明
175-176 163-197~198 3区 手取3	手取3	第2層	江戸後期	混生骨頭 マツイ	M 頭骨	未形	viv	viv	不明
189-206 163-50~77 3区 手取3	手取3	第2層	江戸後期	混生骨頭 マツイ	M 頭骨	未形	viv	viv	不明
207-216 163-103~19 3区 手取3	手取3	第2層	江戸後期	混生骨頭 マツイ	M 頭骨	未形	viv	viv	不明
216 163-119~123 3区 手取3	手取3	第2層	江戸後期	混生骨頭 マツイ	M 頭骨	未形	viv	viv	不明
217-225 163-119~149 3区 手取3	手取3	第2層	江戸後期	混生骨頭 マツイ	M 頭骨	未形	viv	viv	不明
226-238 163-97~98 3区 手取3	手取3	第2層	江戸後期	混生骨頭 マツイ	M 頭骨	未形	viv	viv	不明
239 163-103~106 3区 手取3	手取3	第2層	江戸後期	混生骨頭 マツイ	M 頭骨	未形	viv	viv	不明
239-236 163-103~107 3区 手取3	手取3	第2層	江戸後期	混生骨頭 マツイ	M 頭骨	未形	viv	viv	不明
237-243 163-109~116 3区 手取3	手取3	第2層	江戸後期	混生骨頭 マツイ	M 頭骨	未形	viv	viv	不明
244 163-119~147 3区 手取3	手取3	第2層	江戸後期	混生骨頭 マツイ	M 頭骨	未形	viv	viv	不明
245 163-255 163-256~257 3区 手取3	手取3	第2層	江戸後期	混生骨頭 マツイ	M 頭骨	未形	viv	viv	不明
257 163-49~59 3区 手取3	手取3	第2層	江戸後期	混生骨頭 マツイ	M 頭骨	未形	viv	viv	不明
257 163-75~81 3区 手取3	手取3	第2層	江戸後期	混生骨頭 マツイ	M 頭骨	未形	viv	viv	不明
261-265 163-82~86 3区 手取3	手取3	第2層	江戸後期	混生骨頭 マツイ	M 頭骨	未形	viv	viv	不明
266-275 163-225~235 3区 手取3	手取3	第2層	江戸後期	混生骨頭 マツイ	M 頭骨	未形	viv	viv	不明
286-311 163-34~46 3区 手取3	手取3	第2層	江戸後期	混生骨頭 マツイ	M 頭骨	未形	viv	viv	不明
312-325 163-265~282 3区 手取3	手取3	第2層	江戸後期	混生骨頭 マツイ	M 頭骨	未形	viv	viv	不明
326 163-101 3区 手取3	手取3	第2層	江戸後期	混生骨頭 マツイ	M 頭骨	未形	viv	viv	不明
327-333 163-40~44 3区 手取3	手取3	第2層	江戸後期	混生骨頭 マツイ	M 頭骨	未形	viv	viv	不明
334-332 163-141~205 3区 手取3	手取3	第2層	江戸後期	混生骨頭 マツイ	M 頭骨	未形	viv	viv	不明
339-353 163-353 3区 手取3	手取3	第2層	江戸後期	混生骨頭 マツイ	M 頭骨	未形	viv	viv	不明
394-406 163-34~46 3区 手取3	手取3	第2層	江戸後期	混生骨頭 マツイ	M 頭骨	未形	viv	viv	不明
407 163-206 3区 手取3	手取3	第2層	江戸後期	混生骨頭 マツイ	M 頭骨	未形	viv	viv	不明
408-410 163-208~210 3区 手取3	手取3	第2層	江戸後期	混生骨頭 マツイ	M 頭骨	未形	viv	viv	不明
411-415 163-211~215 3区 手取3	手取3	第2層	江戸後期	混生骨頭 マツイ	M 頭骨	未形	viv	viv	不明
416-421 163-20~25 3区 手取3	手取3	第2層	江戸後期	混生骨頭 マツイ	M 頭骨	未形	viv	viv	不明
422-424 163-26~28 3区 手取3	手取3	第2層	江戸後期	混生骨頭 マツイ	M 頭骨	未形	viv	viv	不明
425 183 3区 手取3	手取3	第2層	江戸後期	混生骨頭 マツイ	M 頭骨	未形	viv	viv	不明

調査地別分析の良好

附編2 天瀬遺跡出土の動物遺存体の分析

附編 2 天瀬遺跡出土の動物遺存体の分析

				cm(外側位、内側位骨 幹部)								
				I. 頭中骨								
487	38	8区	海14	海3								
488	33	8区	海14	海3								
489	58	9区	海8	海古								
490	125	9区	外場(海)	外場								
491	119	9区	外場(海)	外場								
492	149	9区	外場(海)	外場								
493	34	8区	海14	海3								
494	35	8区	海14	海3								
495	36	8区	海14	海3								
496	162	9区	外場(海)	外場								
497	67	6区	海8	海?								
498	109	9区	中 火	外場(海)								
499	143	9区	外場(海)	外場								
500	169	9区	外場(海)	外場								
501	161	9区	外場(海)	外場								
502	68	6区	海8	海7								
503	69	6区	海8	海7								
504	132	9区	外場(海)	外場								
505	172	6区	海6	海古								
506	5	6区	海9	海?								
507	148	6区	外場(海)	外場								
508	164-2	6区	海8	海古								
509	66	6区	海8	海7								
510	62	6区	海8	海?								
511	6	6区	海10	海10								
512	64	6区	海8	海?								
513	10-5	6区	海5	海7古								
514	3	3区	海3	土庫(海)								
515	145	6区	海8	海7古								
516	165-3	6区	海8	海7古								
517	63	6区	海8	海?								
518	63	6区	海8	海?								
519	165-1	6区	海9	海古								
520	60	6区	海8	海?								
521	177	6区	海8	海7								
522	166	9区	外場(海)	外場								
523	64	6区	海8	海?								
524	136	9区	中 火	外場(海)								
525	165-2	6区	海8	海古								
526	161-1	6区	海8	海8								
527	62	6区	海8	海7古								
528	49	6区	海8	海7古								
529	50	6区	海8	海7古								
530	167	6区	海8	海古								
531	168	6区	海8	海?								
532	164-5	6区	海8	海古								
533	166-1	6区	海8	海?								
534	169-1	6区	海8	海?								
535	169-2	6区	海8	海?								
536	170	6区	海8	海古								
537	171	6区	海8	海古								
538	174	6区	海7	海?								
539	176	6区	海8	海?								
540	178	6区	海8	海7								
541	61	6区	海8	海?								
542	165-4	6区	海8	海古								

附編2 天瀬遺跡出土の動物遺存体の分析

543	166-2	5区	漁古	江戸前脚	羽乳頭	クシソウマ	仙椎	骨伴頭骨片	R 頭1枚地 前側位破片	cbp不明	viv	viv	不明	11.3	
544	182	4区	漁古	脚 S	江戸前脚	羽乳頭	クシソウマ	R 大頭骨	頭位端	cb	f?	f?	28.02		
545	59	5区	漁古	脚 S	江戸前脚	羽乳頭	クシソウマ	? 頭位不明	骨伴頭	viv	viv	cm	cm不明		
546	Mn-47	5区	漁古	脚 S	江戸前脚	羽乳頭	クシソウマ	? 頭位不明	骨伴頭	viv	viv	cm	cm不明		
547	165-6	5区	漁古	脚 S	江戸前脚	羽乳頭	クシソウマ	? 頭位不明	骨伴頭	viv	viv	cm	cm不明		
548	47-1	5区	漁古	脚 S	江戸前脚	羽乳頭	クシソウマ	? 頭位不明	骨伴頭	viv	viv	cm	cm不明		
549	58	5区	漁古	脚 S	江戸前脚	羽乳頭	クシソウマ	R 頭骨	骨伴頭	viv	viv	cm	cm不明		
550	61	5区	漁古	脚 S	江戸前脚	羽乳頭	クシソウマ	L 頭骨	骨伴頭	viv	viv	cm	cm不明		
551	147	9区	外脚(?)	外脚	江戸前脚	羽乳頭	クシソウマ	L 頭骨	骨伴頭	viv	viv	cm	cm不明		
552	49	5区	漁古	脚 S	江戸前脚	羽乳頭	クシソウマ	L 頭骨	骨伴頭	viv	viv	cm	cm不明		
553	169-2	5区	漁古	脚 S	江戸前脚	羽乳頭	クシソウマ	L 頭骨	骨伴頭	viv	viv	cm	cm不明		
554	65	9区	漁古	脚 S	江戸前脚	羽乳頭	クシソウマ	L 中足骨	骨伴頭	viv	viv	cm	cm不明		
555	67	9区	漁古	脚 S	江戸前脚	羽乳頭	クシソウマ	R 中足骨	骨伴頭	viv	viv	cm	cm不明		
556	69	5区	漁古	脚 S	江戸前脚	羽乳頭	クシソウマ	L 総合	骨伴頭	viv	viv	cm	cm不明		
557	20	8区	漁古	脚 S	江戸後脚	羽乳頭	ニホンシカ	L 下顎骨	臼齒(歯根一部欠損)	不明	viv	viv	2.部以上(市)	22.98	
558	121	9区	外脚(?)	外脚	江戸後脚	羽乳頭	ニホンシカ	L 下顎骨	臼齒(歯根一部欠損)	不明	viv	viv	2.部以上(市)	26.03	
559	84	9区	外脚(?)	外脚	江戸後脚	羽乳頭	ニホンシカ	L 下顎骨	臼齒(歯根一部欠損)	不明	viv	viv	2.部以上(市)	26.03	
560	66	9区	外脚(?)	外脚	江戸後脚	羽乳頭	ニホンシカ	L 腹甲骨	骨伴頭	viv	viv	cm	cm不明		
561	18	9区	漁古	脚 S	江戸後脚	羽乳頭	ニホンシカ	L 腹甲骨	骨伴頭	viv	viv	cm	cm不明		
562	46	6区	漁古	外脚	江戸後脚	羽乳頭	ニホンシカ	L 腹甲骨	骨伴頭	viv	viv	cm	cm不明		
563	153	9区	外脚(?)	外脚	江戸後脚	羽乳頭	ニホンシカ	L 腹甲骨	骨伴頭	viv	viv	cm	cm不明		
564	17	8区	漁古	脚 S	江戸後脚	羽乳頭	ニホンシカ	L 上頸骨	骨伴頭	viv	viv	cm	cm不明		
565	66	6区	漁古	脚 S	江戸後脚	羽乳頭	ニホンシカ	L 上頸骨	骨伴頭	viv	viv	cm	cm不明		
566	14	8区	漁古	脚 S	江戸後脚	羽乳頭	ニホンシカ	L 上頸骨	骨伴頭	viv	viv	cm	cm不明		
567	85	9区	外脚(?)	外脚	江戸後脚	羽乳頭	ニホンシカ	L 第2脚	骨伴頭	viv	viv	cm	cm不明		
568	16	8区	漁古	脚 S	江戸後脚	羽乳頭	ニホンシカ	R 大頭骨	骨伴頭	viv	viv	cm	cm不明		
569	32	8区	漁古	脚 S	江戸後脚	羽乳頭	ニホンシカ	R 大頭骨	骨伴頭	viv	viv	cm	cm不明		
570	83	9区	外脚(?)	外脚	江戸後脚	羽乳頭	ニホンシカ	R 大頭骨	骨伴頭	viv	viv	cm	cm不明		
571	133	9区	外脚(?)	外脚	江戸後脚	羽乳頭	ニホンシカ	R 大頭骨	骨伴頭	viv	viv	cm	cm不明		
572	82	9区	外脚(?)	外脚	江戸後脚	羽乳頭	ニホンシカ	R 中足骨	骨伴頭	viv	viv	cm	cm不明		
573	179-1	6区	漁古	脚 S	江戸後脚	羽乳頭	ニホンシカ	R 上頸骨	骨伴頭	viv	viv	cm	cm不明		
574	30-1	8区	漁古	脚 S	江戸後脚	羽乳頭	ニホンシカ	R 第2脚	骨伴頭	viv	viv	cm	cm不明		
575	30-2	8区	漁古	脚 S	江戸後脚	羽乳頭	ニホンシカ	R 第2脚	骨伴頭	viv	viv	cm	cm不明		
576	30-3	8区	漁古	脚 S	江戸後脚	羽乳頭	ニホンシカ	R 第2脚	骨伴頭	viv	viv	cm	cm不明		
577	11	6区	漁古	脚 S	江戸後脚	羽乳頭	ニホンシカ	R 第2脚	骨伴頭	viv	viv	cm	cm不明		
578	12	8区	漁古	脚 S	江戸後脚	羽乳頭	ニホンシカ	R 第2脚	骨伴頭	viv	viv	cm	cm不明		
579	160	9区	外脚(?)	外脚	江戸後脚	羽乳頭	ニホンシカ	R 第2脚	骨伴頭	viv	viv	cm	cm不明		
580	13	8区	漁古	脚 S	江戸後脚	羽乳頭	ニホンシカ	R 第2脚	骨伴頭	viv	viv	cm	cm不明		
581	15	9区	外脚(?)	外脚	江戸後脚	羽乳頭	ニホンシカ	R 第2脚	骨伴頭	viv	viv	cm	cm不明		
582	31	9区	漁古	脚 S	江戸後脚	羽乳頭	ニホンシカ	R 第2脚	骨伴頭	viv	viv	cm	cm不明		
583	134	9区	外脚(?)	外脚	江戸後脚	羽乳頭	ニホンシカ	R 総合	臼齒(歯根一部欠損)	不明	viv	viv	d,p,f	202.32	
584	139	9区	外脚(?)	外脚	江戸後脚	羽乳頭	ニホンシカ	R 総合	臼齒(歯根一部欠損)	不明	viv	viv	d,p,f	114.1	
585	107	9区	外脚(?)	外脚	江戸後脚	羽乳頭	ニホンシカ	R 総合	臼齒(歯根一部欠損)	不明	viv	viv	d,f,u	143.38	
586	111	9区	外脚(?)	外脚	江戸後脚	羽乳頭	ニホンシカ	R 総合	臼齒(歯根一部欠損)	不明	viv	viv	d,f,u	143.38	
587	161-283	3区	井戸 3	土壁 13	江戸後脚	羽乳頭	ニホンシカ	R 総合	臼齒(歯根一部欠損)	不明	viv	viv	d,p,f	-	
588	120	9区	外脚(?)	外脚	江戸後脚	羽乳頭	ニホンシカ	R 総合	臼齒(歯根一部欠損)	不明	viv	viv	d,p,f	8.15	
589	105	9区	外脚(?)	外脚	江戸後脚	羽乳頭	ニホンシカ	R 総合	臼齒(歯根一部欠損)	不明	viv	viv	d,p,f	8.15	
590	138	9区	外脚(?)	外脚	江戸後脚	羽乳頭	ニホンシカ	R 総合	臼齒(歯根一部欠損)	不明	viv	viv	d,p,f	130.61	
591	137	9区	外脚(?)	外脚	江戸後脚	羽乳頭	ニホンシカ	R 総合	臼齒(歯根一部欠損)	不明	viv	viv	p,f	16.54	
592	4	7区	土壁 11	土壁 13	江戸後脚	羽乳頭	ニホンシカ	R 総合	臼齒(歯根一部欠損)	不明	viv	viv	d,p,f	28.26	
593	99	9区	外脚(?)	外脚	江戸後脚	羽乳頭	ニホンシカ	R 総合	臼齒(歯根一部欠損)	不明	viv	viv	d,p,f	12.64	
594	146	9区	外脚(?)	外脚	江戸後脚	羽乳頭	ニホンシカ	R 総合	臼齒(歯根一部欠損)	不明	viv	viv	d,p,f	12.43	
595	91	9区	外脚(?)	外脚	江戸後脚	羽乳頭	ニホンシカ	R 総合	臼齒(歯根一部欠損)	不明	viv	viv	d,p,f	8.3	
596	157	9区	外脚(?)	外脚	江戸後脚	羽乳頭	ニホンシカ	R 総合	臼齒(歯根一部欠損)	不明	viv	viv	d,p,f	1.74	

附編2 天瀬遺跡出土の動物遺存体の分析

597	27	8区	游12	游11	江口後期以降	南洋鰐	食肉目	M	尾鱗	尾鱗	なし		f	0.23	投存全長106.26					
569	71	9区	外海(新)	外海	第1櫛	南洋鰐	食肉目	R	船食	完形	なし		不規	2.72						
599	127	9区	外海(新)	外海	第1櫛	江口後期	南洋鰐	R	船食	完形	なし		p.v	0.19						
600	138	9区	外海(新)	外海	第1櫛	江口後期	南洋鰐	R	船食	完形	なし		p.v	0.17						
601	299	9区	外海(新)	外海	第1櫛	江口後期	南洋鰐	L	船食	完形	なし		p.v	0.12						
602	175-1	5区	海7带	海7帶	江口後期	南洋鰐	目不明	L	船食	完形	なし		p.v	46.19						
603	165-5	5区	游7古	游7古	江口後期	南洋鰐	目不明	?	船食	完形	なし		p.v	39.45						
604	173-2	5区	游8	游8	江口後期	南洋鰐	目不明	?	船食	完形	なし		f?	13.35						
605	173	5区	游8	游8	骨	南洋鰐	目不明	?	船食	未定形	なし		p.v	16.28						

凡例	cm : 切創 (カットマーク)、SP : スパイラル割れ viv : ビビアナイト析出 計測値単位はmm
----	---

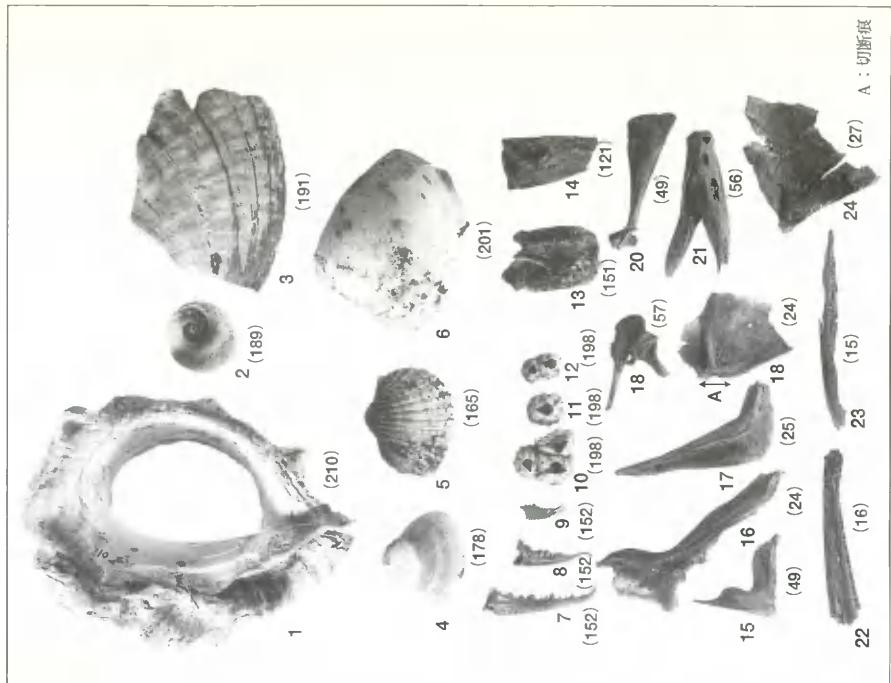


写真1



写真2

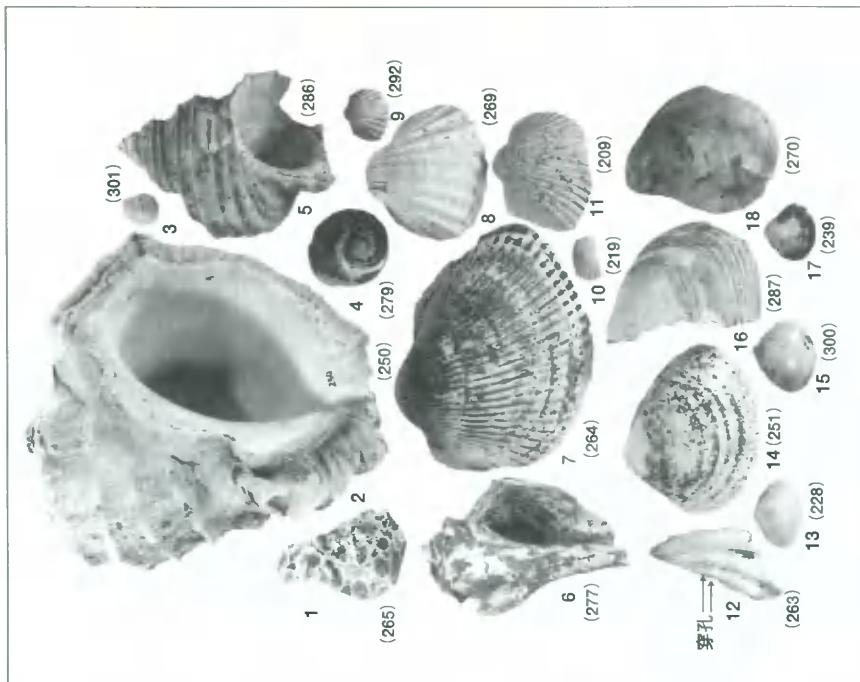


写真3 98年度出土貝類遺存体 [S=60%] 1.ウチヤキツメイシ 2.アカニシ 3.クスズメガイ 4.サザエ (4種) 5.イトマキボラ 7.アカガイル 8.ハイガイ L 9.ハイガイ R 10.トマヤガイ R 11.タツワガイ科 13.ベニハマグリ L 14.ハマグリ L 15.ハマグリ R 16.ハムラサギ 1. 17.ヤマトシジミ R 18.イタボガキ科

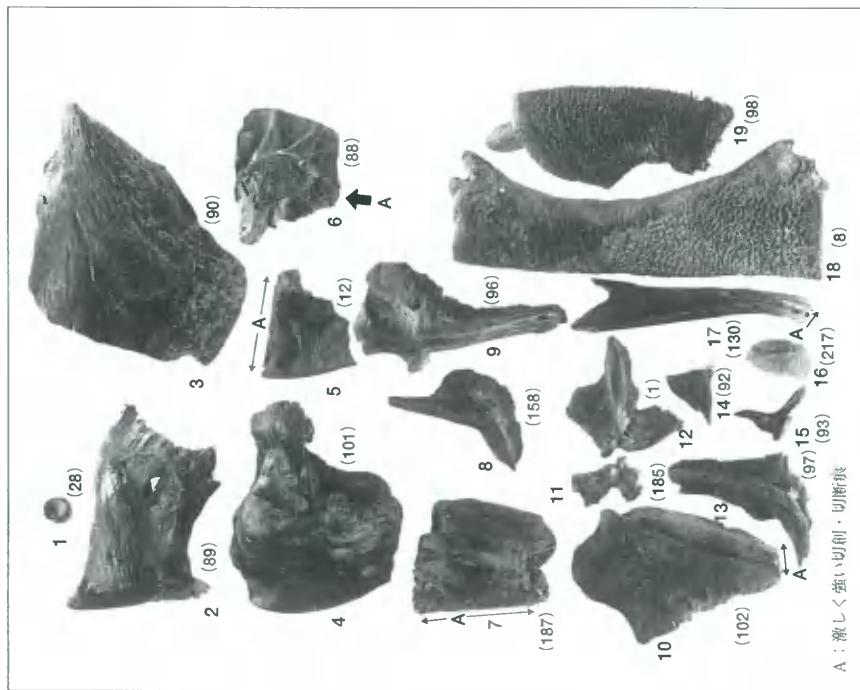


写真4 98年度出土魚類・両生類・爬虫類遺存体 [S=60%] 1.サメ・エイ類椎骨 2.フグ科左側骨 3.ボラ科右側骨 4.トモダチ 4-10.マダイ (4-6 l.後頭骨; 7-8前頭骨; 8-9.前體脊骨; 9-10.後側脊骨; 10-11.鰓蓋骨) 11.サモキ目肩甲骨 12.フサカサゴ科左側骨 13.ススキ左前體脊骨 14-16.スズキ目 (14.行方骨、15.椎間骨、16.コチ) 17.コチ右側骨 18-19.スズポン



写真5 98年度出土ウミガメ遺存体 [S-17%] 背甲

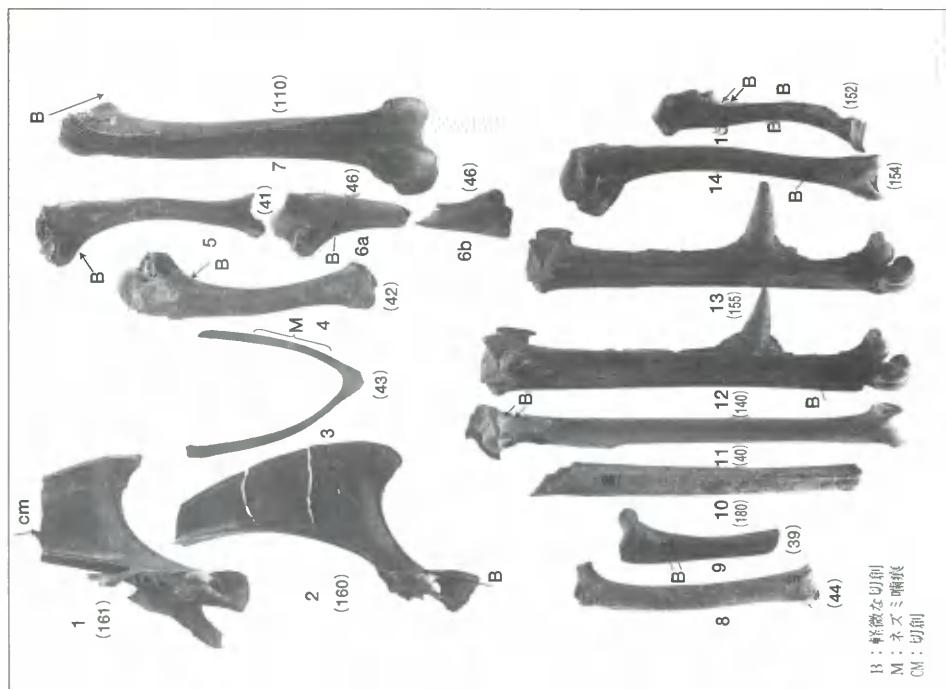
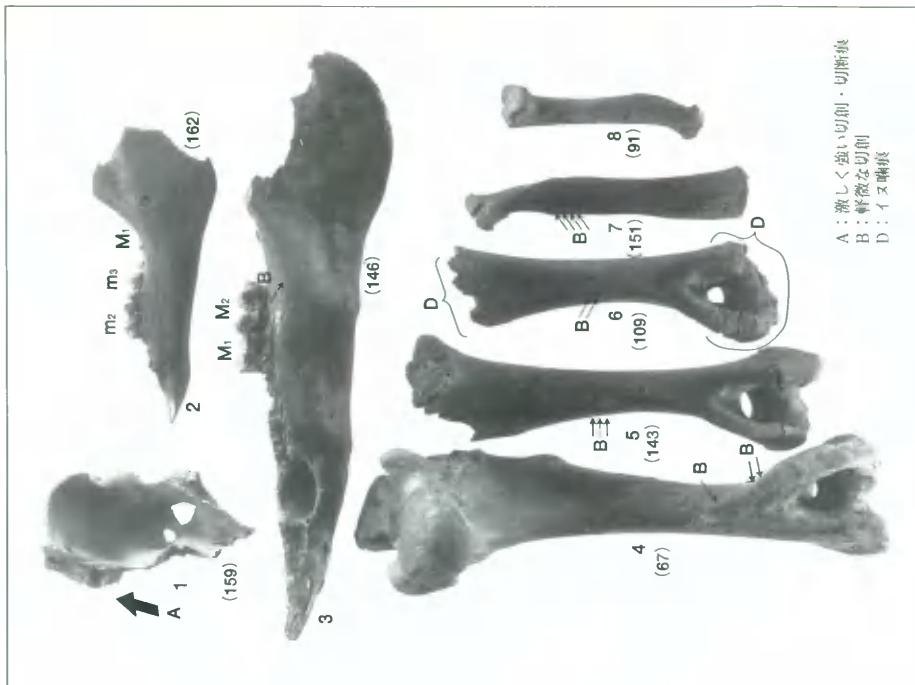
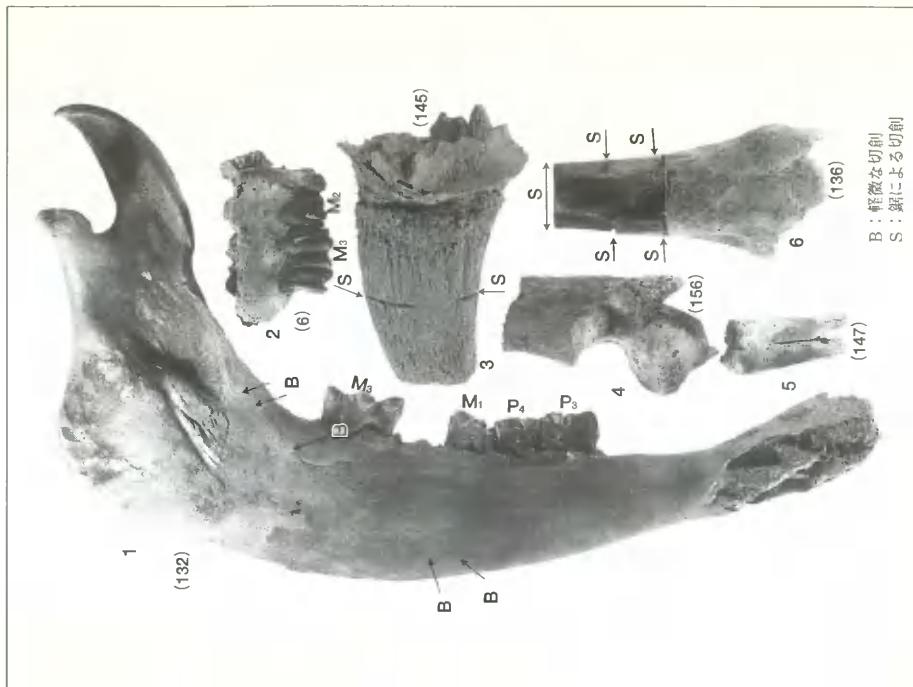


写真6 98年度出土鳥類遺存体 [S=63%] 1~13ニワトリ (1・2胸骨、3融合鎖骨、4左上腕骨、5・6右上腕骨、7・8右大脛骨、9左大脛骨、10右脛骨、11左脛骨、12・13右足根中足骨) 14カモAタイプ右骨 15アオサギ右鳥口骨

B : 鮫状切削
M : ネズミ喰痕
CM : 切削





真9 98年度出土ウシ・ウマ遺存体 [Sa-408] 1 左下頸骨 2 右上頸骨 3 左前頭骨角突起 4 左腕骨、尺骨 5 ヴマ左下顎 6 右脛骨

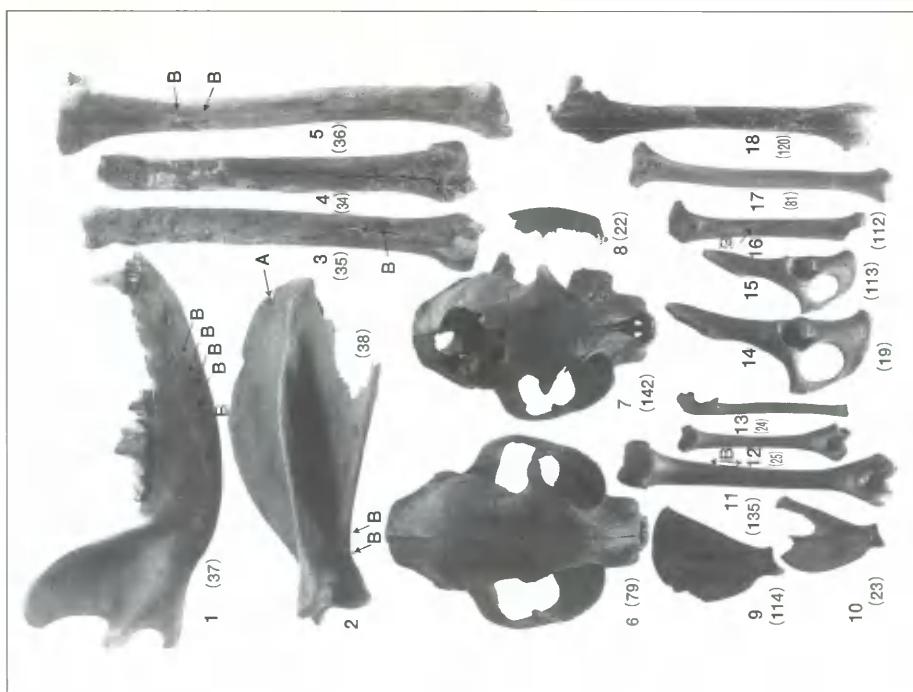


写真10 98年度出土ネココロノウサギ遺存体 [S=60%] 1~5×
2.左下顎骨、3.右下顎骨、4.右腕骨、5.L.頭骨) 6~17エヌコ (6~7頭骨、
左下顎骨、9~10L.頭骨) 11~13L.腕骨、13~15L.脛骨、14~15L.尺骨、16
左大腿骨、17L.脚骨) 18ノウサギ尾大腿骨

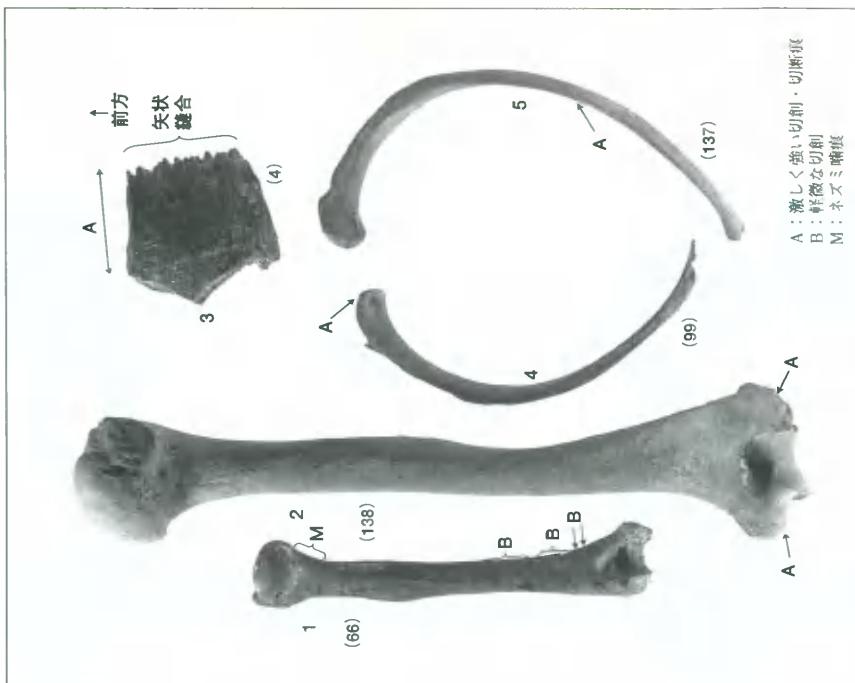


写真11 98年度出土サル目遺存体 [S=40%] 1.ニホンザル左上腕骨、2.右肋骨、3.頭蓋骨左頭頂骨、4.右肋骨、5.左肋骨
(2右上腕骨、3頭蓋骨左頭頂骨、4右肋骨、5左肋骨)

図版1



1. 調査区中景
(南西から)



2. 土壌1土器出土状況
(西から)



3. 土壌5土器出土状況
(南から)

図版2



1. 粘土採掘壙群（北西から）



2. 高まり1（南西から）



3. 井戸1（南から）



4. 井戸2（西から）



5. 溝12・13合流部（北から）



6. 溝12・13合流部（東から）



7. 溝12と柱穴列5・6（東から）



8. 外堀古段階の西肩部柱列（東から）

図版3



1. 外堀東側石垣（西から）



2. 外堀西侧石垣と土層堆積（東から）



3. 土壙19備前焼大甕内堆積物（西から）



4. 土壙20埋土断面（西から）



5. 土壙24（南西から）



6. 土壙30土層断面（北東から）



7. 土壙32北側土層断面（西から）



8. 土壙48土層断面（南から）

図版4



1. 弥生時代の水田畦畔（南西から）



2. 井戸6（東から）



3. 土壌52土層断面（南東から）



4. 土壌56（西から）



5. 溝15土層断面（東から）



6. 石敷き検出状況（西から）



7. 溝16検出状況（東から）



8. 溝16南側護岸状況（北から）

図版5



1



4



11



2



5



9



20



16



18



13



14



15



17



19



21



22



24

土壤1~3・土器溜まり・包含層出土土器① (16~19 1/3、24 1/6、それ以外 1/4)

図版6



25

29

27



26



31



28



32



34



39



35



36



38

包含層出土土器② (27・28・35・36・38 1/6、それ以外 1/4)



包含層出土土器③ (59・62・63 1/3、58・61 1/6、それ以外 1/4)

図版8

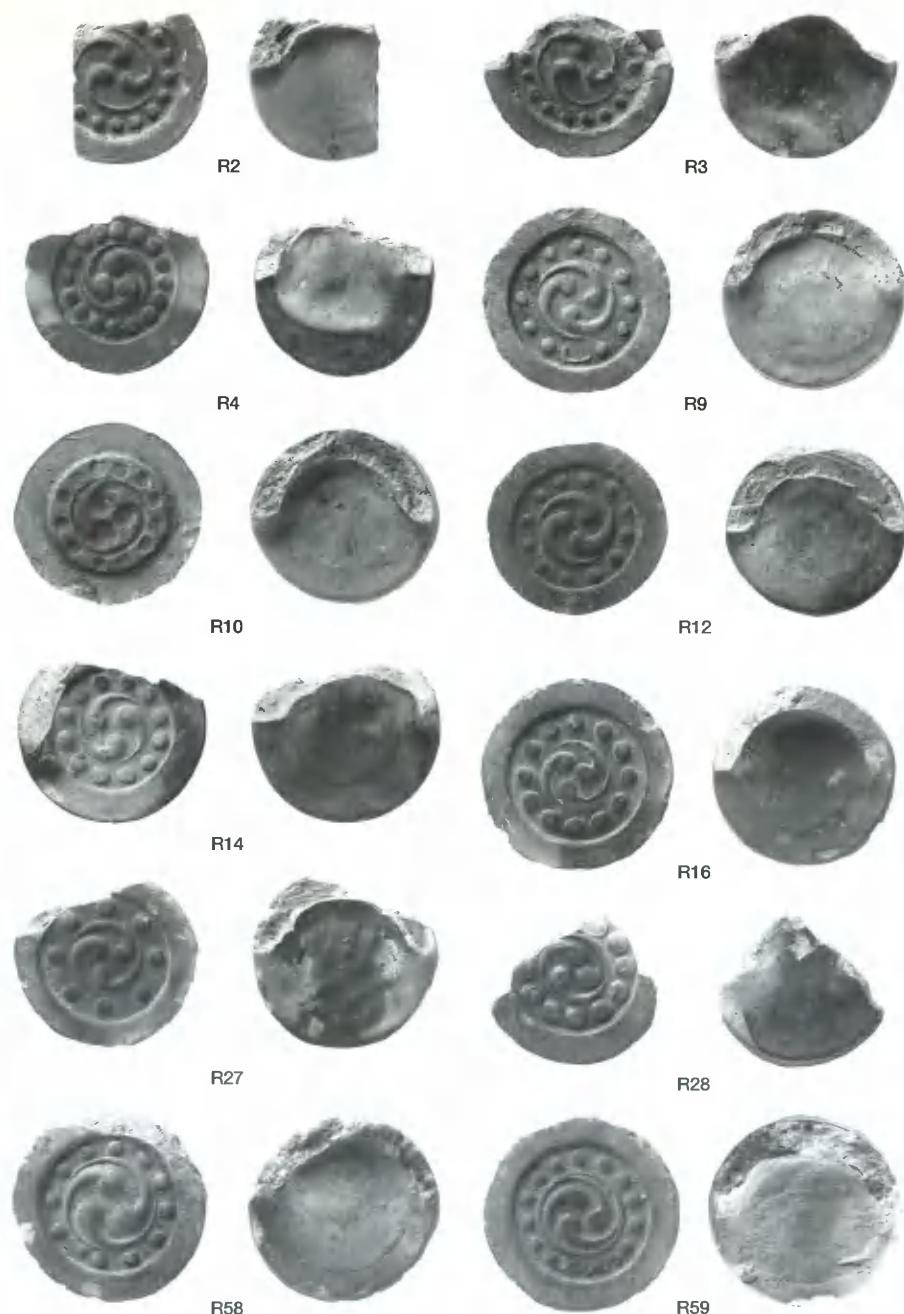


1. 土壙5出土土器 (64・69~72 1/6、それ以外 1/4)



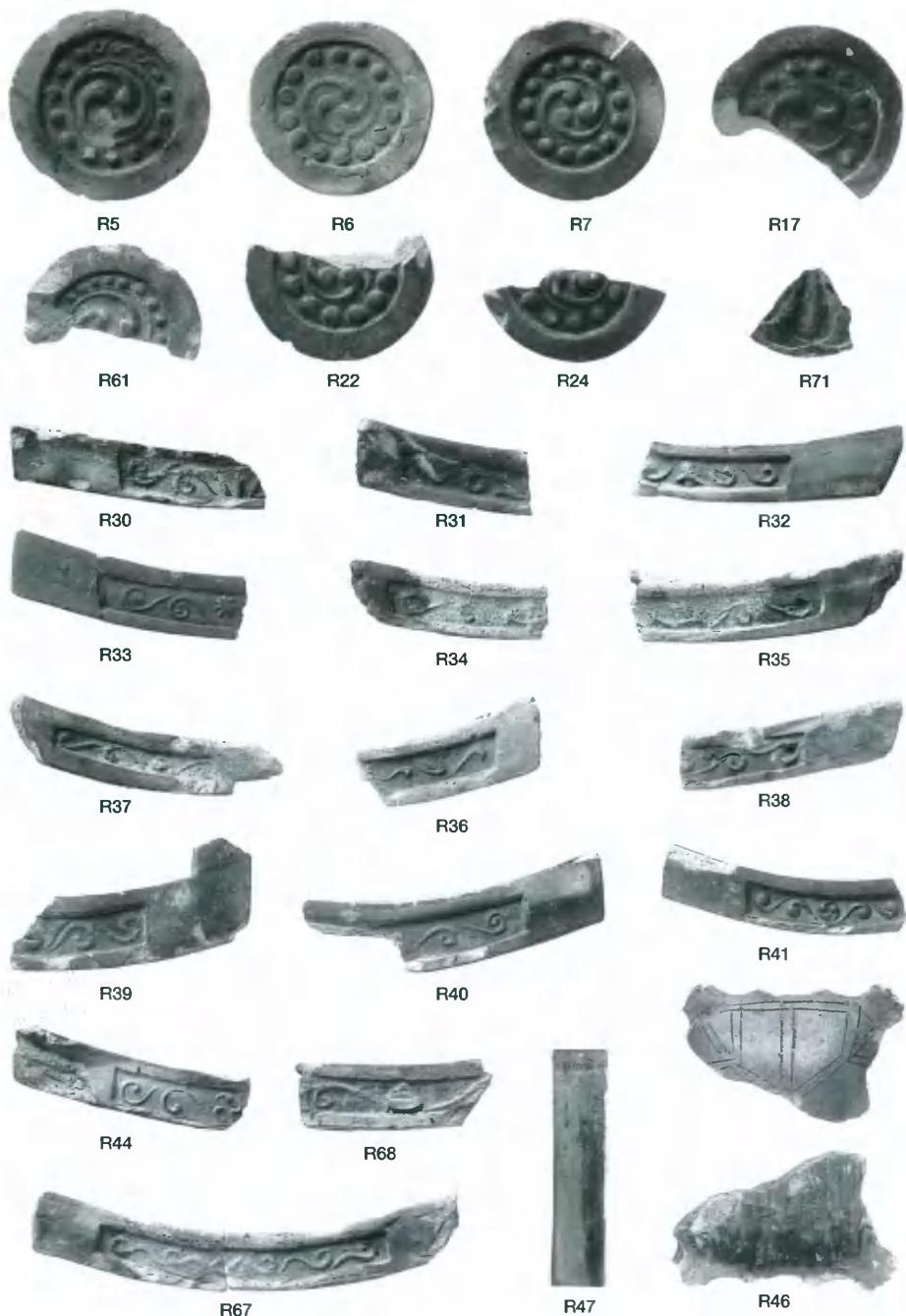
2. 土器・備前焼 (268・448 1/3、
363・364 1/4、それ以外 1/5)

3. 昭和20年の空襲により歪んだ瓦



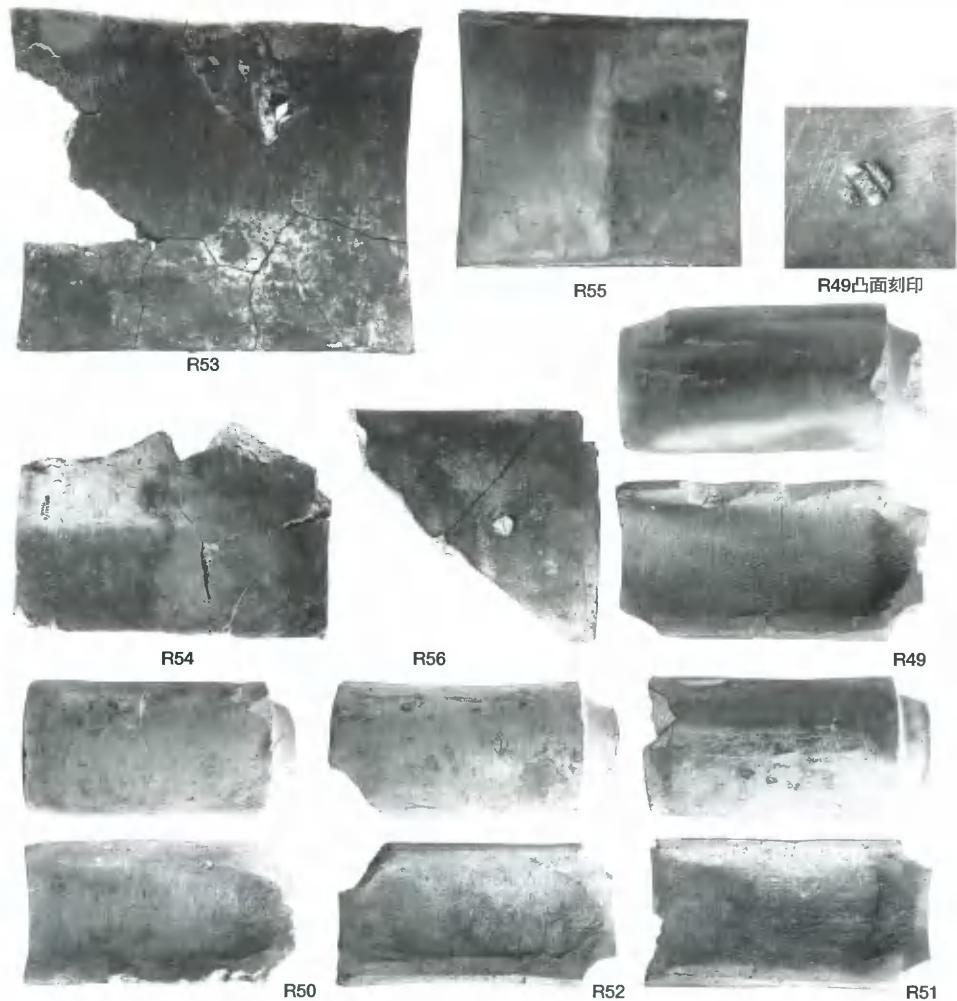
軒丸瓦 (1/4)

図版10



軒丸瓦（1/4）・軒平瓦（1/3）・道具瓦（R71 1/3、それ以外 1/5）

図版11



1. 平瓦・丸瓦 (1/5、刻印拡大は任意)



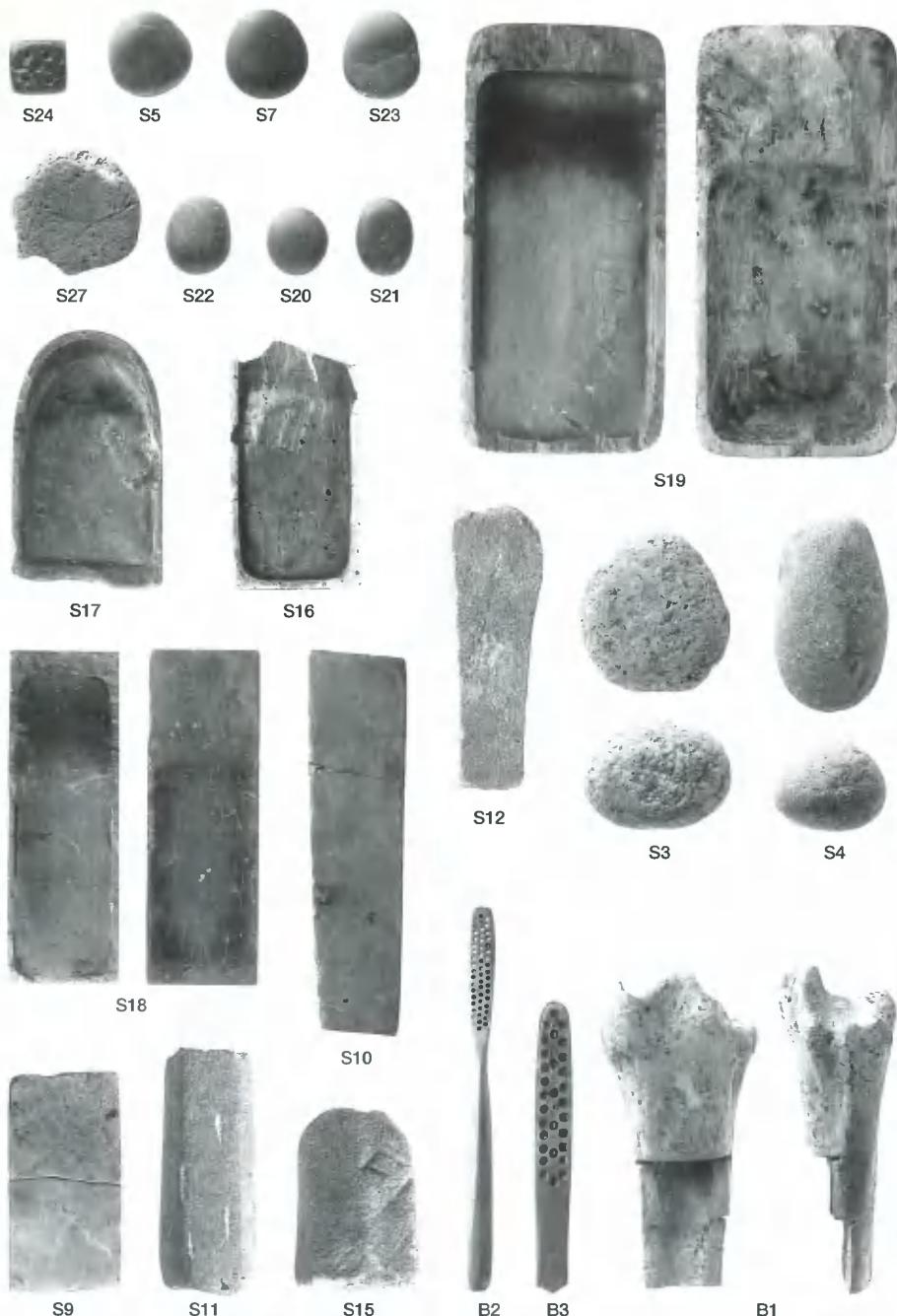
2. 土製品① (2/3)

図版12



土製品② (C39・C42・C56～C58・C60 2/3、それ以外 1/2)

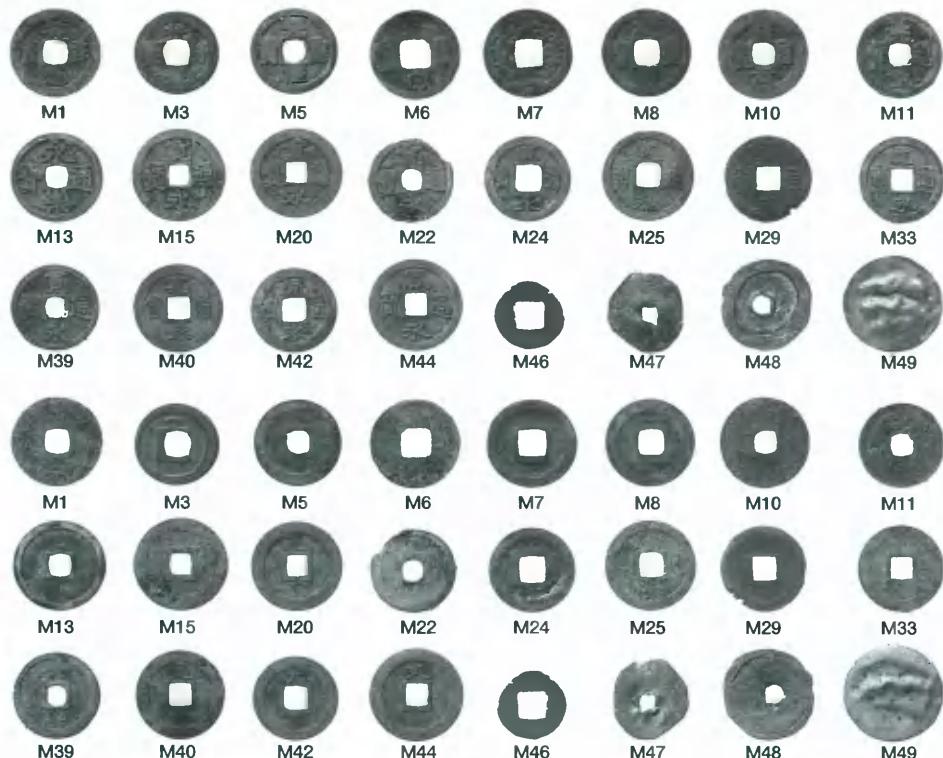
図版13



1. 石製品 (S24 1/1、S5・S7・S20～S23 2/3、
S17・S27 1/2、それ以外 1/3)

2. 骨製品 (1/2)

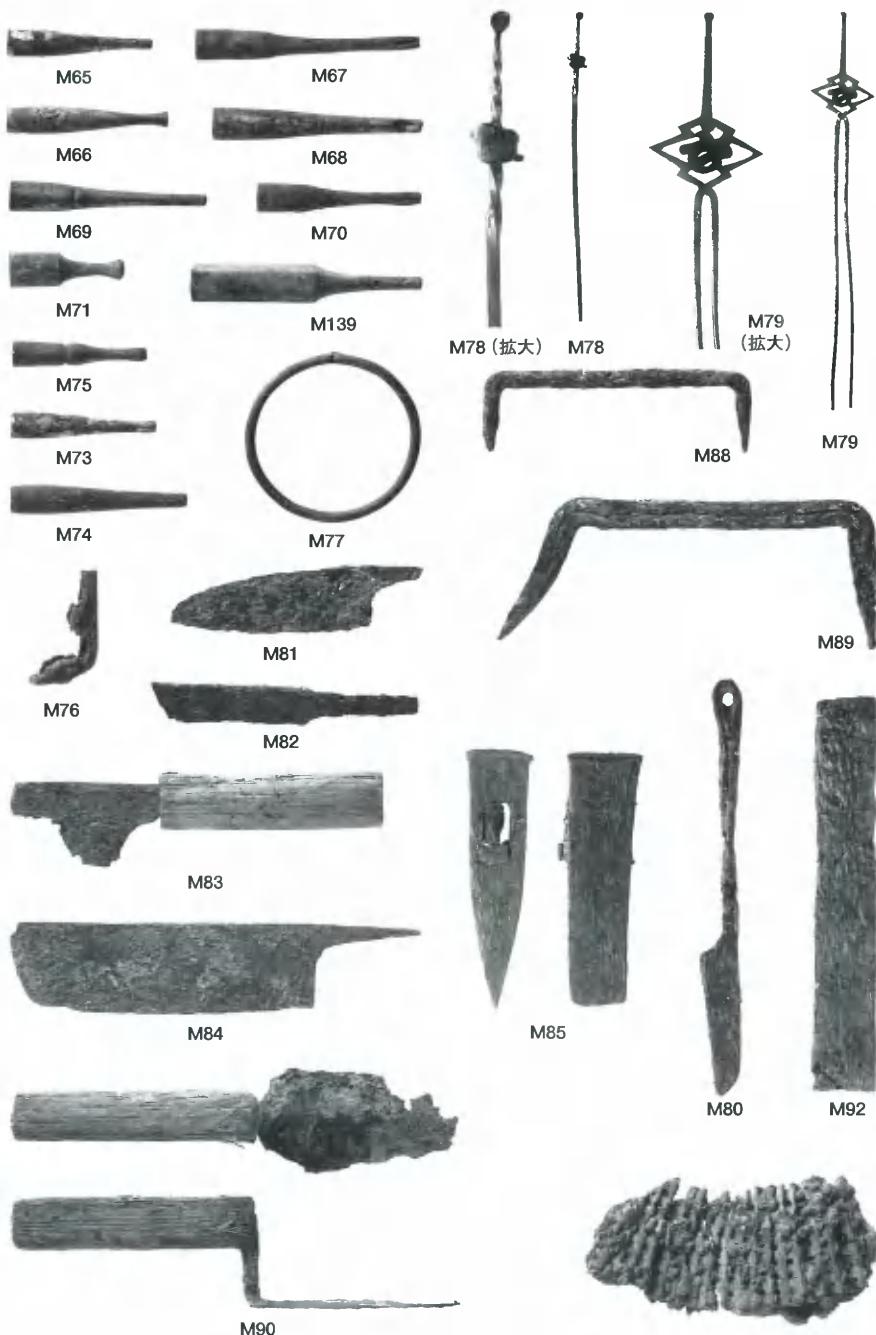
図版14



1. 銅錢 (2/3)



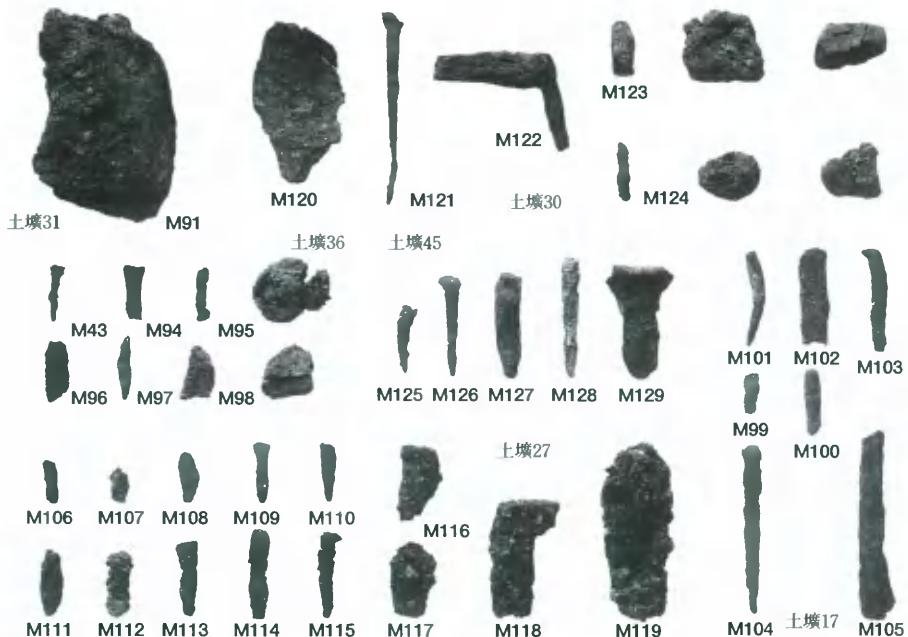
2. 煙管雁首 (1/2)



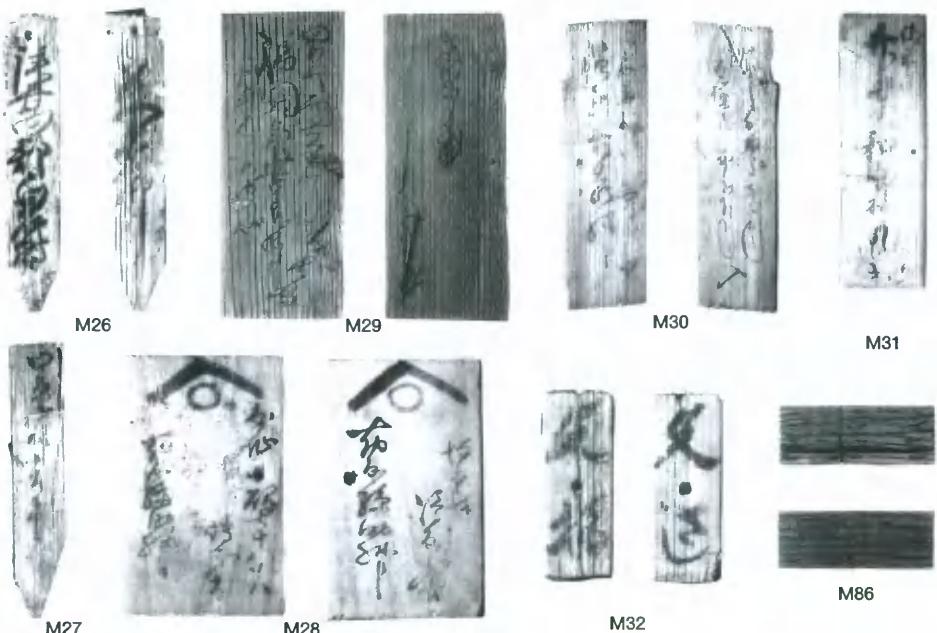
1. 金属製品 (M78拡大 1/1、M79拡大 2/3、M78～
M85・M90・M92 1/3、それ以外 1/2)

2. 鎏片 (1/3)

図版16



1. 土壤17・27・30・31・36・45出土鉄塊・鉄片 (1/2)



2. 墨書き木製品 (W32 1/2、それ以外 1/3)



W1



W17



W20



W8



W21



W6



W10



W9



W12



W18



W93



W11



W25



W49



W62



W107



W90



W39



W64



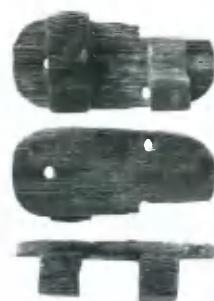
W108

木製品 (W49-W60 1/4、W39 1/6、W108 1/15、それ以外 1/3)

図版18



W70



W71



W80



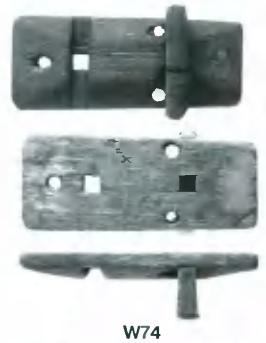
W77



W73



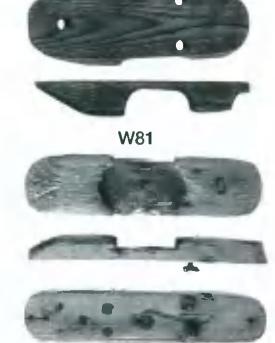
W75



W74



W82



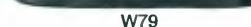
W81



W84



W78



W79



下駄 (鼻緒 1/3、それ以外 1/5)



1. 外堀古段階出土土器・陶磁器



2. 輸入磁器



3. 関西系陶器

図版20



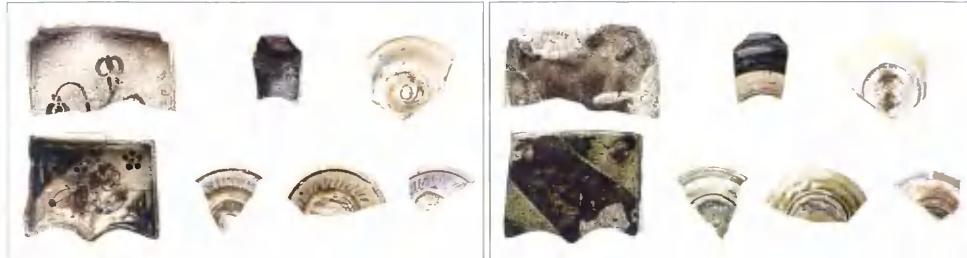
1. 肥前系白磁・染付磁器



2. 肥前系青磁



3. 三田青磁



瀬戸・美濃系陶磁器

図版22



国産陶磁器



1. 焼き締め陶器



2. ガラス焼き継ぎの銘

図版24



1. 外堀出土鍛冶関連遺物



C44



C48



C45



C50



C49



C46



W3 (内)



W48

2. 羽口 (1/4)

3. 蒔絵 (1/3)

報告書抄録

ふりがな	あませいせき・おかやまじょうそとぼりあと							
書名	天瀬遺跡・岡山城外堀跡							
副書名	一般国道2号京橋共同溝他建設に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	154							
編著者名	杉山一雄・柳瀬昭彦・内藤善史・白石 純・富岡直人							
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター							
所在地	〒701-0136 岡山県岡山市西花尻1325-3 TEL 086-293-3211							
発行機関	岡山県教育委員会							
所在地	〒700-8570 岡山県岡山市内山下2-4-6 TEL 086-224-2111							
発行年月日	西暦 2001年2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
あませいせき 天瀬遺跡 おかやまじょうそとぼりあと 岡山城外堀跡	おかやまけん 岡山県 おかやまし 岡山市 ひがしうちゅうとうちゅう 東中央町	市町村	遺跡番号	。' "	。' "	1992.11.11 ~1992.11.17 1996.10.01 ~1996.12.31 1998.10.01 ~1999.03.31	1,992	京橋共同溝 ・岡南共同 溝建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
天瀬遺跡・ 岡山城外堀跡	集落 生産	弥生時代	土壙・粘土採掘廣 溝・水田・高まり	土器、線刻土器、土製品 (紡錘車・玉)、石器(錘)			弥生後期の粘土 採掘溝を検出。 17世紀代の城下 町での鍛冶関連 遺構と遺物を確 認。	
		古墳時代		土師器・須恵器				
中世～ 明治時代		井戸・土壙・鍛冶 関連土壙・溝・外 堀・柱穴列	土器、国産陶磁器、輸入磁 器、瓦類、土製品(人形・円 板・鳩笛・羽口・円板)、石 製品(硯・砥石・碁石など)、 金属製品(錢・煙管・簪・包 丁・鉄・釘・鎌・鎧・小割 鉄・鉄片など)、木製品(漆 製品・蒔絵・木札・下駄な ど)、骨製品(櫛払い)、そ の他(動物遺体・スラグ)					

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告154

天瀬遺跡・岡山城外堀跡

一般国道2号京橋共同溝他建設に伴う発掘調査

平成13年2月27日 印刷

平成13年2月28日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター
岡山県岡山市西花尻1325-3

発行 岡山県教育委員会
岡山県岡山市内山下2-4-6

印刷 サンコー印刷株式会社
岡山県総社市真壁871-2